

塩野西遺跡群

川原田遺跡

——長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡発掘調査報告書——

平安・中世 編

1993

長野県御代田町教育委員会

塩野西遺跡群

川原田遺跡

——長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡発掘調査報告書——

平安・中世 編

1993

長野県御代田町教育委員会

解 説

1 本書は、1991年に調査を実施した、長野県北佐久郡御代田町大字塩野字川原田所在の川原田遺跡の平安時代・中世部分についての調査報告を掲載する。

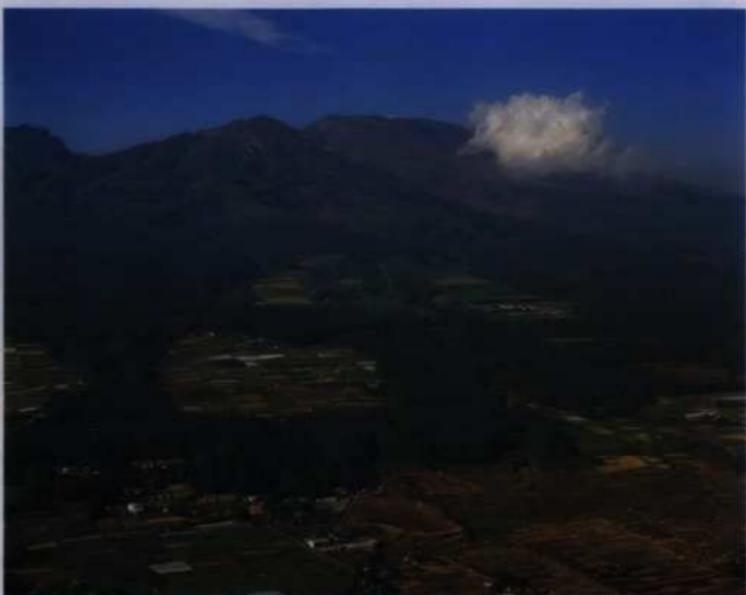
2 調査成果

- ◆ 川原田遺跡では平安時代・9世紀末~10世紀前葉の竪穴住居19軒が検出された。集落としては5軒程度で変遷したことが考えられる。
- ◆ 住居から出土した土器には、土師器では壺・高台壺・甕・羽釜・鉢、灰陶陶器では碗・皿がある。須恵器はほぼ消滅する様相にあり数が少ないが、壺・高台壺が認められた。灰陶陶器は、光ヶ丘1・森岡4・大原2号窯式の製品が認められた。その土器群の様相は3段階に区分して把握できた。
- ◆ 住居から出土した特殊遺物には、火熨斗、転用硯、朱墨転用硯、大平寺・大内寺の墨書き土器があった。特に火熨斗は、国内でも十指に満たない出土例しか知られておらず貴重である。
- ◆ 墨書きにみる大平寺・大内寺は文献にみえないいわば幻の寺であり、こうした地方寺院が存在することが明らかになった。
- ◆ 10世紀前葉以降の、溝で囲われる礎石建物が検出された。
- ◆ 中世では、方形土坑（竪穴状造構）が検出され、渡来鏡などが出土した。

3 調査成果についての考察

川原田遺跡の平安集落は、大平寺・大内寺などの墨書きからも寺院との関わりあいが深いことが推定された。さらに推測するなら、現在遺跡に隣接する真楽寺の存在が当時までさかのばられ、真楽寺に付随して川原田集落が存在したこととも考えられる。

また、10世紀前葉以降の溝囲い礎石建物も、寺院等の施設の一部とも推定された。



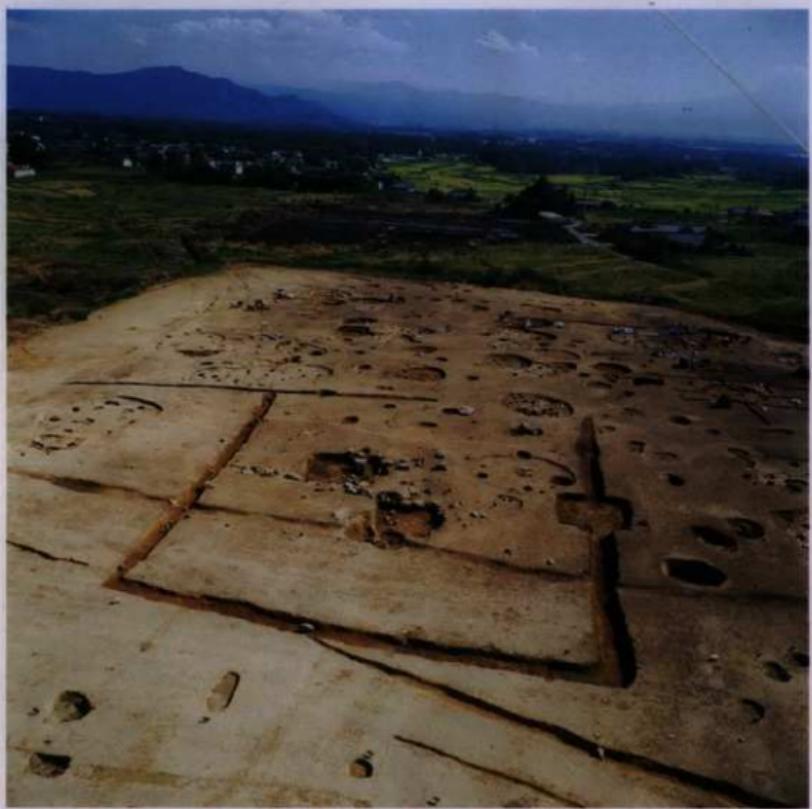
浅間山麓に位置する川原田(左下)と城之腰(右上)遺跡



川原田(左)遺跡と城之腰遺跡(右)

川原田道跡全景(東方より)





K-1号区面内遺構群



H-8号住居址出土土器



H-4号住居址出土火盆斗

例　　言

- 1 本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の川原田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、佐久地方事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
- 3 本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。
- 4 本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。
 - ◎ 遺物復原　　伴野有希子、内堀久代、佐藤夫美子、中山祐子、田村朗子、掛川孝子
 - ◎ 遺物実測　　鳥居　亮、竹原久子、萩原正子、内堀美保子、シン航空写真機。
 - ◎ 遺物拓本　　竹原久子、内堀久代、佐藤夫美子。
 - ◎ 遺物トレース　　竹原久子（土器）、鳥居　亮（石器）。
 - ◎ 遺構トレース　　鳥居　亮。
 - ◎ 遺構写真　　堤　　隆、鳥居　亮。
 - ◎ 遺物写真　　鳥居　亮。
 - ◎ 遺物観察表作成　　小山岳夫。
 - ◎ 版組み　　堤　　隆、鳥居　亮、中込輝子。
- 5 本書に使用した航空写真は、㈱協同測量社が撮影したものである。
- 6 本書の執筆分担については、目次に記してある。
- 7 灰釉陶器については長野県埋蔵文化財センター原明芳氏のご教示を得、墨書き器については国立歴史民俗博物館平川南教授に鑑定いただいた。厚く御礼申し上げる次第である。
- 8 本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、堤　　隆、がおこなった。
- 9 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配意を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。（順不同・敬称略）

田中正治郎、西山克己、桐原健、宮下健司、川島雅人、諫訪間順、諫訪間伸、櫻田誠、新田浩三、林幸彦、羽田野卓也、高村博文、三石宗一、福島邦男、村沢正弘、大上周三、山下誠一、花岡弘、近藤尚義、中田英、白田武正、寺島俊郎、木内捷、原明芳、伊丹徹、宮崎憲二、児玉卓文、百瀬長秀、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、竹原学、市沢英利、平川南、下平博行、西井幸雄、賛田明、早田勉、辻本崇夫、栗原文藏、瀧瀬芳之、金子直行

凡　　例

1 遺構の名称

H → 平安時代竪穴住居址 D → 土坑 T → 特殊建物遺構
F → 挖立柱建物址 M → 溝状遺構 S → 石組遺構 K → 特殊遺構群

2 遺構のナンバーは、時代別・時期別にはなっていない。

3 掘図の縮尺

竪穴住居・掘立柱建物・土坑 = 1 : 80、カマド = 1 : 40、石組遺構 = 1 : 100

溝状遺構 = 1 : 300 特殊建物遺構 = 1 : 100 特殊遺構群 = 1 : 200

土器 = 1 : 4。石器・鉄器 = 4 : 5、1 : 3

以上が基本的なものである。これ以外のものも含めて掘図中にその縮尺を明示してある。

4 図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、土器が 1 : 3、石器・鉄器 = 4 : 5、1 : 3 で、その縮尺は図版中に明記してある。

5 遺構面積の計測にはプラニメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

6 平安時代の出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、-は不明、() は推定値、< > は大幅な推定値を示す。単位はcmである。

7 出土遺物一覧表〈石器〉の法量は、-は不明、() が現存値、() がない場合は完存値を表わす。単位は、cm・gである。

8 遺構の層序説明は本文中に記した。

9 土層の色調、遺物胎土の色調については、「新版標準土色帖」の表示に基づいて示した。

10 掘図中におけるスクリーントーンは以下のものを表わす。

(1) 遺構

遺構断面 = 斜線 ただし、切り合による破壊部分は斜線を逆方向にした。

カマド = 網点 (太)

(2) 遺物

土器内外面 土師器 黒色処理 = 網点 (太)

石器外面 砕石研磨面範囲・石器使用痕範囲 = 網点 (太)

目 次

解 説
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の概要	堤 隆…1
I 発掘調査の概要	〃 …3
(1) 調査に至る動機	〃 …3
(2) 発掘調査の概要	〃 …4
(3) 発掘区の設定と遺構の検出	〃 …5
(4) 発掘調査の経緯	〃 …7
II 遺跡の環境	森川宗治…9
I 遺跡の環境	〃 …11
(1) 自然環境	〃 …11
(2) 歴史的環境	〃 …11
2 層序	堤 隆…17
III 遺構と遺物	堤 隆…19
I 平安時代の竪穴住居址	〃 …21
(1) H-1号住居址	〃 …21
(2) H-2号住居址	〃 …30
(3) H-3号住居址	〃 …33
(4) H-4号住居址	〃 …37
(5) H-5号住居址	〃 …40
(6) H-6号住居址	〃 …42
(7) H-7号住居址	〃 …46
(8) H-8号住居址	〃 …49
(9) H-9号住居址	〃 …54

(10) H-10号住居址	堤 隆	58
(11) H-11号住居址	"	60
(12) H-12号住居址	"	62
(13) H-13号住居址	"	68
(14) H-14号住居址	"	71
(15) H-15号住居址	"	73
(16) H-16号住居址	"	76
(17) H-17号住居址	"	80
(18) H-18号住居址	"	83
(19) H-19号住居址	"	88
2 土 坑	"	91
3 配 石	"	112
(1) S-1号配石	"	112
(2) S-2~4号配石	"	112
4 溝状遺構	"	112
(1) M-1号溝状遺構	"	112
(2) M-2号溝状遺構	"	113
(3) M-3号溝状遺構	"	113
(4) M-4号溝状遺構	"	113
(5) M-5号溝状遺構	"	114
(6) M-6号溝状遺構	"	114
(7) M-7号溝状遺構	"	114
(8) M-8号溝状遺構	"	115
(9) M-9号溝状遺構	"	115
(10) M-10号溝状遺構	"	115
(11) M-11号溝状遺構	"	116
(12) M-12号溝状遺構	"	116
(13) M-13号溝状遺構	"	116
5 K-1号区画内遺構群	"	120
(1) K-1号区画内遺構群	"	120
1 T-1号礎石建物址	"	120
2 F-1号掘立柱建物址	"	120

3	S-2～S-4号配石	堤 隆	121
4	M-8号溝状造構	"	122
5	M-10号溝状造構	"	123
6	K-1号区画内遺構群の構造	"	124
IV	総 括		125
I	総 括		127
(1)	平安時代の土器様相	"	127
1	土器群の段階的把握	"	127
2	土器様相の時間的把握	"	128
(2)	川原田遺跡の特殊遺物	"	133
1	特殊遺物	"	133
2	火熨斗	"	133
(3)	川原田遺跡の文字資料から	"	135
(4)	平安時代の集落	"	137
(5)	川原田遺跡の歴史的性格	"	139
1	平安集落の歴史的性格	"	139
2	K-1号区画内遺構群の性格	"	140
3	おわりに	"	142
引用・参考文献			143
V	写真図版		145

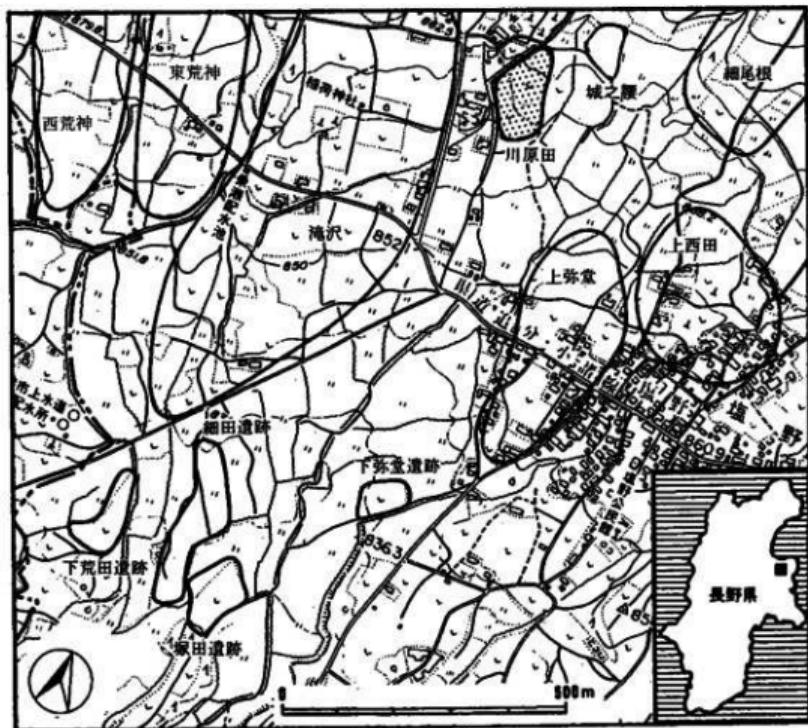
1
**発掘調査
の概要**

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字塩野・小諸市大字塩野・八幡・柏木にかかる一帯、北大井地区において、水田経営の合理化を目的とした県営土地改良総合整備事業が平成2年より実施された。

一方、この地区には周知の遺跡が群在化しており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である佐久地方事務所と、保護部局である長野県教育委員会、御代田町教育委員会の三者において話し合いがもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し、5ヵ年計画で記録保存をはかることとなった。



第1図 川原田（網点）と周辺の遺跡分布（1：10,000）

I 発掘調査の概要

これを受け、平成元年には翌年度工事実施地区にかかる弥堂・細尾・上西田・城之腰・川原田遺跡の5遺跡について試掘調査が実施された。その結果、平成2年度工区に直接かかる遺跡は城之腰と川原田の2箇所に絞り込まれ、翌平成2年にその2遺跡の本発掘調査が実施された。

(2) 発掘調査の概要

1 遺跡名	川原田遺跡
2 所在地	長野県北佐久郡御代田町大字塩野字川原田
3 発掘期間	平成2年4月9日～平成2年9月30日（平成2年度）
4 整理期間	平成2年11月1日～平成3年3月30日（平成2年度） 平成3年4月15日～平成4年3月27日（平成3年度） 平成4年4月3日～平成5年3月25日（平成4年度）
5 発掘理由	平成2年度北大井地区県営土地改良総合整備事業に伴い、川原田遺跡の破壊が予想されたため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行なった。
6 発掘方針	広大な調査対象区について、居住域・生産域・墓域等全体の検出に努める。
7 費用負担	調査費用総額のうち、77.5%は原因者である農政部局（佐久地方事務所）が負担し、残りの22.5%については文化財補助事業として文化財保護部局が負担した（国庫補助金50%、県補助金15%、町費35%）。
8 事務局	教育次長 山本岩正・藤巻興樹 社会同和教育係 堤 隆、小山岳夫
9 調査団	顧問 柳沢 薫（御代田町長） 参与 内山俊雄、桜井為吉、田村泉、小林太郎、柳沢恒三郎、小林五郎、大井源寿 萩原弘祐（御代田町文化財審議委員） 团长 原田正夫・土屋秀憲（御代田町教育長） 担当者 堤 隆（御代田町教育委員会） 調査員 鳥居 亮（主任）、吉井雅勇 補助員 伴野有希子、小山内玲子、竹原久子、小口達志、小林嘉孝、宮下泰 協力者 高地正雄、森川宗治、尾沼けさと、山本まさる、飯田すえの、内堀ときい、 日向万平、日向愛子、甘利隆志、古川まち子、小杉静江、古越邦和 掛川孝子、萩原正子、内堀久代、佐藤夫美子、内堀久美子、内堀美保子 小林満子、松原昭一、大井けさみ

(3) 発掘区の設定と遺構の検出

本調査の発掘区については第1図に示したとおりで、図の約8800m²が該当する。

この発掘区については、一軸を磁北にとって10m四方のグリッドを設定し、北から南に向かって1・2・3～、西から東に向かってA・B・C～と名称を付した。なお、地区全体の把握については、土地改良総合整備事業に関する遺跡總体において、国家座標第VIII系を用い位置付けた。

調査は、調査対象区についてまずは自然地形と遺跡の範囲をみきわめるため、重機により東西・南北に試掘トレンチを入れてみた。その結果おおよその自然地形と遺跡の範囲をとらえることができたので、つぎに遺跡全部分の表土を重機によって除去した。

調査地区から検出された遺構の概要は第1表のとおりである。

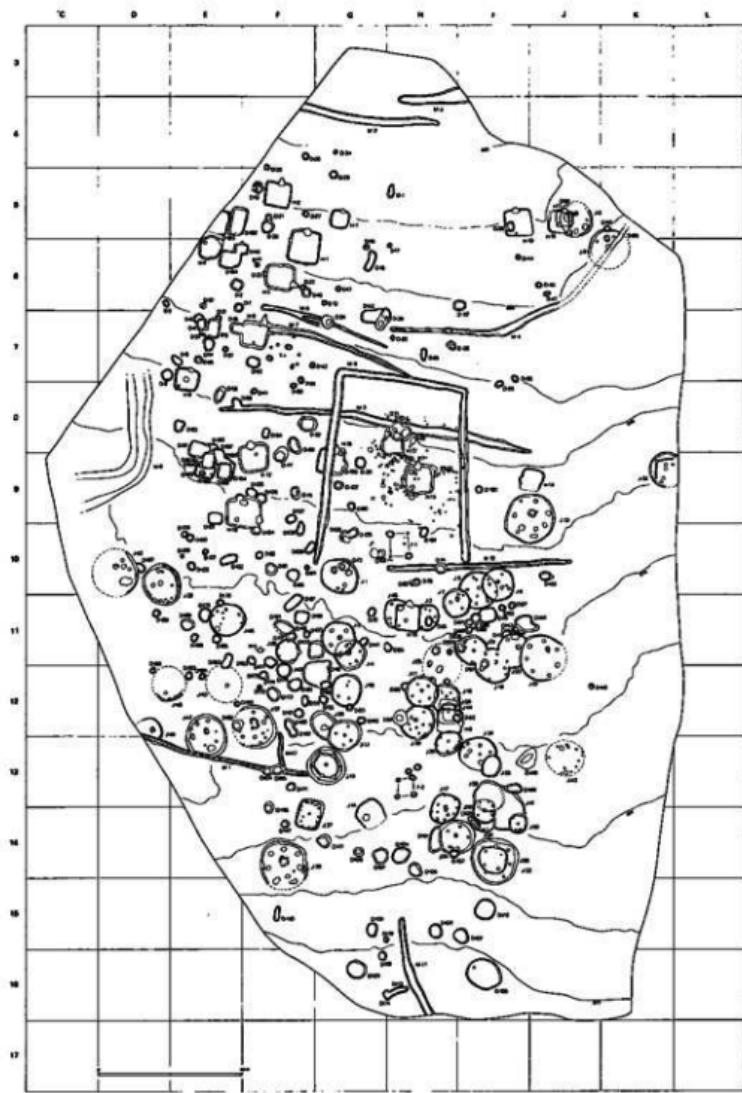
第1表 川原田遺跡の検出遺構数

遺構 時代	竪穴 住居址	獨立柱建物 基	土 坑	礫石 建物	配 石	屋外 が	遺 物	計
縄文前期	6	0	—	0	0	0	0	6
縄文中期	46	1	—	0	0	1	0	48
平 安	19	—	23	—	—	0	—	42
中 世	0	—	14	—	—	0	—	14
不 明	0	1	156	1	4	0	11	173
計	71	2	193	1	4	1	11	283



第2図 川原田遺跡（左）と城之腰遺跡

I 発掘調査の概要



第3図 川原田遺跡全体図 (1 : 800)

(4) 発掘調査の経緯

平成 2 年度

4月9日

発掘調査準備開始

4月13日

重機による表土削平開始

プレハブ設置

4月19日

H-4 より火薬斗出土

4月～7月中旬

平安時代を中心とした調査

7月中旬～9月下旬

縄文時代を中心とした調査

9月27日

航空写真撮影（第一回）

10月18日

航空写真撮影（第二回）

9月30日

発掘調査終了

平成 3 年度

平成 3 年 4 月～平成 4 年 3 月

遺物整理

平成 4 年度

平成 4 年 4 月～平成 5 年 3 月

遺物整理

平成 4 年 12 月～平成 5 年 2 月

原稿作成

平成 5 年 3 月

報告書刊行



第4図 表土削平とプラン確認



第5図 平安住居の調査



第6図 平安住居の実測



第7図 出土遺物の整理

**//
遺 跡
の 環 境**

1 遺跡の環境

(1) 自然環境

川原田遺跡は、浅間山南麓の細い尾根上に位置しており、標高872~882mを測る。

遺跡の背後にそびえる浅間山は標高2,560mを測り、その火山の形態（コニーデ型の裾野・三重式噴火口・寄生火山など）から、わが国においても代表的な活火山といわれており、現在も盛んにその活動を続いている。

浅間火山の最初の噴火は、およそ数万年前から始まったといわれ、その変遷は、古い順から黒斑山期（数万年前）・仏岩期（1万5千年前頃）・軽石流期（1万4千年前～1万1千年前頃）・前掛山期（数千年）とされている。ちなみに、前掛山期における天仁元年（1108年）及び天明3年（1783年）の噴火は、歴史時代の記録に残る大噴火として、あまりにも有名である。

この地域の基盤層は、その浅間山の火山噴出物により構成される。本遺跡の基盤層は主として軽石流期のうち、第2軽石流による堆積物からなっている。また、天仁元年の噴火によると推定される追分火碎流堆積物は、本遺跡の約1km以東の御代田町・軽井沢地域を覆っている。

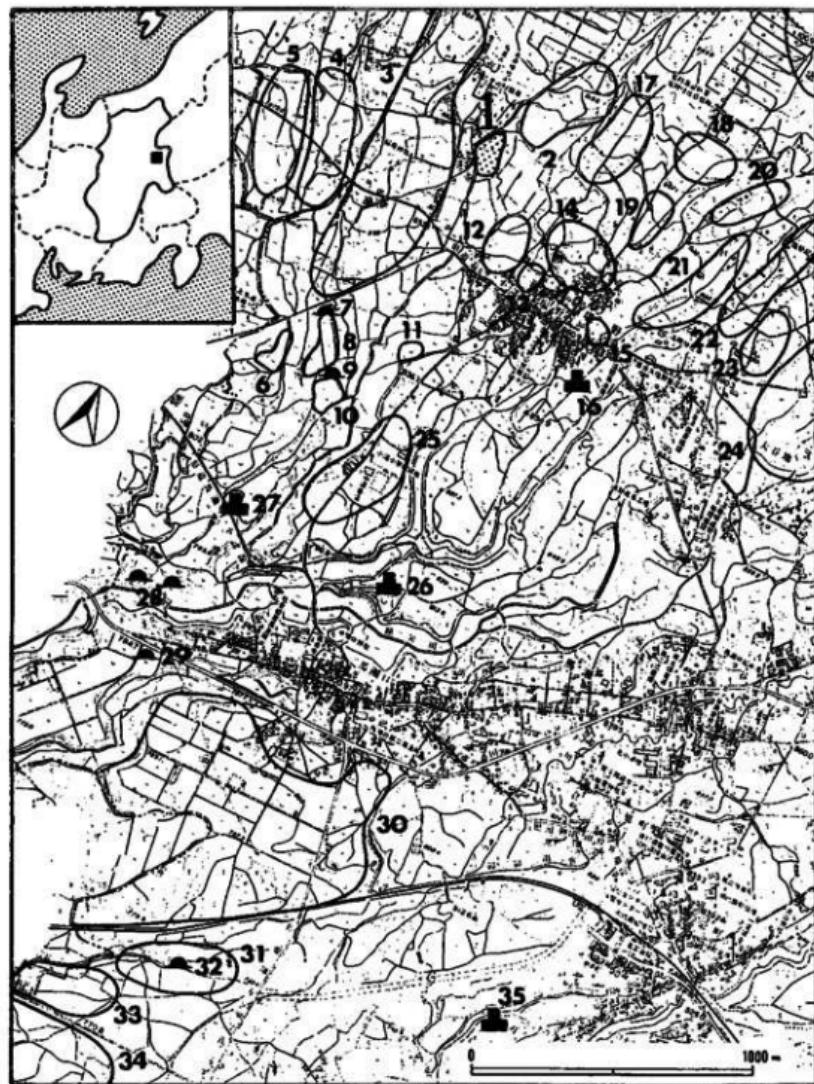
ところで、この遺跡を包括する標高800~900m地帯は、浅間山麓の第一伏流水が、地表の各所に湧出する地帯である。本遺跡の西側、真楽寺の「大沼の池」をたたえる豊富な湧水を始め、本遺跡の東方の湧玉の湧水など隨所に湧水がみられ、往時の集落形成のための要件となっている。なお、湧水や河川の流下は、山麓末端部の軽石流堆積物を刻んで、当地方特有ないわゆる「田切り地形」を発達させている。

さて、この地帯の現在の植生を見ると、北側に植付されたカラマツの林地があり、これにアカマツ、クリ、などが点在している。縄文時代以降の自然植生を想定するなら、コナラ類やクリなどの落葉広葉樹を主とする自然林を含む景観が展開したと見て、差し支えないであろう。

(2) 歴史的環境

川原田遺跡の位置する浅間山南麓の標高800~900m内外には、さきに述べた豊富な湧水や動植物など生活環境や自然環境を背景に、縄文時代を中心とし弥生・古墳・奈良平安時代の、数多くの遺跡が分布している（第8図）。近年の発掘調査成果にも基づいて、以下には時代ごとに遺跡のあり方を追い、歴史的環境についてふれてみたい。

II 痕跡の環境



第8図 川原田遺跡(1)と周辺の遺跡分布(1:20,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代					備考
			旧石器 文	周 生	新 墳	古 墳	奈 良 平 安	
1	川原田	御代田町大字福野字川原田	○			○	○	1950年発掘調査
2	城之體	# 城之體	○		○	○		1990年発掘調査
3	池沢	# 池沢	○		○			1992年発掘調査
4	東荒神	# 東荒神	○			○		
5	西荒神	# 西荒神	○			○		
6	下荒田	# 下荒田			○	○		1991年発掘調査
7	繩田塚古墳	# 繩田				○		1991年発掘調査
8	綿田	# 綿田			○		○	1991年発掘調査
9	塙田古墳群	# 塙田				○		1991年発掘調査
10	櫛田	# 櫛田		○		○		1991年発掘調査
11	下弥堂	# 下弥堂	○					1991年発掘調査
12	上弥堂	# 上弥堂	○					
13	西島	# 西島			○			
14	上西田	# 上西田	○					
15	下藤塚	# 下藤塚	○					
16	塙野城	# 塙野城					○	
17	細屋根	# 細屋根	○			○		
18	広塚	# 広塚	○			○		1987年発掘調査
19	桜庭	# 桜庭	○					
20	西駒込	# 西駒込	○					1991年発掘調査
21	上暮塚	# 上暮塚	○					
22	東二ツ石	# 東二ツ石	○					1991年発掘調査
23	塙野西原	# 西原	○					
24	湯玉	# 湯玉	○					1991年発掘調査
25	馬場	# 馬場				○		
26	馬瀬口城	御代田町大字馬瀬口字北原					○	
27	東十石城	# 東十石					○	
28	めがね塙古墳群	# 塙場			○			
29	下巣古墳群	# 下巣			○			1974年発掘調査
30	下前田摩道跡群	# 西向原				○		
31	桜岸	御代田町大字御代田字桜岸				○		1987年発掘調査
32	根岸古墳	# 根岸				○		
33	十二	# 十二				○		1986年発掘調査
34	病田	# 病田				○ ○		1985年発掘調査
35	谷地城	# 谷地					○	

II 遺跡の環境

(1) 縄文時代

まず、縄文時代の草創期では、本遺跡（第8図1）から「有舌尖頭器」が出土しており、御代田町においては最も古い時期の遺物として位置付けられる。

縄文時代の早期の遺跡としては、塚田（10）・滝沢（3）・城之腰（2）の各遺跡がある。このうち早期前半の遺物としては、塚田遺跡からは山型文・楕円文・格子目文の押型文土器が、滝沢遺跡及び本城之腰遺跡からも楕円押型文土器の破片が出土している。また、つづく縄文早期後半では、塚田遺跡からいくつかの土坑が検出されており、完形復原可能な尖底土器がいくつか認められた。このうち復原された野島式土器は、県下でも数少ない優品である。このほか戸上層式土器や、東海系の木島式土器の破片も出土している。

縄文時代前期初頭では、下弥堂遺跡（11）から竪穴住居址14軒と土坑16基からなる集落が検出された。この時期の住居が明瞭なかたちで検出されたこと自体貴重であると共に、それらがまとまつた「集落」というかたちで検出されたことの意義は深く、佐久地方のみならず県下でも貴重な事例となった。集落出土の土器は、いわゆる「中道式」とも呼称されるされるものであり、その豊富な一括資料も注目される。

これにつづく、縄文時代の前期前半の遺跡としては、城之腰遺跡と塚田遺跡がある。本城之腰遺跡においては、後に詳述するように神之木式土器を含む竪穴住居址が5軒検出されている。そしてこの同型式を伴う集落が、本遺跡の南側約1kmに位置する塚田遺跡において、平成3年の調査によって検出された。塚田遺跡は、当該期の竪穴住居址の10数軒を始め数多くの土坑より構成されており、本遺跡と並んで神之木期の良好な資料を提示するに至った。

さて、縄文時代中期の遺構は、隣接する城之腰遺跡でも4軒が検出されているが、なんといっても注目すべきは、本川原田遺跡での竪穴住居跡46軒の検出である。その竪穴住居により構成される集落全体の検出は、東日本でも有数の調査事例となったといつても過言ではない。加えてこの集落から出土した土器は、いわゆる「焼町土器」と言われるもので、長野・群馬を中心に近年俄に注目を浴びている土器である。そして本遺跡から出土した「焼町土器」は、これまでのものを質量ともにはるかに上回り、最も充実した資料となつた。

また、縄文時代の後期の遺物としては、滝沢遺跡（3）で堀之内式土器等が充実して出土している。なお、縄文時代晚期の資料は、本遺跡西南の小諸市石神遺跡で出土しているという。

(2) 弥生時代後期～古墳時代初頭

弥生時代後期に包括される遺跡には、細田遺跡・下荒田遺跡がある。細田遺跡からは、竪穴住居址10軒が検出されている。従来、当町一帯の地域は、標高が高く気温が低いことから、稲作が営まれ始めて間のないこの時代の遺跡は存在しないのではないかと言われてきた。しかし、はか

らずも平成3年の発掘調査によってこの時代の住居址が確認されたのである。ただ、遺跡付近では残念ながら水田跡は検出されなかつたが、当時の人々が付近の湿地などをを利用して水稻耕作を行っていたことは十分に推測され得る。一方、下荒田遺跡からは、当該期の竪穴住居址5軒が検出されている。これらの住居址からは、ベンガラで染められた千曲川流域特有のいわゆる「赤い土器」を含む箱清水式土器が一括して出土しており、その資料の幅を増した。いずれにしても標高800m以上の高冷地での弥生時代後期遺跡の発見は貴重な事例といえる。

その弥生時代後期に続く古墳時代初頭では、塚田遺跡より竪穴住居址6軒からなる集落が検出された。そのなかには、長辺10mを測る佐久地方最大の大形住居が含まれている。集落出土の土器群は前時期より継続した様相を呈している。

(3) 古墳時代後期

当町の北部馬瀬口・塩野地区には、従前から古墳が散見されていたが、最近の発掘調査（平成3年度）によって、塚田古墳群（円墳5基）の調査がなされた。しかし残念なことに、これらのいずれも畠地造成などにより墳丘が削られ、その存在が明確でなかったものである。したがって1基を除いてはいずれも周溝のみが検出されたにすぎない。また、細田塚古墳（7）も塚田古墳群に隣接して存在している。

ちなみに、既存の古墳群のうち、国道18号線沿いにある下原1号古墳については、昭和49年に発掘調査され、現在、町の史跡として保存されている。

(4) 平安時代

この時代に包括される遺跡は、城之腰遺跡・下荒田遺跡・滝沢山遺跡で、本川原田遺跡からは竪穴住居址が19軒検出されている。

本遺跡の竪穴住居址19軒からは、土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。特筆すべきは、土師器のいくつかに「大内寺」もしくは「大平寺」の墨書きが認められており、文献はもちろん伝承にもない、いわば幻の寺「大内寺」もしくは「大平寺」が、存在したことを想定させることである。また、溝の巡る礎石建物址も検出されている。このほか竪穴住居址の1軒からは全国で、10例にも満たないといわれる青銅製の大熨斗も出土した。

なお、下荒田遺跡からは、10世紀ごろの竪穴住居址8軒が検出されている。

(5) 御牧「塩野牧」と東山道

平安時代の当地域は、延喜式に見られる御牧「塩野牧」が存在したといわれている地域である。現在、その「塩野牧」の遺構とみられ、通称、「駒飼の土堤」と呼ばれる一辺50mの方形状の土堤

構築物が、本遺跡の北東約1kmの、塩野山地籍に残っており、塩野山遺跡として町の指定史跡になっている。

なお、この「塩野牧」の明確な範囲については不明であるが、その入口は、樋口（ませぐち）とももされた現在の御代田町馬瀬口と推定されることや、駒などのついた牧に由来する地名から考へるに、相当広範囲に及んでいたことが推定される。先に述べた本遺跡や、下荒田の各遺跡も当然この範囲に包括されていたものと考えられる。したがって、これらの遺跡の集落に住んでいた人々について、「塩野牧」との何らかの係りも想定できないことはない。

さて、延喜の官道といわれる「東山道」が、当時、本地域を横断していたことが推定されている。小諸から東進した「東山道」は、軽井沢・碓井艸を経て群馬へと通ずるが、そのためには必然的に本地域近隣を通過せねばならない。本地域では、残念なことにこれまで「東山道」そのものの発見には至っておらず、またその通過ルートについても諸説が提示されたままで決着に至っていない。想定されている「東山道」通過ルート説は、大きくは3つあって、それぞれ「小田井ルート」・「馬瀬口ルート」・「塩野ルート」となっている。ここで、仮に、「塩野ルート」を探った場合、奈良平安時代の本川原田遺跡の集落付近をこの「東山道」が通っていたことになり、その関連も無視できない。

ところで、昭和59年から62年にかけて発掘調査のなされた鎌師屋遺跡群(31~34)では、奈良平安時代の集落が充実して検出された。それに伴って多数の馬骨も出土したことなどから、鎌師屋の集落は「東山道」や「御牧」に関連が深いとする見解がある。かつて一志茂樹氏も、「東山道長倉駅」が存在したのは鎌師屋遺跡群に隣接する中屋敷地籍（小田井ルート）であると推定した経緯がある。鎌師屋遺跡群前田遺跡では、「長倉寺」と墨書きされた土器も検出されており、その関連性も窺わせている。本遺跡以外にもそうした関連性が考えられるところである。

(6) 中世

城之腰遺跡は、その小字名から「城」との関連が想定されていたが、果たして発掘調査によつて二重に巡らされた堀跡など検出され、中世城郭としての機能の一端をになっていたことが明らかになった。

また、城之腰の周辺には、「塩野城」(16)・「西城」・「馬瀬口城」(26)とされる史跡が、中世城郭として周知されている。

ちなみに、本遺跡の南方5kmに位置する金井城跡については、破格の8万m²が調査され、16世紀における中世城郭の構造が明らかにされた。

以上、川原田遺跡をとりまく歴史的環境について述べてみた。

(森川 宗治)

2 層序

川原田遺跡の基本層序については、第9図に示した。以下にその基本層序を説明する。

I層 耕作土層

黒褐色 (10YR2/3) を呈し、粒子細かくてやや粘性あり。層厚30~40cm前後。

II層 黒褐色土層

黒褐色 (10YR3/2)。細粒バミスをよく含む。層厚20~30cm前後。

III層 黒褐色土層

黒褐色 (10YR3/1)。細粒バミスを大量に含む。層厚30~40cm前後。

IV層 暗褐色土層

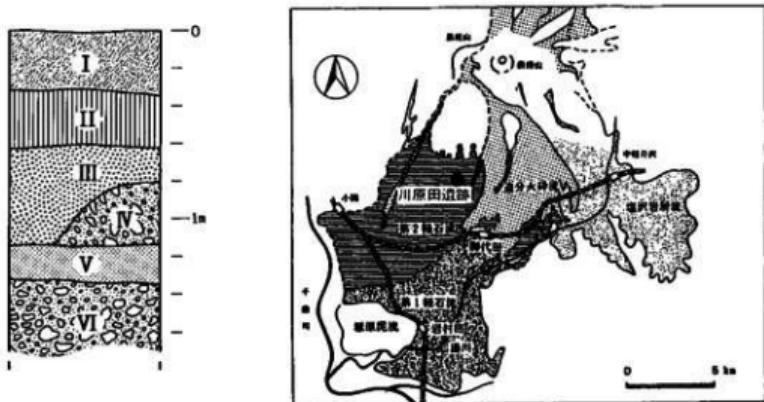
暗褐色 (10YR3/3)。拳大の軽石を大量に含む。部分的に認められるのみ。

V層 漸移層

に近い黄褐色 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含み始める。細粒バミスをよく含む。

VI層 ローム層

灰黄褐色 (10YR6/2)。浅間山軽石流期の第2軽石流堆積物(約1万1千年前)。径15~30mm前後の軽石を主体的に含み、わずかに拳大の軽石を多く含む。



第9図 川原田遺跡の基本層序と浅間の火山堆積物の分布

III
遺構
と遺物

1 平安時代の竪穴住居址

(1) H-1号住居址

住居址 第10図

H-1号住居址は、F-6グリッドにおいて検出された。

本址は、南北4.7m東西4.2m隅丸長方形を呈し、床面積17.1m²を測り、南北軸方向はN-9°-Eを指す。壁の残存高は、10~40cmを測る。壁溝は認められない。床面は貼り床である。

ピットは、住居址の南壁よりP₁P₂とP₃P₄とが対で認められた。西壁にはP₅が存在する。また、住居の床面をはがすとP₆~P₁₀が検出された。このうち少なくともP₆は床下土坑の可能性が高いと考えられる。なお、P₇(第12図)中には灰釉陶器が廃棄され粘土塊(網点)も認められた。ピットの大きさは、P₁が30×30cm深さ65cm、P₂が40×25cm深さ15cm、P₃が35×25cm深さ10cm、P₄が30×30cm深さ60cm、P₆が40×40cm深さ50cm、P₇が30×30cm深さ60cm、P₈が140×125cm深さ60cm、P₉が190×100cm深さ40cm、P₁₀が30×30cm深さ20cm、P₁₁が60×60cm深さ40cmを測る。

遺物は、13の高台付皿が東南コーナーの床面より5cm浮いて正常位で検出された。また、40の鉄製紡錘車も東南コーナーより出土している。2の灰釉陶器と16の環はP₇中より出土した。カマド東袖脇からは、8が正常位で、11が転倒位で出土した。カマドの西脇には、カマドの構材である安山岩礫の一部が取り外されて置かれていた。またカマドの前方にも構材と考えられる安山岩礫が散乱していた。

覆土は、4層に分層された。I層はローム粒子を含まない黒色土層(10YR2/1)、II層はローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR2/3)、III層はローム粒子をよく含む暗褐色土層(10YR3/3)、IV層はロームをブロック状に含む褐色土層(10YR4/4)であった。その堆積全体について人為か自然かの判断は付け難かった。

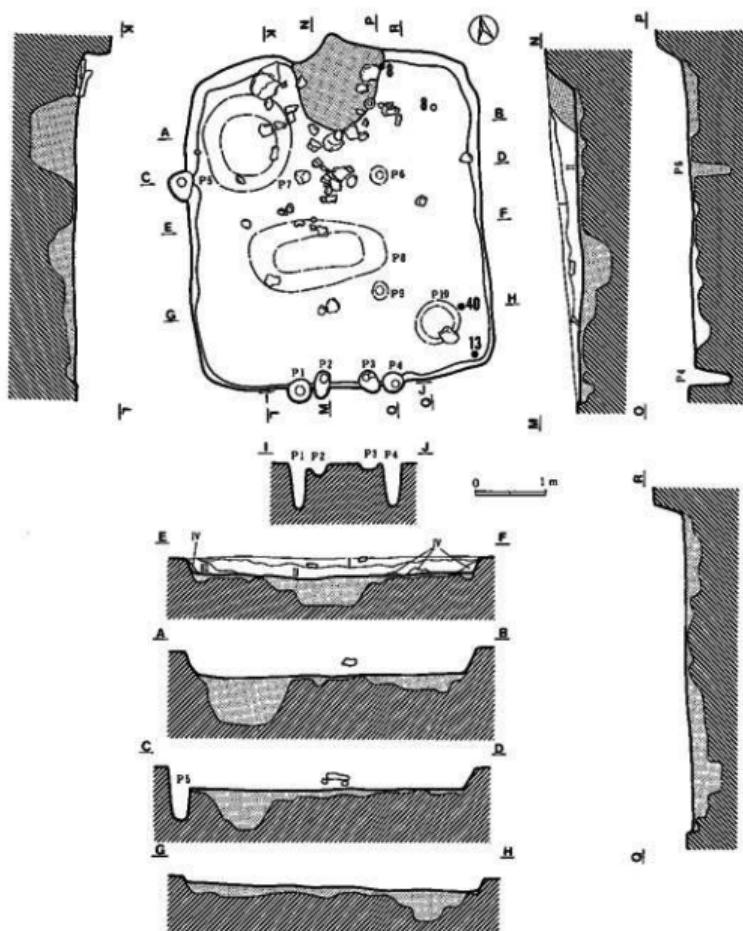
掘り方は、平坦ではなく、中央が高く周辺部で低い状態をみせていた。その掘り方中からは、P₆等が検出された。

カマド 第11図

カマドは、住居址の北壁の中央に存在している。

本カマドは、その西脇にはカマドの構材である安山岩礫の一部が取り外されて置かれていた。またカマドの前方にも構材と考えられる安山岩礫が散乱していた。しかし、その両袖と天井石の一部はとどめていた。袖には、安山岩と鉄平石が芯材として用いられ、黄褐色ローム(8層 10

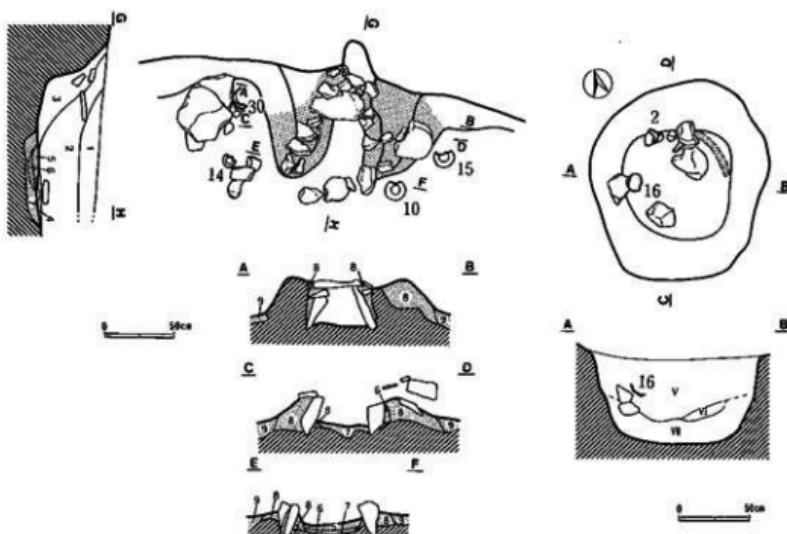
III 遺構と遺物



第10図 H-1号住居址実測図 (1 : 80)

YR5/8)・ロームの混じる暗褐色土層(9層 10YR3/3)によって構築されていた。天井石は扁平な鐵平石である。

本カマドの覆土は、7層に分層された。1層は焼土・カーボンをまったく含まない黒褐色土層(10YR2/2)、2層は焼土が全体に混入し・カーボンを若干含む暗褐色土層(10YR3/3)、3層は



第12図 ピット7実測図 (1:40)

第11図 H-1号住居址カマド実測図 (1:40)

多量の焼土とカーボンを若干含む暗褐色土層(10YR3/4)、4層は焼土・カーボンを含まない黒色土層(10YR2/1)、5層は明赤褐色焼土層(5YR5/8)、6層は赤褐色焼土層(5YR4/8)、7層は焼土・カーボンをまったく含まない暗褐色土層(10YR3/4)である。火床は5層の上面である。

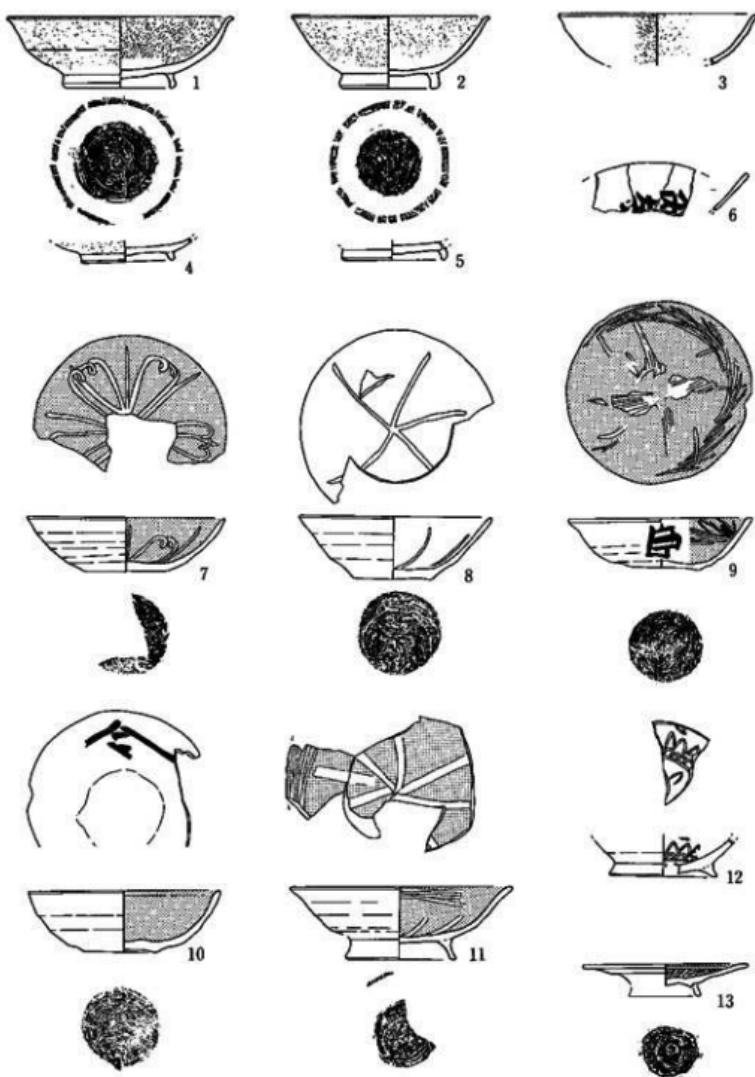
遺物 第13~16図・第3~5表

遺物は、灰釉陶器壺・長頸瓶、須恵器では甕、土師器では杯・皿・甕・羽釜・手づくね、石器では磨石・敲石、鐵器では紡錘車が検出されている。このほかスラグも1点出土している。

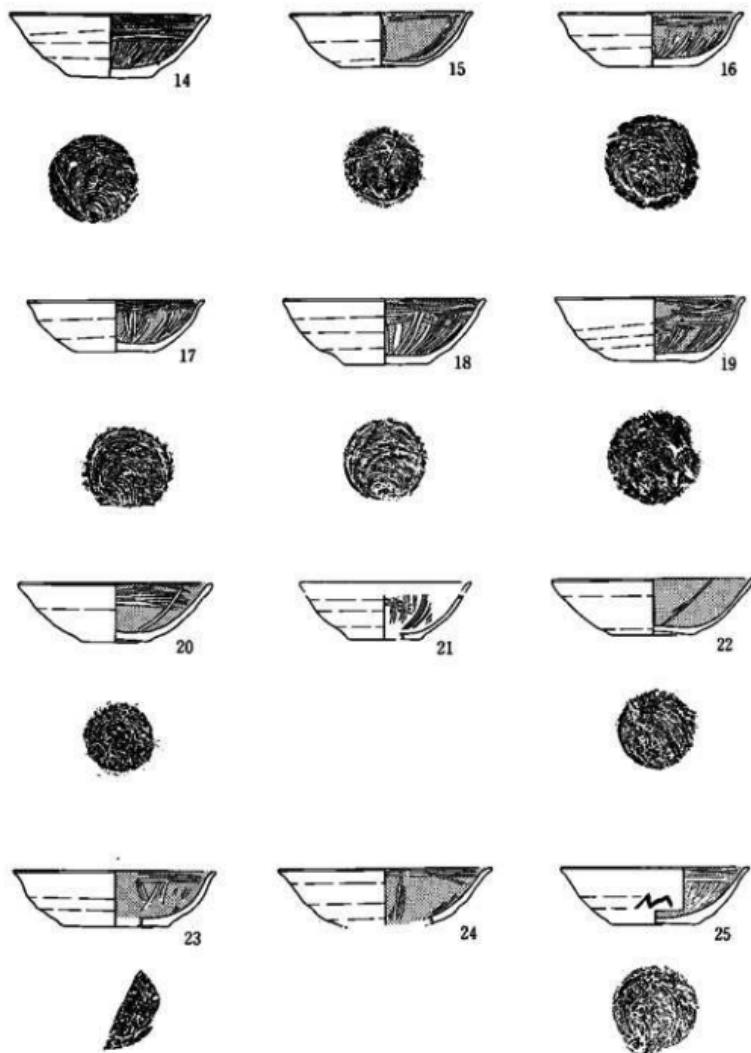
1~5は釉が刷毛掛けによる灰釉陶器壺、34は灰釉陶器長頸瓶である。原明芳氏のご教示によれば、2の壺が尾北の篠岡4号窯式に、他は東濃の光ヶ丘1号窯式比定されるものであるという。このうち、4の底部内面と5の底部内外面には研磨光沢が顕著で、転用碗として用いられたことが窺える。ただ、墨の付着がないため、黒墨用か朱墨用かの判断ができない。

7~10・14~25は内面黒色研磨のなされた回転糸切りの土師器杯、11・12は内面黒色研磨のなされた土師器高台付杯、13は土師器高台付皿である。このうち、8・15・19には放射状暗文が、7には花弁状暗文、12には花びら状の暗文が認められる。なお10は内面に煤が付着し灯明皿とし

III 造構と遺物

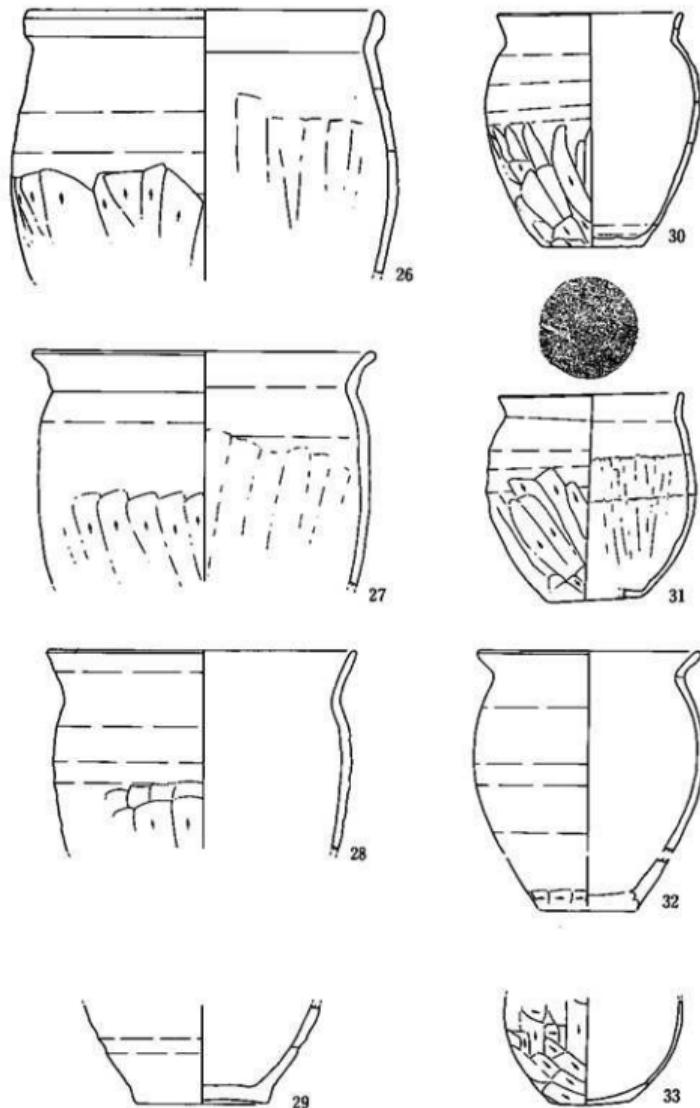


第13図 H-1号住居址出土遺物 (1 : 4)



第14図 H-1号住居址出土遺物 (1:4)

III 造構と遺物



第15図 H-1号住居址出土遺物 (1:4)



34



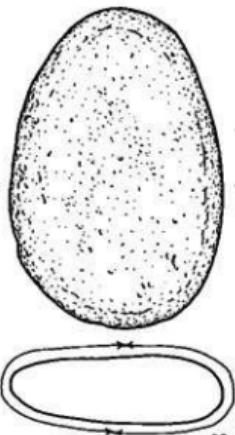
35



36



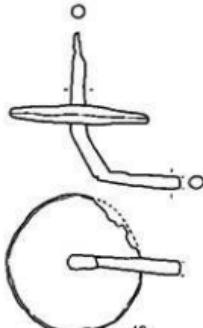
37



38



39



40



41

42

43

第3表 H-1号住居址出土遺物一覧表(石器・鉄器)

図版番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
38	磨石	安山岩	17.0	11.0	3.6	1057	
39	磨石	安山岩	18.4	5.8	4.4	527	
40	筋轆車	鉄	(8.2)	7.4	7.3	(86)	
41	鉄器	鉄	(4.4)	0.8	0.4	(3)	
42	鉄器	鉄	5.9	0.6	0.4	5	
43	鉄器	鉄	(4.8)	0.3	0.3	(1.1)	

※ 単位はcm・g

第16図 H-1号住居址出土遺物

(34~37は1:4・38~43は1:3)

III 造構と遺物

第4表 H-1号住居址出遺物一覧表〈土器〉

件番 固 有 数 号	部 種 法 号	器形の特徴	測 定 数	備 考
1 (完)	壺 (灰)	15.2 体部内側、口縁部強く屈折して外傾。底部に三日月状の凸台貼り付け。 7.1	内部面クロコナ。底部未切手の様ナ。内外底を焼き刷毛掛けによる施釉。	胎土は結晶化され、灰白色に近い。 (1.5YR 8/2) 東端・光ヶ丘1
2 (完)	壺 (灰)	14.0 体部内側、口縁部強く屈折して外傾。底部に三日月状の凸台貼り付け。 7.0	内外面クロコナ。底部未切手の様ナ。内外底を焼き刷毛掛けによる施釉。	胎土は結晶化され、灰白色。 (1.5YR 8/3) 尾北・森岡4
3 (原)	壺 (灰)	14.0 体部内側、口縁部強く屈折してやや外傾。 —	内外面クロコナ。内外底を焼き施釉。	胎土は結晶化され、灰白色。 (1.5YR 7/1) 東端・光ヶ丘1
4 (完)	壺 (灰)	— 台脚丸みをもつた形。	内外面クロコナ。底部未切手の様ナ。内外底を焼き刷毛掛けによる施釉。	胎土は結晶化され、灰白色。 (1.5YR 7/1) 内底部・外底部ともに乾燥。
5 (完)	壺 (灰)	— 底部に三日月状の凸台貼り付け。 7.0	内外面クロコナ。底部未切手の様ナ。内外底を焼き刷毛掛けによる施釉。	胎土は結晶化され、灰白色。 (1.5YR 7/1) 東端・光ヶ丘1
6 (原)	耳 (土)	— 体部に「大内寺」と墨定される墨書きあり。	内外面クロコナ。内面は墨色処理。	胎土は砂粒を含み、にいよい黄褐色。 (10YR 6/4)
7 (原)	耳 (土)	13.7 口縁から底部にかけて内側汽泡に開く。 3.8 底部平底。 5.6	内外面クロコナ。内面は黑色処理のち、放射状と花弁状を組み合せた墨文を施す。 底部未切手後、手持てらへタケリ。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/3)
8 (原)	耳 (土)	13.6 口縁から底部にかけてほぼ直線的に開く。 4.4 底部平底。 5.6	内外面クロコナ。内面直いへラミガキの後、放射状の墨文を施す。 底部未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/4)
9 (完)	耳 (土)	12.7 体部は内側汽泡に開き、口縁部いたって外反する。 3.6 底部平底。 4.7	内外面クロコナ。内面は黑色処理のち、口縁部一帯に直い墨書きのへラミガキを施す。 底部未切手後、手持てらへタケリ。	胎土は砂粒を含み、にいよい黄褐色。 (10YR 7/3) 東端部に有り。
10 (完)	耳 (土)	13.0 体部から底部にかけて内側して開く。口縁部 4.3 内側而取り。底部平底。 5.2	内外面クロコナ。内面直いへラミガキの後、放射状の墨文を施す。 底部未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/3) 「合」備考欄に有り。
11 (原)	高台耳 (土)	— 体部は内側して開くと思われる。台脚は薄く、 断面丸みを帯びた方形を呈する。	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、放射状の墨文を施す。 底部未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/3)
12 (原)	高台耳 (土)	— 体部は内側して開くと思われる。 断面は先端がシャープで方形を呈する。	内外面クロコナ。内面直いへラミガキの後、電線・波状・直線を三段に組み合わせた墨文を施す。 底部未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 6/3)
13 (完)	耳 (土)	11.6 体部は直線的に開くが中位で底厚、口縁部はやや外反する。	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、やや墨をへラミガキを施す。 底部未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/3)
14 (完)	耳 (土)	14.1 体部は内側して開く。 5.8 底部平底。 4.6	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、直いミガキ。 底部未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/4)
15 (完)	耳 (土)	12.6 体部は内側して開く。口縁部でやや外反する。 5.6 底部平底。 5.4	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、底部一帯に直いミガキ。内底から口縁部にかけて放射状の墨文を施す。底部削底未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい黄褐色。 (10YR 7/3)
16 (原)	耳 (土)	12.9 体部は内側して開く。口縁部でやや外反する。 3.3 底部平底。 6.3	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、直いミガキ。 底部削底未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい黄褐色。 (10YR 7/3)
17 (原)	耳 (土)	12.3 体部は内側して開く。口縁部でやや外反する。 3.6 底部平底。 5.4	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、直いミガキ。 底部削底未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい黄褐色。 (10YR 7/3)
18 (完)	耳 (土)	14.1 体部は内側して開く。口縁部でやや外反する。 4.6	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、やや粗いミガキ。 底部削底未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/4)
19 (原)	耳 (土)	13.4 体部は内側して開く。口縁部でやや外反する。 4.5 底部平底。 5.7	内外面クロコナ。内面は黑色処理の後、やや粗いミガキ。 底部削底未切手。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.5YR 7/4)

第5表 H-1号住居址出遺物一覧表〈土器〉

番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
20 (H)	环 (土)	(13.6) 4.2 (4.5)	体部は内凹きみに開く。 底部平底。	内外面クロナダ。 内面黑色地色の後、やや細いミガキ後、放射状文。 底部削除未切り。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/4)
21 (H)	环 (土)	- - - 4.0	体部内向して開く。 底部平底。 部内薄い。	内外面クロナダ。 底部系引りの後手待ちへラケズリ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(10YR7/2)
22 (H)	环 (土)	14.0 3.9 5.8	体部内向して開く。 底部平底だが上げ張気味。 部内薄い。	内外面クロナダ。 内面黑色地色の後、放射状文。 底部削除未切り。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/3)
23 (H)	环 (土)	(14.4) 3.9 0.7	体部内向して開く、口縁部で外反する。 底部平底。	内外面クロナダ。 内面黑色地色の後、やや細いミガキ。 底部削除未切り。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/3)
24 (H)	环 (土)	(14.8) - -	体部内向して開く、口縁部で外反する。	内外面クロナダ。 内面黑色地色の後、やや細いミガキ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/4) 例説不明器体部あり。
25 (H)	环 (土)	- - 7.0	体部内向気味に開き、口縁部でやや外反する。	内外面クロナダ。 内面黑色地色の後、やや細いミガキ。 底部削除未切り。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/4) 例説不明器体部あり。
26 (H)	型 (土)	(24.2) - -	口縫部肥厚して受口状に直立する。側部は中位で強く膨らむ。	内外面クロナダ。 内面は側部上位以下を横方向ナダ。 外面は中位以下を横方向ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/4)
27 (H)	型 (土)	(24.0) - -	口縫部から側部上位にかけて「く」字状に屈曲し、側部は上位で膨らむ。	内外面クロナダ。 内面は側部上位以下を横方向ナダ。 外面は中位以下を横方向ナダ。	胎土は黒い砂粒を多量含み、褐色。(5YR7/6)
28 (H)	型 (土)	(21.0) - -	口縫部から側部上位にかけて「く」字状に屈曲し、側部は上位で膨らむ。	内外面クロナダ。 内面は側部上位以下を横方向ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(2.5YR7/4) 外縁、内面上面に煤の付着有り。
29 (H)	型 (土)	13.0 16.6 7.1	口縫部から側部上位にかけて「く」字状に屈曲し、側部は上位で膨らむ。底部平底。	内外面クロナダ。 内面は側部上位以下を横方向ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(10YR7/4) 外縁、内面上面に煤の付着有り。
30 (H)	型 (土)	13.0 14.3 6.6	口縫部肥厚気味で受口状に開く。側部は中位で強く膨らむ。	内外面クロナダ。 内面は中位以下を横方向ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(10YR7/4) 外縁、内面上面に煤の付着有り。
31 (H)	型 (土)	(15.6) 18.4 7.0	口縫部から側部上位にかけて「く」字状に屈曲し、側部は中位で膨らむ。底部平底。	内外面クロナダ。 側部の底部近くで横方向へラケズリ。	胎土は黒い砂粒を多量含み、褐色。(5YR7/6)
32 (H)	型 (土)	- - 9.2	-	内外面クロナダ。 底部削除未切り。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/3)
33 (H)	型 (土)	- - 5.7	側部は丸く膨らむ。 底部平底。	外表面かいランダムな方向へのラケズリ。 内面ミガキのちナダ。 底部へラケズリ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(5YR7/4)
34 (H)	瓶 (土)	12.4 - -	口縫部外反し、縫部で面取りされ直立する。	内外面クロナダ。	胎土は焼過され、灰白色。(10YR7/1)
35 (H)	型 (土)	14.4 - -	口縫部外反気味に開き、口縫部は面取りされる。	内外面クロナダ	胎土は燒過され、灰白色。(10YR5/1)
36 (H)	手捏ね (土)	6.0 3.7	やや底部気味、造形形状を呈する。 並み有り。	内外面指痕成形の後、ナダ。内面に輪辺み痕残る。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(5YR7/3)
37 (H)	羽釜 (土)	27.4 - -	口縫部はほぼ直立する。	内外面クロナダ。	胎土は砂粒を含み、にい黄色。(7.5YR7/4) 燒過成形。

III 造構と遺物

て利用されたことが窺える。

26・32はロクロ整形による土師器甕である。このうち、32は回転糸切りの底部、29・30は切り離しの後周囲手持ちヘラケズリの底部をみせる。

35は須恵器甕、36は手づくね土器、37は羽釜である。

38は磨石、39は敲石、40は紡錘車である。

なお、墨書き土器は6点が確認されている。これらはいずれも国立歴史民俗博物館の平川南教授に判読をお願いした。うち、9は臣であるいは「臣」の可能性が考えられ、10は「合」、7は「○内寺」でH-8の同様な墨書きとの関連から「大内寺」、25は「物」と考えられ、24は判読不能、もう一点も判読不可能なため図示していない。

時 期

本住居址は、10世紀初頭、川原田遺跡第II期に位置付けられよう。

(2) H-2号住居址

住居址 第17図

H-2号住居址は、F-5グリッドにおいて検出された。南北3.4m東西3.54mの隅丸方形を呈し、床面積10.6m²を測り、南北軸方向はN-7°-Eを指す。残存壁高は、10~35cmを測る。壁溝は認められない。床面は貼り床である。ピットは認められなかった。

カマドの前方には、カマドの構材である軽石・安山岩礫が散乱していた。

掘り方は、平坦ではなく、住居中央部が高く、周囲は凹凸をみせていた。

遺物は1の环がカマドの前方より出土しているが、そのほかには良好な出土状態を示すものは認められなかった。

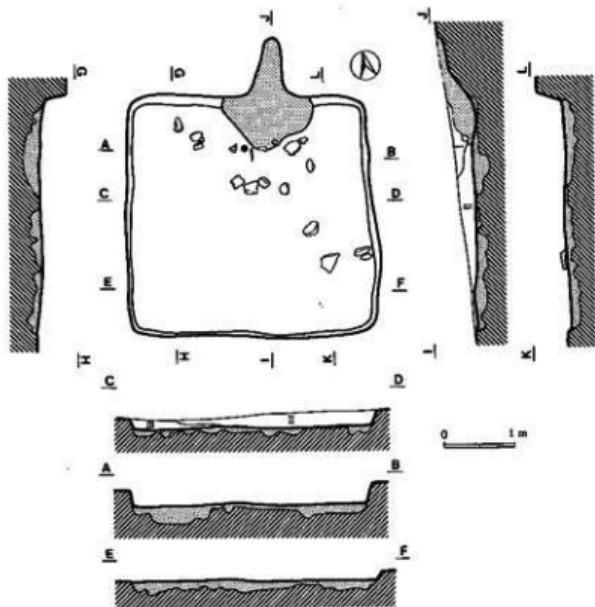
住居址中の覆土は3層で、I層はローム粒子の僅かに混じる黒色土層(10YR2/1)、II層はローム粒子・ロームブロックのよく混じる黒褐色土層(10YR2/3)、III層はローム粒子が全体に混じる暗褐色土層(10YR3/3)であった。覆土は人為的な埋土である可能性も残る。

カマド 第18図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東寄りに存在している。

本カマドは、左右両袖の一部をとどめるのみで、全体に破壊され、前方にはその構材である軽石・安山岩礫が散乱していた。

袖は、黒色土にローム粒子の混じるを主体に黒褐色土層(7層 10YR3/2)、ロームを主体とす



第17図 H-2号住居址実測図 (1:80)

る構築土である暗褐色土層（8層 10YR4/4）によって構築されていた。また、火床にもロームを主体とする構築土である褐色土層（5層 10YR4/6）が貼られていた。

本カマドの覆土は、4層に分層された。1層はローム粒子を多量に含み焼土もよく含む黒褐色土層（10YR3/2）、2層は僅かにカーボンを含む暗褐色土層（10YR3/4）、3層は多量の焼土を含むにぶい赤褐色土層（5 YR4/3）、4層は赤褐色焼土層（5 YR4/8）である。

遺物 第19図・第6・7表

遺物の出土量はきわめて少なく、土師器の壊・甕が検出されているのみである。

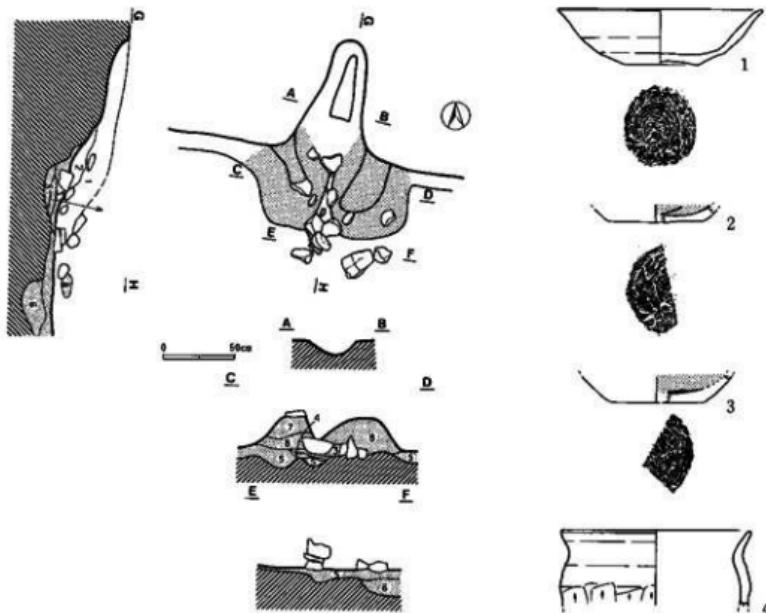
1～3は回転糸切りの底部をみせる土師器壊である。

4はロクロ整形による土師器甕である。

III 這様と遺物

第6表 H-2号住居址出土遺物一覧表(土器)

件名番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (Ⅰ)	平 (土)	(14.4) 3.9 5.4	体部内斜、口縁部微く外反。底部平底。	内外面クロナナ。底部朱書き。	胎土は砂粒を含み、灰褐色。 (SYR 7/5)
2 (Ⅱ)	平 (土)	- - 底部 底部	底部平底。	内外面クロナナ。 内面黒色處理の後放射状の理文。 底部朱切り。	胎土は砂粒を含み、灰褐色。 (SYR 6/3)
3 (Ⅳ)	平 (土)	- (5.6)	底部平底。	内外面クロナナ。 内面黒色處理の後、丁寧なこぎき。 底部朱切り。	胎土は砂粒を含み、灰褐色。 (SYR 6/2)
4 (Ⅴ)	腹 (土)	(13.4) - -	口縁部から腹部上位にかけて「く」字状に墨由する。	内外面クロナナ。底、側部は南北方向のへラケズリをほどこす。	胎土は砂粒を含みにい灰褐色。 (SYR 7/2)



第18図 H-2号住居址カマド実測図 (1:40)

第7表 H-2号住居址出土遺物一覧表(鉄器)

件名番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5	鉄器	鉄	(3.9)	0.5	0.5	(1)	

※ 単位はcm・g

第19図 H-2号住居址出土遺物
(1~4は1:4・5は1:3)

時期

本住居址は、10世紀前葉、川原田遺跡第III期に位置付けられよう。

(3) H-3号住居址

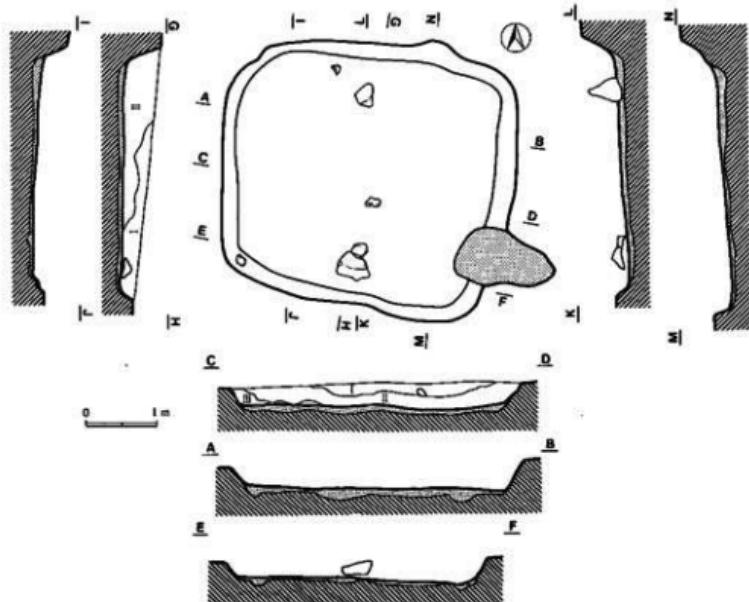
住居址 第20図

H-3号住居址は、F-6グリッドにおいて検出された。

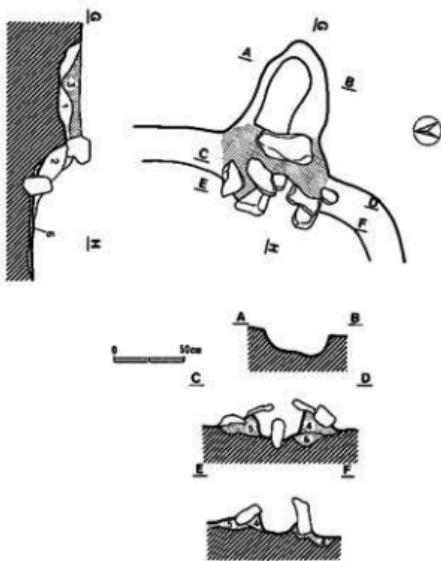
本住居址は、南北3.66m東西4.06mの隅丸方形を呈し、床面積11.1m²を測り、南北軸方向はN-7°-Eを指す。壁高は、20~50cmを測る。壁溝は認められない。床面は薄い貼り床である。ピットは検出されていない。

覆土は、3層に分層され、人為埋土的な堆積状況を示していた。I層は大量のローム粒子を含む褐色土層(10YR4/4)、II層はローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR3/2)、III層は大量のローム粒子を含む褐色土層(10YR4/6)である。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。



第20図 H-3号住居址実測図 (1:80)



第21図 H-3号住居址カマド実測図 (1:40)

カマド 第21図

カマドは、住居址の東壁の南コーナーよりに存在しているが、床下の焼土から移動前の旧カマドが北壁の東コーナーよりに存在していたことが窺えた。

本カマドの大部分は破壊されており、左右両袖の一部と天井石・支脚石を留めているのみであった。袖石・天井石・支脚石には未加工の安山岩礫が用いられ、構築土は暗褐色土層(3層 10YR3/3)、ロームの混じる暗褐色土層(4層 10YR3/3)、ロームの混じる褐色土層(5層 10YR4/6)によって構築されていた。

本カマドの覆土は、2層に分層された。1層は焼土・カーボンを若干含まない褐色土層(10YR4/4)、2層は焼土粒子を含む暗褐色土層(10YR3/3)である。

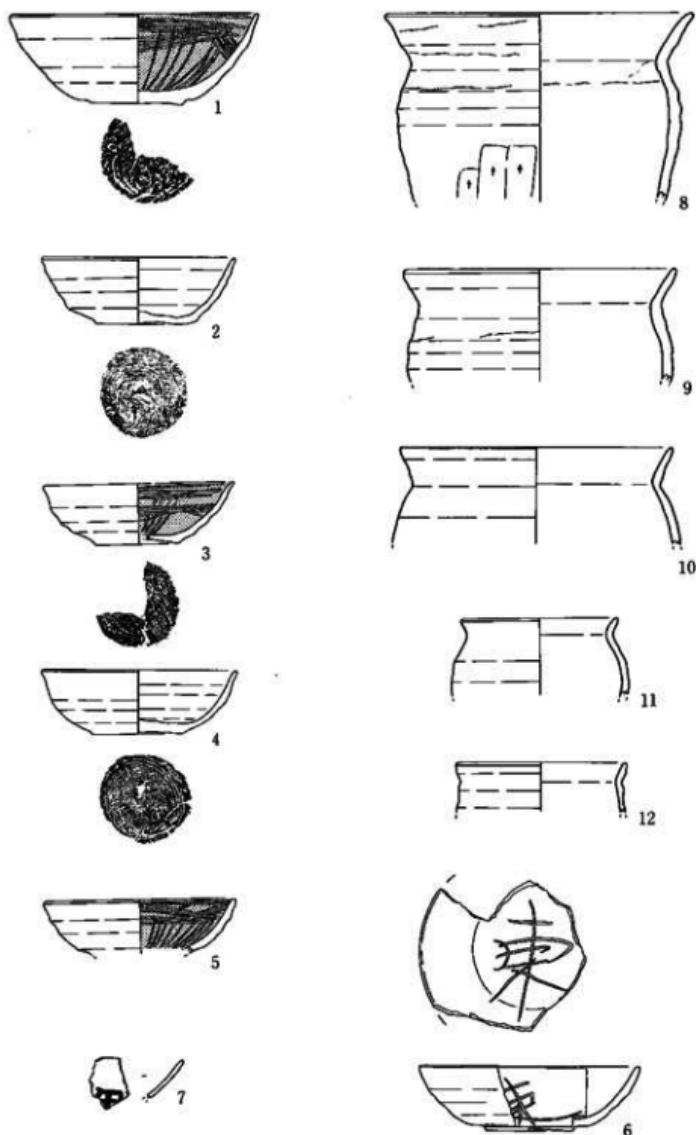
遺物 第22・23図・第8・9表

遺物は、須恵器では甕の破片、土師器では壺・甕が検出されている。

1~4は回転糸切りの底部をみせる土師器壺で、1・3・5が内面黒色研磨のなされたもの、2・4の内面はロクロヨコナデのまま未調整である。6には「東」の刻書がある。

8~12はロクロ調整による土師器甕である。

1 平安時代の整穴住居址



第22図 H-3号住居址出土遺物 (1 : 4)

III 遺構と遺物

第8表 H-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

序 番 号	器 種	性 質	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (四)	平 (土)	17.4 3.8 6.6	口縁部から底盤にかけて内窓気孔に開く。 底盤平底。	内外面ロクロナナ。 内面黑色處理の後、丁寧なミガキ。 底盤赤切り。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 6/4)
2 (三)	平 (土)	13.5 4.7 6.2	口縁部から底盤にかけて内窓して開く。 底盤平底。	内外面ロクロナナ。 底盤赤切り。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (5YR 7/4)
3 (三)	平 (土)	13.4 4.2 5.8	体部は内窓気孔に開き、口縁部で若干外反する。 底盤底平。	内外面ロクロナナ。 内面黑色處理の後、口縁部一帯に粗い指位のヘラミガキを施す。 底盤赤切り。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (8YR 7/3)
4 (三)	平 (土)	13.6 4.3 6.2	口縁部から外縁にかけて内窓し、口縁部で若干外反する。 底盤平底。	内外面ロクロナナ。 底盤赤切り。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 7/4)
5 (三)	平 (土)	13.4 — —	体部は内窓して開く。	内外面ロクロナナ。 内面黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (2.5YR 6/6)
6 (四)	平 (土)	15.5 4.5 6.9	体部は内窓して開く。	内外面ロクロナナ。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 6/4) 内面底部、外縁底部に「重」の刻印。
7 (四)	平 (土)	— — —	破片	内外面ロクロナナ。 内面黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 6/4) 体部に墨書きあり「重」か?
8 (四)	甕 (土)	21.5 — —	口縁部から胴部上位にかけて「く」の字状に屈曲し、胴部は上位で軽く膨らむ。 口縁部に最大径をもつ。	内外面ロクロナナ。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 5/6)
9 (四)	甕 (土)	15.0 — —	口縁部から胴部上位にかけて「く」の字状に屈曲し、胴部は中位で軽く膨らむ。	内外面ロクロナナ。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 6/4)
10 (四)	甕 (土)	19.0 — —	口縁部から胴部上位にかけて「く」の字状に屈曲し、胴部は中位で軽く膨らむ。	内外面ロクロナナ。 胴部ヘラクズリ。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 7/4)
11 (四)	甕 (土)	11.0 — —	口縁部から胴部上位にかけて「く」の字状に屈曲し、胴部は中位で軽く膨らむ。 胴部に最大径をもつ。	内外面ロクロナナ。	胎土は砂粒を含み、にじい褐色。 (2.5YR 6/3)
12 (四)	甕 (土)	12.0 — —	口縁部から胴部上位にかけて「く」の字状に屈曲し、胴部は中位で膨らむ。	内外面ロクロナナ。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5YR 6/6)

第9表 H-3号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

序 番 号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
13	鉄器	鉄	(4.3)	0.8	0.3	(2.3)	

単位はcm・g

第23図 H-3号住居址出土遺物 (1 : 3)



時 期

本住居址は、10世紀前葉、川原田遺跡第III期に位置付けておきたい。

(4) H-4号住居址

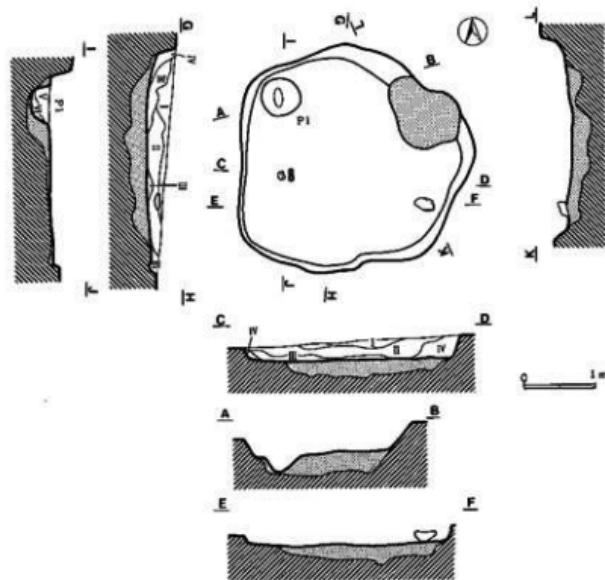
住居址 第24図

H-4号住居址は、E-6グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.2m東西3.26mの歪んだ隅丸長方形を呈し、床面積6.8m²を測り、南北軸方向はN-8°-Eを指す。壁高は10~30cmを測る。壁溝は認められない。床面はロームの混じる貼り床（褐色 10YR4/4）、表面は硬質である。

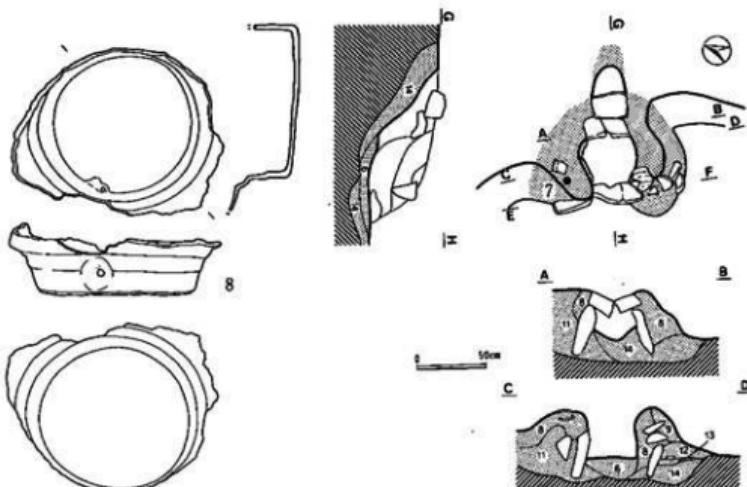
柱穴と考えられるピットは検出されなかったが、西北コーナーより円形のピットP₁が検出された。P₁は、56cm×54cm深さ30cmを測る。

覆土は、4層に分層され、II層以下は人為的な堆積状況を示していた。I層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土層(10YR2/3)、II層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR3/4)、III層はローム粒子を若干含む黒色土層(10YR2/1)、IV層はローム粒子を多量に含む褐色土層(10YR4/



第24図 H-4号住居址実測図 (1:80)

III 造構と遺物



第25図 H-4号住居址出土遺物 (1:3)

第10表 H-4号住居址出土遺物一覧表〈青銅器〉

件名番号	器種	材質	長さ	底径	厚さ	重量	備考
8	火鉢斗	青銅	-	8.0	(3.6)	(144)	

※ 単位はcm・g



第26図 H-4号住居址カマド実測図
(1:40)

4) である。

遺物は、西壁際の床面上に8の火鉢斗が認められた。また、カマド中からは2~5の土師器壺類、7の須恵器甕が出土している。

掘り方の底面は、現床面より20cm程下位にある。

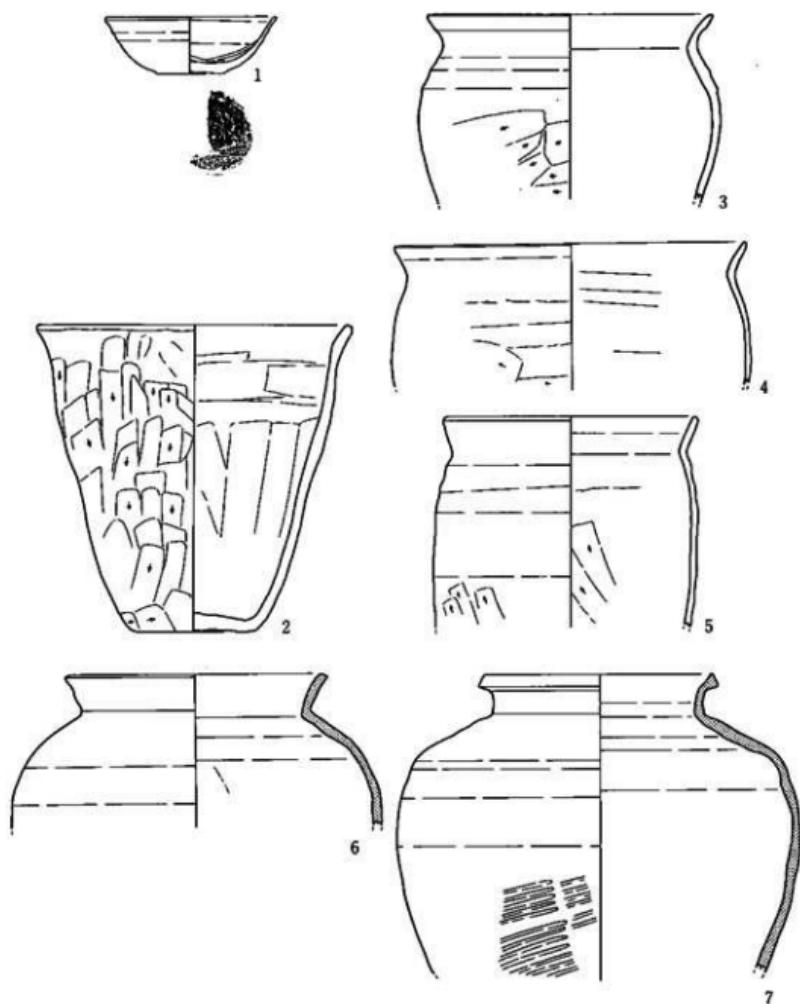
カマド 第26図

カマドは、住居址の北東コーナーに存在している。

本カマドは、左右両袖・天井部・煙道部を比較的よくとどめていた。

袖は、未加工の安山岩礫を芯にして、ローム層を主とする8~12層を貼って構築されていた。8層はロームの多く混じる暗褐色土層(10YR3/6)、9層は黄褐色ローム層(10YR5/8)、10層は黒色土層(10YR1.7/1)、11層は褐色ローム層(10YR4/6)、12層は褐色ローム層(10YR4/4)である。また、掛け口の前後の天井石も未加工の安山岩礫である。

本カマドの覆土は、6層に分層された。1層は焼土・カーボンをまったく含まない黒色土層(10YR2/1)、2層も焼土・カーボンをまったく含まない黒褐色土層(10YR3/2)、3層は焼土粒子を



第27図 H-4号住居址出土遺物 (1:4)

III 遺構と遺物

第II表 H-4号住居址出遺物一覧表(土器)

序 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (回)	壺 (土)	(10.0) 4.0 (4.4)	口縁部から全体にかけて内側気味に開き、口輪 部若干外反する。 底部平坦。	内外面ロクロナダ。 内側は波状紋の模様を残す。 底部糸切りのめら、外縁を手持ちへラケズリ。	胎土は砂粒を含み、によい褐色。 (5 YR 5/6)
2 (回)	鉢 (土)	(21.0) 21.4 8.4	底部から副輪部はほぼ直線的に開き口縁部で若干 外反する。	内面口縁部ヨコナダのめら、副輪部上位後方、中、下位後方へ ラナダ、外縁ヨコナダのめら、副輪部後方へラケズリ。 底部へラケズリ。	胎土は砂粒を含み、によい褐色。 (10 YR 7/3)
3 (回)	甕 (土)	(19.4) — —	口縁部から副輪部上位にかけて「く」の字形に屈 曲し、副輪部は上位で大きく盛らむ。 口縁部若干肥厚する。	内外面ロクロナダ。 のめら、内側は筋向ナダ。外縁は筋方向の軽いケズリ。	胎土は砂粒を含み、によい褐色。 (10 YR 6/3)
4 (回)	甕 (土)	(34.4) — —	口縁部から副輪部上位にかけて「く」の字形に屈 曲し、副輪部は中位で盛らむ。	内外面ロクロナダ。 のめら、内側は筋向ナダ。外縁は筋方向の軽いケズリ。	胎土は砂粒を含み、によい褐色。 (7.5H 7/4)
5 (回)	甕 (土)	(17.2) — —	口縁部から副輪部上位にかけて「く」の字形に屈 曲し、副輪部は結構盛らむ。	内外面ロクロナダ。 のめら、内側は筋向ナダ。外縁は筋方向の軽いケズリ。	胎土は砂粒を含み、によい褐色。 (7.5 YR 7/4)
6 (回)	甕 (土)	(18.0) — (25.6cm)	口縁部から副輪部上位にかけて「く」の字形に屈 曲し、副輪部は大きく盛らみ最大径を有する	内外面ロクロナダ。	胎土は稍濃され、青灰色。 (5 PB 5/1)
7 (回)	甕 (土)	(15.6) — —	口縁部は直立し、突出する副輪部で外反する。副 輪部は上位で強く盛り、中位で最大径を有する (28.0cm)。	内外面ロクロナダのめら、底下半平行甲き。	胎土は脂透され、青灰色。 (5 PB 5/1)

若干含む黒褐色土層(10YR3/2)、4層は焼土粒子をよく含む黒褐色土層(10YR2/2)、5層は崩落したカマド構築土である褐色ローム層(10YR4/4)、6層は赤褐色焼土層(5YR4/8)であった。

なお、13・14層はロームの混じる住居の貼り床である(褐色 10YR4/4)。

遺物 第25・27図

遺物は、須恵器では甕、土師器では壺・鉢・甕が検出されている。また、青銅の火熨斗が出土している。1は回転糸切りの底部をみせる土師器壺、2は土師器鉢、3~5は土師器ロクロ甕、6・7は須恵器甕である。8は青銅の火熨斗は、外縁部を欠き、やや歪んでいる。径は8cm程度である。また体部には穴が開き、その一部は火熱を受けたのか火ぶくれ状になっている。なお、柄の付けられた部分は推定できない。

時期

本住居址は、10世紀初頭、川原田遺跡第II期に位置付けられよう。

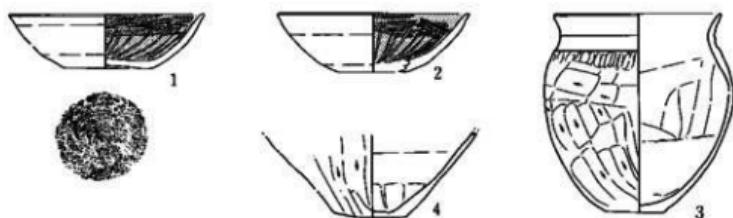
(5) H-5号住居址

住居址

H-5号住居址は、F-11グリッドにおいて検出された。

第12表 H-5号住居址出土物一覧表〈土器〉

種 類 名	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (完)	杯 (土)	(13.9) 3.8 6.2	体部内側して開き、口縁部で外反する。 底盤平底。	内外面クロナデ。内面黒色研磨の後、丁寧なヘラミガキ。 底盤赤切り。	胎土は砂粒を含み、灰褐色。 (7.5YR 7/3)
2 (残)	杯 (土)	(13.2) 4.7 (4.9)	体部内側して開く。 底盤平底。	内外面クロナデ。内面黒色研磨の後、丁寧なヘラミガキ。 底盤赤切り。	胎土は砂粒を含み、灰褐色。 (5YR 6/6)
3 (完)	甕 (土)	11.7 14.0 4.7	唇部～口縁部「つ」の字状に強く屈曲する。 唇部は上位で張り、最大径を得る。	内外面口縁部コロナデ。のち、内面削削浅いヘラケズリ。外表面 唇上傾斜方向、下唇斜方角へヘラケズリ。	胎土は砂粒を含み、灰褐色。 (7.5YR 6/4)
4 (残)	甕 (土)	— — 5.0		内面削削浅いヘラケズリ。外表面唇部下位斜方角へヘラケズリ。	胎土は砂粒を含み、灰褐色。 (7.5YR 6/4)



第28図 H-5号住居址出土物 (1:4)

本址は、カマドの一部を残すのみで、その大部分が削平をうけており、旧状は不明である。

遺物は、カマド部分より検出された。

カマド 第29図

本カマドは、住居址の北壁側に存在していたものと考えられる。

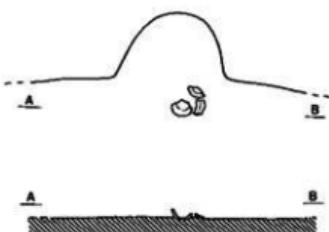
遺 物 第28図・第12表

遺物は、須恵器では壺の破片、土師器では壺・甕などが少量出土している。

1～2は内面黒色研磨のなされた回転条切りの土師器壺、3は弱いコの字状口縁の土師器甕である。

時 期

本住居址は、9世紀末葉、川原田遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。



第29図 H-5号住居址カマド実測図 (1:40)

(6) H-6号住居址

住居址 第30図

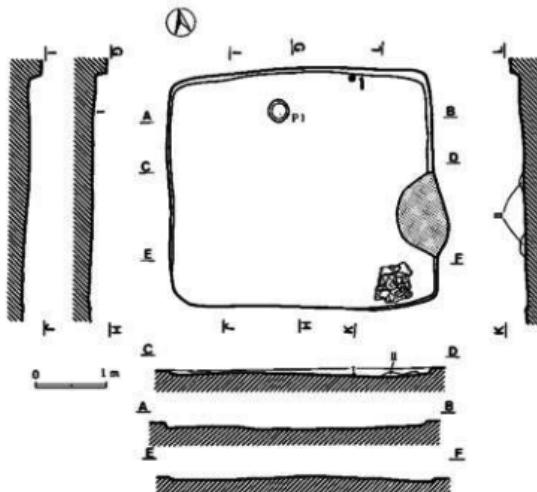
H-6号住居址は、H-12グリッドにおいて検出された。本址は、縄文時代の住居J-20-39-44およびD-50号土坑を切って存在している。

その形態は、南北3.4m東西3.74mの隅丸方形を呈し、床面積11.9m²を測り、南北軸方向はN-3°-Eを指す。残存壁高は最高で15cmを測る。壁溝は認められない。床面は貼り床である。ピットといえるかどうかは疑問だが、30cm×30cm深さ5cmの浅い皿状のくぼみであるP₁が北壁側に認められた。

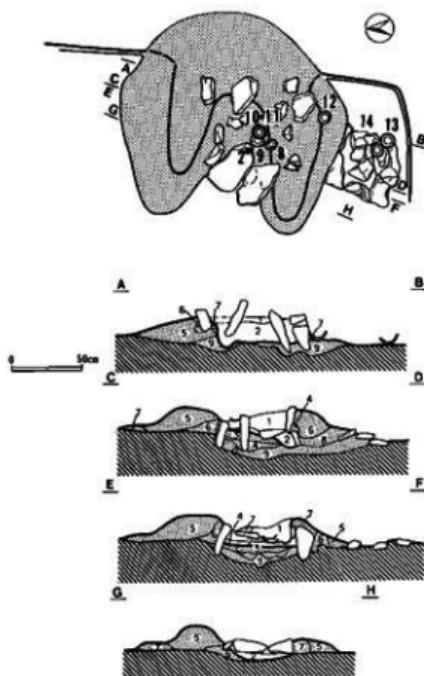
カマドの南脇には、カマドの構材である安山岩礫がたたみ置かれていた。

遺物は、1の灰釉陶器塊が住居北東コーナーより出土、またカマドの南脇、カマド構材がたたみ置かれた場所からは、13の环（灯明に利用）が正常位で、14の环（灯明に利用）が伏せられて出土した。カマド中央部からは、8・9の环が正常位で、10・11の环が重なった状態の正常位で検出された。これらの环はいずれも灯明に用いられているものである。また、2の灰釉陶器塊もカマド中から出土した。12の环（灯明に利用）はカマドの南側の袖上から正常位で出土した。

以上の出土状態から推察されるのは、カマドの使用停止後、カマドの構材の一部が取り外されカマドの南脇にたたみ置かれた後、カマド本体中央・カマドの南側の袖上・カマドの南脇にた



第30図 H-6号住居址実測図 (1:80)



第31図 H-6号住居址カマド実測図 (1:40)

たみ置かれた構材の上に、坯を置いて灯明したという行為である。住居廃絶時におけるカマド解体という祭祀が普遍的に行なわれていたことについてはすでに指摘しているが(堤1991)、本カマドにおける解体そして灯明という行為も、カマド祭祀の一例としてとらえることができよう。

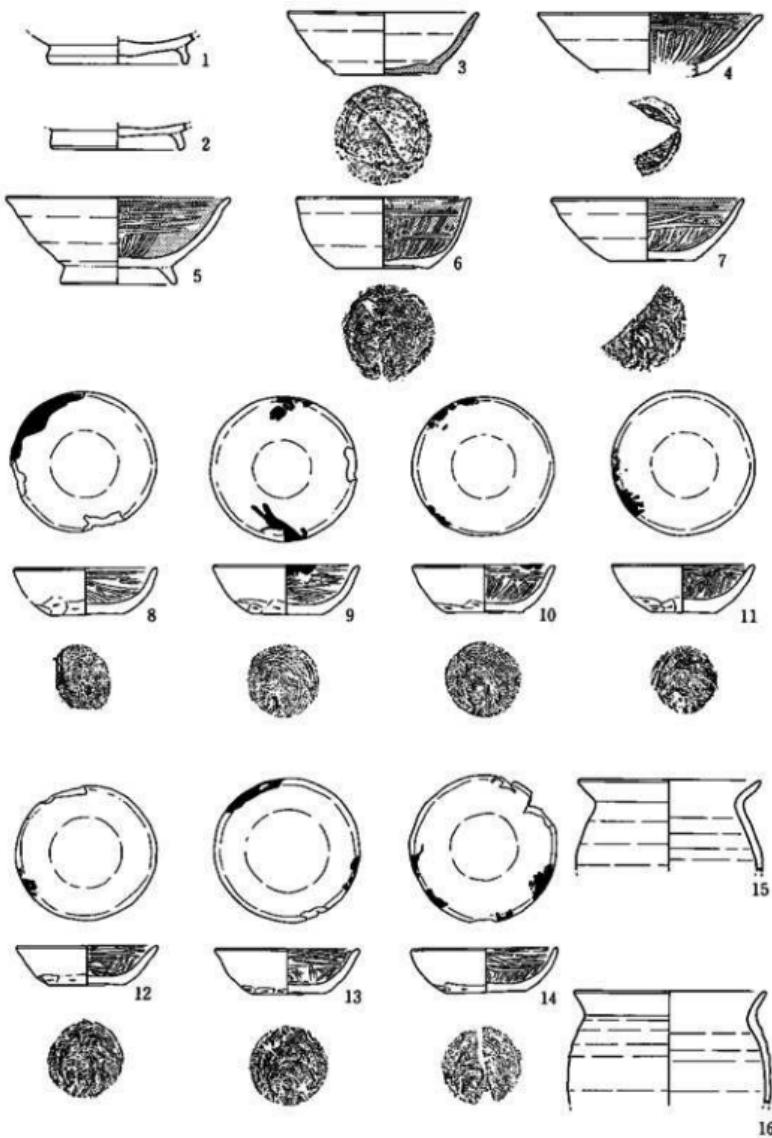
住居址中の覆土は2層に分層された。I層はカーボンを含みローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR2/3)、II層はローム粒子のよく混じるカマドの構築土の再堆積である暗褐色土層(10YR3/4)である。

カマド 第31図

カマドは、住居址の東壁中央よりやや南寄りに存在している。

本カマドは、さきにも述べたように、カマドの使用停止後、カマドの構材の一部が取り外され、カマドの南脇にたたみ置かれた後、カマド本体中央・カマドの南側の袖上・カマドの南脇にた

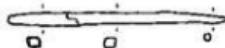
III 遺構と遺物



第32図 H-6号住居址出土遺物 (1:4)

第13表 H-6号住居址出遺物一覧表〈土器〉

序 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	壺 (鉢)	- - 9.6	底部に三日月状の高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内外底を強く刷毛掛けによる施釉。	胎土は焼成され、灰白色。 (10Y R 7 / 1) 東晩・先ヶ丘
2 (完)	壺 (鉢)	- - 8.8	底部に矩形の高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内外底を強く刷毛掛けによる施釉。	胎土は焼成され、灰白色。 (10Y R 7 / 1) 東晩・先ヶ丘
3 (完)	杯 (碗)	12.4 4.4 7.3	大器へ口縁部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。 底部無切り	胎土は焼成され、灰白色。 (2.5Y R 7 / 1)
4 (完)	高台平 (土)	(15.0) - -	体部へ口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色処理し、内底部から口縁部に放射状模文風のヘラミガキを施す。 底部無切りのままで、高台部焼成ナダ。	胎土は砂粒を含み、灰白色。 (2.5Y R 7 / 4)
5 (完)	高台平 (土)	15.6 6.1 6.8	体部へ口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色処理し、内底部から口縁部に放射状模文風のヘラミガキを施す。 底部無切りのままで、高台部焼成ナダ。	胎土は砂粒を含み、灰白色。 (7.5Y R 7 / 4) 2次焼成受ける。
6 (完)	环 (土)	(12.2) 5.6 6.8	体部へ口縁部内側して急角度で開く。底部平底。	内外面クロナダ。内面黒色処理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、灰白色。 (2.5Y R 7 / 4)
7 (完)	环 (土)	(12.4) 4.3 6.2	体部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダ。内面黒色処理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、灰白色。 (10Y R 7 / 3)
8 (完)	环 (土)	9.8 3.3 5.2	体部へ口縁部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は丁寧なヘラミガキを施す。 外底下位は手持ちヘラケズリ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5Y R 6 / 6) 口唇部2次焼成。
9 (完)	环 (土)	10.0 3.4 4.9	体部へ口縁部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は丁寧なヘラミガキを施す。 外底下位は手持ちヘラケズリ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5Y R 6 / 6) 口唇部2次焼成。
10 (完)	环 (土)	9.8 3.2 5.5	体部へ口縁部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は丁寧なヘラミガキを施す。 外底下位は手持ちヘラケズリ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5Y R 6 / 6) 口唇部2次焼成。
11 (完)	环 (土)	9.8 3.2 5.5	体部へ口縁部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は丁寧なヘラミガキを施す。 外底下位は手持ちヘラケズリ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5Y R 6 / 6) 口唇部2次焼成。
12 (完)	环 (土)	9.8 2.7 5.2	体部へ口縁部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は丁寧なヘラミガキを施す。 外底下位は手持ちヘラケズリ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5Y R 6 / 6) 口唇部2次焼成。
13 (完)	环 (土)	9.9 3.2 5.3	体部へ口縁部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は丁寧なヘラミガキを施す。 外底下位は手持ちヘラケズリ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5Y R 6 / 6) 口唇部2次焼成。
14 (完)	环 (土)	10.0 3.1 5.6	体部内側して開く。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は丁寧なヘラミガキを施す。 外底下位は手持ちヘラケズリ。 底部無切り。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (5Y R 6 / 6) 口唇部2次焼成。
15 (完)	壺 (土)	12.6 - -	底部へ口縁部「く」の字状に強く屈曲する。	内外面クロナダ。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (7.5Y R 6 / 6)
16 (完)	壺 (土)	10.0 3.1 5.6	底部へ口縁部「く」の字状に強く屈曲する。	内外面クロナダ。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (7.5Y R 7 / 4)



第14表 H-6号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

器 種	材 質	長 さ	幅	厚 さ	重 量	備 考
17	鉄器	鉄	11.6	0.7	0.7	14.1

単位: cm

第33図 H-6号住居址出土遺物 (1 : 3)

III 遺構と遺物

たみ置かれた構材の上に、坏を置いて灯明がなされたという過程を経ていることが窺える。また、天井石も取り外されて焚口に置かれている。なお、カマドの構材は中央の支脚石が軽石である以外は、いずれも安山岩である。

カマドの袖は、ローム粒子の若干混じる黒褐色土層（5層 10YR3/2）、ローム粒子を多量に含む暗褐色土層（6層 10YR3/4）、暗褐色ローム層（7層 10YR4/4）、ローム粒子を含む暗褐色土層（8層 10YR4/4）によって構築されていた。また、火床にもローム粒子の若干混じる黒褐色土層（9層 10YR3/2）が貼られていた。

本カマドの覆土は、4層に分層された。1層は天井部の崩落土ともみられる黒褐色土層（5層 10YR3/2）、2層はカーボン・灰・焼土をよく含む暗赤褐色土層（5 YR3/4）、3層は多量の焼土を含む黄褐色灰層（10YR6/6）、4層は明赤褐色焼土層（5 YR5/8）である。

遺 物 第32・33図・第13・14表

遺物は、灰釉陶器塊、土師器の坏・甕、砂岩の砥石が検出されている。

1・2は刷毛掛けによる灰釉陶器塊である。2は東濃光ヶ丘窯式の製品、1も光ヶ丘窯式並行のものと考えられる。1は見込部と底部ともに摩耗光沢が認められ転用硯として利用されていることが窺えるが、ことに見込部には朱墨が付着しており、朱墨用の硯として利用されたことが窺える。また、2の底部も摩耗光沢が激しく、黒墨か朱墨かはわからないが硯として利用されたと考えられる。

3・4・6～14は回転糸切りの底部をみせる土師器坏、5は高台付坏である。このうち8～14は、口唇部を僅かに欠くものもあるがほぼ完形品で、その縁には煤の付着が認められている。さきにも述べたようにカマド祭祀の際に灯明に用いられたものと考えられる。

15・16はロクロ調整による土師器甕である。

17は、砂岩の砥石の断片である。

時 期

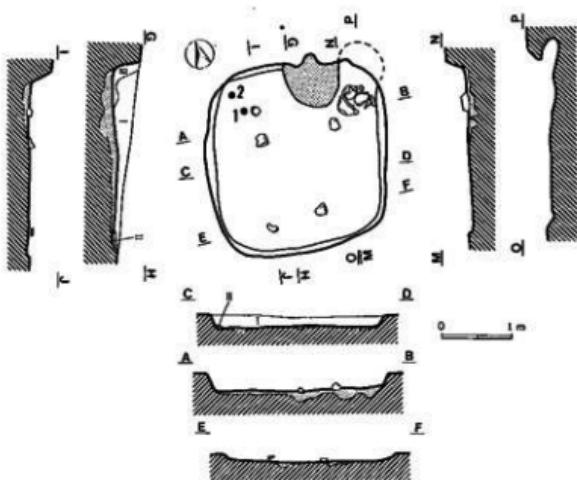
本住居址は、10世紀初頭、川原田遺跡第II期に位置付けられよう。

（7） H-7号住居址

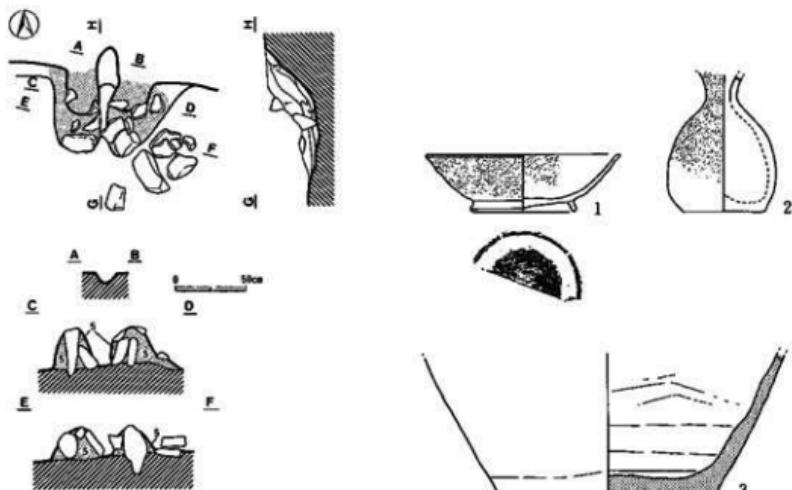
住居址 第34図

H-7号住居址は、G-5グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北2.68m東西2.48mの隅丸方形を呈し、床面積5.2m²を測り、南北軸方向はN-



第34図 H-7号住居址実測図 (1 : 80)



第35図 H-7号住居址カマド実測図 (1 : 40)

第36図 H-7号住居址出土遺物 (1 : 4)

III 置構と遺物

第15表 H-7号住居址出遺物一覧表(土器)

種類 番号	基層 法 量	器形の特徴	測定	備考
1 (1)	埴 (灰) (12.0) — —	外縁内折鉢底に開き、口縁部で外反。底部に三日月状の高台取り付け。	内外面クロナザ。底部ナザ。内外底を除く底毛掛けによる凹凸。	粘土は稍透され灰紫色。 (2.5YR 7/2) 光ヶ丘1並行
2 (2)	小瓶 (灰) — — 5.7	外縁は柳花果形を呈し、底部は著しく收縮し、口縁部で強く外反する。	内外面クロナザ。底部未切り。	粘土は稍透され灰紫色。 (2.5YR 7/1)
3 (3)	壺 (灰) — — (14.0)		外表面クロナザ。 内面ナザ。	粘土は稍透され褐色。 (10YR 6/1)

8'-Eを指す。壁高は、20~40cmを測る。壁溝は認められない。ピットは検出されていない。また、カマド東脇の壁が34cmほどオーバーハングして袋状に掘り込まれており、何らかの収納の機能をはたしていたことが推定される。

覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子を多く含む暗褐色土層(10YR3/4)、II層はローム粒子をよく含む褐色土層(10YR4/4)である。2層ともに人為埋土的な堆積状況を示しているとも考えられる。

遺物は、1の灰釉陶器壺と2の灰釉陶器小瓶が北西コーナーより出土している。

カマド 第35図

カマドは、住居址の北壁の東コーナー寄りに存在しているが、その一部は破壊され、カマドの南脇にはカマドの構材である安山岩礫がたたみ置かれていた。

本カマドの袖は、未加工の安山岩礫を芯とし、ロームの混じる暗褐色土層(5層 10YR3/3)によって構築されていた。

本カマドの覆土は4層に分層された。1層は焼土・カーボンをよく含む暗赤褐色土層(5 YR3/3)、2層は焼土粒子をよく含むにぶい黄褐色土層(10YR4/3)、3層は焼土をブロック状に含む赤褐色土層(5 YR4/8)、4層は焼土・カーボンをよく含む黒褐色土層(5 YR2/2)である。

遺物 第36図・第15表

遺物は、灰釉陶器壺・灰釉陶器小瓶、土師器壺・須恵器甕が検出されている。

1は刷毛掛けによる灰釉陶器壺である。2は黒巻90号もしくは光ヶ丘窯式並行の小瓶と考えられ、回転糸切りの底部をみせる。

3は須恵器甕の底部である。

このほか、土師器壺の破片は数片が出土しているのみである。

時期

本住居址は、10世紀初頭、川原田遺跡第II期に位置付けておきたい。

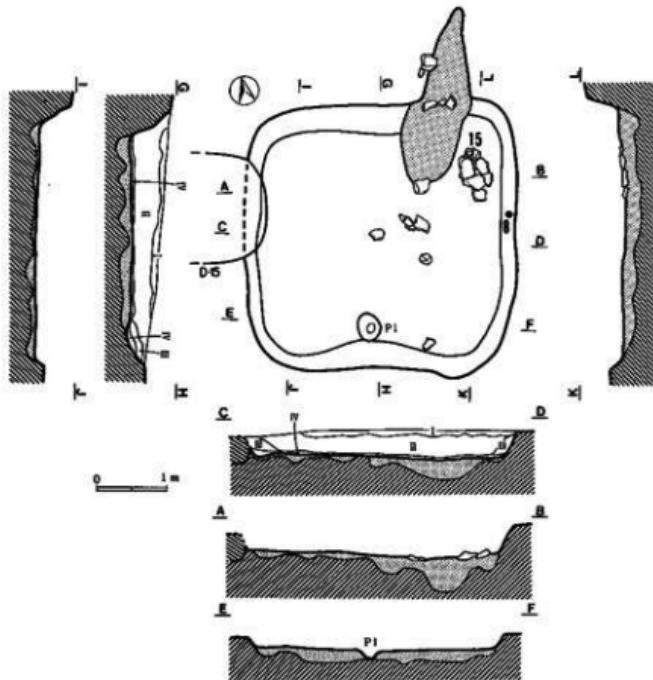
(8) H-8号住居址

住居址 第37図

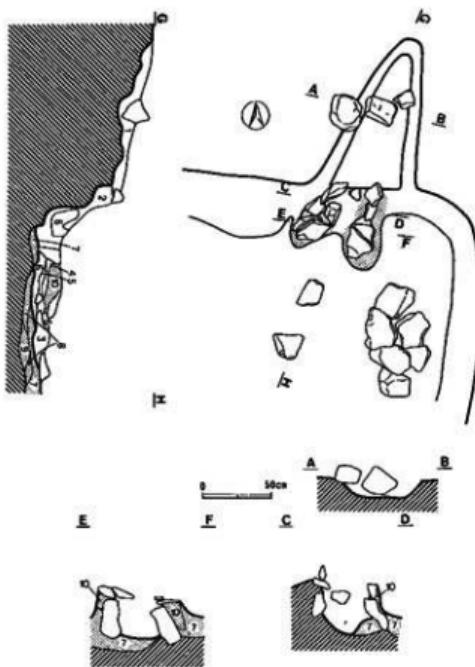
H-8号住居址は、F-7グリッドにおいて検出された。D-15と重複するが、双方の新旧関係はとらえられなかった。

本住居址は、南北3.8m東西3.7mの隅丸長方形を呈し、床面積10.2m²を測り、南北軸方向はN-Eを指す。壁高は15~45cmを測る。壁溝は認められない。床面は貼り床である。ピットは南北壁際中央より40cm×30cm深さ12cmを測るP1が検出された。

覆土は、4層に分層された。I層はローム粒子を含まない黒色土層(10YR2/1)、II層はローム



第37図 H-8号住居址実測図 (1:80)



第38図 H-8号住居址カマド実測図 (1:40)

粒子を若干含む黒褐色土層 (10YR2/3)、III層はロームをブロック状に含む暗褐色土層 (10YR3/3)、IV層はロームをブロック状に含む暗褐色土層 (10YR3/4) である。

遺物は、カマドの東脇のカマド構材がたたみ置かれた場所から15の土師器甕が出土している。ここからは、H-6と同様、カマドの使用停止後、カマドの構材の一部が取り外されてカマドの南脇にたたみ置かれた後、その構材の上に土師器甕が配置されたことが窺える。H-6と同様カマド祭祀に関連する遺棄状態としてとらえておきたい。なお、8の土師器甕は東壁中央に貼り付いて出土した。

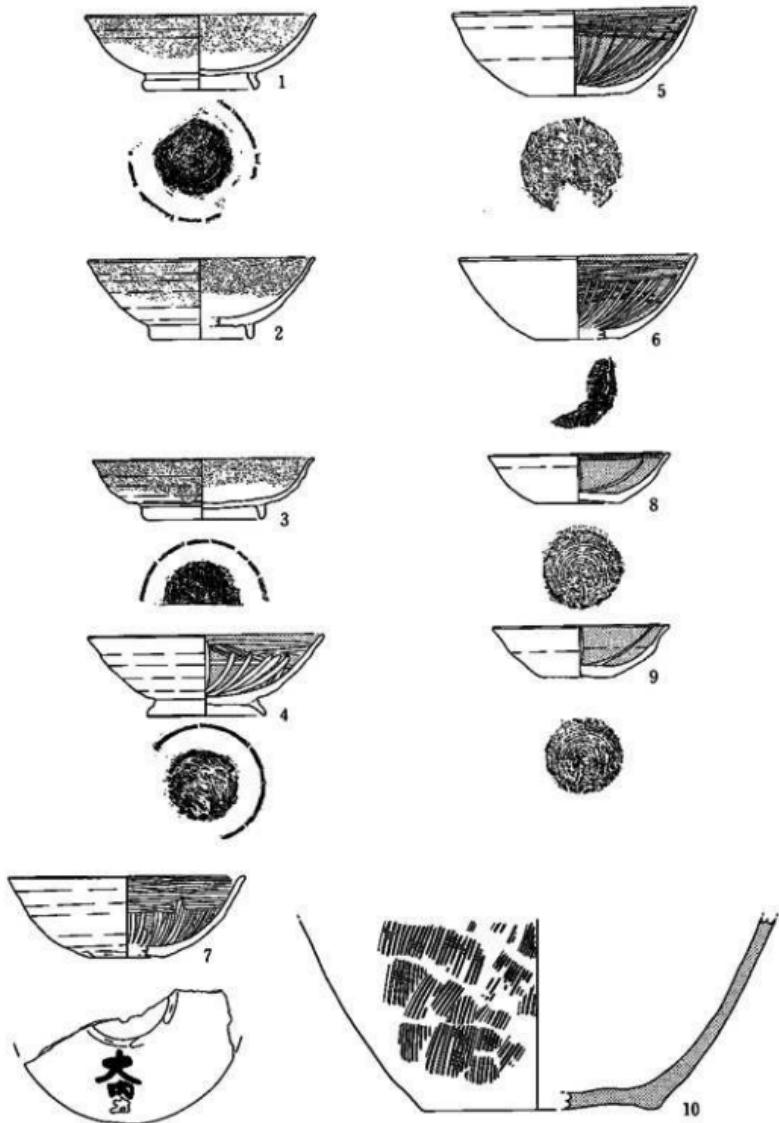
カマド 第38図

カマドは、住居址の北東コーナー寄りに存在している。

本カマドは、その本体が破壊されており、カマドの東脇にカマド構材の一部がたたみ置かれていた。

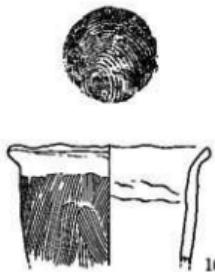
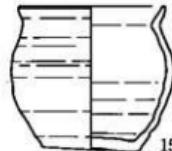
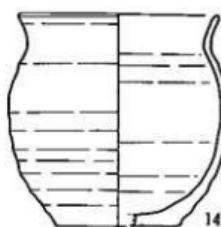
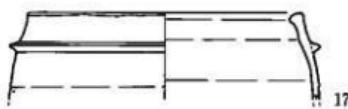
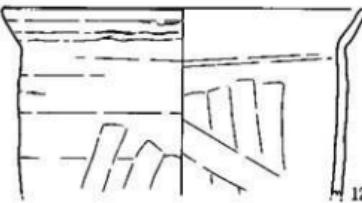
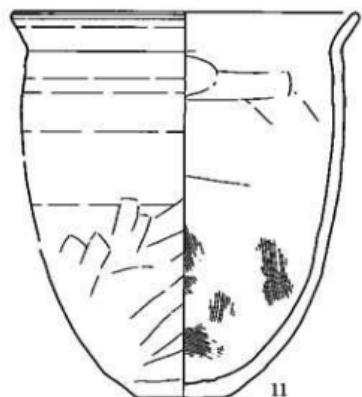
袖は、安山岩礫を芯にして、7・9・10層を貼って構築されていた。7・9層は暗褐色土層 (10

1 平安時代の豊穴住居址



第39図 H-8号住居址出土遺物 (1 : 4)

III 造様と遺物



第40図 H-8号住居址出土遺物 (1:4)

第16表 H-8号住居址出土物一覧表〈土器〉

格 番 号	器 種 名	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完) 壺 (灰)	16.0 体部内側、口縁部感て外反。底部に三日月状の高台取り付け。 5.2 7.6	内外面クロナダ。底部ナダ。内外底を除き羽毛掛けによる施釉。	胎土は砂粒され、灰白色。 (10Y R 7/1) 裏部・充ヶ丘	
2 (残) 壺 (灰)	(15.0) 3.7 6.8	体部内側して開く。底部に半椭円状の高台取り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内外底を除く羽毛掛けによる施釉。	胎土は砂粒され。灰白色。 (10Y R 7/1) 裏部・大原2
3 (回) 壺 (灰)	(15.0) 4.2 8.1	体部内側して、口縁部で外反する。底部に三日月状の高台取り付け。	内外面クロナダ。 底部ナダ。外底を除き羽毛掛けによる施釉。	胎土は砂粒され。灰青黄色。 (10Y R 6/2) 尾丸・充ヶ丘丘陵
4 (回) 高台平 (土)	(16.0) 5.1 8.1	体部内側して口縁部若干外反する。底部に高台取り付け。	内外面クロナダ。 内底は黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (5Y R 6/4) 2次施釉を受ける。
5 (完) 坏 (土)	16.0 6.0 6.8	体部内側、口縁部感て外反。 底盤平底。	内外面クロナダ。 内底は黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (7.5Y R 6/3)
6 (回) 坏 (土)	(16.0) 5.1 4.8	体部・口縫部内側気泡に開く。 底盤平底。	内外面クロナダ。 内底は黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (7.5Y R 6/3)
7 (回) 坏 (土)	(16.0) 5.3 (5.2)	体部・口縫部内側気泡に開く。 底盤平底。	内外面クロナダ。 内底は黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (7.5Y R 6/3) 体部に「大内寺」の墨書きあり。
8 (完) 坏 (土)	12.5 3.5 5.8	体部内側して、口縫部で若干外反する。 底盤平底。	内外面クロナダ。 内底は黑色處理の後、施釉後の暗化。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (7.5Y R 7/4)
9 (完) 坏 (土)	12.0 3.6 4.6	体部内側して、口縫部で若干外反する。 底盤平底。	内外面クロナダ。 内底は黑色處理の後、施釉後の暗化。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (7.5Y R 7/3)
10 (回) 瓶 (灰)	- -		内外面ナダ。 外底端部目状叩き。	胎土は砂粒され。灰青黄色。 (10Y R 6/2)
11 (完) 瓶 (土)	24.2 27.2 底	脚部は脚伸形を呈し、底部は不安定ながらも平底。 口縫部は「く」の字状に強く屈曲し、最大5.0cmを有する。	内外面クロナダ。後、内面脚部上部以下は不整方向のナダ。内底部は板面によるカキノ痕明確。外底は今位以下斜方向へのテケズリ。底部へラックス。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (5Y R 6/4)
12 (回) 瓶 (土)	(25.0) -	脚部はあまり膨らまない。口縫部は脚部から後、内底は難方向を主としたナダ。 「く」の字状に強く屈曲するがやや内側気泡。	内外面クロナダ。	胎土は砂粒を含み、暗色。 (5Y R 6/6)
13 (回) 瓶 (土)	22.0 -	脚部は膨らむ。 口縫部は脚部から「く」の字状に強く屈曲する。	内外面クロナダ。	胎土は砂粒を含み、暗色。 (5Y R 5/6)
14 (回) 瓶 (土)	(14.0) 15.0 (15.0) 15.0	脚部は膨らみ最大径を有する(15.0cm)。口縫部は「く」の字状に強く屈曲する。底部は安定した平底。	内外面クロナダ。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (10Y R 7/4)
15 (回) 瓶 (土)	(10.0) 10.1 6.8	脚部は膨らみ最大径を有する(11.5cm)。口縫部は「く」の字状に強く屈曲する。底部は安定した平底。	内外面クロナダ。 底部ナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (10Y R 7/4)
16 (回) 瓶 (土)	(14.0) - - - - - - -	脚部は直線的に開き。口縫部は強く強く屈曲する。 口縫部は若干肥厚する。脚部は断面三角形を呈し、径(21.0cm)を測る。	内底ナダ 外底は口縫部ナダののち脚部直線方向の浅いケズリ。	胎土は砂粒を含み、暗色。 (2.5Y R 5/4)
17 (回) 羽蓋 (土)	(19.0) - - -	口縫部から脚部は船底形を呈すると考えられ。口縫部で若干肥厚する。脚部は断面三角形を呈し、径(21.0cm)を測る。	内外面クロナダ。	胎土は砂粒を含み、にい様色。 (10Y R 7/3)

III 造構と遺物

YR3/3)、10層はローム粒子の混じる褐色土層(10YR4/4)である。また、火床には黒色土層(10YR1.7/1)が貼られている。

本カマドの覆土は、6層に分層された。1層はローム粒子の混じる褐色土層(10YR3/4)、2層は焼土を若干含む黒褐色土層(10YR2/3)、3層はローム粒子の混じる褐色土層(10YR3/4)、4層は焼土粒子をよく含む赤褐色土層(5YR4/8)、5層は明赤褐色焼土層(5YR5/8)、6層は明赤褐色焼土層(5YR5/8)であった。

遺物 第39・40図

遺物は、灰釉陶器塊・瓶、須恵器では甕、土師器では壺・高台付壺・甕・羽釜が検出されている。1~3は、灰釉陶器塊である。1は東濃光ヶ丘窯式、2は東濃大原2号窯式、3は尾北系で光ヶ丘窯式並行期の製品と考えられる。このほか図示しなかったが、尾北系で光ヶ丘窯式並行期の塊の破片1点、内面を朱墨バレットに転用した東濃光ヶ丘窯式の塊の破片1点・東濃光ヶ丘窯式の瓶の破片1点が認められた。

4は高台付壺、5~9は回転糸切りの底部をみせる土師器壺で、6は回転糸切りの後手持ちヘラケズリがなされている。7は「大内寺」の墨書き土器である。このほか、断片で判読不能ではあるが、墨書き土器がもう1点認められている。

10は須恵器甕、11~15は土師器ロクロ甕、17は羽釜である。

時期

本住居址は、10世紀初頭、川原田遺跡第III期に位置付けられよう。

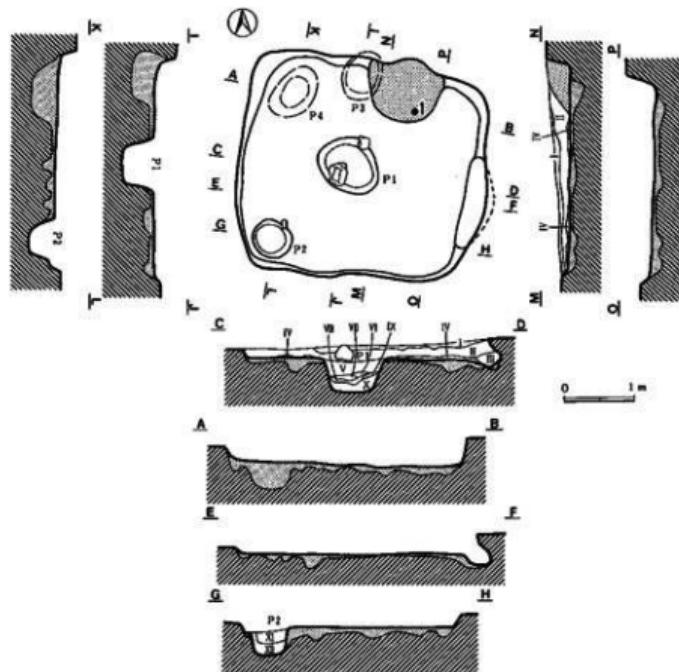
(9) H-9号住居址

住居址 第41図

H-9号住居址は、E-7グリッドにおいて検出された。

本址は、南北3.1m東西3.5m隅丸長方形を呈し、床面積8.5m²を測り、南北軸方向はN-8°-Eを指す。壁の残存高は、20~40cmを測る。壁溝は認められない。床面は、ロームを主とする黄褐色土層(10YR5/6)の貼り床である。

ピットは、床面上にP₁・P₂が、床下からはP₃・P₄が認められた。ピットの大きさは、P₁が90×60cm深さ50cm、P₂が55×50cm深さ40cm、P₃が70×55cm深さ35cm、P₄が80×55cm深さ35cmを測る。また、P₁中の覆土は、6層に分層され、V層が焼土をブロック状に含む黒褐色土層(10YR2/2)、VI層が焼土を若干含む黒褐色土層(7.5YR2/2)、VII層は明赤褐色焼土層(5YR5/8)、VIII層が炭化物を多量に含み焼土をブロック状に含む黒色土層(10YR1.7/1)、IX層はローム粒子を少量含



第41図 H-9号住居址実測図 (1:80)

むにふい黄褐色土層(10YR4/3)、10層はローム粒子を多量に含み炭化材を若干含む褐色土層(10YR4/4)であった。その堆積状況からファイアーピット的な機能を有していたことが窺えよう。ただ、P₁はその配置からしても住居より新しい造構である可能性も残る。つぎに、P₂中の覆土は、2層に分層され、11層はローム粒子を若干含む黒色土層(10YR2/1)、12層はローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR3/2)であった。

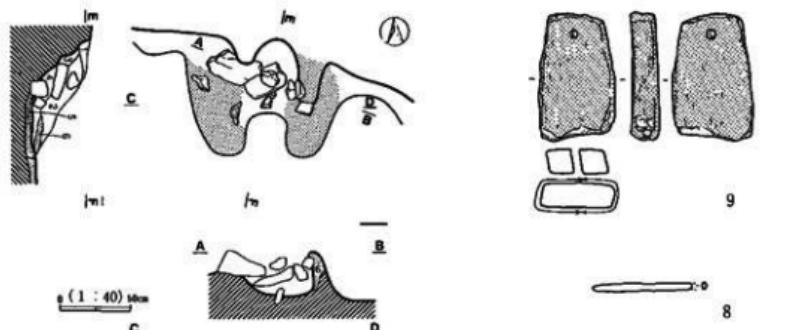
遺物は、1の灰釉陶器がカマド部分より出土している。

覆土は、4層に分層された。I層はローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR2/3)、II層はローム粒子を全体に含む埋土的な暗褐色土層(10YR3/4)、III層はロームをブロック状に含む黒褐色土層(10YR2/2)、IV層はローム粒子をよく含むにふい黄褐色土層(10YR4/3)であった。

カマド 第42図

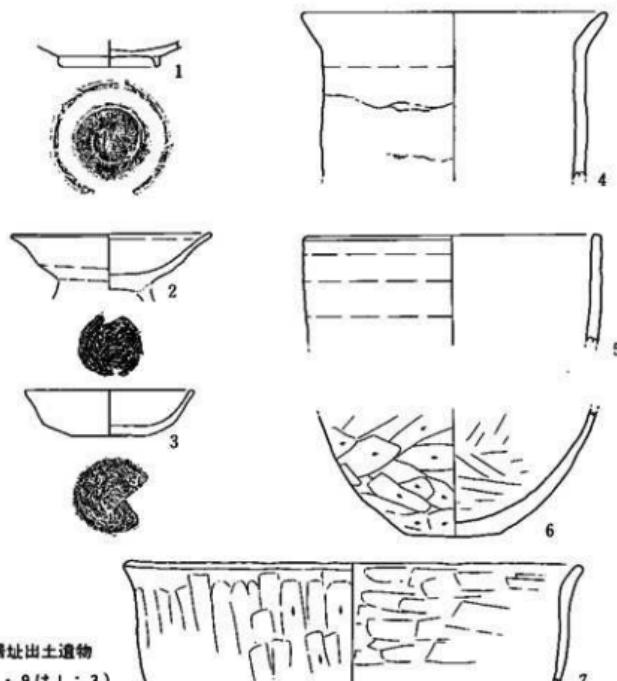
カマドは、住居址の北壁の中央よりやや東寄りに存在している。

III 造構と遺物



第42図 H-9号住居址カマド実測図

※ 単位はcm・g



第43図 H-9号住居址出土遺物
(1~7は1:4, 8・9は1:3)

第18表 H-9号住居址出遺物一覧表〈土器〉

件番 団 号	器 種	法 身	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (空)	壺 (灰)	- - 6.4	台部は三日月状を呈する。	内外面クロナダ。 底部ナダ。	粘土は黒褐色され、灰白色。 (YR7/1) 内底部用灰、窓縁、光ヶ丘1
2 (同)	高台壺 (土)	(13.7) - -	底部から体部にかけて内削し、口縁部で外反す。	内外面クロナダ。 底部表切りのら、ナダ。	粘土は砂粒を含み、よい粘性。 (5YR7/4)
3 (同)	耳 (土)	(11.6) 3.2 5.4	体部は中位で縮折して開く。 3.2 底部平底。	内外面クロナダ。 底部表切り。	粘土は砂粒を含み、よい粘性。 (10YR6/3)
4 (同)	甕 (土)	(21.2) - - 1.5	口縁部から側部上位にかけて「く」の字状に削 し、側部はすん底。 1.5 側部に最大径をもつ。	内外面クロナダ。のち内面側部中位以下はナダ。 外側側部中位以下は浅いラケズリ。 底部表切り。	粘土は砂粒を含み、よい粘性。 (7.5YR6/6)
5 (同)	鉢? (土)	(20.8) - -	口縫部から側部ほぼ直線的。	内外面クロナダ。 後、内面はナダ。	粘土は砂粒を含み、星色。 (7.5YR7/6)
6 (同)	甕 (土)	- (5.6)	器内厚く、底部下位は内削して開く。	内面ナダ。 外表面・斜方向のラケズリ。	粘土は砂粒を含み、よい粘性。 (5YR6/4) 2次表面落差。
7 (同)	甕 (土)	(31.6) - -	口縫部から側部上位にかけて、強く外反する。 中位で擦らむ。	内面ヨコナダのうち、浅い裏方向へラケズリ。 外表面ヨコナダのうち、深い裏方向へラケズリ。	粘土は砂粒を含み、よい粘性。 (2.5YR6/6)

本カマドは、全体的に破壊された状況を示していたが、その両袖と天井石の一部はとどめていた。袖と天井には、安山岩が芯材として用いられ、ロームを主とする褐色土層（6層 10YR4/4）、ロームの混じるよい黄褐色土層（10YR4/3）によって構築されていた。支脚石には縄文時代の凹石が再利用されていた。

本カマドの覆土は、5層に分層された。1層は焼土粒子を若干含む暗褐色土層（10YR3/3）、2層は焼土粒子を若干含む黒褐色土層（10YR3/2）、3層は焼土粒子を若干含む黒褐色土層（10YR3/1）、4層は焼土をよく含みカーボンを若干含む暗赤褐色層（5YR3/3）、5層は明赤褐色焼土層（5YR5/8）である。

遺 物 第43図・第17・18表

遺物は、灰釉陶器壺、土師器では壺・甕・鉢？、鐵器では棒状の鐵製品、石器では砥石が検出されている。

1は東濃の光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器壺である。この底部内面には研磨光沢が顕著で、転用窓として用いられたことが窺える。

2は回転糸切りの土師器壺、3は土師器高台付壺である。

4はロクロ調整による土師器甕、5はロクロ調整による土師器鉢？、6・7はロクロ調整によらない土師器甕である。

8は棒状の鐵製品で、あるいは紡錘車の軸であろうか。9は砂岩の砥石で、片側に穿孔の成されたものである。表裏両面・左右側面ともに研磨に供されている。

III 造構と遺物

時期

本住居址は、10世紀前葉、川原田遺跡第III期に位置付けられよう。

(10) H-10号住居址

住居址 第44図

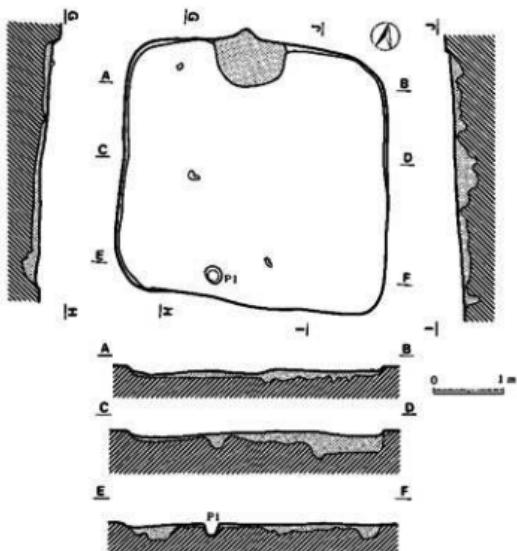
H-10号住居址は、I-5グリッドにおいて検出された。D-38号土坑と重複関係をもつが、両者の新旧関係は不明である。

H-10号住居址は、南北3.8m東西3.8mの隅方形を呈し、床面積13.1m²を測り、南北軸方向はN-7°-Wを指す。残存壁高は、10cm程度である。壁溝は認められない。床面は貼り床である。ピットは、30×20cm深さ30cmのP₁が南壁際に認められた。

遺物は良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマド 第45図

カマドは、住居址の北壁中央に存在している。

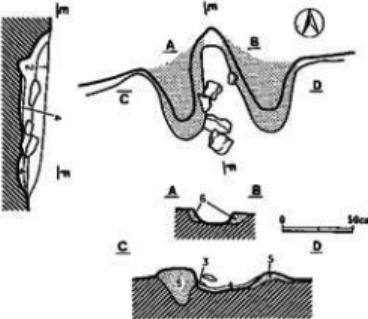


第44図 H-10号住居址実測図 (1:80)

本カマドは、左右両袖の一部をとどめるのみで、全体に破壊され、中央にはその構材である輕安山岩礫が認められた。

袖は、ローム粒子の混じるを主体に暗褐色土層（5層 10YR3/3）、暗褐色土層（6層 5YR3/4）によって構築されていた。

本カマドの覆土は、4層に分層された。1層はカーボン少量に含む褐色土層（10YR4/4）、2層は多量の焼土を含み僅かにカーボンを含む褐色土層（10YR4/6）、3層は黄褐色灰土層（10YR4/2）、4層は褐色焼土層（10YR4/6）である。

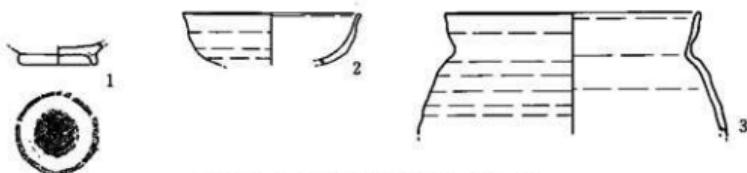


第45図 H-10号住居址カマド実測図 (1:40)

遺物 第46図・第19表

遺物の出土量はきわめて少なく、灰釉陶器塊、土師器の坏・甕が検出されているのみである。1は東濃の光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器塊底部である。内面には研磨光沢が顯著で、転用窯として用いられたことが窺える。同部分には朱墨が付着も認められる。

2は土師器坏、3はロクロ調整による土師器甕である。



第46図 H-10号住居址出土遺物 (1:4)

第19表 H-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

序 番 号	名 稱	古 代	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (窯)	塊 (灰)	- 5.0		内外面ロクロナデ。後、底部ナデ。	胎土は焼透され、灰白色。 (10YR7/1) 内底部を滑板用磚、東亞、光ヶ丘
2 (窯)	坏 (土)	12.4 - -	体部は内側して開き口部部で外反する。	内外面ロクロナデ。	胎土は砂粒を含み、赤褐色。 (2.5YR4/6)
3 (窯)	甕 (土)	17.8 - -	口唇部から器腹上部にかけて「く」字形に屈曲し、口縁部は受け口状に立ち上がる。	内外面ロクロナデ。	胎土は砂粒を含み、よい黄色。 (7.5YR7/4)

III 築構と遺物

時期

本住居址は、10世紀前葉、川原田遺跡第III期に位置付けられよう。

(II) H-11号住居址

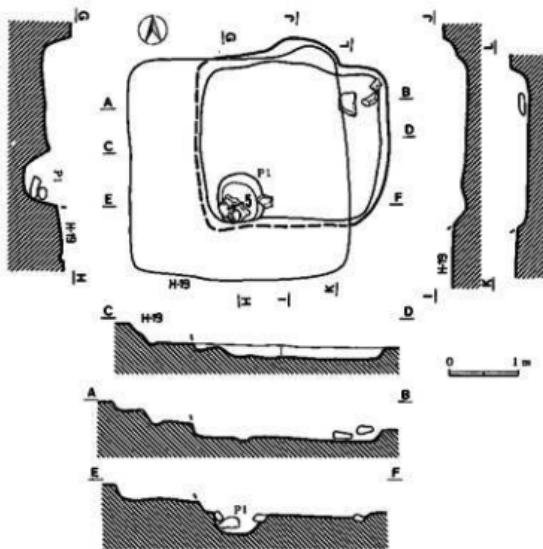
住居址 第47図

H-11号住居址は、F-6グリッドにおいて検出された。H-19号住居址と重複関係をみせており、本H-11号住居址が古いものとしてとらえられる。

本住居址は、南北2.5m東西2.7mの隅丸方形を呈し、床面積5.2m²を測り、南北軸方向はN-2°-Wを指す。残存壁高は、10~15cm程度である。壁溝は認められない。ピットは、75×75cm深さ30cmのP₁が南西コーナーに認められた。その内部には、安山岩礫が認められた。

覆土は、I層のみで、大量のローム粒子を含む褐色土層で(10YR4/6)で、人為的な埋土と考えられる。

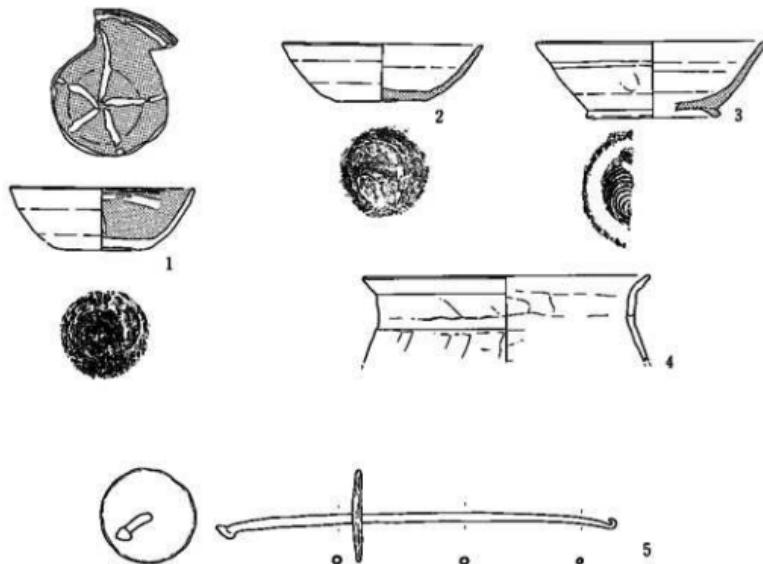
遺物は、5の効鍤車が南西コーナーのP₁上部より検出された。その他は良好な出土状態を示すものは認められなかった。



第47図 H-11号住居址実測図 (1:80)

第20表 H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標 識 番 号	器 種	法 量	形 態 の 特 徴	調 査	備 考
1 (同)	平 (土)	(12.8) 4.4 5.1	体部内側して聞く。 底部平底。	内外面クロナダ。内面墨色處理の後、放射状暗文を施す。 底部赤切り。	胎土は砂利を含み、にじい褐色。 (7.5YR 7/4)
2 (同)	平 (土)	13.8 4.0 6.5	体部内側気味に聞く。 底部平底。	内外面クロナダ。 底部赤切り。	胎土は精選され、灰白色。 (12.5YR 7/2)
3 (同)	高台所 (土)	(16.2) 5.4 (5.8)	体部から口部底部急激的に聞く。 底部に瓶形の高台盛り付け。	内外面クロナダ。 底部赤切り。高台盛り付け後、周辺墨ナダ。	胎土は精選され、灰白色。 (12.5YR 7/2)
4 (同)	甕 (土)	(19.7) — —	口部底から瓶部上部にかけて「コ」の字状に唇 唇する。	内外面口縁部墨ナダ。後、内面瓶部は浅いへラケズリ。外面部 上部後方向へラケズリ。	胎土は砂利を含み、にじい褐色。 (7.5YR 6/4)



第48図 H-11号住居址出土遺物 (1:4)

第21表 H-11号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

標識番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5	鎌鍔車	鉄	21.0	4.8	5.0	38.9	

※ 単位はcm・g

III 遺構と遺物

カマド

カマドの構材と考えられる軽石と安山岩礫は、住居址の東北コーナーに認められており、カマドが北壁側に存在していたことを窺わせる。しかし、本カマドは完全に破壊されており、その場所を特定することができなかった。

遺物 第48図・第20・21表

遺物は、須恵器では壺、土師器では壺・甕が検出されている。

1は回転糸切りの底部をみせる土師器壺でわずかに墨書が認められるが判読はできない。2は回転糸切りの底部をみせる須恵器壺、3は須恵器高台付壺である。

5は、先端を欠くが、遺存状態のよい鉄製紡錘車である。

時期

本住居址は、9世紀末葉、川原田遺跡第Ⅰ期に位置付けておきたい。

(12) H-12号住居址

住居址 第49図

H-12号住居址は、F-9グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.9m東西4.1mの隅丸長方形を呈し、床面積12.2m²を測り、南北軸方向はN-7°-Wを指す。残存壁高は30~40cmを測る。壁溝は認められない。床面は貼り床である。また、住居の北西コーナーには50cm四方ほどの扁平な安山岩礫が置かれていた。

柱穴と考えられるピットは検出されなかつたが、住居中央より円形のピットP₁が検出された。P₁は、45cm×40cm深さ25cmを測り、その中には安山岩礫2点が認められた。また、床下からはP₂・P₃・P₄・P₅が認められた。ピットの大きさは、P₂が50×40cm深さ30cm、P₃が45×40cm深さ20cm、P₄が90×90cm深さ20cm、P₅が50×50cm深さ20cmを測る。

覆土は、3層に分層された。I層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土層(10YR2/3)、II層はローム粒子を少量含む暗褐色土層(10YR3/3)、III層はローム粒子を多量に含む褐色土層(10YR4/6)である。

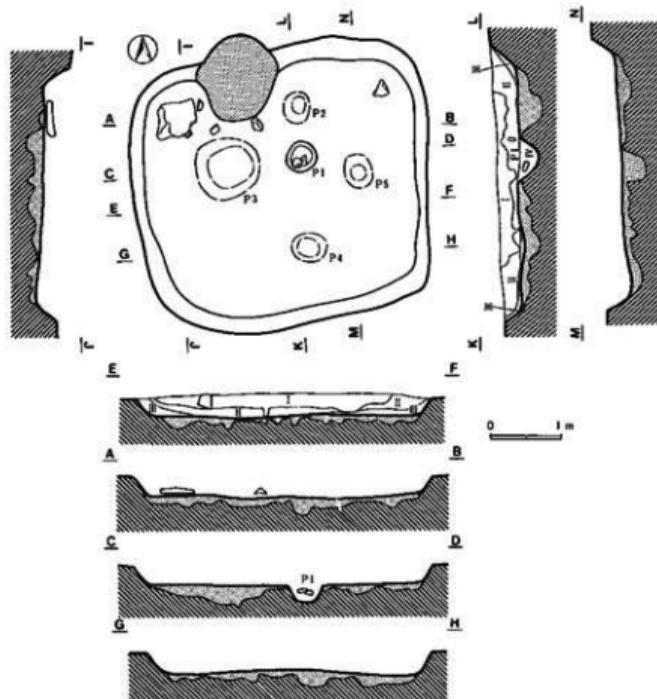
遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかつた。

カマド 第51図

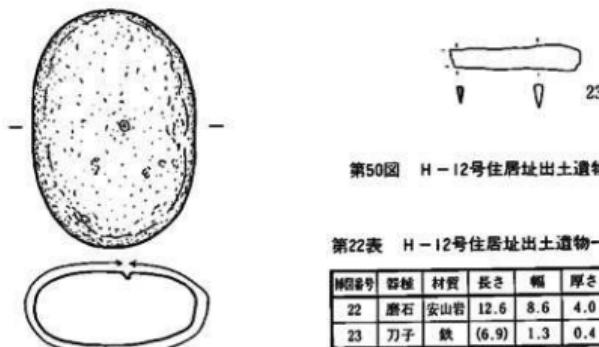
カマドは、住居址の北壁中央よりやや東寄り存在している。

本カマドは、全体的に破壊された様相を呈していた。

袖は、未加工の安山岩礫を芯にして、褐色土層(5層 10YR4/4)を貼って構築されていた。また、火床にはロームを主体とするにぶい黄褐色土層(10YR4/3)が貼られていた。



第49図 H-12号住居址実測図 (1 : 80)

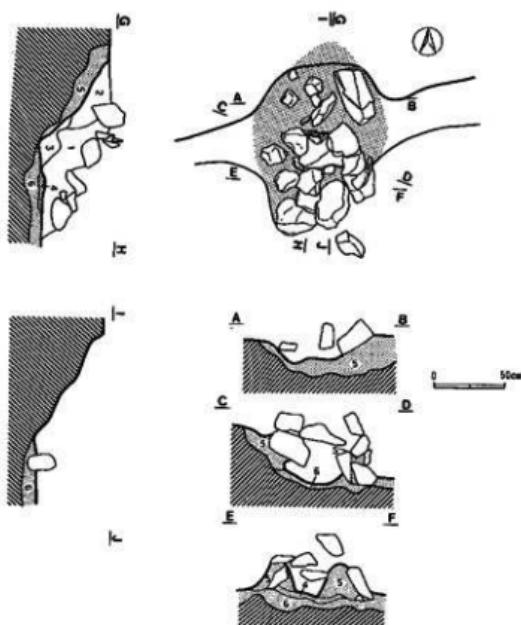


第50図 H-12号住居址出土遺物 (1 : 3)

第22表 H-12号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉

件名	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
22	磨石	安山岩	12.6	8.6	4.0	673	
23	刀子	鉄	(6.9)	1.3	0.4	(11.1)	

※ 単位はcm・g



第51図 H-12号住居址カマド実測図 (1:40)

本カマドの覆土は、4層に分層された。1層は焼土・カーボンをまったく含まない暗褐色土層(10YR3/3)、2層も焼土・カーボンをまったく含まないにぶい黄褐色土層(10YR4/3)、3層は焼土粒子を多量に含みカーボンを若干含む暗赤褐色焼土層(5 YR3/3)、4層は赤褐色焼土層(5 YR4/6)であった。

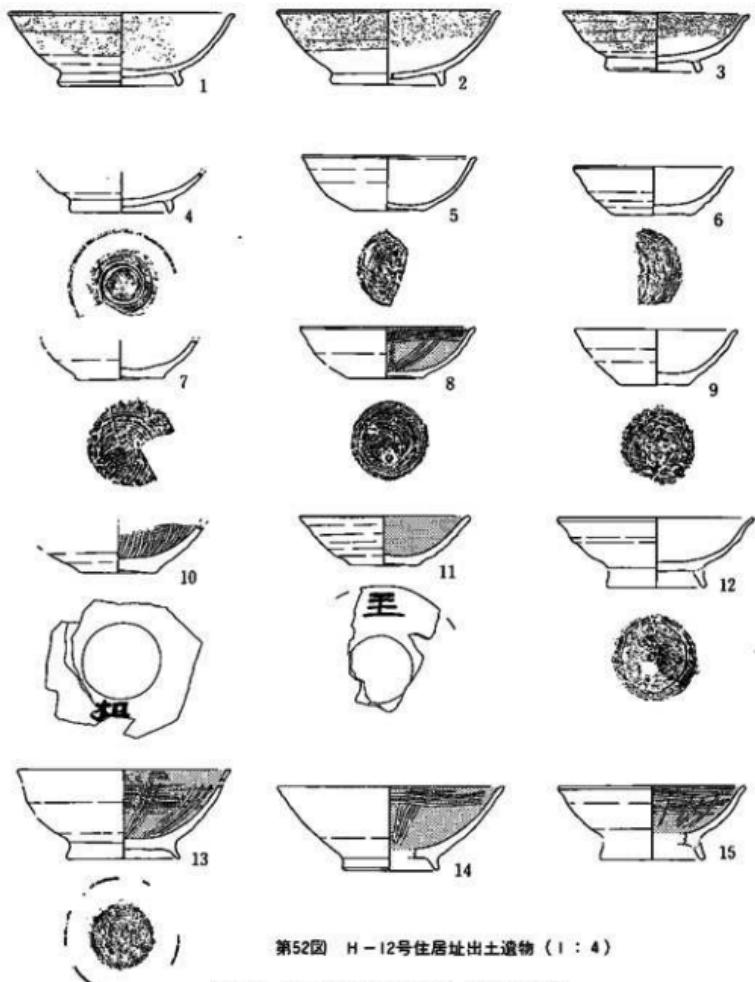
なお、安山岩礫の支脚は中央にそのまま残されていた。

遺 物 第50・52・53図・第22・23・24表

遺物は、灰釉陶器壺、須恵器甕、土師器では壺・高台付壺・鉢・甕が検出されている。

1~4は、灰釉陶器壺である。いずれも刷毛掛けの施釉がなされるもので、東濃の光ヶ丘1号窯式の製品と考えられる。

5~11回転糸切りの底部をみせる土師器壺、10~13は土師器高台付壺である。11には王の墨書が、10には片側に「木」偏の付く墨書が認められた。また、8の土師器壺には内外面全体に漆の付着(塗布?)が窺える。

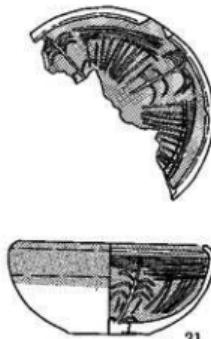
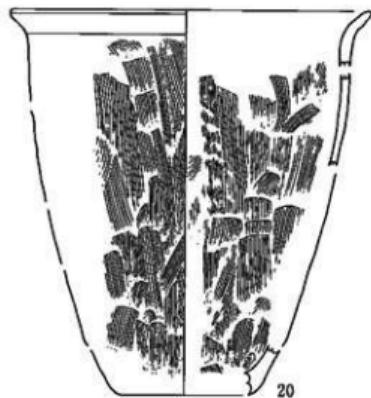
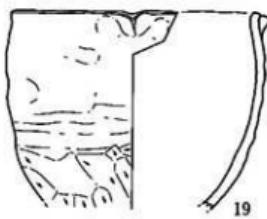
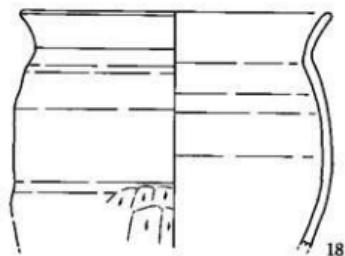
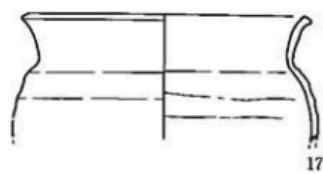
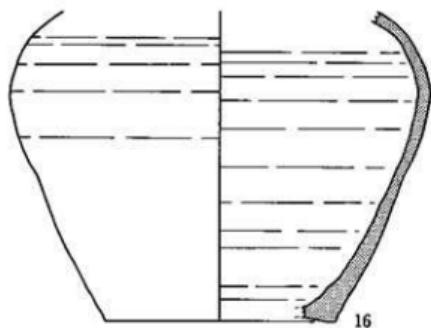


第52図 H-12号住居址出土遺物 (1:4)

第23表 H-12号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

件 器 名 号	器 種 (形)	法 量	器 形 の 特 徴	調 査	考
1 (1)	碗 (碗)	15.6 8.0	15.6 体部内凹、口縁略膨で外反。底部に三日月状の 5.1 略凸貼り付け。 8.0	内外面クロナナ。底部ナナ。内外底を刷毛掛けによる施釉。	粘土は精選され、灰白色。 (10Y R7/1) 東北光ヶ丘1 H-12号と接合
2 (2)	碗 (碗)	15.4 5.2 7.4	15.4 体部内凹、口縁略膨で外反。底部に三日月状の 5.2 略凸貼り付け。 7.4	内外面クロナナ。底部ナナ。内外底を刷毛掛けによる施釉。	粘土は精選され、灰白色。 (10Y R7/1) 東北光ヶ丘1

III 造構と遺物



第53図 H-12号住居址出土遺物 (1:4)

第24表 H-12号住居址出遺物一覧表〈土器〉

序 番 号	種 類	法 量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
3 (回)	壺 (灰)	11.0 4.3 6.3	体部内時、口縁部で外反。底部に三日月状の高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内外底を焼き跡を剥による追加。	粘土は焼過され、灰白色。 (10YR 7/1) 東邊丸ヶ丘1
4 (回)	壺 (灰)	- - 6.8	底部に三日月状の高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内外底を焼き跡を剥による追加。	粘土は焼過され、灰白色。 (10YR 7/1) 東邊丸ヶ丘1
5 (回)	壺 (土)	(12.0) 2.8 5.0	体部へ口縁部内時して開く。 底部平底。	内外面クロナダ。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、青色。 (2.5YR 6/6)
6 (回)	壺 (土)	(11.0) 3.4 (5.2)	体部へ口縁部内時して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダ。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、青色。 (5YR 6/6)
7 (回)	壺 (土)	- - 6.2	体部へ口縁部内時して開く。 底部平底。	内外面クロナダ。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 7/4)
8 (回)	壺 (土)	(12.0) 3.6 5.0	体部へ口縁部内時して開く。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色施用し、口縁部周辺をヘラで引き、内底部から口縁部に放射状の暗文を施す。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、灰黃褐色。 (10YR 6/2) 内外面に擦らきもの有る
9 (回)	壺 (土)	(11.4) 3.8 5.2	体部へ口縁部内時して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダ。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 6/4) 外側縁付着有り。
10 (完)	壺 (土)	- - 5.2	底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色施用。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 6/4) 体部に擦り有り。
11 (回)	壺 (土)	(11.9) 3.4 4.7	体部へ口縁部やや内時して開く。 底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色施用。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5) TR 6/4) 体部に擦り有り。
12 (回)	高台壺 (土)	(11.6) 4.5 6.6	体部内時して、口縁部で若干外反する。底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部余切りのちナダ。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 5/6)
13 (回)	高台壺 (土)	(14.6) 6.2 7.6	体部内時して、口縁部で若干外反する。底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。内面黑色施用後、丁寧なヘラミガキ。 底部余切りの後、ナダ。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 6/2)
14 (回)	高台壺 (土)	(15.0) 5.8 6.2	体部内時して、底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。内面黑色施用の後、やや難なヘラミガキ。 底部余切りの後、ナダ。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 6/4)
15 (回)	高台壺 (土)	(13.6) 5.1 7.2	体部内時して、口縁部で若干外反する。底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。内面黑色施用後、丁寧なヘラミガキ。 底部余切りの後、ナダ。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 6/4)
16 (回)	甕 (土)	- (16.0)	側部は上段で強く張り、以下直線的に收縮する。	内外面クロナダ。後、外側縁付。	粘土は焼過され、褐灰色。 (10.5YR 5/1)
17 (完)	甕 (土)	19.4 - -	口縁部から腹部上部にかけて「く」の字形に張り出し、肩部は丸みをもつ。口縁部内時。	内外面クロナダ。後、内面調整ナダ。	粘土は砂粒を含み、灰青褐色。 (2.5YR 5/6)
18 (完)	甕 (土)	21.4 - -	口縁部から腹部上部にかけて「く」の字形に張り出し、肩部は丸みをもつ。口縁部内時。	内外面クロナダ。後、内面調整ナダ。外側調節下位に縫方向のカーラケズリ。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 7/4)
19 (完)	片口甕 (土)	16.6 - - - - - -	右側影を呈する。 底部不明。 口縁部は拂み出しによる片口を有する。	内外面クロナダ。 のち、内面は縫方向ナダ。外側下位は斜め方向の縫かいヘラケズリ。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 6/5)
20 (回)	甕 (土)	(24.0) 27.0 9.0 5.8	側部はおむね直線的に開き、口縁部は最も細く短く屈曲する。	内外面ナダのち、細い素地をもつ板状工具による縫方向のカズリを施す。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (2.5YR 7/4)
21 (回)	鉢 (土)	13.2 6.4 5.8	体部内時し、半球円底を呈する。 底部内折する。	内外面クロナダ。後、内面黑色施用。また内面全底、外側口縁部余切りに丁寧なヘラミガキ。内面に更に軽本状の暗文を施す。 底部余切り。	粘土は砂粒を含み、外側に灰青褐色のTR 6/4、内面卷毛のYR 6/6、外側に茎状の擦付場。

III 造構と遺物

16は須恵器甕である。

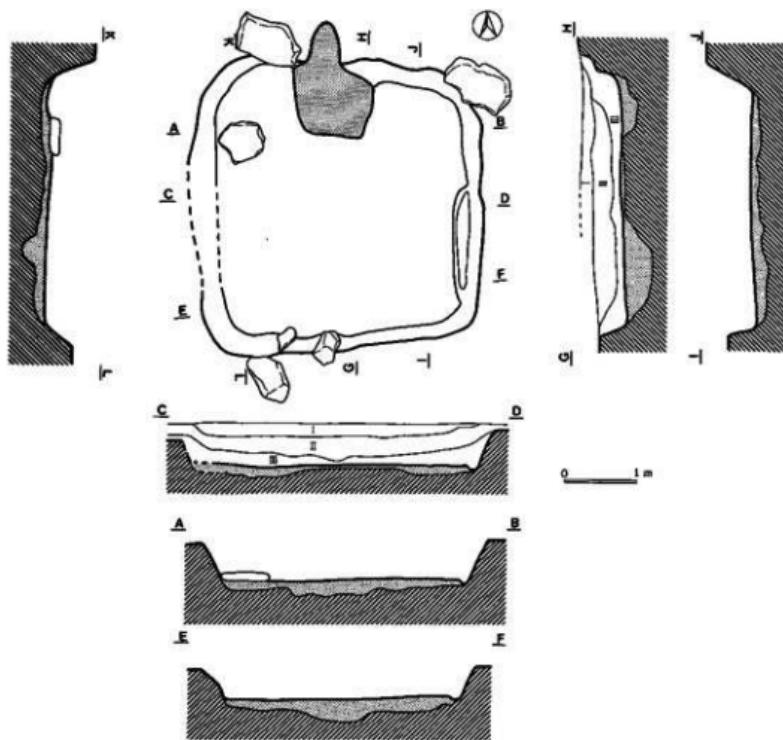
17・18は土師器ロクロ甕、20は土師器の甕で内外面に刷毛目状調整が顕著である。

また、19は土師器の片口のロクロ深鉢である。21は噴水状の暗文がみられる鉄鉢状の土師器で、外面上半部には漆の塗布（トーン部）が窺える特殊な土器である。

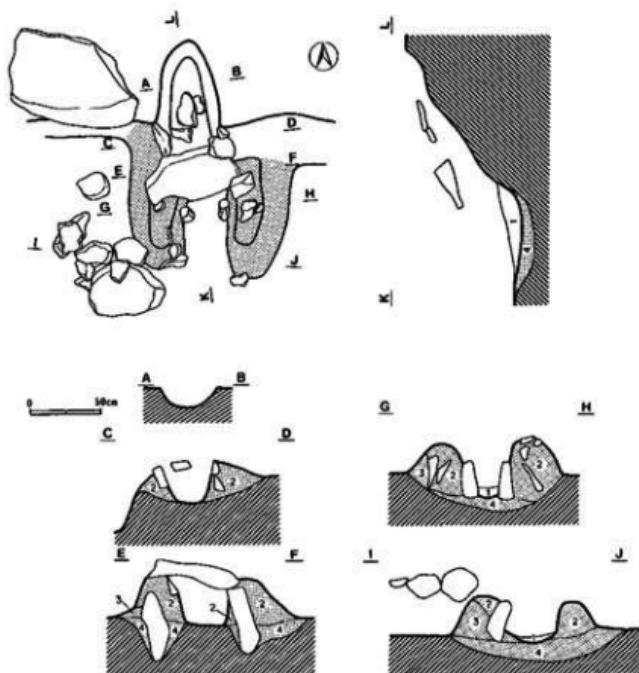
時期

本住居址は、10世紀前葉、川原田遺跡第III期に位置付けられよう。

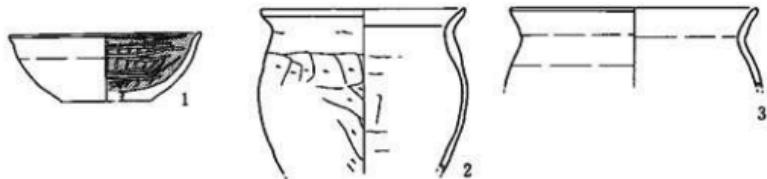
(13) H-13号住居址



第54図 H-13号住居址実測図 (1:80)



第55図 H-13号住居址カマド実測図 (1 : 40)



第56図 H-13号住居址出土遺物 (1 : 4)

III 遺構と遺物

第25表 H-13号住居址出遺物一覧表(土器)

種類 図 番	器 種 法 位	器形の特徴	調 査	備 考
1 (回)	环 (土) 4.7 6.2	体窓内内房して開き、口縁部で強く曲屈する。 底盤平底。	内外面クロナデ。後、内面黑色施墨の後、丁寧なヘラミガキ 底盤余留り	粘土は砂粒を含み、栗赤褐色 (5YR5/6)
2 (回)	甕 (土) (14.2) — —	口縁部から腹部上位にかけて「コ」の字状に屈曲し、底部は中位で丸みをもつ。 底部に最大径をもつ(14.5)。	内外面口部斜面ナデ。後、内面斜面は浅いへラケズリ。另面部上位、中位以下剥方向へヘラケズリ。	粘土は砂粒を含み、よい褐色 (7.5YR5/4)
3 (回)	甕 (土) (17.2) — —	口縁部から腹部上位にかけて「く」の字に屈曲する。	内外面クロナデ。	粘土は砂粒を含み、褐色 (7.5YR7/6)

住居址 第54図

H-13号住居址は、H-9グリッドにおいて検出された。本住居址廃絶後にT-1の礎石が配置され礎石建物が構築されていることが窺える。

本址は、南北4.1m東西4.1m隅丸長方形を呈し、床面積12.2m²を測り、南北軸方向はN-2°-Eを指す。壁の残存高は、40~50cmを測る。壁溝は幅20cm前後のものが東壁に認められた。床面は、ロームを主とする褐色土層(10YR4/4)の貼り床である。

ピットは認められていない。

遺物は、全体的に少なく、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

覆土は、3層に分層された。I層はローム粒子をあまり含まない黒褐色土層(10YR2/3)、II層はローム粒子を若干含む暗褐色土層(10YR3/3)、III層はローム粒子を多量に含む埋土的ないし黄褐色土層(10YR4/3)であった。

カマド 第55図

カマドは、住居址の北壁の中央よりやや西寄りに存在している。

本カマドは、一部が破壊されたものと考えられるが、その両袖と天井石・支脚石をとどめており、比較的遺存状態のよいほうのものと考えられる。天井には扁平な安山岩が置かれ、袖には安山岩が芯材として用いられ、ロームの混じるによ褐色土層(2層 10YR3/3)、褐色ローム層(3層 10YR4/4)によって構築されていた。また基底部はロームの混じる暗褐色土層(4層 10YR4/3)によって構築されていた。火床には赤褐色焼土層(1層 5YR4/6)が認められた。支脚石は、2個の角錐状の面取り石が左右両袖際に配されていた。

遺物 第56図・第25表

遺物の出土量は少なく、土師器の壊・變の破片が検出されているのみである。

1は回転糸切りによる土師器壊で、内面黑色研磨のなされたものである。

2はコの字状口縁の土師器變、3はロクロ調整による土師器變である。

時 期

本住居址は、9世紀末葉、川原田遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(14) H-14号住居址

住居址 第57図

H-14号住居址は、J-9グリッドにおいて検出された。

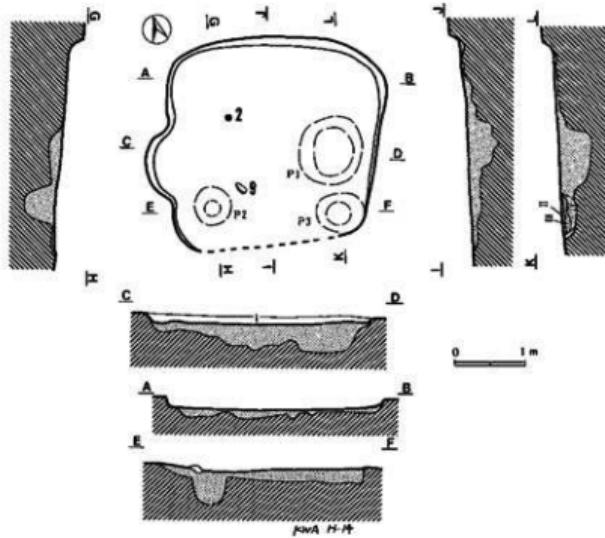
本住居址は、南北3.1m東西3.0mの歪んだ隅丸方形を呈し、床面積7.7m²を測り、南北軸方向はN-12°-Eを指す。残存壁高は、最高で20cm程度である。壁溝は認められない。ピットは、75×75cm深さ30cmのP₁が南西コーナーに認められた。その内部には、安山岩礫が認められた。

覆土は、1層のみで、ローム粒子をよく含む暗褐色土層(5YR3/4)であった。

遺物は、2の灰釉陶器皿が住居中央よりやや西寄りから検出された。その他は良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマド

カマドの構材と考えられる軽石と安山岩礫は、住居址の西南コーナーに認められており、カマドが西壁側に存在していたことを窺わせる。おそらくは住居の西壁中央部に位置していたものと

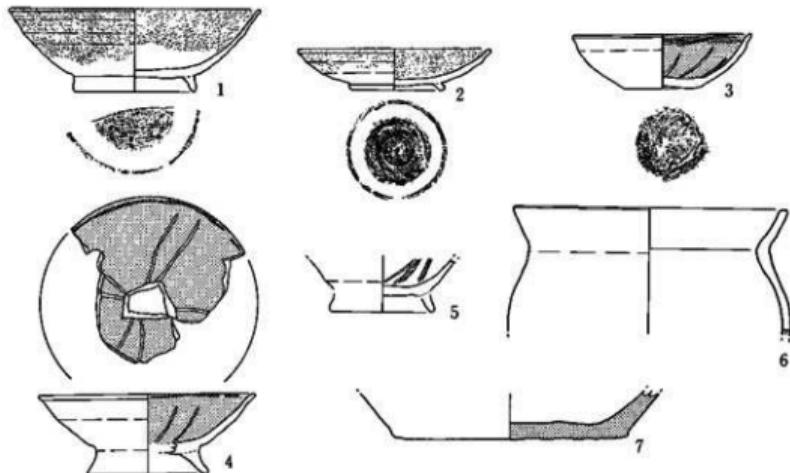


第57図 H-14号住居址実測図 (1:80)

III 遺構と遺物

第26表 H-14号住居址出遺物一覧表(土器)

序 番 号	器 種 (材)	法 量	器 形 の 特 徴	特 徴	備 考
1 (四)	壺 (灰)	(17.0) 3.0 (灰.2)	体態内向。口縁部で若干外反。底部に平長筋。 円弧の高台貼り付け。	内外面ロクロナデ。底部ナデ。内外底を除く筋毛剥けによる施文。	胎土は稍選され、灰黄色。 (2.SVR 7/2) 尾北S-4
2 (三)	壺 (灰)	13.4 2.9 6.2	体態内向。口縁部で若干内折する。底部に高台貼り付け。	内外面ロクロナデ。底部ナデ。内外底を除く筋毛剥けによる施文。	胎土は稍選され、灰灰色。 (2.SVR 5/1) 尾北S-4
3 (四)	壺 (土)	(17.4) 3.8 6.2	体態~口縁部内側して開き、口縁部で多く外反 する。底態平底。	内外面ロクロナデ。のち、内面は褐色処理し、口縁部周辺をヘラミガキ。内底部から口縁部に放射状の暗文を施す。 底邊を切り。	胎土は砂粒を含み、にいよい黄褐色。 (10YR 7/3) 口縁部に蟹が付着する。
4 (四)	高台壺 (土)	(15.6) 5.6 (灰.3)	体態~口縁部内側して開き、口縁部で若干外反 する。底態に高台貼り付け。	内外面ロクロナデ。のち、内面は黑色処理し、内底部から口縁部に放射状の暗文を施す。 底邊を切り。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.SVR 6/4)
5 (四)	高台壺 (土)	- - -	底邊に高台貼り付け。	内外面ロクロナデ。のち、内底部に基本単位の放射状の暗文を施す。 底邊を切り。	胎土は砂粒を含み、にいよい褐色。 (7.SVR 7/4)
6 (四)	甕 (土)	18.7 - -	口縁部は受け口状を呈する。	内外面ロクロナデ。	胎土は砂粒を含み、明褐色。 (2.SVR 5/6)
7 (四)	甕 (灰)	- - 16.5		内面ナデ。外面ヨコナデのち、斜方向のナデ。	胎土はやや粗く、明灰色。 (10YR 5/1)



第58図 H-14号住居址出土遺物 (1:4)

考えられる。1層は焼土をよく含む褐色土層(10YR4/6)である。

遺物 第58図・第26表

遺物は、灰釉陶器碗・皿、須恵器甕、土師器では壺・甕のほか、磨石類も検出されている。

1・2は、灰釉陶器の碗および皿で、いずれも刷毛掛けの施釉がなされるもので、尾北S-4号窯式の製品と考えられる。

3は回転糸切りの底部をみせる土師器壺、4・5は土師器高台付壺である。このうち3の土師器壺の口唇部には煤が付着しており、灯明の機能をはたしていたことが窺える。

6は土師器ロクロ甕である。

7は須恵器甕である。

この他、磨石が出土しているが縄文時代遺物である可能性が強いため掲載しなかった。

時期

本住居址は、10世紀前葉、川原田遺跡第III期に位置付けておきたい。

(15) H-15号住居址

住居址 第59図

H-15号住居址は、G-9グリッドにおいて検出された。本住居址はT-1の西側の溝に中央部を切られている。また、その東壁をD-190号土坑に切られている。

本住居址は、南北3.6m東西3.6mの隅丸長方形を呈し、床面積10.3m²を測り、南北軸方向はN-7°-Eを指す。残存壁高は30~50cmを測る。壁溝は認められない。床面は貼り床である。また、住居の北西コーナーには50cm四方ほどの扁平な安山岩礫が置かれていた。

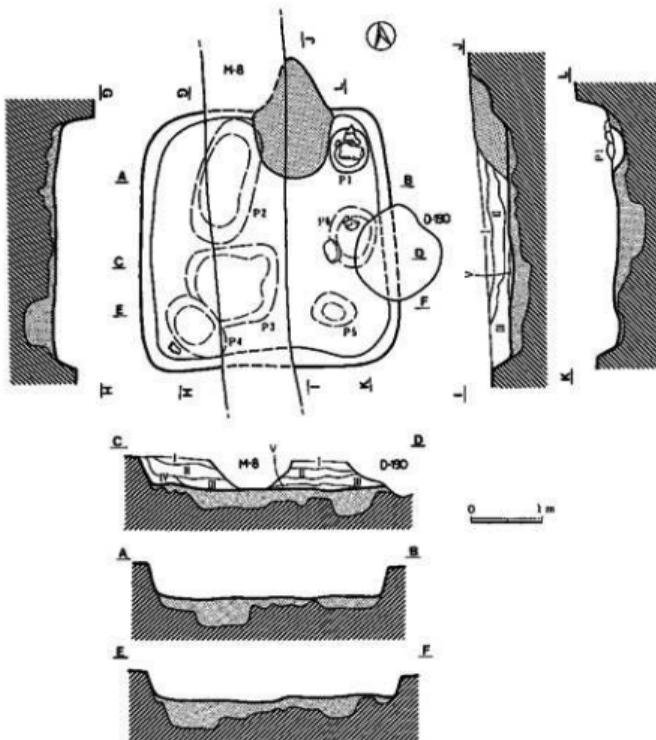
柱穴と考えられるピットは検出されなかったが、住居北東コーナーより円形のピットP₁が検出された。P₁は、60cm×55cm深さ20cmを測る。また、床下からはP₂・P₃・P₄・P₅・P₆が認められた。ピットの大きさは、P₂が175×80cm深さ40cm、P₃が100×65cm深さ35cm、P₄が65×45cm深さ30cm、P₅が80×60cm深さ40cm、P₆が125×110cm深さ25cmを測る。

覆土は、5層に分層された。I層はローム粒子を若干に含む黒褐色土層(10YR2/3)、II層はローム粒子を大量に含む褐色土層(10YR4/6)、III層はローム粒子を多量に含む褐色土層(10YR4/4)、IV層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層(10YR2/3)、V層は黒色土層(10YR1.7/1)である。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマド 第60図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東寄り存在している。



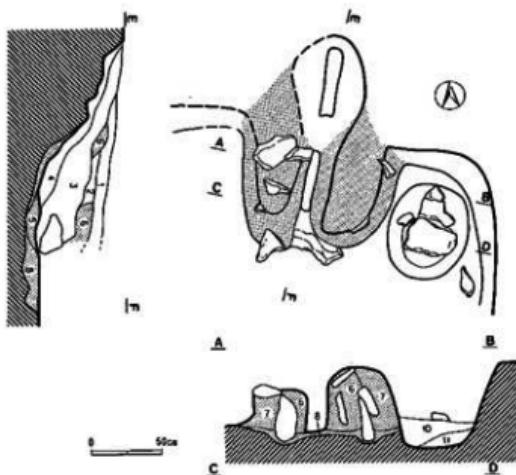
第59図 H-15号住居址実測図 (1 : 80)

本カマドの一部は破壊され、その東脇に構材である安山岩礫がたたみ置かれていた。

袖は、未加工の安山岩礫を芯にして、ロームを主体とする褐色土層 (10YR4/3) を貼って構築されていた。また、火床にはロームを主体とする黄褐色土層 (10YR5/8) が貼られていた。また、天井部もロームを主体とする黄褐色土層 (6層 10YR5/8) を用いて構築されていた。

本カマドの覆土は、5層に分層された。1層は焼土・カーボンを若干含む黒褐色土層 (10YR2/3)、2層は焼土を多く含む暗褐色土層 (10YR3/4)、3層は焼土を多量に含む暗褐色土層 (10YR4/4)、4層は焼土を大量に含む褐色土層 (10YR4/6)、5層は赤褐色焼土層 (5YR4/6) であった。

なお、天井部の安山岩礫のはやや沈んだ状態で検出された。



第60図 H-15号住居址

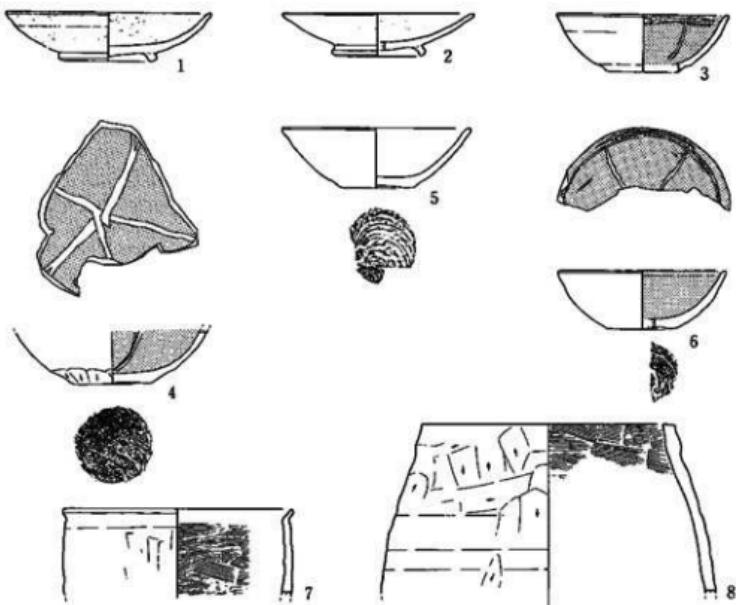
カマド実測図 (1:40)



第27表 H-15号住居址出遺物一覧表〈土器〉

器 器 番 号	器 種	寸 量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (同) 皿 (灰)	(14.2) 体部内凹、口縁部で若干外反。 底部に船形の高台貼り付け。 6.3		内外面クロナデ。底部ナデ。内底部を施さ抜け掛けによる施物。	粘土は焼過され、浅黄色。 (2.5YR 7/3) 尾北S-4	
2 (同) 皿 (灰)	(13.4) 体部は内凹して開く。 3.8 底部に船形の高台貼り付け。 (6.0)		内外面クロナデ。底部ナデ。内底部を施さ抜け掛けによる施物。	粘土は焼過され、浅黄色。 (2.5YR 7/1) 尾北S-4	
3 (同) 杯 (土)	17.8 体部～口縁部内凹して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。 —		内外面クロナデ。のち、内面は茶色処理し、口縁部周辺へラッカギ。内底部から口縁部に放射状の暗文を施す。底部未切り。	粘土は砂粒を含み、にい黃色。 (7.5YR 6/6)	
4 (同) 杯 (土)	— 5.4		内外面クロナデ。のち、内面は茶色処理し、内底部から口縁部に放射状の暗文を施す。外側底部下位はヘラケツリ加わる。底部未切り。	粘土は砂粒を含み、にい黃色。 (5YR 7/3)	
5 (同) 斧 (土)	(13.2) 体部～口縁部内凹気にして開き、口縁部で若干外反する。底部平底。 4.2 5.2		内外面クロナデ。のち、内面は茶色処理し、口縁部周辺へラッカギ。内底部から口縁部に放射状の暗文を施す。底部未切り。	粘土は砂粒を含み、にい黃色。 (7.5YR 7/4)	
6 (同) 斧 (土)	(11.8) 体部～口縁部内凹して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。 4.1 5.6		内外面クロナデ。のち、内面は茶色処理し、口縁部周辺へラッカギ。内底部から口縁部に放射状の暗文を施す。底部未切り。	粘土は砂粒を含み、にい黃色。 (5YR 6/4)	
7 (同) 壺 (土)	15.8 — —		内外面クロナデのち、内面、外表面方向の板状工具によるケツリ。	粘土は砂粒を含み、にい黃色。 (7.5YR 7/4)	
8 (同) 壺 (土)	17.7 — —		内面板状工具によるナデ。外表面ラッカギ。	粘土は砂粒を含み、にい黃色。 (7.5YR 7/4)	

III 瓷器と遺物



第61図 H-15号住居址出土遺物 (1:4)

時 期

本住居址は、10世紀初頭、川原田遺跡第II期に位置付けられよう。

遺 物 第61図・第27表

遺物は、灰釉陶器皿、土師器では壺・甕が検出されている。

1・2は、灰釉陶器皿である。いずれも刷毛掛けの施釉がなされたもので、尾北S-4号窯式の製品と考えられる。

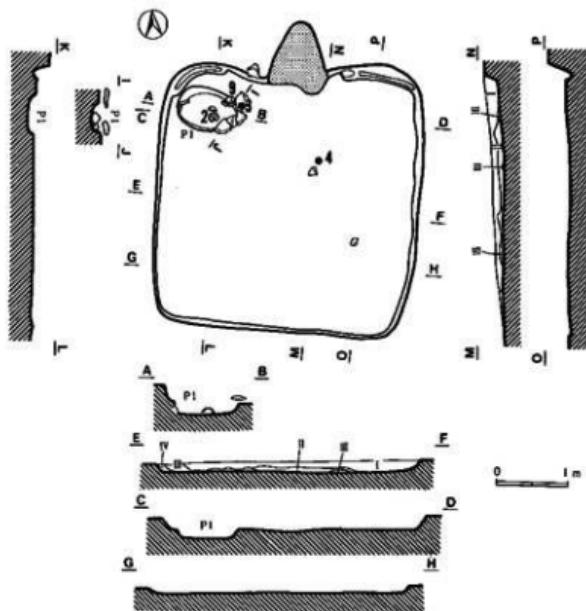
3～6は回転糸切りの底部をみせる土師器壺である。

7は土師器甕で、その内面にはヘラ状工具の小口による刷毛目状の調整が顕著である。8は土師器のロクロ甕で内面に刷毛目状調整が顕著である。

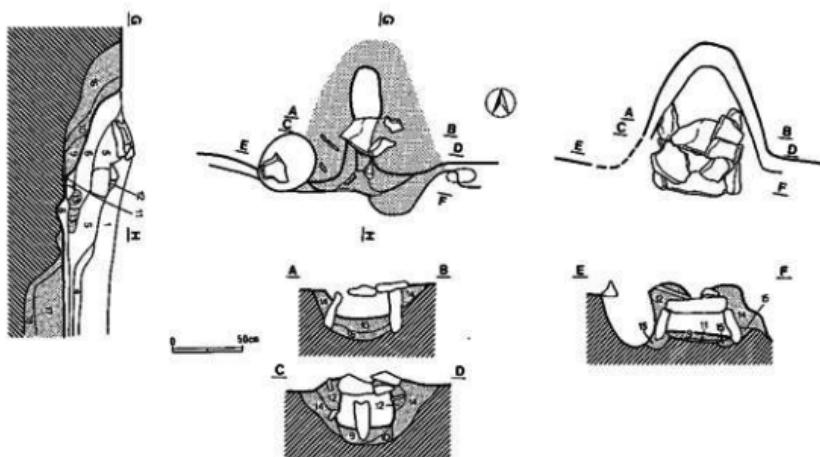
(16) H-16号住居址

住居址 第62図

H-16号住居址は、H-11グリッドにおいて検出された。本住居址はJ-2およびJ-46号住



第62図 H-16号住居址実測図 (1:80)



第63図 H-16号住居址カマド実測図 (1:40)

III 遺構と遺物

居址を切って存在している。

本住居址は、南北3.8m東西3.7mの隅丸長方形を呈し、床面積12.2m²を測り、南北軸方向はN-4°-Eを指す。残存壁高は10~20cmを測る。壁溝は認められない。床面はローム粒子を若干含む褐色土層(10YR3/3)の貼り床である。

柱穴と考えられるビットは検出されなかったが、住居北西コーナーより楕円形のビットP₁が検出された。P₁は、60cm×55cm深さ20cmを測る。

覆土は、4層に分層された。I層はローム粒子をよく含む暗褐色土層(10YR3/4)、II層はローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR2/2)、III層は焼土を多量に含みカーボンをよく含む赤褐色焼土層(5YR5/8)、IV層はローム粒子をよく含む暗褐色土層(10YR3/4)である。

遺物は、住居北西コーナー床面直上より3の高台付坏が正常位で、2の須恵器坏がP₁中より伏せられた状態で検出された。そのほかは良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマド 第63図

カマドは、住居址の北壁中央に存在している。

本カマドの一部は破壊され、その東脇に構材である安山岩礫がたたみ置かれていたが、比較的その本体を良好にとどめているものである。

袖は、未加工で扁平な安山岩礫左右二個づつ配して芯にし、ロームと黒色土を混ぜた暗褐色土層(12層 10YR3/3)、ロームと黒色土を混ぜた暗褐色土層(14層 10YR3/3)、ロームを大量に混ぜた黄褐色土層(15層 10YR3/3)を貼って構築されていた。13層は15層の崩落土である。

また、火床には焼土をよく含む褐色土層(9層 10YR4/6)、ロームを含むにぶい黄褐色土層(16層 10YR5/8)が貼られていた。

天井部は、手前の左右両袖に方形の安山岩礫が渡されたのち、掛け口を開けて、扁平な鉄平石数枚で覆われている。支脚は、棒状の安山岩が火床に直立していた。

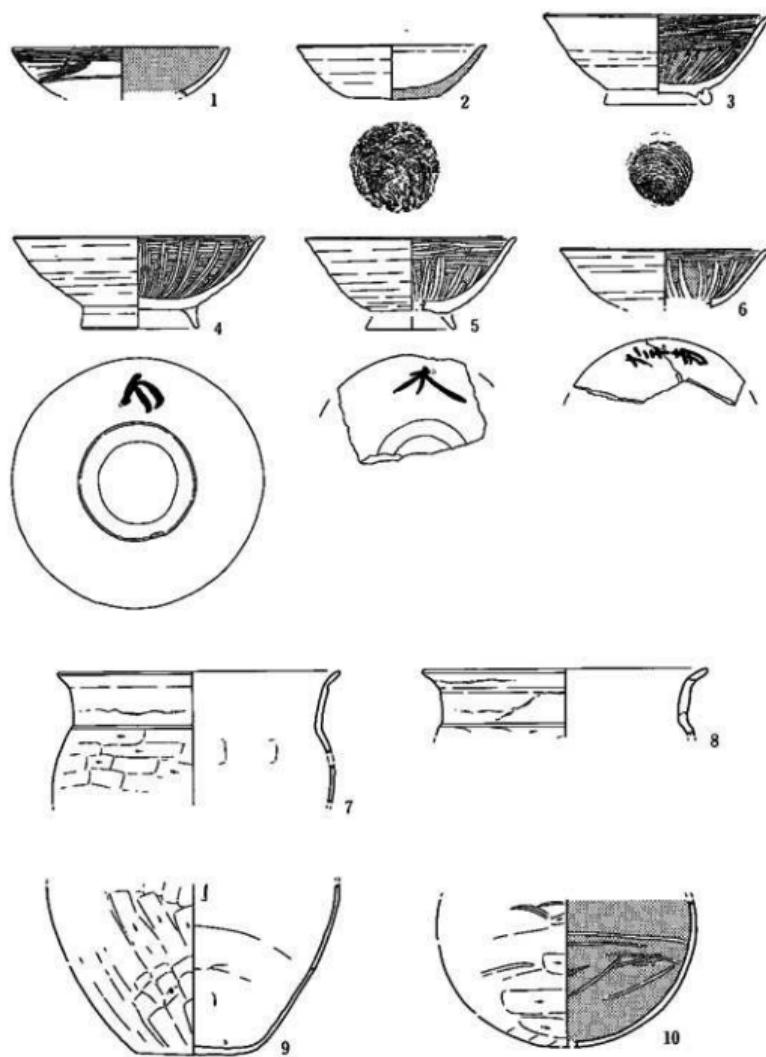
本カマドの覆土は、11層に分層された。1層は焼土・カーボンを若干含む黒褐色土層(10YR2/3)、2層は焼土を含む褐色土層(10YR4/4)、3層は明赤褐色焼土ブロック(5YR5/8)、暗褐色土層(10YR4/4)、4層は焼土を大量に含む褐色土層(10YR4/6)、5層は焼土・カーボンを含む黒褐色土層(10YR2/3)、6層は焼土・カーボンを含む褐色土層(10YR3/4)、7層は暗褐色灰層(10YR4/4)、8層は焼土・カーボンを含む黒褐色土層(10YR2/3)、9層は焼土をよく含む褐色焼土層(10YR4/6)、10層はカーボンを若干含む褐色焼土層(5YR4/8)、11層は褐色焼土ブロック(5YR4/8)であった。

遺物 第64図・第28表

遺物は、須恵器坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1は土師器坏、2は須恵器坏で回転糸切りの底部をみせる。3~5回転糸切りの底部をみせる

1 平安時代の堅穴住居



第64図 H-16号住居址出土遺物 (1 : 4)

III 造構と遺物

第28表 H-16号住居址出遺物一覧表〈土器〉

序 番 号	器 種 目	性 質 目	形 状 の 特 徴	調 査 録	備 考
1 (15)	平 (土)	15.0 - -	体部～口縁部内側して開く。 口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面ロクロナナ。のち、内面は黒色處理し、丁寧なヘラミガキ。 外面は口縁部から体部上半にかけて丁寧なヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、にいむき色。 (7.5YR 7/4)
2 (16)	平 (土)	13.0 3.8 6.3	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面ロクロナナ。 底部未切り。	胎土は粘土され、灰白色。 (2.5YR 7/1)
3 (17)	高台坪 (土)	15.8 - -	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。	内外面ロクロナナ。のち、内面は黒色處理し、丁寧なヘラミガキ。 底部未切り。	胎土は砂粒を含み、にいむき色。 (7.5YR 7/4)
4 (18)	高台坪 (土)	17.4 6.5 8.3	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。	内外面ロクロナナ。のち、内面は黒色處理し、丁寧なヘラミガキ。 底部未切り。	胎土は砂粒を含み、にいむき色。 (7.5YR 7/4) 外面全体に「万」の墨書きあり
5 (19)	高台坪 (土)	14.8 - -	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。	内外面ロクロナナ。のち、内面は黒色處理し、丁寧なヘラミガキ。 底部未切り。	胎土は砂粒を含み、にいむき色。 (7.5YR 7/4) 外面全体に「木」の墨書きあり
6 (20)	平 (土)	14.7 - -	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。	内外面ロクロナナ。のち、内面は黒色處理し、丁寧なヘラミガキ。 底部未切り。	胎土は砂粒を含み、にいむき色。 (7.5YR 7/4) 外面全体に「大平寺」の墨書きあり
7 (21)	壺 (土)	19.6 - -	口縁部から胴部にかけて「コ」の字状に外反する。	内外面ロクロナナ。のち、内面は黒色處理し、丁寧なヘラミガキ。 底部未切り。	胎土は砂粒を含み、橙色。 (7.5YR 7/6)
8 (22)	壺 (土)	- - 8.0	胴部は底部から内側気球に向く。 底部平底。	内面ナナ。外沿縁方向へラケズリ。	胎土は砂粒を含み、橙色。 (7.5YR 7/6)
9 (23)	壺 (土)	19.8 - -	口縁部から胴部にかけて「コ」の字状に外反する。	内外面ロクロナナ。のち、内面は黒色處理し、丁寧なヘラミガキ。 底部未切り。	胎土は砂粒を含み、橙色。 (7.5YR 7/6)
10 (24)	壺 (土)	- - -	底部は底部から内側気球に向く。	内面黒色處理の後、筆をヘラミガキ。外縁へラケズリのち筆をヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、にいむき色。 (10YR 7/4)

土師器高台付窓である。4は「万」、5は「木」、6は「大平寺」の墨書きである。

7～9は土師器壺で、7・8はコの字状口縁をみせる。10は内面黒色研磨のなされた土師器球胴窓である。

時 期

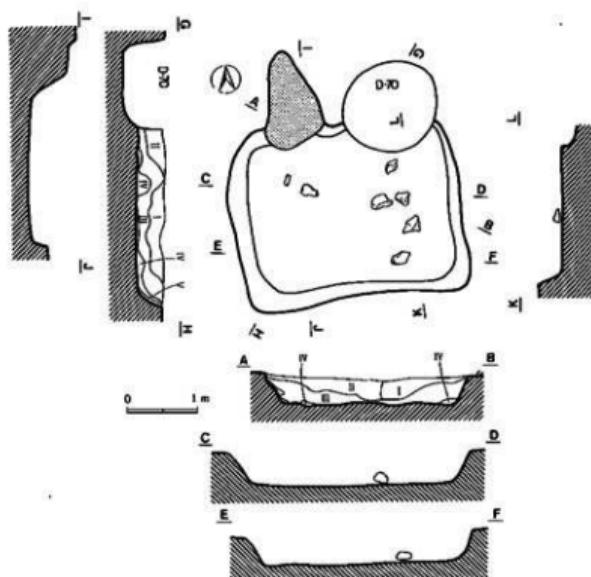
本住居址は、9世紀末葉、川原田遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(17) H-17号住居址

住居址 第65図

H-17号住居址は、H-8グリッドにおいて検出された。本住居址はその北壁をD-70号土坑に切られている。

本址は、南北2.6m東西3.2m隅丸長方形を呈し、床面積6.0m²を測り、南北軸方向はN-3°-Wを指す。壁の残存高は、40～50cmを測る。壁溝は認められない。ピットも認められなかった。住



第65図 H-17号住居址実測図 (1:80)

居内にはカマドの構材かとも考えられる安山岩礫が散布していた。

遺物は、全体的に少なく、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

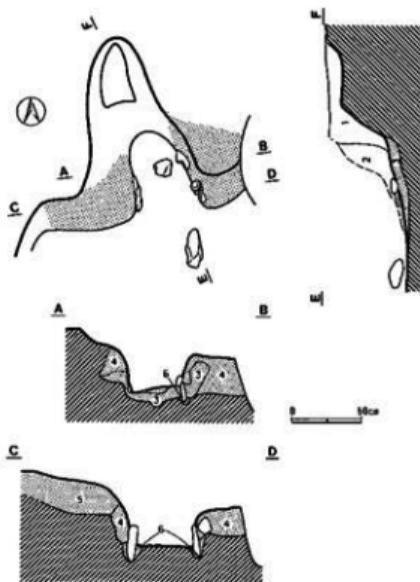
覆土は、5層に分層された。I層はローム粒子を多く含む褐色土層(10YR4/6)、II層はローム粒子を大量に含む黄褐色土層(10YR4/3)、III層はローム粒子を多量に含む褐色土層(10YR4/4)、IV層はローム粒子を含む黒褐色土層(10YR3/2)、V層はロームをブロック状に含む褐色土層(10YR4/6)で、全体的に埋土的な堆積状況をしめしていた。

カマド 第66図

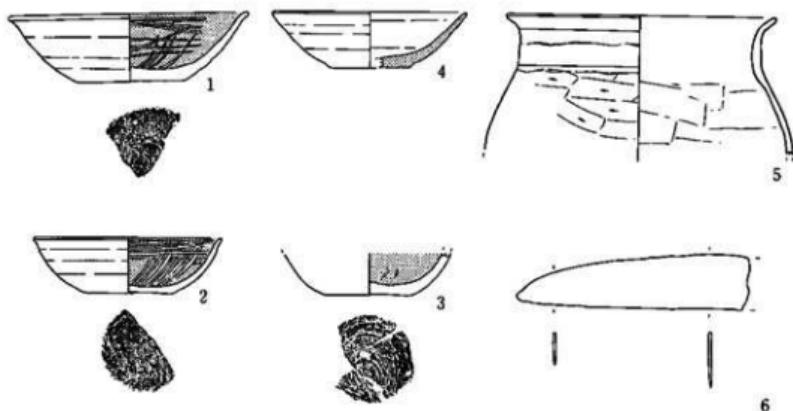
カマドは、住居址の北壁の中央より西寄りに存在している。

本カマドは、その大半が破壊されており、その両袖石の一部をとどめているのみである。袖には安山岩が芯材として用いられ、黄褐色粘質土層(4層 10YR5/8)、ロームを含む黄褐色土層(6層 10YR5/8)によって構築されていた。カマドの覆土は二次的な埋土である。1層は焼土・カーボンを含まずロームがブロック状に混じる褐色土層(10YR4/6)、2層はロームの多量に混じる暗褐色土層(4層 10YR4/3)、3層は焼土を多量に含みロームの混じる暗褐色土層(4層 10YR4/4)である。

III 造構と遺物



第66図 H-17号住居址カマド実測図 (1 : 40)



第67図 H-17号住居址出土遺物 (1 : 4)

第29表 H-17号住居址出遺物一覧表〈土器〉

種類	器種	材質	器の特徴	測定	備考
1 (回)	平 (土)	(16.4) 4.7 (7.1)	体部内側して開き、口縁部で外反する。 底部平底。	内外面ロクロナデ。内面黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部赤褐色のち、手持ちヘラケズリ。	粘土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5YR 7/4)
2 (回)	平 (土)	(12.8) 3.8 (5.6)	体部内側して開き、口縁部で外反する。 底部平底。	内外面ロクロナデ。内面黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部赤褐色。	粘土は砂粒を含み、褐色。 (7.5YR 7/4)
3 (回)	平 (土)	- (6.6)	体部内側して開く。	内外面ロクロナデ。内面黑色處理の後、丁寧なヘラミガキ。 底部赤褐色。	粘土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5YR 6/4)
4 (回)	平 (陶)	(13.4) 3.9 (5.6)	体部から底部直線的に開く。 底部平底。	内外面ロクロナデ。 底部赤褐色。	粘土は焼過され、灰白色。 (2.5YR 7/1)
5 (完)	甕 (土)	18.7 - -	口縁部から腹部上位にかけて「つ」の字状に屈曲し、断面は丸みをもつ。 底部に最大径をもつ。	内外面に底部から腰帯部折衷成形の後、ヨコナデ。後、腰帯内外面積方向へラケズリ。	粘土は砂粒を含み、褐色。 (7.5YR 7/5)

第30表 H-17号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

種類	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	鎌	鉄	(12.2)	2.9	0.2	(30.7)	

単位(cm・g)

遺物 第67図・第29・30表

遺物の出土は少なく、須恵器環、土師器の环・甕が検出された。

1～3は回転糸切りによる土師器環で、内面黑色研磨のなされたものである。4は回転糸切りによる須恵器環である。

2はコの字状口縁の土師器甕である。

時期

本住居址は、9世紀末葉、川原田遺跡第Ⅰ期に位置付けられよう。

(18) H-18号住居址

住居址 第68図

H-18号住居址は、F-9グリッドにおいて検出された。D-134・D-135・D-136号土坑と重複するがその新旧関係はとらえられなかった。

本住居址は、南北4.2m東西4.9mの歪んだ隅丸方形を呈し、床面積17.4m²を測り、南北軸方向はN-2°-Eを指す。残存壁高は、最高で40cmである。壁溝は幅10~15cm程度のものが、東壁から北壁半分にかけてと、北壁から西壁にかけて認められた。床面は貼り床である。

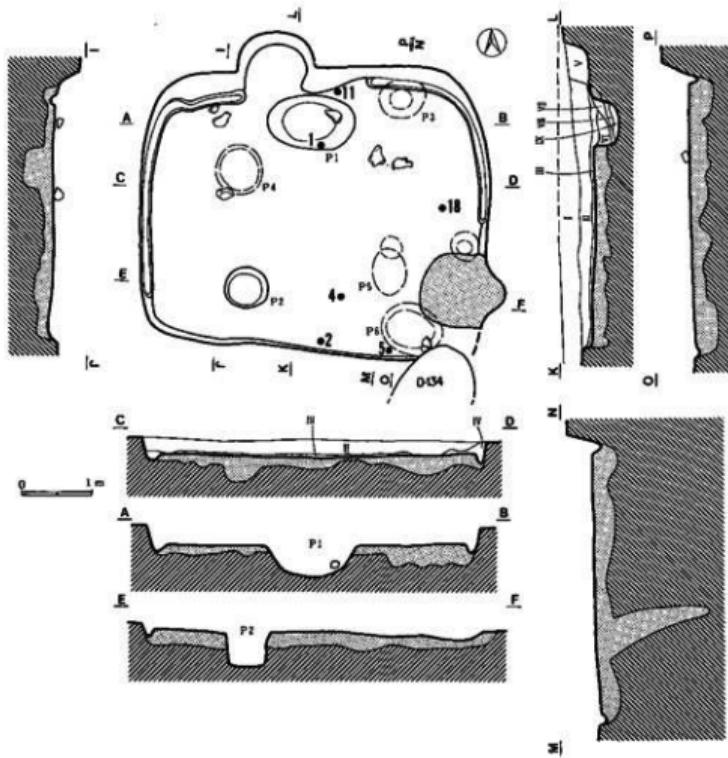
ピットは、P₁・P₂が床面上において、P₃～P₆が貼り床下から認められた。P₁は120×75cm深

III 遺構と遺物

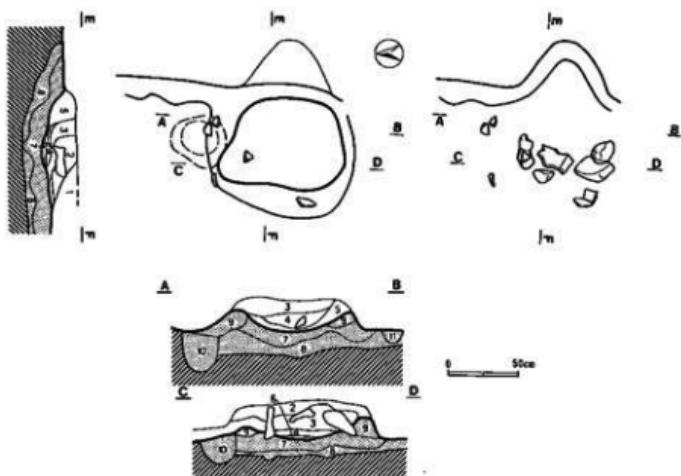
さ40cm、P₁は60×60cm深さ50cm、P₂は65×55cm深さ30cm、P₃は65×65cm深さ40cm、P₄は65×45cm深さ160cm、P₅は90×70cm深さ30cmを測る。このうちP₅はきわめて深く斜めに掘られたピットである。P₁中の覆土は4層に分層された。VI層はロームを小ブロック状に多く含む暗褐色土層(10YR3/4)、VII層は焼土・ロームが若干混じる暗褐色土層(10YR2/2)、VIII層はロームを大量に含む褐色土層(10YR4/4)、IX層は焼土・ロームが若干混じる暗褐色土層(10YR2/2)であった。

覆土は、5層に分層された。I層は黒色土層(10YR2/1)、II層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土層(10YR2/3)、3.層はローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR2/2)、IV層はローム粒子・焼土をよく含む暗褐色土層(10YR3/4)、V層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土層(10YR3/2)であった。

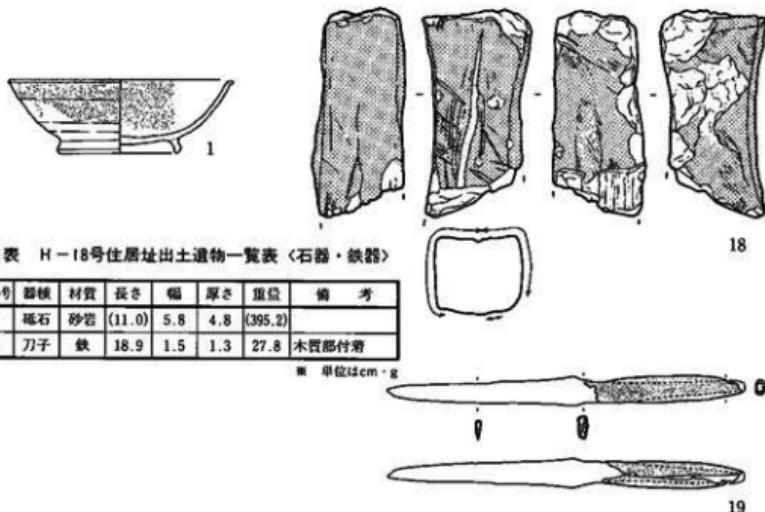
遺物は、2・3の灰釉陶器、5・6の土師器坏、11の須恵器甕が良好な状態で出土した。その



第68図 H-18号住居址実測図 (1 : 80)

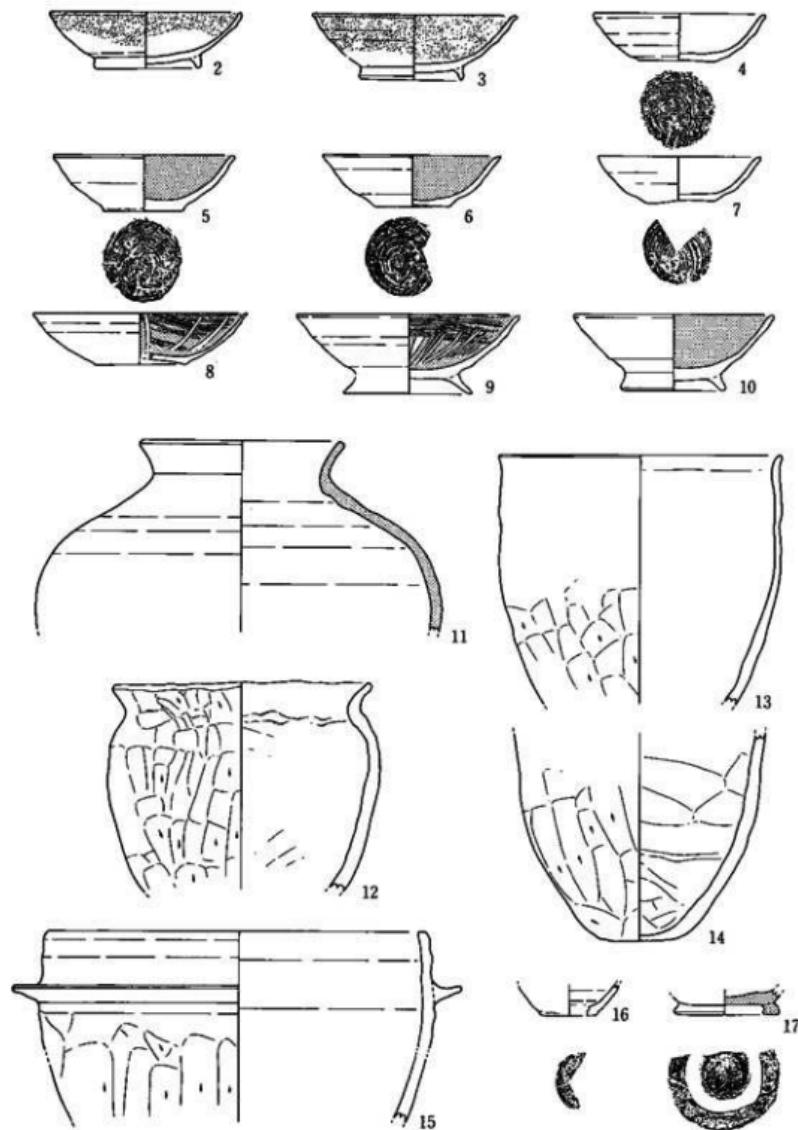


第69図 H-18号住居址カマド実測図 (1:40)



第70図 H-18号住居址出土遺物 (1は1:4, 18・19は1:3)

III 造様と遺物



第71図 H-18号住居址出土遺物 (1 : 4)

第32表 H-18号住居址出遺物一覧表〈土器〉

登録番号	部種	法量(0)	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完) (灰)	瓶	15.6 5.1 8.0	体部は内側して開き、底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内底をねじ糊毛掛けによる施釉。	粘土は焼成され、灰白色。 (10YR 2' / 1) 東面光りなし、質一貫と検合
2 (完) (灰)	壺	13.2 4.0 7.0	体部は内側して開き、底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内底をねじ糊毛掛けによる施釉。	粘土は焼成され、灰白色。 (2.5YR 8' / 1) 東面光りなし
3 (完) (灰)	壺	04.0 4.6 6.8	体部は内側して開き、底部に三日月状の高台貼り付け。	内外面クロナダ。底部ナダ。内底をねじ糊毛掛けによる施釉。	粘土は焼成され、灰白色。 (2.5YR 7' / 2) 東面光りなし
4 (完) (土)	平 (土)	12.0 3.3 5.6	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダ。	粘土は砂粒を含み、褐色。 (7.5YR 6' / 6)
5 (完) (土)	平 (土)	12.0 3.9 5.6	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色處理。	粘土は砂粒を含み、褐色。 (7.5YR 7' / 6)
6 (完) (土)	平 (土)	12.0 3.6 (5.4)	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色處理し、ヘラミガキ。底部未切り。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (7.5YR 6' / 4)
7 (完) (土)	炉	13.4 3.2 4.7	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダ	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (7.5YR 6' / 4)
8 (完) (土)	平 (土)	14.6 3.6 (5.3)	体部～口縁部内側して開き、口縁部で若干外反する。底部平底。	内外面クロナダののち、内面は黑色處理。口縁部を塗なへラミガキの後、放射状の略文を施す。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (7.5YR 6' / 4)
9 (完) (土)	高台炉 (土)	14.9 5.7 (3.0)	体部～口縁部内側して開き、底部に高台貼り付け。	内外面クロナダののち、内面は黑色處理のち、下掌なへラミガキを施す。 底部未切り。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (5YR 8' / 4)
10 (完) (土)	高台炉 (土)	14.0 5.4 6.9	体部～口縁部内側して開き、底部に高台貼り付け。	内外面クロナダ。のち、内面は黑色處理。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (7.5YR 6' / 4)
11 (完) (灰)	甕	13.8 — —	口縁部は短く屈曲して開き、胴部は上位で強く張る。	内外面クロナダ。	粘土は焼成され、褐灰色。 (10YR 5' / 1)
12 (完) (土)	甕	17.6 — —	口縁部は短く屈曲し、胴部は上位で張る。	内面張、開め方向の浅いケズリ。外面縮方向の深いケズリ。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (7.5YR 5' / 4)
13 (完) (土)	体	19.6 — —	口縁部から胴部・底部にかけて短く屈く。口縁部で若干外反する。	内面口縁部はヨコナダ。以下ナダ。外面口縁部～胴部中位ナダ。	粘土は砂粒を含み、褐色。 (5YR 6' / 6)
14 (完) (土)	体	— — 3.8	—	—	—
15 (完) (土)	甕	(25.4) — —	口縁部から胴部の前後部に弱く貼り付け。	内外面クロナダ。後、胴部内面ナダ。胴部外面縮方向のヘラケズリ。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (5YR 7' / 4)
16 (完) (土)	甕	— — (4.0)	—	内外面クロナダ。後、外沿ナダ。底部軽軽未きのち、ナダ。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (10YR 6' / 3)
17 (完) (灰)	甕	— — (2.2)	—	内外面クロナダ。底部周辺高台貼り付けの後、ナダ。	粘土は砂粒を含み、よい褐色。 (10YR 6' / 1)

III 遺構と遺物

他は良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマド 第69図

カマドは、住居址の南東コーナー寄りに存在している。

本カマドの大半は破壊されていた。

袖は、安山岩礫を芯にして、ロームが混じる褐色土層（10YR4/3）を貼って構築されていた。また、火床にはロームが混じる暗褐色土層（7層 10YR3/3）、ロームを主体とする褐色土層（8層 10YR4/4）が貼られていた。

本カマドの覆土は、6層に分層された。1層は焼土を僅かに含む黒褐色土層（10YR3/2）、2層は焼土を多く含むに由い赤褐色土層（5 YR4/4）、3層は焼土をよく含むに由い赤褐色土層（5 YR4/4）、5層は焼土を大量に含む褐色土層（10YR4/6）、6層は赤褐色焼土層（5 YR4/6）であった。

遺物 第70図・第31・32表

遺物は、灰釉陶器塊、須恵器甕・瓶、土師器では壺・高台付壺・甕・羽釜、石器では砥石が検出されている。

1・2・3は、灰釉陶器の塊で、1・3は刷毛掛けの施釉がなされるもので東濃光ヶ丘1号窯式の製品、2は潰掛けの施釉がなされるもので東濃大原2号窯式の製品と考えられる。

4～7は回転糸切りの底部をみせる土師器壺、9・10は土師器高台付壺である。なお、判読不能で図示しなかったが土師器壺に墨書が認められるものが2点あった。

11は、須恵器甕である。

12・13・14は土師器甕で、13は口縁部が短く屈曲する。いずれも非クロクロ調整による甕である。このうち13・14は接合がなされなかつたが、同一個体と考えられる。

15はロクロ調整による羽釜である。

17は、須恵器甕の高台である。

18は、砂岩の砥石、19は柄の木質部を残す刀子である。

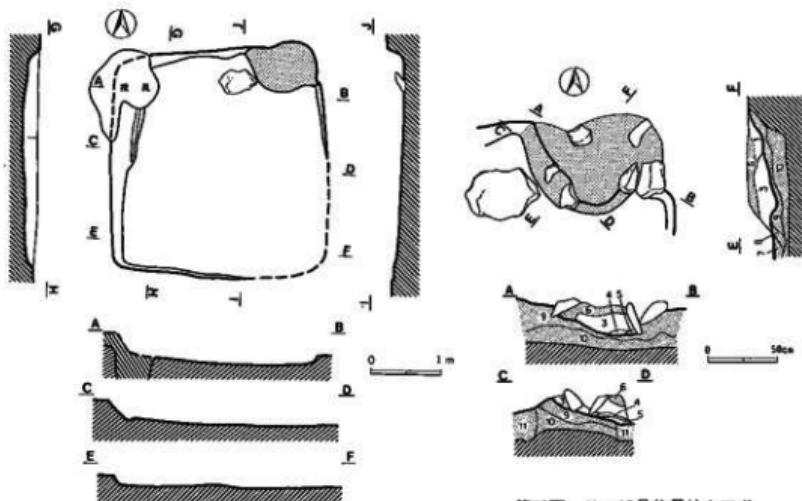
時期

本住居址は、10世紀前葉、川原田遺跡第Ⅳ期に位置付けておきたい。

(19) H-19号住居址

住居址 第72図

H-19号住居址は、J-5グリッドにおいて検出された。本住居址はH-11号住居址およびD-80号土坑を切って存在している。



第72図 H-19号住居址実測図 (1:80)

第73図 H-19号住居址カマド

(1:40)

本住居址は、南北3.2m東西3.0mの隅丸長方形を呈し、床面積8.2m²を測り、南北軸方向はN-1°-Wを指す。残存壁高は10~20cmを測る。壁構は西壁際に一部認められた。床面は貼り床である。ピットは検出されなかった。

覆土は、1層のみでローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR2/3)である。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

カマド 第73図

カマドは、住居址の北東コーナーに存在している。

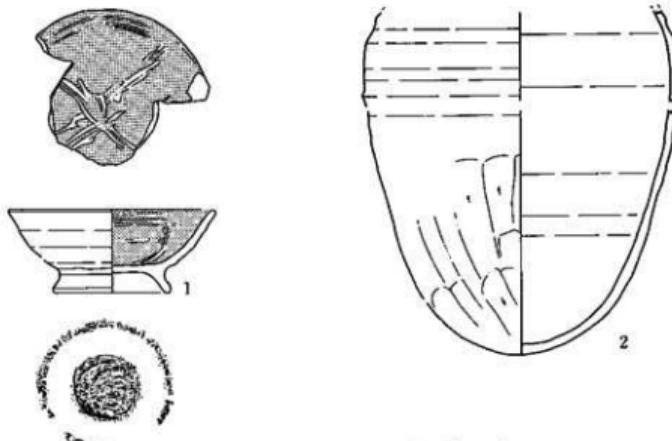
本カマドの大部分は破壊され、安山岩礫の袖石数個が残されているのみであった。天井部はロームを主体とする灰黄褐色土層(10YR4/2)を貼って構築されていた。また、火床は明赤褐色土層(5層 5YR5/8)、ロームを含む黒褐色土層(7層 10YR3/1)、ロームを主体とする黄褐色土層(8層 10YR5/8)、ロームを含む黒褐色土層(9層 10YR3/2)、ロームを大量に含む黄褐色土層(10層 10YR5/6)、ロームを大量に含む黑色土層(10層 10YR2/1)を用いて構築されていた。

本カマドの覆土は、4層に分層された。1層は焼土を多量に含む暗赤褐色土層(5YR3/3)、2層は焼土カーボンを若干含む黒色土層(10YR2/1)、3層は焼土をブロック状に多く含む黒褐色土層(5YR3/1)、4層は明赤褐色焼土層(5YR5/8)であった。

III 遺構と遺物

第33表 H-19号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

序 番 号	器 種	法 量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (回)	高台坏 (土)	(14.2) 5.5 8.0	体部内面気泡に薦く。 先端に比較的長い高台盛り付け。 底部。	内外面クロナデ。底、内面黒色斑塊。 更に2本一对の差削状の端文を施す。底部を切り。高台盛り付け。 底、底邊部ナデ。	胎土は砂粒を含み、におい褐色。 (7.5 YR 7/4)
2 (回)	壺 (土)	- -	腹部から底盤にかけて施削痕を示す。	内外面クロナデ。底、内面底部付近ナデ。外面脚窓下半周方向 へラケズリ。	胎土は砂粒を含み、褐色。 (7.5 YR 6/6)



第74図 H-19号住居址出土遺物 (1 : 4)

遺 物 第74図・第33表

遺物は、須恵器高台付坏、土師器では坏・高台付坏・壺が検出されている。

1は須恵器高台付坏、2は土師器高台付坏である。いずれも回転糸切りの底部をみせる。

3は土師器のロクロ壺、4はコの字状口縁の土師器壺である。

時 期

本住居址は、10世紀初頭、川原田遺跡第II期に位置付けられよう。

2 土 坑

本書では、グリッド10・11列の境界以北の土坑で、明らかに縄文時代に属すると考えられる土坑を除く、時期の不明の土坑・平安時代の土坑・中世の所産と考えられる土坑102基について報告する。中世のいわゆる堅穴状造構とされるものについても、とりあえず土坑として扱った。

土坑の個々の内容については第34表に示してあるのでここでは逐一取り上げず、特徴的な事項やいくつかの傾向のみ述べておく。

まず、形態別では、円形40(39%)・楕円形21(20%)・不整円形8(8%)・不整楕円形13(13%)・隅丸方形20(20%)基となった。特殊なものでは、D-19のように安山岩の方形の石囲いをもつもの、D-34のように内部に安山岩礫が詰まるものなどが見受けられる。

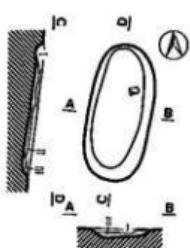
さて、隅丸方形の土坑はいわゆる堅穴状造構とされるものであるが、覆土がロームの混じる埋土的な状況をみせており、一様に埋められた可能性が考えられる。また、その出土遺物中には、内耳鍋や土師質の壺・甕などが認められる他、渡来銭が何枚かみとめられた。D-155からは、咸平元宝(998)・祥府元宝(1008)・治平通宝(1164)・熙寧元宝(1168)の四枚が重なって出土している。カッコ内はその初鋤年代であるが、熙寧元宝(1168)の存在から、少なくとも本土坑は12世紀後半以降の所産であることは間違いない。この隅丸方形の土坑については、全体的に鎌倉・室町期のものと考えてよいだろう。

なお、円形や楕円形の土坑からの出土遺物には、土師器や縄文土器があるがいずれも小破片ばかりであった。このなかで、D-72から出土した須恵器壺(第85図4)は完形であり、土坑内に遺棄されたものと考えられる。

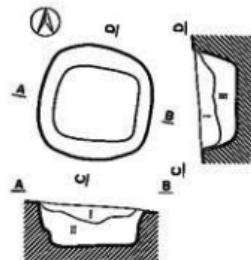
第34表 土坑の所産期

平安時代と考 えられる土坑	D-1 D-2 D-7 D-10 D-14 D-15 D-16 D-20 D-25 D-26 D-30
	D-33 D-38 D-40 D-43 D-46 D-58 D-59 D-62 D-71 D-72 D-161
中世と考えら れる土坑	D-5 D-17 D-19 D-21 D-154 D-155 D-156
	D-157 D-158 D-159 D-160 D-192 D-193 D-194
時期不明な土 坑	D-4 D-6 D-8 D-9 D-11 D-12 D-13 D-18 D-22 D-23 D-24 D-27 D-28 D-29 D-30 D-32 D-34 D-35 D-36 D-37 D-39 D-41 D-42 D-44 D-45 D-47 D-60 D-61 D-63 D-63 D-64 D-65 D-67 D-68 D-70 D-74 D-77 D-75 D-80 D-85 D-86 D-92 D-93 D-94 D-122 D-124 D-125 D-126 D-127 D-128 D-129 D-130 D-131 D-132 D-134 D-136 D-137 D-138 D-139 D-162 D-163 D-178 D-180 D-190

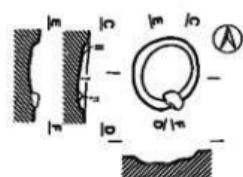
III 造構と遺物



D-1



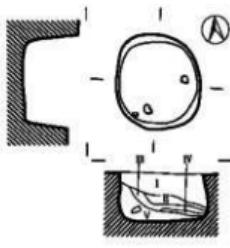
D-2



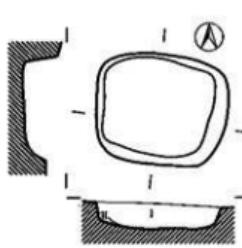
D-3



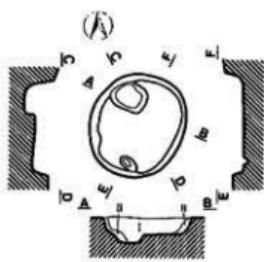
D-7



D-10



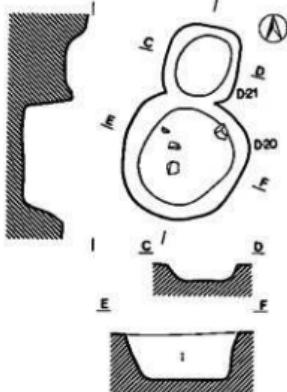
D-15



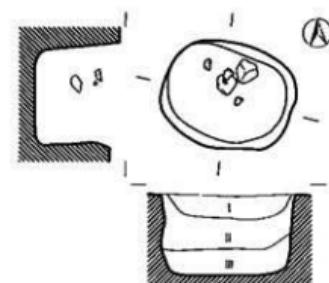
D-14



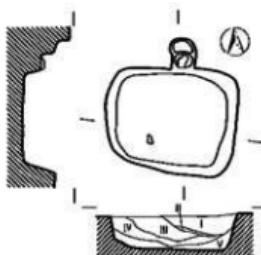
D-16



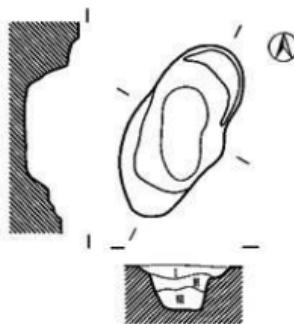
第75図 平安時代と考えられる土坑 (1 : 80)



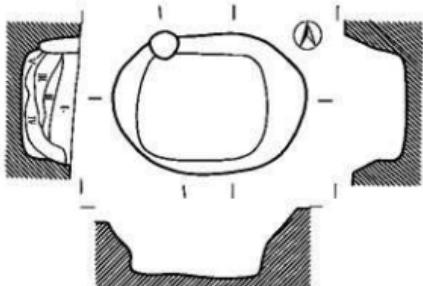
D-43



D-46



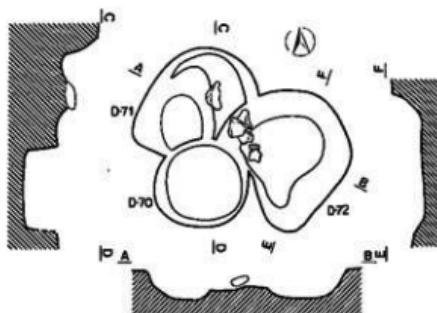
D-58



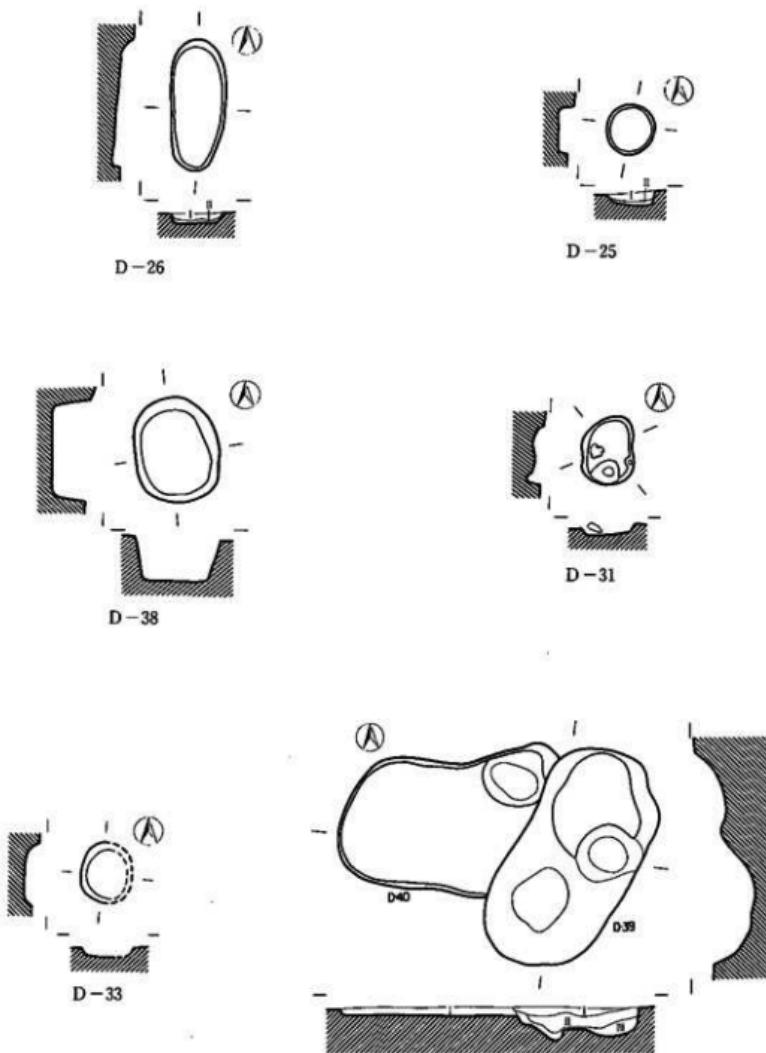
D-62



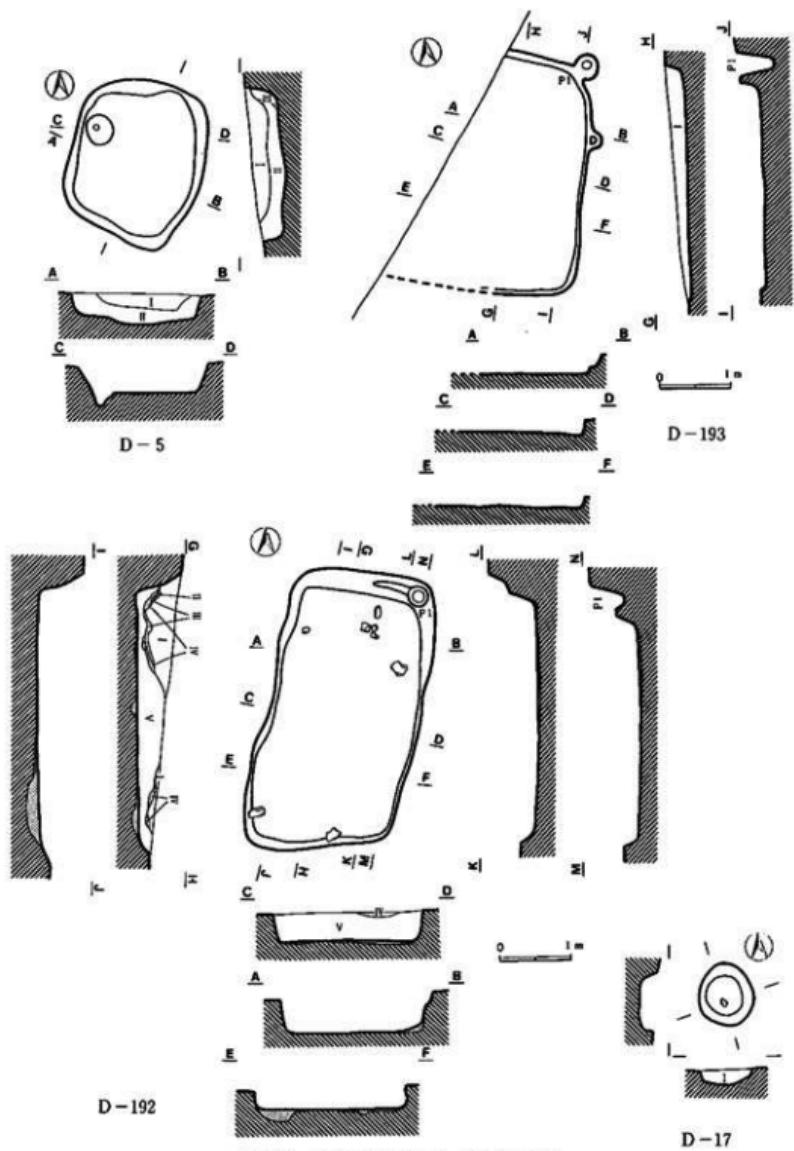
D-59



第76図 平安時代と考えられる土坑 (1 : 80)

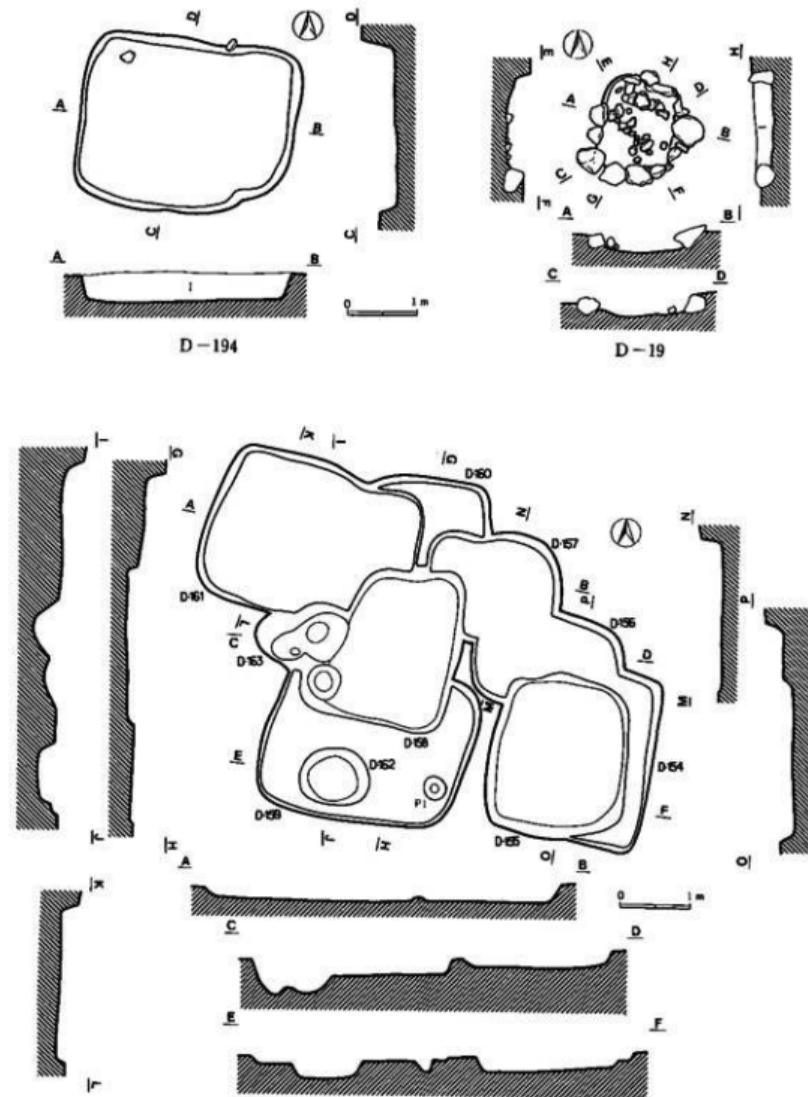


第77図 平安時代と考えられる土坑 (1 : 80)

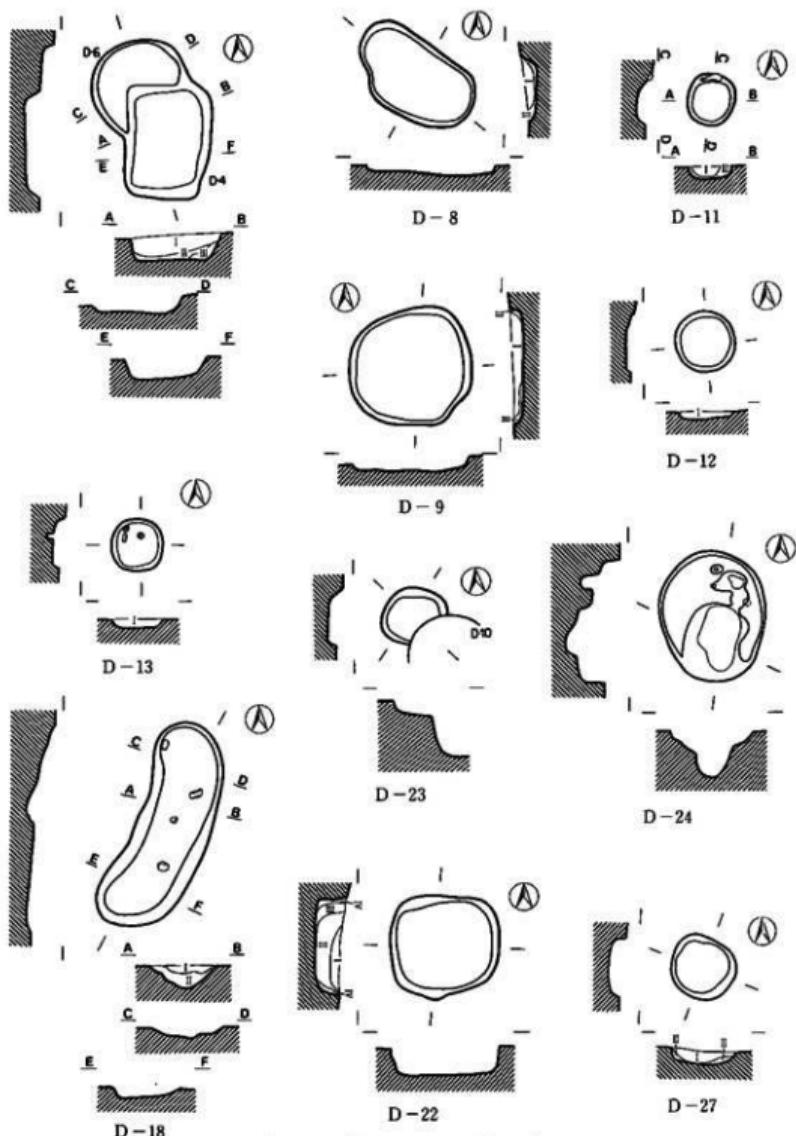


第78図 中世と考えられる土坑 (1 : 80)

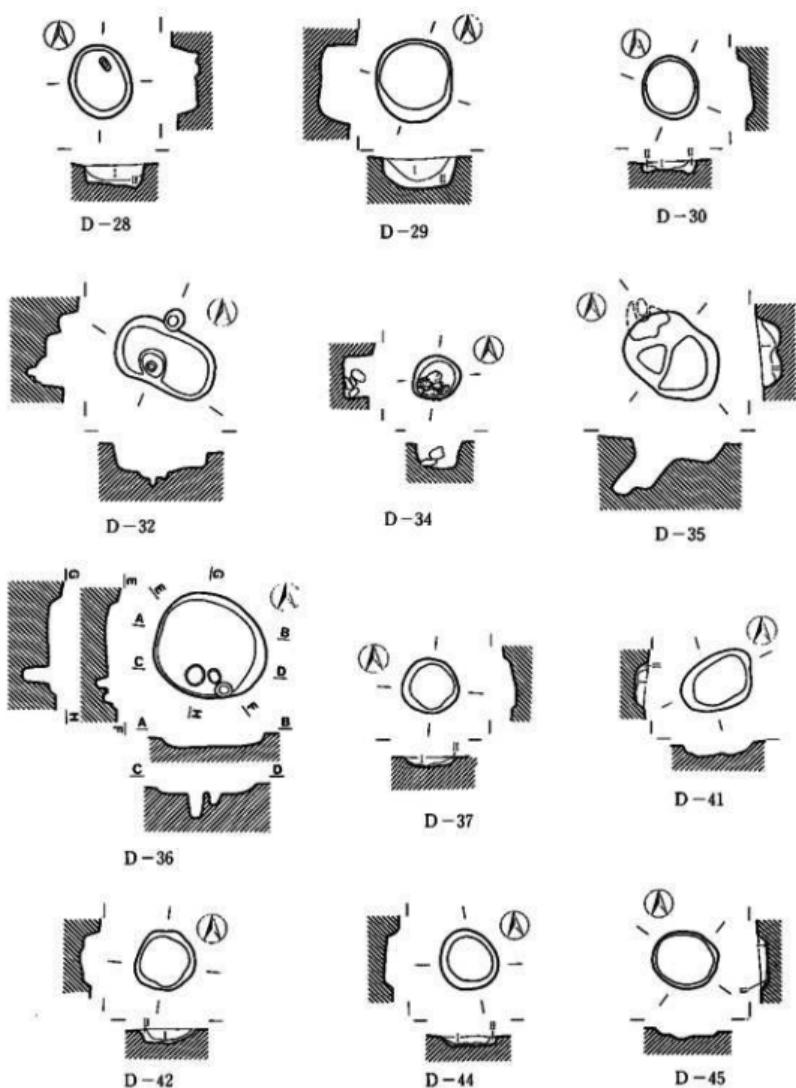
III 遺構と遺物



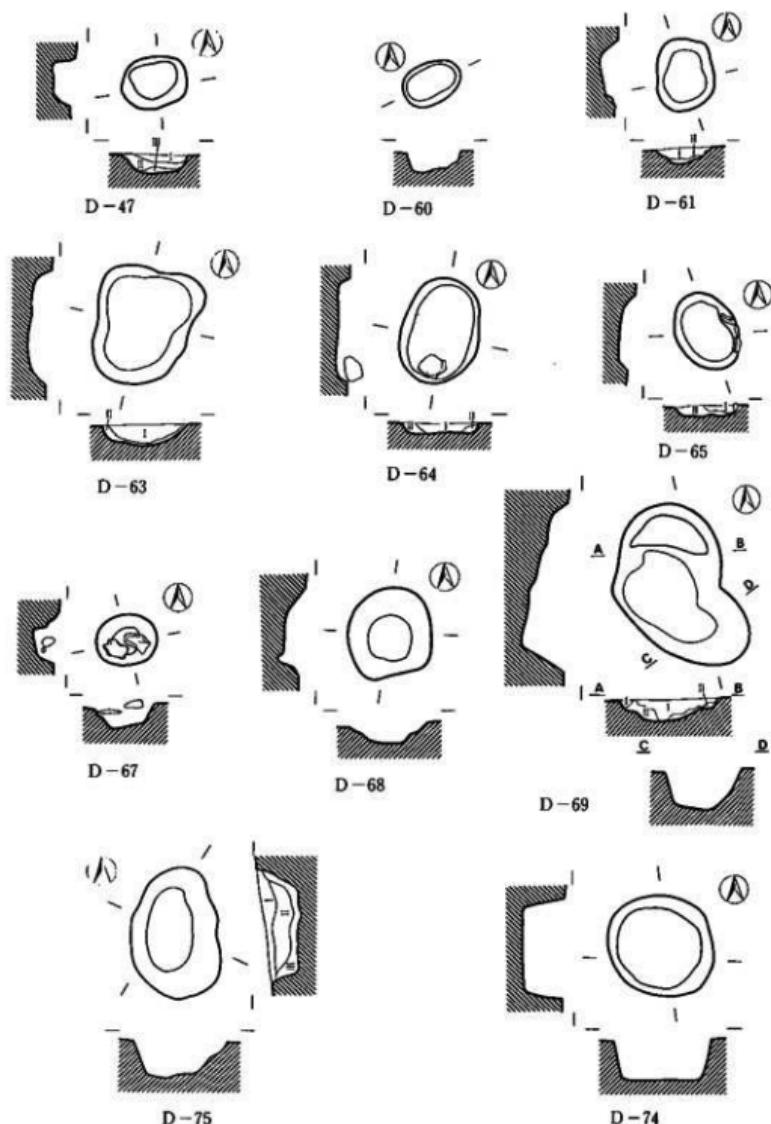
第79図 中世と考えられる土坑 (1 : 80)



第80図 所属期不明の土坑 (1 : 80)

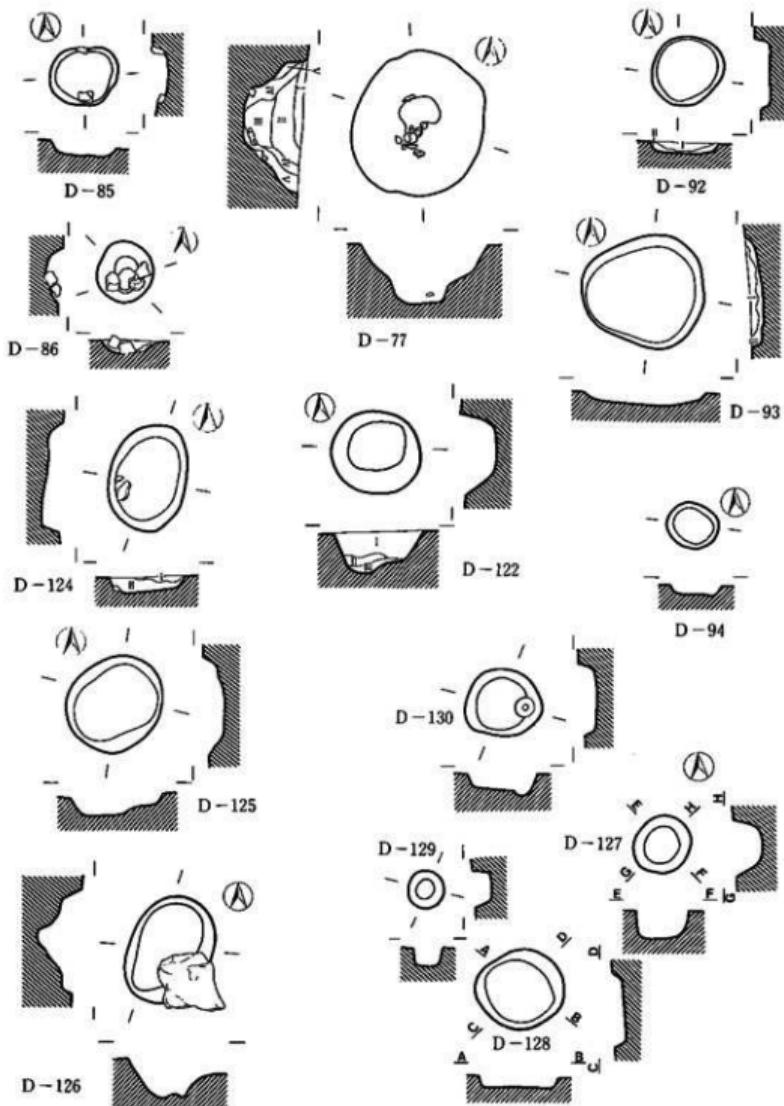


第81図 所属期不明の土坑 (1 : 80)

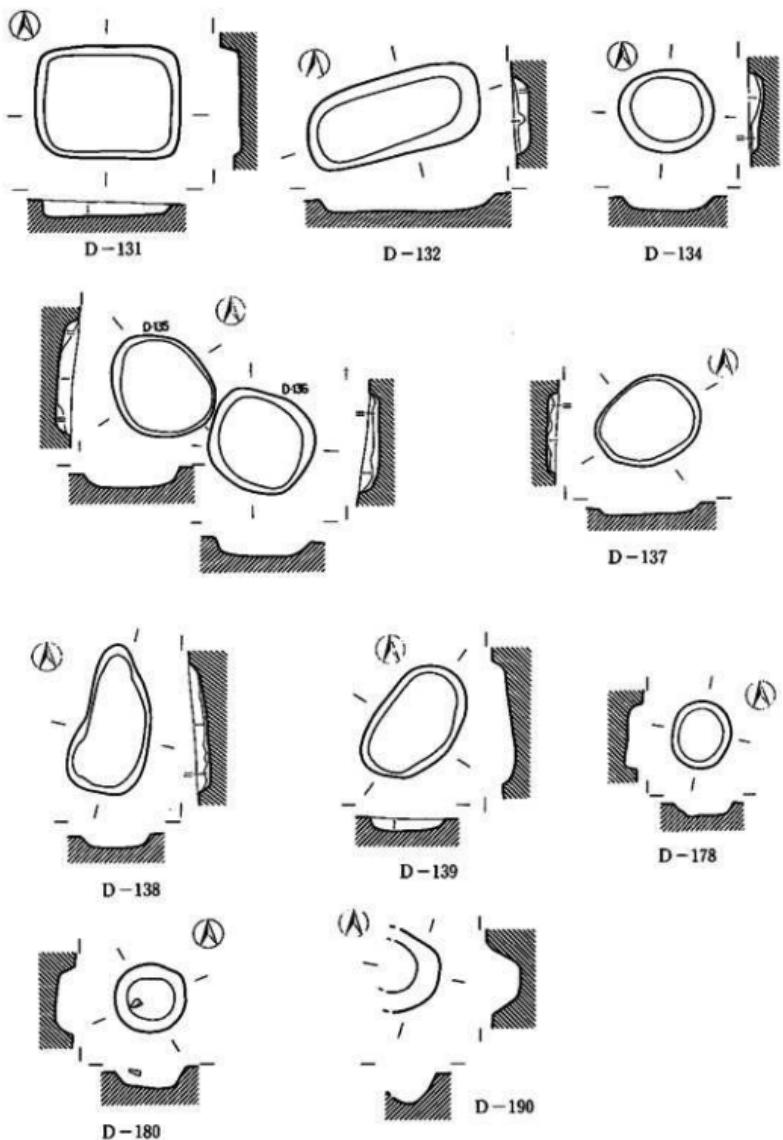


第82図 所属期不明の土坑 (1 : 80)

III 造構と遺物

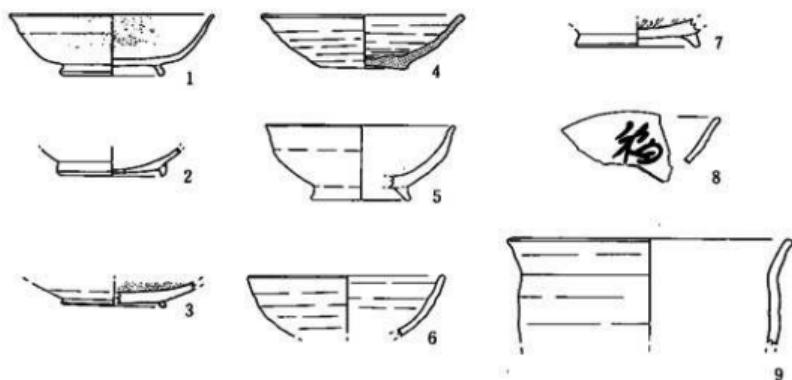


第83図 所属期不明の土坑 (1 : 80)



第84図 所属期不明の土坑 (1 : 80)

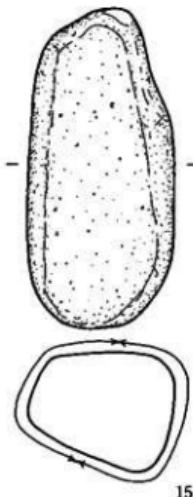
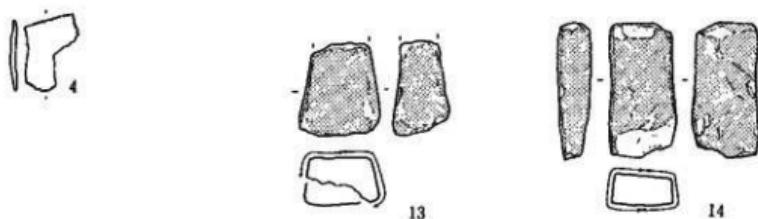
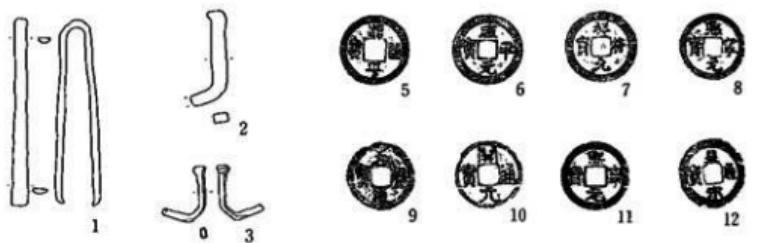
III 遺構と遺物



第85図 土坑出土遺物 (1 : 4)

第35表 土坑出土遺物一覧表〈土器〉

序 番 号	器 種	法 目	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (回) D-193	埴 (灰)	(14.2) 4.3 6.5	体部内凹。口縁部近く屈曲して外側。底部に三日月状の高台貼り付け。	内外面ロクロナナ。底部ナナ。内外底を駆き刷毛擦けによる施釉。	粘土は筋選され灰白色。 (7.5YR 7/1) 瓦窓・北ヶ丘1号窯式
2 (回) D-193	埴 (灰)	- (7.0)	底部に三日月状の高台貼り付け。	内外面ロクロナナ。底部ナナ。	粘土は筋選され灰白色。 (7.5YR 7/1) 瓦窓・光ヶ丘1号窯式差行窯
3 (回) D-38	埴 (灰)	- (7.2)	底部に三日月状の高台貼り付け	内外面ロクロナナ。底部ナナ。	粘土は筋選され灰白色。 (7.5YR 7/1)
4 (完) D-72	耳 (灰)	14.0 3.4 5.8	体部内凹。口縁部近く外反。底部平底。	内外面ロクロナナ。底部を切り。	粘土は砂粒を含み、灰色。 (10YR 6/1)
5 (回) D-194	高台环 (土)	(12.8) 5.3 (5.8)	体部は内凹して開き口縁部で外反する。	内外面ロクロナナ 底部ナナ。	粘土は砂粒を含み、にい青色。 (10YR 7/3)
6 (回) D-38	耳 (土)	(13.6) -	体部内凹。	内外面ロクロナナ。底部を切り。	粘土は砂粒を含み、黄褐色。 (10YR 5/6)
7 (回) D-62	高台环 (土)	- (5.6)	付け高台	外面ロクロナナ。底部を切り。 内面は黑色処理の後、丁寧なミガキ。	粘土は砂粒を含み、にい黄褐色。 (10YR 6/4)
8 (回) D-7	耳 (土)	- -	体部内凹 底の墨付	外面ロクロナナ。 内面は黑色処理の後、丁寧なミガキ。	粘土は砂粒を含み、にい黄褐色。 (10YR 6/4)
9 (回) D-43	耳 (土)	(9.8) -	口縁部は「く」の字状に屈曲し側面はすん製。 口縁部に最大径をもつ。	外面ロクロナナ。内面はナナ。	粘土は砂粒を含み、褐色。 (7.5YR 6/4)

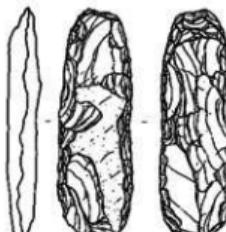


第86図 土坑出土の遺物
(5~12は1:2,
その他は1:3)

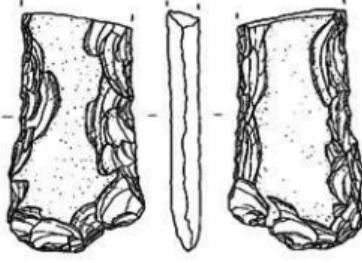
第36表 土坑出土遺物一覧表〈石器・鉄器・古銭〉

標題番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備 考
1	毛抜き	鉄	9.8	2.4	0.8	12	D-3出土
2	鉄器	鉄	(5.0)	(2.0)	0.5	(7.3)	D-192 出土
3	鉄器	鉄	3.0	2.2	0.5	2.2	D-192 出土
4	鉄器	鉄	4.2	2.8	0.3	4.2	D-158 出土
5	古銭	銅	2.45	2.45	0.15	3.0	D-155 出土
6	古銭	銅	2.48	2.45	0.12	3.0	D-155 出土
7	古銭	銅	2.50	2.48	0.12	3.0	D-155 出土
8	古銭	銅	2.35	2.34	0.14	2.8	D-155 出土
9	古銭	銅	2.37	2.40	0.15	2.5	D-158 出土
10	古銭	銅	2.40	2.37	0.11	2.2	D-193 出土
11	古銭	銅	2.40	2.39	0.15	3.5	F-8 グリッド出土
12	古銭	銅	2.42	2.41	0.13	3.5	F-8 グリッド出土
13	砥石	砂岩	(4.8)	4.3	3.0	(56.3)	D-193 出土
14	砥石	砂岩	7.2	3.6	1.7	(48.4)	D-7 出土
15	磨石	安山岩	17.0	7.8	6.4	1221.0	D-192 出土

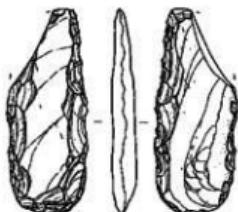
※ 単位はcm・g



28



29



30



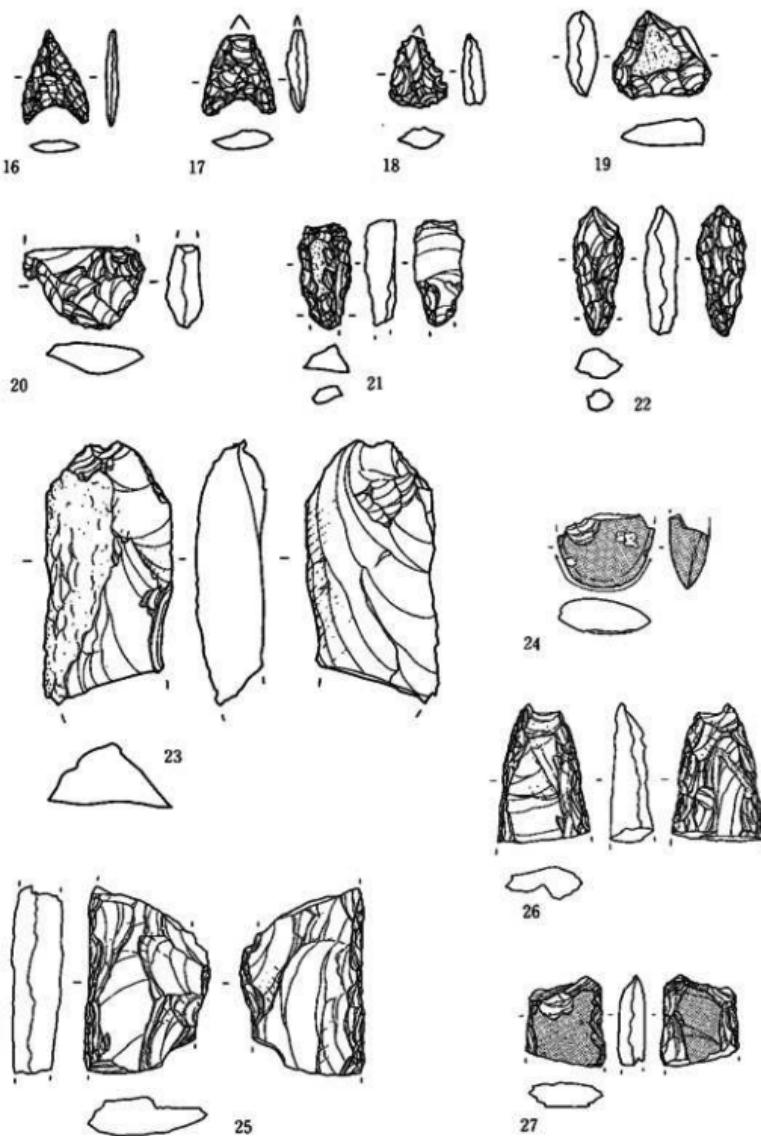
31

第37表 土坑出土遺物一覧表〈石器〉

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	石鏨	チャート	2.0	1.4	0.25	0.5	D-21出土
17	石鏨	黒曜石	(1.7)	1.6	0.4	(0.9)	D-39出土
18	石鏨	黒曜石	(1.6)	1.2	0.5	(0.8)	D-70出土
19	石鏨	黒曜石	1.9	2.1	0.6	2.3	D-24出土 未製品
20	石鏨	黒曜石	(1.8)	2.6	0.8	(2.8)	D-20出土 未製品
21	鏹	黒曜石	(2.3)	1.1	0.6	(1.6)	D-180 出土
22	鏹	黒曜石	2.8	1.1	0.7	1.9	D-24出土
23	加工を 有する削片	チャート	(5.7)	2.8	1.4	(22.3)	D-9 出土
24	打製石斧	ホルン フェルス	(3.9)	5.0	1.8	(35.4)	D-70出土
25	打製石斧	安山岩	(9.7)	6.5	2.7	(193.2)	D-43出土
26	打製石斧	安山岩	(7.2)	4.8	2.2	(70.2)	D-19出土
27	打製石斧	安山岩	(4.7)	4.1	1.3	(31.9)	D-18出土
28	打製石斧	ホルン フェルス	12.0	3.9	1.7	102.8	D-94出土
29	打製石斧	安山岩	(12.6)	7.2	1.5	(222.6)	D-155 出土
30	打製石斧	安山岩	10.9	4.2	1.2	(64.8)	D-24出土
31	打製石斧	安山岩	(7.5)	5.2	0.7	(33.1)	D-1 出土

※ 単位はcm・g

第87図 土坑出土遺物 (1 : 3)



第88図 土坑出土の遺物（6～22は4：5、22～23は1：3）

III 遺構と遺物

第38表 川原田遺跡 土坑 一覧表 (1)

遺構番号	規模(cm)			形態	積 土	遺物	その他
	長	幅	深				
D-1	190	90	15	楕円形	記載なし	土師甕2片 打斧1・剝片3	
D-2	160	160	60	隅丸方形	記載なし	土師甕6片 土師甕7片 縄文2片 剝片3	
D-3	100	90	10	円形	I層・黒褐色土層(10YR 2/3)ローム粒子をよく含む II層・褐色土層(10YR 4/4)ロームのブロック状堆積	土師甕1片 鉄金具1	
D-4	160	120	40	方形	記載なし	縄文1片	D-6と重複、新旧不明
D-5	220	190	40	不整円形	I層・黒褐色土層(10YR 3/2)ローム粒子が全体に混入する。埋土か? II層・褐色土層(10YR 3/3)ローム粒子が全体に多量に混入する。埋土か? III層・褐色土層(10YR 4/4)ロームがブロック状に混入する。埋土か?	土師甕6片 内耳鍋8片 剝片1	
D-6	130	130	15	円形	記載なし	縄文3片	D-4と重複、新旧不明
D-7	120	125	30	隅丸方形	I層・ローム粒子をよく含む黒褐色土層(埋土?) (10YR 2/3) II層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 3/4)	土師甕1片 縄文3片 磁石1 剝片1	
D-8	185	110	16	不整橢円	I層・ローム粒子をよく含む黒褐色土層(埋土?) (10YR 2/2) II層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 3/4)	縄文1片 剝片1	
D-9	170	165	18	不整円	I層・ローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR 2/3) おそらく埋土であろう。 II層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 3/4)	スクレイバー1	
D-10	135	115	80	円形	I層・ローム粒子を多量に含む褐色土層 (10YR 2/1) II層・ローム粒子を大層に含む黒褐色土層 (10YR 3/2) III層・ローム粒子を大層に含む褐色土層 (10YR 4/4) IV層・ローム粒子を大量に含む黒褐色土層 (10YR 3/2) V層・ローム粒子を大層に含む褐色土層 (10YR 4/6) I層～V層まで、いずれも埋土と考えられる。	土師甕2片 縄文2片	
D-11	75	65	10	円形	I層・ローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 2/3) II層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 3/4)		
D-12	85	80	10	円形	I層・ローム粒子をよく含む褐色土層(埋土?) (10YR 4/4)		
D-13	70	70	10	円形	I層・ローム粒子をよく含む褐色土層(埋土?) (10YR 4/4)		
D-14	150	130	30	円形	I層・ローム粒子を多量に含む褐色土層 (10YR 3/3) II層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 3/4)	土師甕1片 土師甕1片 碎片1	中央に小ピット

第39表 川原田遺跡 土坑 一覧表 <2>

遺構番号	規模(cm)			形態	覆 土	遺物	その他
	長	幅	深				
D-15	180	155	50	隅丸方形	I層・ローム粒子を含まない黒褐色土層(埋土?) (10YR 2/3) II層・ロームをブロック状に含む暗褐色土層 (10YR 3/3)(埋土?)	土師環2片 土師甕2片 縄文1片	
D-16	110	90	20	円形	I層・ローム小ブロックを含む暗褐色土層(埋土?) (10YR 3/3)	土師甕3片 縄文1片	
D-17	90	80	20	円形	I層・ローム粒子を若干含む黒色土層(埋土?) (10YR 1/1)	内耳鉢1片	
D-18	300	105	30	不整橢円	I層・ローム粒子を含む黒褐色土層(10YR 2/1) II層・ローム粒子をよく含むよい黄褐色土層 (10YR 4/3)	縄文1片 銅片1	
D-19	100	90	20	方形	I層・僅かにローム粒子を含み小砂利を多く含む黒褐色土層 (10YR 2/3)(埋土かどうか不明)	須恵甕1片	方形に石回いがなされる
D-20	180	170	60	円形	I層・ローム粒子が大量に混じる褐色土層 (10YR 4/6)(埋土)	土師環1片 土師甕3片 縄文10片 石器未成品1	D-20と重複
D-21	120	100	20	隅丸方形	記載なし	土師甕3片 磁器1片 石器1	D-21と重複
D-22	150	140	38	隅丸方形	I層・ローム粒子を多量に含む褐色土層 (10YR 4/4)(埋土) II層・ローム粒子を大量に含む褐色土層 (10YR 4/6)(埋土) III層・ローム粒子を多量に含む暗褐色土層 (10YR 3/3)(埋土) IV層・二次堆積黄褐色ローム層(10YR 5/6)		D-10と重複
D-23	95	80	20	円形	記載なし		
D-24	180	150	70	楕円形	記載なし	縄文数十片 石器未成品1 石器未成品1 銅片25点	
D-25	70	70	20	円形	I層・大量的ローム粒子によって構成される褐色土層 (10YR 4/6) II層・二次堆積黃褐色ローム層(10YR 5/8)	土師甕3片	
D-26	180	70	15	楕円形	I層・ローム粒子を多量に含む埋土によい黄褐色土層 (10YR 4/3) II層・大量的ローム粒子で構成される褐色土層 (10YR 4/6)	土師環1片 縄文3片	
D-27	90	86	18	円形	I層・ローム粒子をよく含む暗褐色土層(埋土?) (10YR 3/4) II層・ローム粒子を多量に含む褐色土層(10YR 4/4)		
D-28	104	85	30	円形	記載なし	縄文6片	
D-29	105	120	40	円形	I層・カーボンをよく含み、ローム粒子が若干入る黒褐色土層 (10YR 2/3)(埋土?) II層・大量的ローム粒子によって構成される褐色土層 (10YR 4/6)	縄文2片 銅片2	
D-30	85	75	20	円形	記載なし	縄文8片	
D-31	95	75	20	不整円形	記載なし	土師甕1片	

III 遺構と遺物

第40表 川原田遺跡 土坑 一覧表 (3)

遺構番号	規模(cm)			形態	覆土	遺物	その他
	長	幅	深				
D-32	145	85	60	楕円形	記載なし		小ピットが付属する
D-33	80	70	20	円形	記載なし	土師甕1片 網文3片	
D-34	70	60	40	円形	記載なし	網文9片	安山岩礫が入る
D-35	140	100	80	楕円形	I層・ロームがブロック状に入る暗褐色土層 (10YR 3/3) II層・ロームが大粒に入る暗褐色土層 (10YR 3/4)		
D-36	155	145	50	円形	記載なし	網文4片	小ピットが付属する
D-37	75	80	15	円形	I層・ローム粒子を若干含む暗褐色土層 (10YR 3/3) 球土? II層・大粒のローム粒子を含む暗褐色土層 (10YR 5/6)	剝片3	
D-38	150	115	60	楕円形	記載なし	土師甕20片 土師甕22片 灰釉陶器1片 須恵器1片	
D-39	330	172	30	不整楕円	I層・ローム粒子を若干含む黒褐色土層 (10YR 2/1) II層・ローム粒子をよく含む黒褐色土層 (10YR 3/2) III層・ローム粒子を多量に含む褐色土層 (10YR 4/4)	網文10片 石鐵1 剝片2	D-40と重複
D-40	170	110	15	不整楕円	I層・ローム粒子を多量に含む褐色土層 (10YR 4/4)	土師甕6片 土師甕1片 網文3片 剝片2	D-39と重複
D-41	110	80	15	不整楕円	I層・ローム粒子を多く含む黒褐色土層 (10YR 2/3) (球土?) II層・二次堆积黃褐色ローム層 (10YR 5/5)		
D-42	90	80	20	不整円	I層・ローム粒子を多く含む暗褐色土層 (10YR 3/3) II層・ロームをブロック状に多量に含む褐色土層 (10YR 4/6)		
D-43	180	155	10	楕円形	I層・ロームを小ブロック状に若干含む黒褐色土層 (10YR 2/3) (球土?) II層・ローム粒子を少く含む暗褐色土層 (10YR 3/4) (球土?) III層・ローム粒子を多量に含む褐色土層 (10YR 4/4)	土師甕20片 土師甕70片 網文10片 剝片1点	
D-44	90	80	15	円形	I層・ローム粒子を多く含む褐色土層 (10YR 4/6) II層・二次堆积黃褐色ローム層 (10YR 5/8)	剝片1点	
D-45	90	80	10	円形	I層・ローム粒子を大量に含む黃褐色土層 (10YR 5/8) II層・二次堆积明黄褐色ローム層 (10YR 6/8)		
D-46	185	150	50	隅丸方形	I層若干の褐色土を含むローム褐色土層 (10YR 4/6) II層ローム粒子を多量に含む黒褐色土層 (10YR 2/3) III層若干の褐色土を含むローム褐色土層 (10YR 4/6) IV層ローム粒子を多量に含む黒褐色土層 (10YR 2/3) V層若干の褐色土を含むローム褐色土層 (10YR 4/6) いずれも球土?と考えられる。	土師甕1片 土師甕4片 網文12片 剝片1点	
D-47	95	70	25	不整円形	I層・ローム粒子を多量に含む暗褐色土層 (10YR 5/8) (球土?) II層・ローム粒子を大量に含む明黄褐色土層 (10YR 6/8) (球土?) III層・二次堆积明黄褐色ローム層 (10YR 6/6)	網文3片	

第41表 川原田遺跡 土坑 一覧表 <4>

遺構番号	規模(cm)			形態	覆土	遺物	その他
	長	幅	深				
D-58	260	135	60	不整梢円	I層・ローム粒子や多く含む褐色土層(10YR 4/4) II層・ロームブロックを少量含む暗褐色土層 (10YR 3/3) III層・ローム粒子含む褐色土層(10YR 4/6)	土師壺6片 土師甕8片	
D-59	175	125	35	梢円形	I層・ローム粒子が少しある暗褐色土層 (10YR 3/4) II層・ロームブロックが混入する褐色土層 (10YR 4/6)	土師壺1片 網文1片	
D-60	85	60	30	梢円形	記載なし	網文10片	
D-61	100	80	25	不整梢円	I層・ロームをブロック状に少量含む暗褐色土層 (10YR 3/4) II層・ローム粒子をよく含む褐色土層(10YR 4/4)	網文6片	
D-62	270	140	75	梢円形	I層・ローム粒子を大量に含む褐色土層(10YR 5/6) II層・ローム粒子を多量に含む黒褐色土層(10YR 2/2) III層・ロームを大粒に含む褐色土層(10YR 4/4) IV層・ロームをブロック状に含む黑色土層(10YR 2/1) V層・ローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR 3/3) VI層・II層は樹土か?	土師壺4片 網文数十片 剝片1	
D-63	170	130	25	不整梢円	I層・ローム粒子を含む暗褐色土層(10YR 3/4) II層・ロームブロックを含む黃褐色土層(10YR 5/8)	土師壺1片 土師甕2片 網文6片	
D-64	150	110	15	梢円形	I層・ローム粒子をよく含む黄褐色土層 (10YR 4/3) II層・ロームを多量に含む黃褐色土層(10YR 5/6)		上部に安山岩礫あり
D-65	115	85	15	梢円形	I層・ローム粒子を若干含み、鐵土・炭化材をわずかに含む 褐色土層(10YR 4/4) II層・ローム粒子を多量に含む黄褐色土層 (10YR 5/6)	網文3片	安山岩礫あり 屋外の石扱い跡か?
D-67	80	70	30	円形	記載なし		安山岩礫あり
D-68	130	110	20	円形	記載なし		
D-69	245	150	30	不整梢円	記載なし	網文12片	
D-70	130	120	30	円形	記載なし	網文3片 石鐵1 磨製石斧1	D-71・D-72と重複
D-71	190	150	50	不整円形	記載なし	土師甕1片	D-70・D-72と重複
D-72	200	180	40	不整円形	記載なし	土師甕1点 須恵甕1片 網文7片 剝片1	D-70・D-71と重複
D-74	155	140	60	円形	記載なし	剝片2	M-10を切る
D-75	185	120	70	不整梢円	I層・パミスを含み、ローム粒子は含まない暗褐色土層 (10YR 3/3) II層・パミス、スコリアを多く含む黒褐色土層 (10YR 2/3) III層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 4/4)		

第42表 川原田遺跡 土坑 一覧表 (5)

遺構番号	規模(cm)			形態	私 土	遺物	その他
	長	幅	深				
D-77	200	180	80	円形	I層・ローム粒子をよく含む暗褐色土層 (10YR 3/4) II層・ローム粒子は含まず、若干のバミスを含む黒褐色土層 (10YR 3/2) III層・ローム粒子は含まず、若干のバミスを含む黒褐色土層 (10YR 3/2) IV層・ローム粒子を多量に含む暗褐色土層 (10YR 3/4) (埋土?) V層・ローム粒子を大量に含む褐色土層 (10YR 4/4) (埋土?)	縄文17片 剥片1	底面に擦が発生する
D-80	125	100	40	円形	I層・ローム粒子を多く含む褐色土層 (10YR 4/6) (埋土?) II層・ローム粒子を大量に含む黄褐色土層 (10YR 5/6) (埋土?)	縄文3片 剥片1	
D-85	95	80	15	円形	記載なし	縄文3片	安山岩礫あり
D-86	85	80	20	円形	I層・ローム粒子を含む黒褐色土層 (10YR 3/2)	縄文5片 剥片1	安山岩礫4個が入る
D-92	100	95	15	円形	I層・ロームをブロック状に少量含む暗褐色土層 (10YR 3/1) II層・ロームを大量に含むにい黄褐色土層 (10YR 4/3)	縄文3片 剥片1	
D-93	170	110	20	不整円形	I層・ローム粒子を若干含む黒色土層 (10YR 2/1) II層・ロームを大量に含むにい黄褐色土層 (10YR 4/3)	縄文1片	
D-94	70	60	15	円形	記載なし		
D-122	125	115	55	円形	I層・ロームを若干含む黒褐色土層 (10YR 2/2) II層・ロームをよく含む暗褐色土層 (10YR 3/3) III層・ロームを大量に含む褐色土層 (10YR 4/6)	縄文1片	
D-124	150	105	20	楕円形	I層・ローム粒子をまったく含まない暗褐色土層 (10YR 2/0) II層・ローム粒子を大量に含む黄褐色土層 (10YR 5/6)	縄文10片	安山岩礫が入る
D-125	140	170	20	楕円形	記載なし	縄文3片	
D-126	155	115	50	楕円形	記載なし	縄文3片	上部に瓦礫が散る
D-127	80	75	35	円形	記載なし		
D-128	125	115	10	円形	記載なし		
D-129	50	50	25	円形	記載なし		
D-130	110	95	30	円形	記載なし	剥片1	中央に小ビット
D-131	200	150	20	隅丸方形	I層・ローム粒子を多く含む暗褐色土層 (10YR 3/2)	縄文6片	
D-132	250	110	20	長楕円形	I層・若干のローム粒子を含む黒褐色土層 (10YR 2/3) II層・ローム粒子多量に含む、バミス若干含む暗褐色土層 (10YR 3/4)	剥片1	中央に小ビット
D-134	145	110	20	円形	I層・ローム粒子、バミス箇かに含む暗褐色土層 (10YR 3/2) II層・ローム粒子、バミス多量に含む褐色土層 (10YR 4/4)		
D-135	165	130	20	楕円形	I層・ローム粒子を若干含む黒褐色土層 (10YR 2/3) II層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 4/6)	縄文10片	
D-136	160	145	20	楕円形	I層・ローム粒子を若干含む黒褐色土層 (10YR 2/3) II層・ロームをブロック状に含む褐色土層 (10YR 4/6)	縄文1片	

第43表 川原田遺跡 土坑 一覧表 <6>

遺構番号	規模(cm)			形態	覆土	遺物	その他
	長	幅	深				
D-137	300	105	30	楕円形	I層・ローム粒子をよく含む黒褐色土層(10Y R2/1) II層・二次堆積ローム褐色土層(10Y R4/4)		
D-138	210	110	15	不整楕円	I層・若干のローム粒子を含む黒褐色土層(10Y R2/2) II層・ローム粒子を多量に含む褐色土層(10Y R4/4)		
D-139	180	110	20	楕円形	I層・ローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10Y R3/0)	剝片1	
D-154	200	250	10	隅丸方形	記載なし	土師環1片 土師甕1片 内耳鍋3片	
D-155	200	230	25	隅丸方形	記載なし	銅製品2点 北宋銭4枚	古銭=祥符元宝・咸平元宝 ・熙寧元宝・治平通宝
D-156	150	215	25	隅丸方形	記載なし		
D-157	160	200	30	隅丸方形	記載なし		
D-158	210	235	40	隅丸方形	記載なし	土師甕1片 古銭1枚	古銭は判読不能
D-159	240	280	15	隅丸方形	記載なし		
D-160	150	180	35	隅丸方形	記載なし	繩文10片 剝片3	
D-161	230	290	15	隅丸方形	記載なし	土師甕1片 焼成品1点 繩文9片	
D-162	80	100	30	楕円形	記載なし	繩文4片 磨石1	
D-163	-	-	50	楕円形	記載なし		
D-178	100	80	15	円形	記載なし		
D-180	100	100	25	円形	記載なし	繩文7片 石錐1・剝片1 黒曜石原石1	
D-190	115	-	-		記載なし		
D-192	400	220	60	隅丸方形	I層・ロームを若干含む暗褐色土層(10Y R3/4)埋土 II層・明赤褐色兼土層(5Y R5/8) III層・灰褐色灰層(10Y R4/1) IV層・灰を均一に含む黒褐色土層(10Y R2/3) V層・ローム粒子をよく含む暗褐色土層(10Y R5/6)埋土 VI層が埋められた後、そのくぼみにおいて火が焚かれてIV・III・II層が堆积し、そのうえにI層が埋められたものと考えられる。	土師甕2片 繩文8片 磨石1	
D-193	335	-	40	隅丸方形	I層・ロームを若干含む黑色土層(10Y R2/1)	土師環1片 土師甕10片 内耳鍋4片 繩文10片 砾石1	
D-194	300	250	40	隅丸方形	I層・ロームを大量に含む暗褐色土層(10Y R3/4)埋土	土師高台環2片 土師甕6片 繩文12片	

3 配 石

(1) S-1号配石 第89図

S-1号配石は、F-9グリッドにおいて検出された。

安山岩の大形礫12個が $1.5m \times 0.6m$ の範囲に配されたものである。配石内部からは砂岩の砥石2点が検出されている（第90図1・2）。

本遺構は、平安もしくは中世の所産と考えられる。

(2) S-2～4号配石 第89図

S-2～4号配石は、後述するK-1号区画内遺構群の一部に関連するものである。

S-2号配石は、K-1号区画内の南西コーナーに位置し、M-10号溝状遺構が途切れた部分に3mほど間隔を置いて配置された2個の配石である。双方の礫とも1mを越す安山岩の巨礫である。

S-3号配石は、M-8号溝状遺構の西溝2m東に位置し、およそ1mの範囲で9個の安山岩礫が集められたものである。

S-4号配石は、T-1号礎石建物址の北面の礎石に連なる列石で、18個の安山岩礫が認められるものである。

4 溝 状 遺 構

(1) M-1号溝状遺構

遺 構 第91図

M-1号溝状遺構は、D・E・F-13グリッドにおいて検出された東西に延びる長い溝状遺構で、J-15・J-47・J-49号住居を切って存在している。また、D-164・D-165とも重複をみせるがその新旧関係は不明である。また、M-12号溝状遺構が本号溝状遺構に直交し、一連のものであることが考えられる。

本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は25m程であり、その幅は50～80cm深さは20～110cmを測った。その下層には河川堆積物の砂層が認められ、水路としての機能をはたして

いたことがうかがえる。

遺物は、縄文中期土器片135片と剝片6点が出土している。

(2) M-2号溝状遺構

遺構 第91図

M-2号溝状遺構は、F・G・H-4グリッドにおいて検出された東西に延びる長い溝状遺構である。本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は20m程であり、その幅は70~120cm深さは20~30cmを測った。

遺物は、縄文中期土器片127片と打製石斧5点・剝片6点が出土している。

(3) M-3号溝状遺構

遺構 第91図

M-3号溝状遺構は、H・I-4グリッドにおいて検出された東西に延びる長い溝状遺構である。本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は10m程であり、その幅は100~230cm深さは20cmを測った。

遺物は、平安時代の土師器壺1片・鉄器1点・縄文中期土器片38片と打製石斧1点・剝片6点が出土している。

(4) M-4号溝状遺構

遺構 第91図

M-4号溝状遺構は、H・I・J・K-6・7グリッドにおいて検出された東西方向に延びる長い溝状遺構で、J-9号住居を切って存在している。本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は30m程であり、さらに東側の発掘区外に続いている。その幅は100~230cm深さは20cmを測った。

その土層堆積は、I層がローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR2/3)、II層がローム粒子をよく含む黒色土層(10YR2/1)、III層がローム粒子を大量に含む暗褐色土層(10YR3/3)、IV層がローム粒子を含まない黒色土層(10YR1.7/1)、V層がローム粒子を大量に含む褐色土層(10YR4/6)であり、水流堆積は認められなかった。その底面が平坦な部分もあり道の可能性も残るうし、区画溝として機能した可能性もある。

III 遺構と遺物

遺物は、平安時代の土師器坏1片・縄文中期土器片24片と剝片6点が出土している。

(5) M-5号溝状遺構

遺構 第91図

M-5号溝状遺構は、F・G・H・I-8グリッドにおいて検出された東西方向に延びる長い溝状遺構で、M-8号溝状遺構に切られて存在している。本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は40m程であり、その幅は80~170cm深さは20cmを測った。

その土層堆積は、I層がローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR2/2)、II層がロームをブロック状に含む暗褐色土層(10YR3/4)で、水流堆積は認められなかった。底面は平坦である。

遺物は、平安時代の土師器坏6片・土師器甕2片・灰釉陶器1片・縄文中期土器片184片と打製石斧1点・剝片8点が出土している。

(6) M-6号溝状遺構

遺構 第92図

M-6号溝状遺構は、F・G-7グリッドにおいて検出された東西方向に延びる長い溝状遺構で、D-24号土坑と重複するがその新旧関係は不明である。本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は20m程であり、その幅は30~50cm深さは30cmを測った。その一部は二又に分岐する。

その土層堆積は、I層がローム粒子を若干含む暗褐色土層(10YR3/3)、II層がローム粒子を大量に含む暗褐色土層(10YR3/4)で、水流堆積は認められなかった。

遺物は、内耳鍋5片・白磁1片・縄文中期土器片40片が出土している。

(7) M-7号溝状遺構

遺構 第92図

M-7号溝状遺構は、F・G-7グリッドにおいて検出された東西方向に延びる長い溝状遺構で、M-8号溝状遺構に切られて存在し、H-8号住居址と重複するがその新旧関係は不明である。本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は20m程であり、その幅は60~130cm深さは30cmを測った。

その土層堆積は、I層がローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR3/2)、II層がローム粒子をよ

く含む黒褐色土層(10YR2/3)、III層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR3/4)で、水流堆積は認められなかった。

なお、本溝状遺構はM-6号溝状遺構と2m程の間隔をおきながら並行しており、両者に挟まれた部分が道路で、両溝状遺構はその側溝であった可能性も考えられる。

遺物は、縄文中期土器片64片と剝片2点が出土している。

(8) M-8号溝状遺構

遺構 第92図

M-8号溝状遺構は、G-I-7~10グリッドにおいて検出されたコの字状に巡る溝状遺構で、M-5・7号溝状遺構・H-15号住居址を切って存在し、その東側の溝はM-10号溝状遺構に接している。その東側の溝が24m、北側の溝が18m、西側の溝が28mの長さを測る。その幅は80~110cm深さは10~40cmを測った。

その土層堆積は、I層がローム粒子を若干含む暗褐色土層(10YR3/3)、II層がローム粒子を多く含む黄褐色土層(10YR5/6)、III層はローム粒子をブロック状に含む褐色土層(10YR4/6)で、水流堆積は認められなかった。

なお、本溝状遺構はM-10号溝状遺構およびT-1号礎石建物址と有機的に関連しており、その点についてはK-1号区画内遺構群の項で触ることにする。

遺物は、平安時代の土師器壺22片・土師器甕34片・灰釉陶器1片・縄文中期土器片142片が出土している。

(9) M-9号溝状遺構

遺構

M-9号溝状遺構は、D-8・9グリッドにおいて検出された南北に延びる自然流路である。

遺物は、平安時代の土師器壺1片・土師器甕2片・須恵器壺1片・縄文中期土器片9片が出土している。

(10) M-10号溝状遺構

遺構 第92図

M-10号溝状遺構は、H-I-J-10グリッドにおいて検出された東西に延びる溝状遺構で、

III 遺構と遺物

D-74号土坑に切られて存在している。その長さは26mを測り、その幅は60~80cm深さは30cmを測った。

その土層堆積は、I層がローム粒子を若干含む暗褐色土層(10YR3/3)、II層がローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR2/3)で、水流堆積は認められなかった。

なお、本溝状遺構はM-8号溝状遺構およびT-1号礎石建物址と有機的に関連しており、その点についてはK-1号区画内遺構群の項で触ることにする。

遺物は、縄文中期土器片82片が出土している。

(11) M-11号溝状遺構

遺構 第92図

M-2号溝状遺構は、H-15・16グリッドにおいて検出された南北に延びる溝状遺構である。本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は15m程であり、その幅は70~100cm深さは20cmを測った。

遺物は、縄文中期土器片45片が出土している。

(12) M-12号溝状遺構

遺構

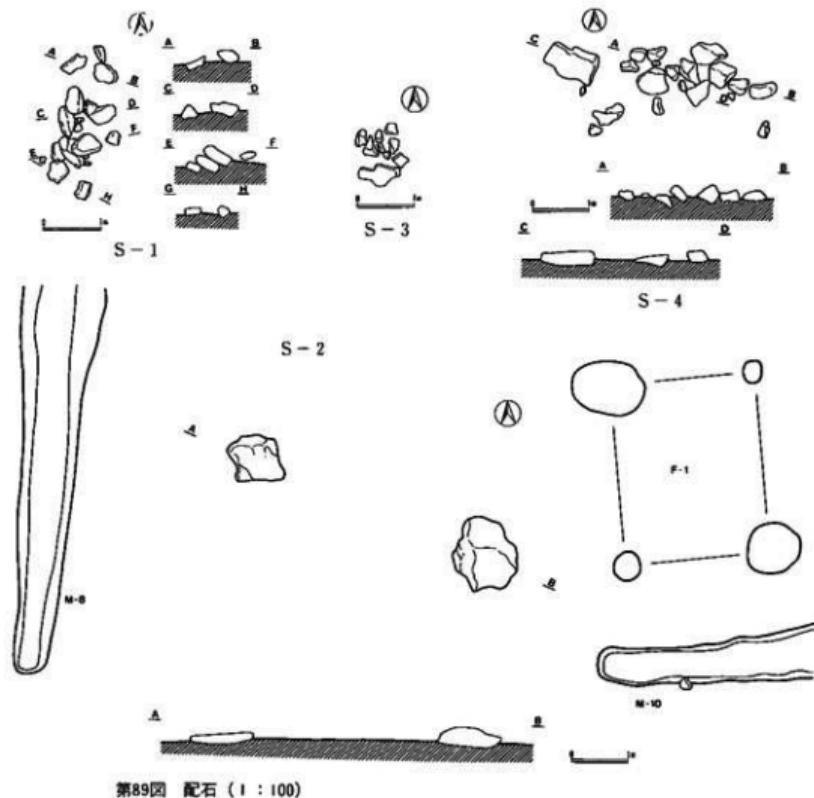
M-12号溝状遺構は、F-13グリッドにおいて検出された南北に延びる溝状遺構である。本溝状遺構は、M-1号溝状遺構に直交し、両者は一連のものであることが考えられる。発掘調査地区において検出された部分は5m程であり、その幅は40~60cm深さは20cmを測った。

遺物は、縄文中期土器片3片が出土している。

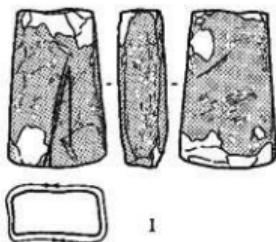
(13) 溝 状

遺構の時期

M-1号～M-12号溝状遺構の時期についてであるが、遺構から出土した遺物からは時期を決定し難い。重複関係からは、M-8号溝状遺構が平安時代のH-15号住居址を切って存在しており、少なくともその住居の所産期以降に位置付けられる。また、M-8号溝状遺構は、M-5・7号溝状遺構も切って存在しており、その両者はM-8号溝状遺構の所産期以降に位置付けられる。全体的には、M-1号～M-12号溝状遺構は、少なくとも平安時代以降の所産であろう。



第89図 配石 (1:100)



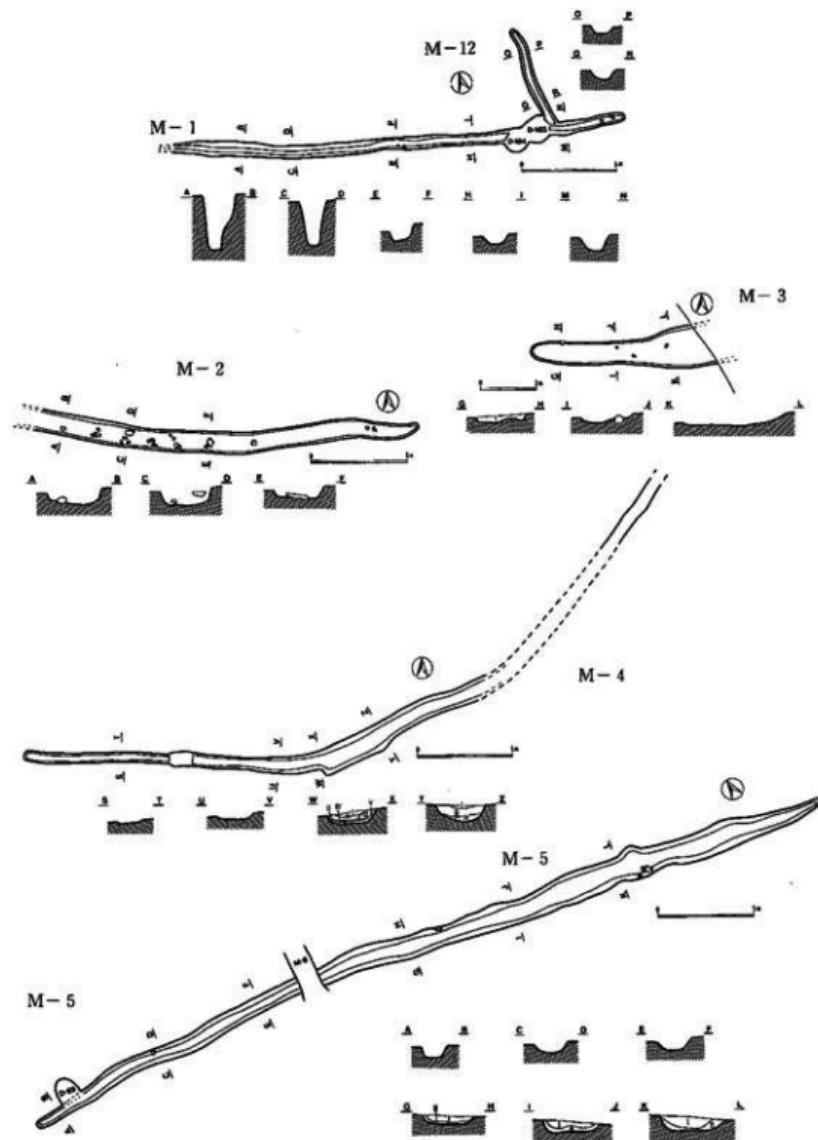
第90図 S-1号配石出土遺物 (1:3)

第44表 S-1号配石 出土遺物一覧表〈石器〉

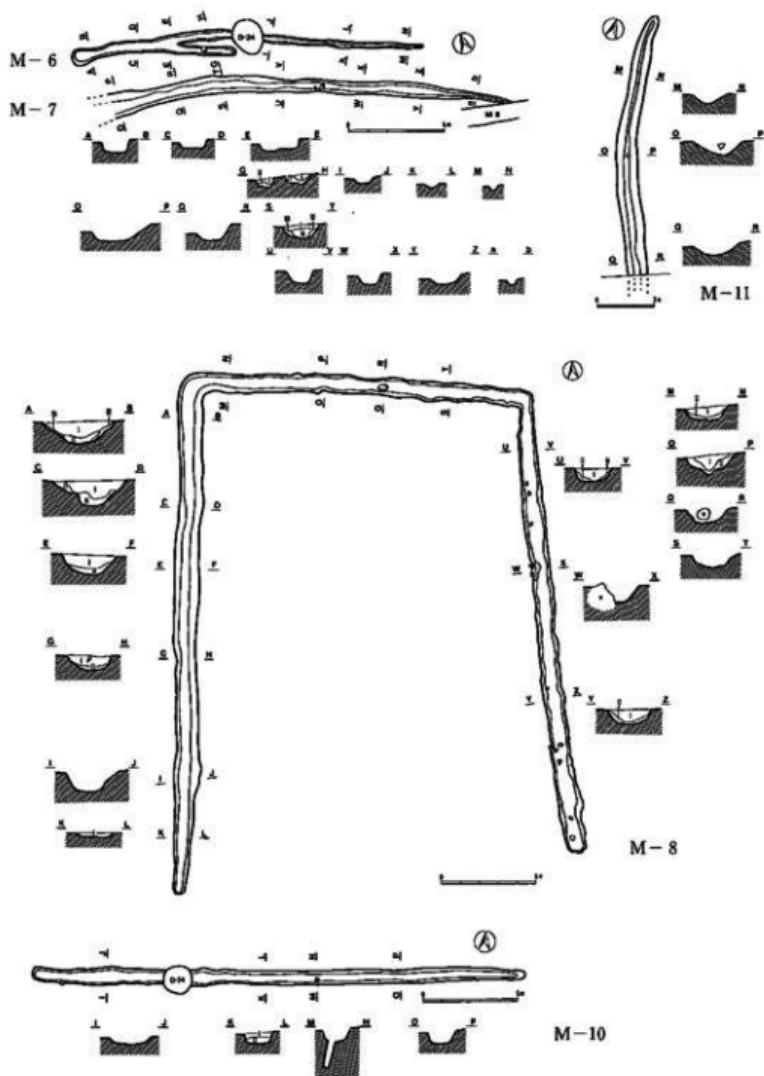
発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	砾石	砂岩	8.4	5.0	2.5	188.9	
2	砾石	砂岩	(4.5)	3.8	3.4	(87)	

※ 単位はcm・g

III 造構と遺物



第91図 溝状造構実測図 (平面図は 1 : 300・断面図は 1 : 120)



第92図 溝状造構実測図 (1 : 300)

5 K-1号区画内遺構群

(1) K-1号区画内遺構群

K-1号区画内遺構群

K-1号区画内遺構群は、G-I-7~10グリッドにおいて検出されたコの字状に巡るM-8号溝状遺構と、その東側が接するM-10号溝状遺構に区画された内部に認められる遺構群で、その配列性から、有機的関連が考えられるものである。M-8号溝状遺構・M-10号溝状遺構・F-1号掘立柱建物址・T-1号礎石建物址・S-2号配石・S-3号配石・S-4号配石から構成されている。また、T-1号礎石建物址の北に位置するD-70・D-71・D-72号土坑のいずれかも関連する可能性は残る。以下、その個々の遺構について述べ、全体をまとめる。

1 T-1号礎石建物址 第94図

T-1号礎石建物址は、コの字状に巡るM-8号溝状遺構のはば中央に位置し、M-8の西溝とは7m、東溝とは6.4m、南北の溝とは11mの距離を隔てている。石材には若干乱れが生じ配列性にやや欠けてみえるが、全体図第94図のスクリーントーン部分で示したプランの復元が可能であり、またその平坦面が上向きのものも目立つことから、礎石と判断した。石材は在地の安山岩である。

本建物址では20個程度の大形で扁平な礎石がその主體となり、これに中小形の礎が50個程度伴っている。間数は推定できないが、復元されるプランは $4.4 \times 4\text{ m}$ ほどの矩形となる。付近で瓦などがまったく検出されていないことから、板葺もしくは茅葺の建物が想定される。

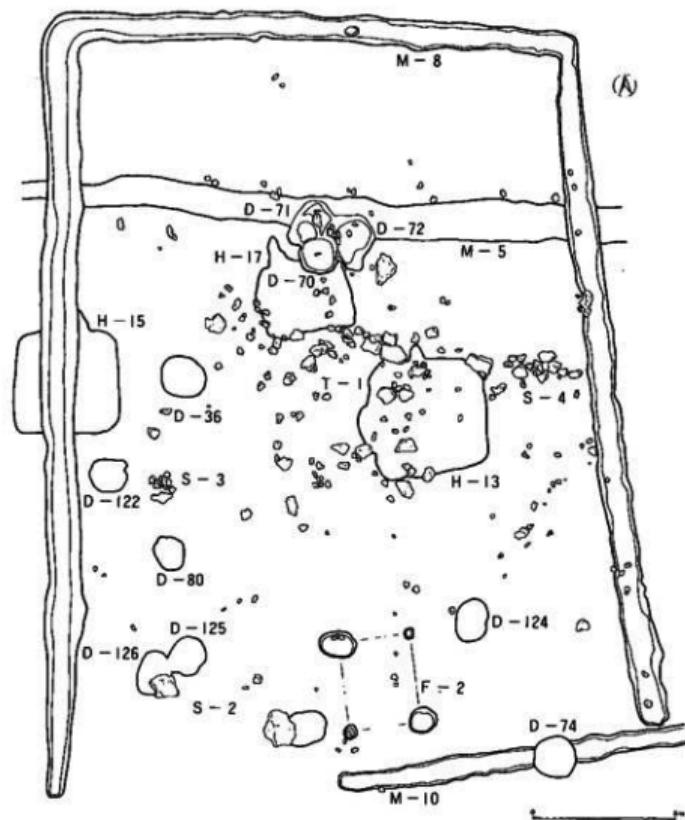
なお、本礎石の東側は、H-13号住居址の覆土最上面にあり、H-13号住居址が埋まりきった段階で配されていることが窺える。つまり本遺構は時期的には、H-13号住居址に後出することになる。

2 F-1号掘立柱建物址 第95図

F-1号掘立柱建物址は、M-10号溝状遺構に接して、H-10グリッドで検出された。

F-1は、1間×1間(3.2×2.6m)の矩形の掘立柱建物址である。柱痕は、30~35cm程度のものが4個のピットから検出された。

遺物の出土は認められない。



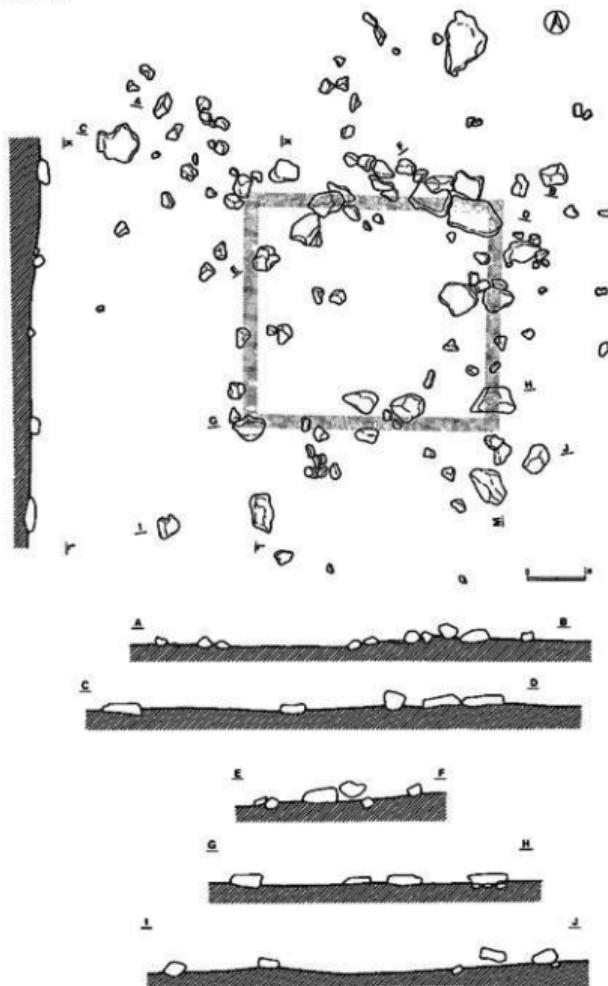
第93図 K-1号区画内遺構群 (1:200)

3 S-2号配石・S-3号配石・S-4号配石

S-2号配石は、K-1号区画内の南西コーナーに位置し、M-10号溝状遺構が途切れた部分に3mほど間隔を置いて配置された2個の配石である。双方の礎とも1mを越す安山岩の巨礎である。

S-3号配石は、M-8号溝状遺構の西溝2m東に位置し、およそ1mの範囲で9個の安山岩礎が集められたものである。

S-4号配石は、T-1号礎石建物址の北面の礎石に連なるの列石で、18個の安山岩礎が認め

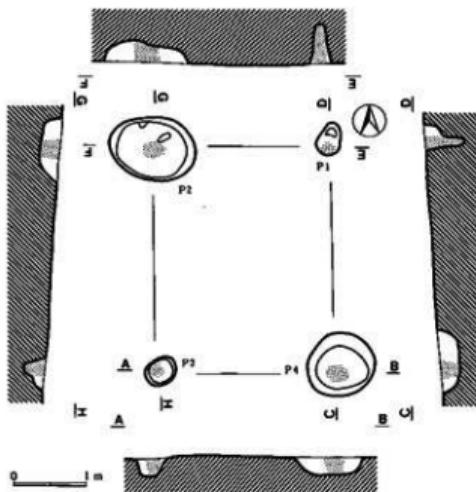


第94図 T-1号礫石建物址実測図 (1:100)

られるものである。

4 M-8号溝状遺構

M-8号溝状遺構は、G~I-7~10グリッドにおいて検出されたコの字状に巡る溝状遺構で、



第95図 F-1号堀立柱建物址実測図 (1:80)

M-5・7号溝状遺構・H-15号住居址を切って存在し、その東側の溝はM-10号溝状遺構に接している。その東側の溝が24m、北側の溝が18m、西側の溝が28mの長さを測る。その幅は80~110cm深さは10~40cmを測った。

その土層堆積は、I層がローム粒子を若干含む暗褐色土層(10YR3/3)、II層がローム粒子を多く含む黄褐色土層(10YR5/6)、III層はローム粒子をブロック状に含む褐色土層(10YR4/6)で、水流堆積は認められなかった。

遺物は、平安時代の土師器壺22片・土師器甕34片・灰釉陶器1片・縄文中期土器片142片が出土している。

5 M-10号溝状遺構

M-10号溝状遺構は、H・I・J-10グリッドにおいて検出された東西に延びる溝状遺構で、D-74号土坑に切られて存在している。その長さは26mを測り、その幅は60~80cm深さは30cmを測った。

その土層堆積は、I層がローム粒子を若干含む暗褐色土層(10YR3/3)、II層がローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR2/3)で、水流堆積は認められなかった。

遺物は、縄文中期土器片82片が出土している。

6 K-1号区画内遺構群の構造

以上、K-1号区画内遺構群を構成する個々の遺構について触れてきた。若干のまとめとして全体の構造について触れておく。

28m×18mの溝で区画された中央部に、4.4×4mの矩形の板葺もしくは茅葺の建物が存在していた。その区画の南側の半分は溝が切れており、入り口部と考えられ、2個の大石が左右に配されていた。また、その入り口の東隣には1間×1間の掘立柱建物址が存在していた。

時期的には、重複関係からH-13号住居址とH-15号住居址の所産期である10世紀初頭以降と考えられる。遺構群の時期を示す遺物は認められず、直接的な根拠はないが、10世紀以降の平安時代のものとみておくことが無難なところであろう。

遺構群の性格を示す遺物も認められず、その推定が困難であるが、平安集落の寺院との関わり合いの深さ、古刹真楽時などの近隣の宗教的環境などを考えあわせると、仏堂的な性格が先ず思い付く。さらに、考察部分においてその検討を進めたい。

IV

總 括

1 総 括

(1) 平安時代の土器様相

まず、川原田遺跡の19軒の平安時代住居から検出された土器群についての編年を組み立て、その様相を明らかにしたい。

編年の基準としたのは、住居間の時間的関係をふまえたうえでの、土器の組成・組列、主要器種の消長といった点である。

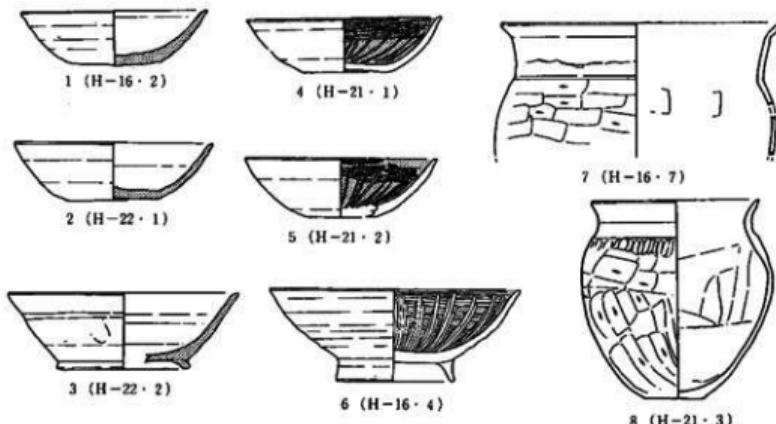
そのような視点に立脚したうえで、川原田遺跡の土器様相を3段階に区分することが可能となつた。

I 土器群の段階的把握

第1段階 第96図

資料が少なく、土器組成全般を示していないと考えられるので注意したいが、以下の概況を呈している。

まず、本段階では須恵器の壺(1・2)・高台付壺(3)を含んでいるが、須恵器は次の段階ではほぼ消滅すると考えられる器種である。同じく次の段階ではほぼ消滅すると考えられるコの字状



第96図 第1段階の土器 (1 : 4)

口縁で薄手の土師器甕=いわゆる武藏甕(7・8)もみられる。土師器坏(4・5)や高台付坏(6)では、内面黒色処理+ヘラミガキのものが普遍的にあるが、第II段階にみられる内面黒色処理のみのもの、第III段階のロクロ調整のまま内面黒色処理のなされないもの等は認められていない。

灰釉陶器は認められなかつたが、おそらく光ヶ丘1号窯式並行のものが伴うと考えられる。

第II段階 第97・98図

灰釉陶器は、東濃光ヶ丘1号窯式の皿(9・10)・塊(11・12・13)・小瓶(17)・長頸瓶(18)、尾北窯岡4号窯式の塊(15)、東濃大原2号窯式の塊(16)などが認められる。光ヶ丘段階のみでなく、大原2号窯式の灰釉陶器を含んでいることに注意したい。

土師器坏では、内面に暗文を有する反面ミガキが雑になるものが顕著になる(19・20)。土師器高台付坏では、高台部がハの字状に開き裾がやや長くなる傾向にある。

土師器甕では、非ロクロ調整のもの(27・29)とロクロ調整のもの(30~33)がある。前者は、逆八の字状の器形をみせ内面に刷毛目状調整をみせるものである(28・29)。ロクロ調整のものは小形甕(30・31)と、砲弾形を呈しいわゆる「北信型」といわれる長胴甕(32・33)が存在している。

羽釜はロクロ調整のもの(34・35)が存在する。

須恵器は本段階ではほぼ消滅すると考えられるが、わずかに坏(36)、甕(37・38)が認められている。

第III段階 第99・100図

灰釉陶器は、東濃光ヶ丘1号窯式の塊(39~42)、尾北窯岡4号窯式の塊(43)・皿(44)、東濃大原2号窯式の塊(45)などが認められる。

土師器坏では、前段階に比較し内面黒色処理のままミガキがなされないもの、内面ロクロ調整のまま黒色処理およびミガキのなされないもの(48~50)も目立つ。土師器高台付坏は、高台部がハの字状に開く裾のやや長いもので(52~54)、内面ロクロ調整のまま黒色処理およびミガキのなされないもの(54)もある。また、55は特殊な器形と考えられるが鉢である。

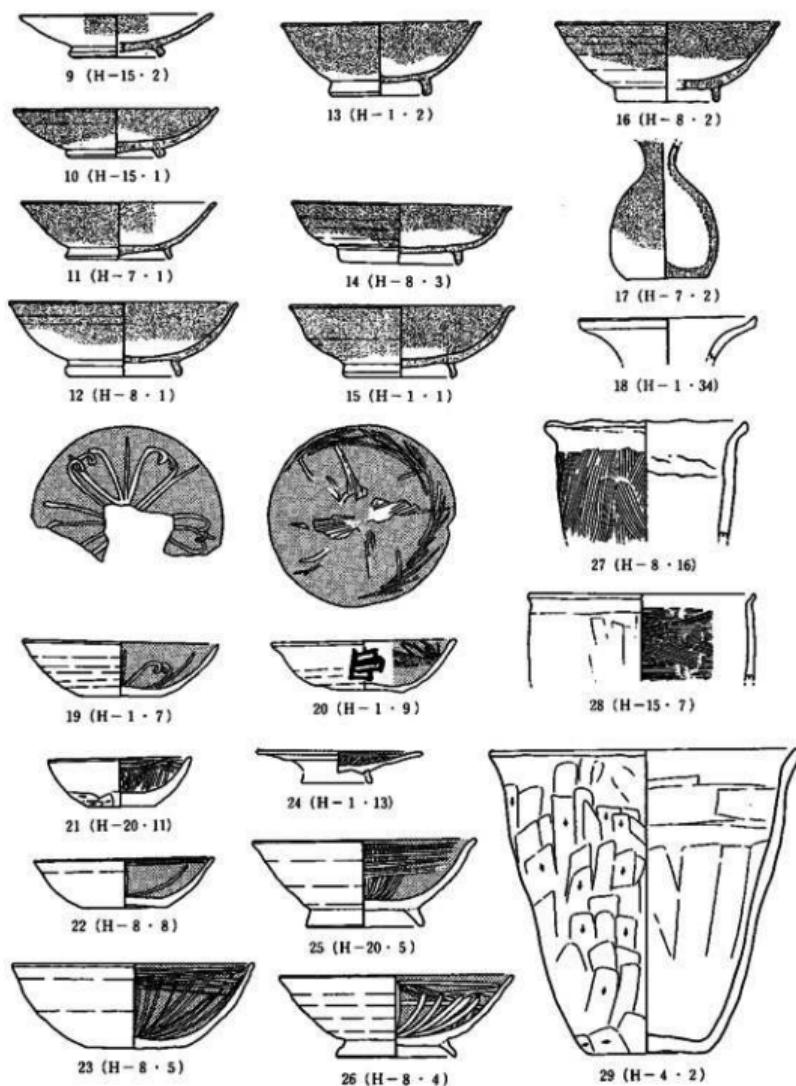
土師器甕では、非ロクロ調整のもの(58・59)とロクロ調整のもの(56・57)がある。非ロクロ調整のものでは、前段階に認められた逆八の字状の器形をみせ内面に刷毛目状調整をみせるものもある(59)。また、非ロクロ調整の長胴の鉢があり(60・61)、61は片口を有している。

羽釜はロクロ調整のもの(62)である。

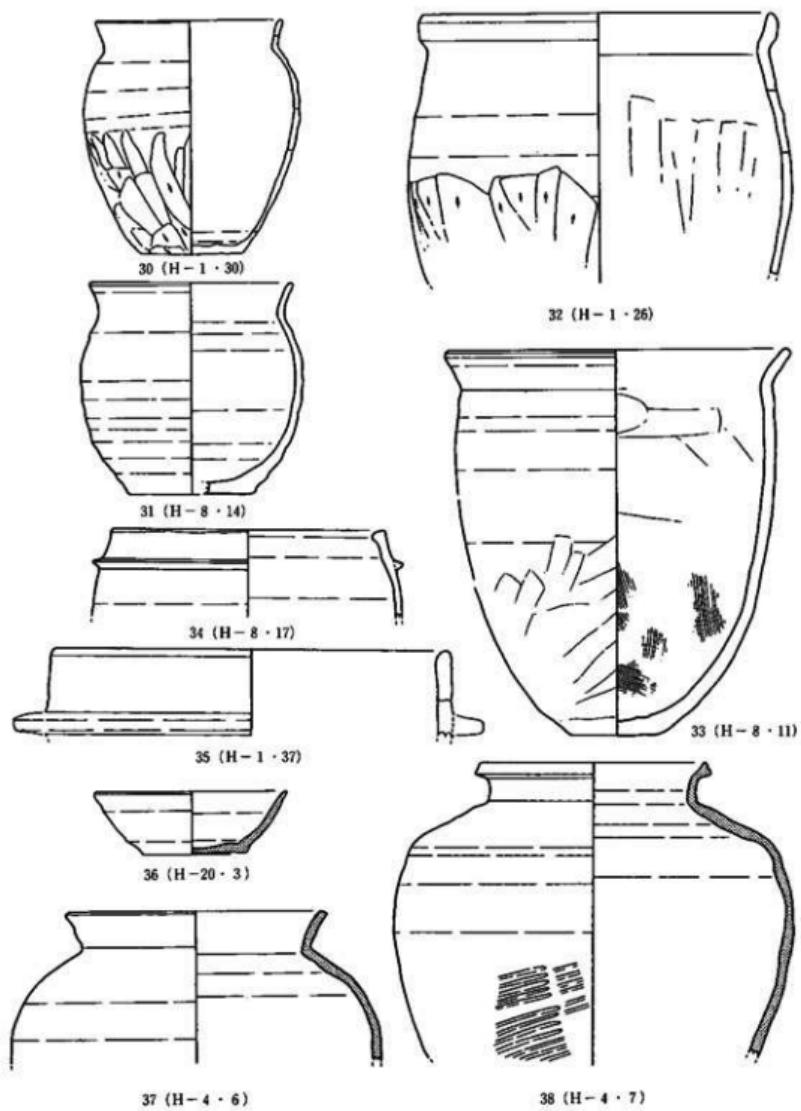
須恵器は前段階では認められなくなるが、わずかに残存した甕(63)がある。

2 土器様相の時間的把握

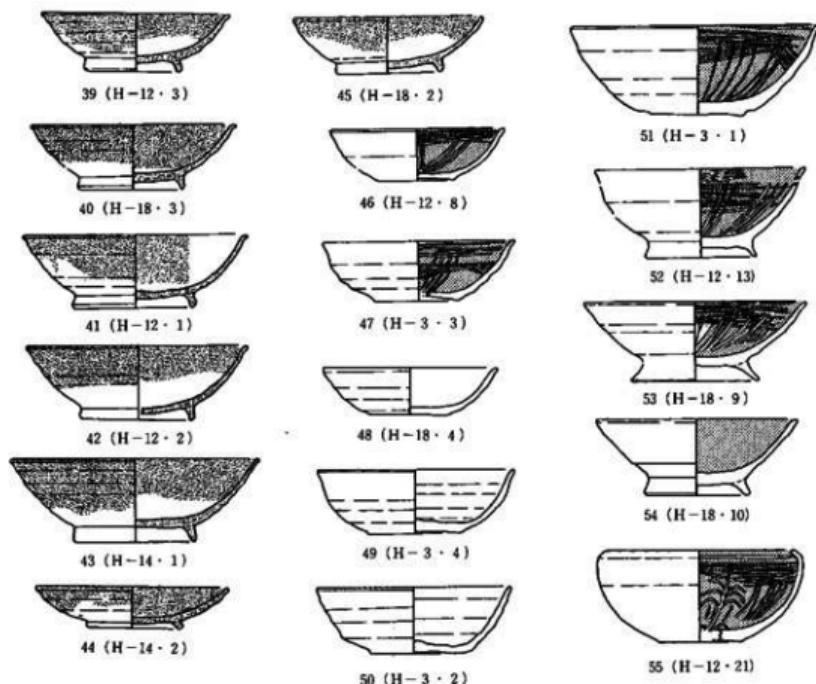
以上、川原田遺跡の土器様相の段階について概説した。次に、それら時間的位置付けについて若干触れておく。



第97図 第II段階の土器① (1 : 4)



第98図 第II段階の土器② (1 : 4)

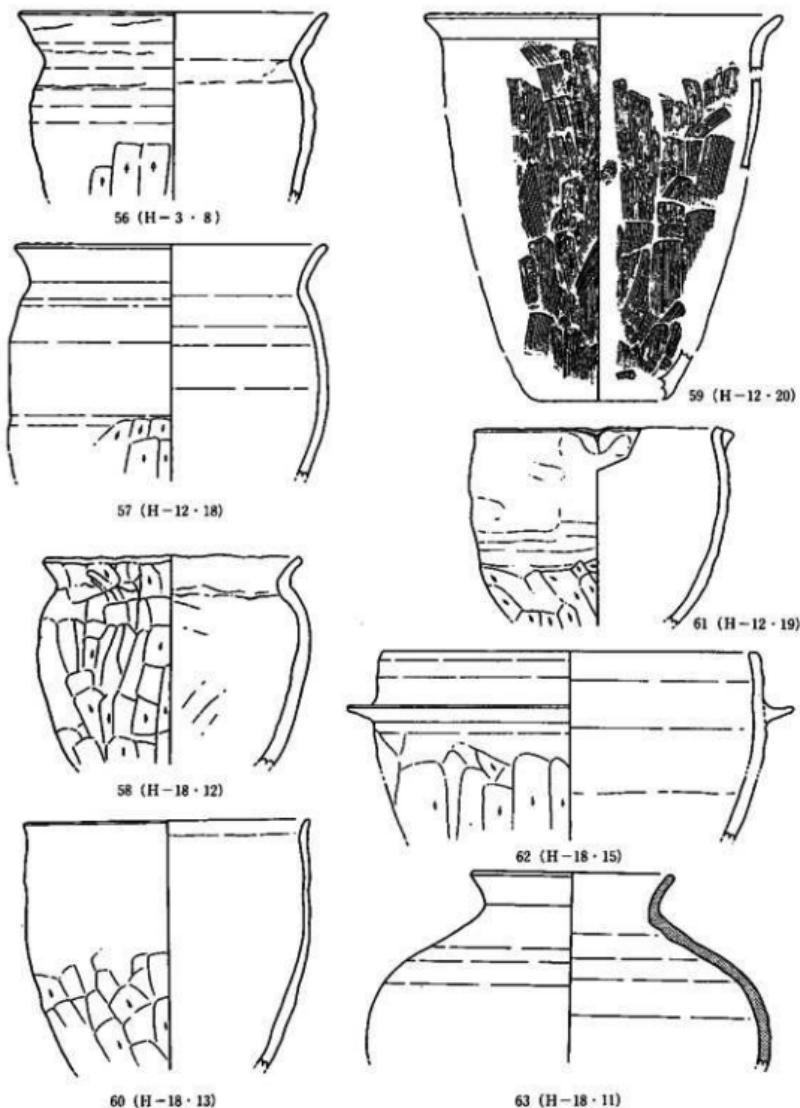


第99図 第III段階の土器① (1 : 4)

時間的位置付けは、推定年代の出されている他遺跡との様相比較や、時間幅を考慮したうえでの灰釉陶器の年代などを手掛かりとして、推定した。

まず、川原田遺跡第I段階であるが、資料が少なくその位置付けは難しいが、御代田町鎌師屋遺跡群根岸遺跡の第IV段階（堤1989）と並行させて考えることができる。この段階において根岸遺跡では光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器と餽益神寶（859年）が共伴している。したがってこの段階の一部は、少なくとも859年を過らない年代が与えられる。加えて光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器については前川の年代観（前川1984）により九世紀後半の年代を考えておくなら、本段階を九世紀末葉（初頭・前葉・後葉・末葉の四期区分の場合において）と位置付けることが可能である。

統いて川原田遺跡第II段階は、第I段階に継続する段階であり、継続した年代を考慮すること



第100図 第III段階の土器② (1 : 4)

が妥当である。この段階では東濃光ヶ丘1号窯式・尾北篠岡4号窯 第45表 川原田遺跡の時期区分式・東濃大原2号窯式の灰釉陶器が共伴している。本段階は、十世紀初頭の位置付けを考えておきたい。なお、本段階の並行期には根岸遺跡の第V段階があげられる。

川原田遺跡第III段階は、第II段階に継続する段階であるが、土器様相には大幅な変化は認められない。本段階でも前段階と同様、東濃光ヶ丘1号窯式・尾北篠岡4号窯式・東濃大原2号窯式の灰釉陶器が共伴している。本段階については、十世紀前葉の位置付けを考えておきたい。

以上を整理するなら、第45表のような編年的理解ができる。

年代	時期	段階	遺構
9世紀末葉	第一期	第一段階	H-5 H-11 H-13 H-16 H-17
10世紀初頭	第二期	第二段階	H-1 H-15 H-4 H-19 H-6 H-7 H-8
10世紀前葉	第三期	第三段階	H-2 H-14 H-3 H-18 H-9 H-10 H-12

(2) 川原田遺跡の特殊遺物

1 特殊遺物

川原田遺跡においては、いくつかの特殊遺物が検出されている。灰釉陶器の底部を利用した転用硯5点や朱墨転用硯3点、灯明に用いられた土師器壺8点、鉄鉢様の土師器鉢1点、青銅製の火熨斗1点や「大内寺」の墨書き土器2点・「大平寺」の墨書き土器1点などである(第101図)。

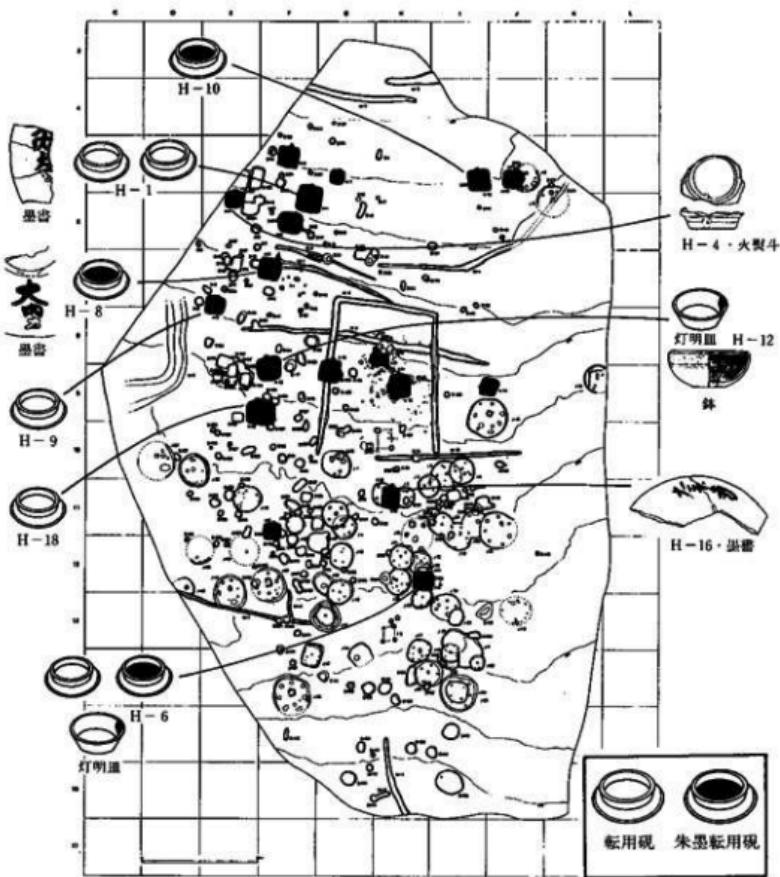
2 火熨斗

さきの特殊遺物なかで、火熨斗について若干ふれておきたい。

火熨斗は、柄杓状の形態を呈するもので、皿部分と柄の部分からなっている。本遺跡の青銅製火熨斗は、縁部を欠く皿部分のみで、全体に歪んでおり、柄の部分のあり方は不明である。底部径は8cmである。

さて、火熨斗は、柄杓状の形態を呈するもので、皿部分と柄の部分からなっている。機能的には今日でいうアイロンのことであり、その皿の中に炭火を入れ、平坦な底部に伝わる熱で布のしわ伸ばしをおこなったものと考えられている。ただ、移動用の灯・行灯などの説もあるといわれ(毛利光1991)、大阪府高井田山古墳で発見された火熨斗にはその皿部分に燃えたより糸が残っていることから埋葬時の灯明に用いられたとも伝えられており(読売新聞1991. 4. 4)、アイロンとしての主たる機能のほかに、灯明用という二義的な機能を問々はたしたものと想定される。

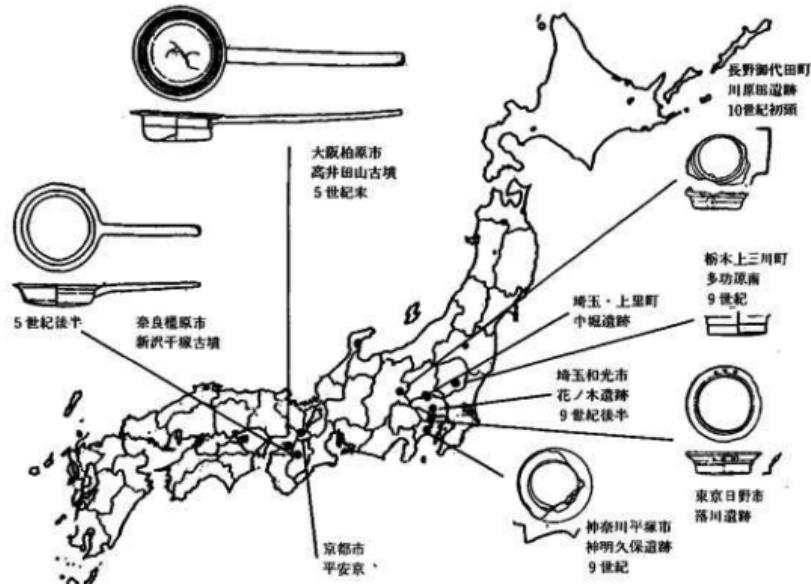
火熨斗の系譜については、朝鮮や中国に求められるというが、国内の出土事例については、西井幸雄氏のご教示にもよるなら、現在までに本例も含め9例が確認される(第102図)。これらのうち古墳時代5世紀後半のものが2例、平安時代9世紀のものが2例、10世紀前半のものが1例



第101図 川原田遺跡の特殊遺物の分布

(本遺跡)、それ以外は時期不明である。

いずれにせよこのように事例の少ない火鉢斗が、本遺跡で出土したこと、本集落の一部特殊性を物語っている。



第102図 国内における火熨斗の出土事例(9例)

(3) 川原田遺跡の文字資料から

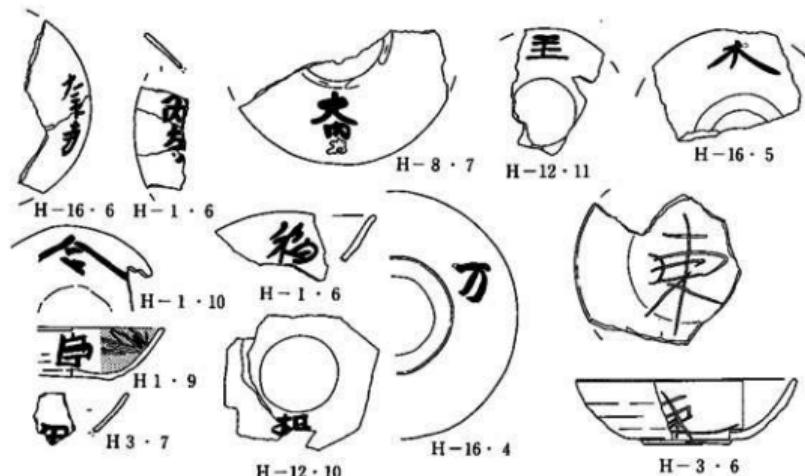
川原田遺跡の19軒の平安時代住居からは、24点の墨書き土器と1点の刻書き土器が出土している(第103図)。この全点については、国立歴史民俗博物館平川南教授に判読をお願いし、第46表のような記載のご報告をいただいた。

このうち、文字種の推定されたものは、万・福・物・合・木・大平寺・大内寺・東(刻書)などである。ここで大平寺・大内寺についてみてみよう。大平寺は9世紀末葉の土器、大内寺は10世紀末葉の土器に書かれた墨書きである。それぞれの時期において、大平寺・大内寺なる寺院がいずれかに存在し、それぞれに帰属するのが各墨書き土器であったのだろうか。ところで、佐久地方に最初に寺院名がみえるのは、日本三代実録で貞觀8年(866年)に定額寺となつた「妙楽寺」であり、これ以外の寺院名は知られていない。双方の土器の示す大平寺・大内寺が遺跡の近隣もしくは佐久地方にあったかどうかの確証はないが、妙楽寺が存在したのとほぼ同じ頃に中央の文献にみえないこれら寺院が存在したことが明らかになった。なお、この調査の終了当時にあっては、K-1号区画内遺構群が、大平寺あるいは大内寺のいずれかに相当する寺院遺構ではないかと考えてみた。しかし、土器様相をふまえ遺跡の段階的変遷を追うと、K-1号区画内遺構群が登場

第46表 文字資料とその訳文

No.	土器名	器 形	部 位	訳 文	出土地点	備 考	No.	土器名	器 形	部 位	訳 文	出土地点	備 考
1	土師器	环	体部外・横位	大内寺	H-1	第13回6	12	土師器	—	—	□	—	団なし
2	土師器	环	体部外・正位	合	n	第13回10	13	土師器	环	体部外・正位	■	H-12	第52回11
3	土師器	环	体部外・正位	參(三)?	n	第13回9	14	土師器	环	体部外・達位	△、水、△、△	n	第52回10
4	土師器	环	体部外・正位	物	n	第14回25	15	土師器	环	体部外・正位	木	H-16	第64回5
5	土師器	环	体部外・正位	國	n	—	16	土師器	高台环	体部外・横位	万、口	n	第64回4
6	土師器	环	体部外	吉口	n	—	17	土師器	环	体部外・横位	大平寺	n	第64回6
7	土師器	环	体部外・外正	東、東	H-3	ヘラ書き	18	土師器	环	体部外	茎痕あり	H-18	团なし
8	土師器	环	体部外・正位	口(田)?	n	第22回7	19	土師器	环	—	□	n	团なし
9	土師器	环	体部外	墨痕あり	n	—	20	土師器	环	体部外・正位	ノ	H-19	团なし
10	土師器	环	体部外	墨痕あり	H-5	团なし	21	土師器	环	体部外・正位	福	D-7	第85回8
11	土師器	环	体部外・横位	大内寺	H-8	第39回7	22	土師器	—	—	万	H-8回7	团なし

東 平川南教授の判読による



第103図 川原田遺跡の文字資料

するのは、大平寺・大内寺の墨書の存在する段階以降ということになってズレが生じ、それらの並行対比が困難になった。

付記するが、本遺跡より4km南の鍋師屋遺跡群前田遺跡（佐久市分）では、平川教授の判読による「長倉寺」の墨書が認められており、本遺跡と同様な幻の地方寺院の存在が明らかにされている。長倉は延喜式記載の佐久郡内の御牧名でもあり、また現在でも軽井沢の大字名として残っており、古代の長倉地域もこれと重なる部分は当然あろうと想定されることから、浅間山麓のいずれかの場所にこの「長倉寺」が存在した可能性はきわめて高いと考えられる。

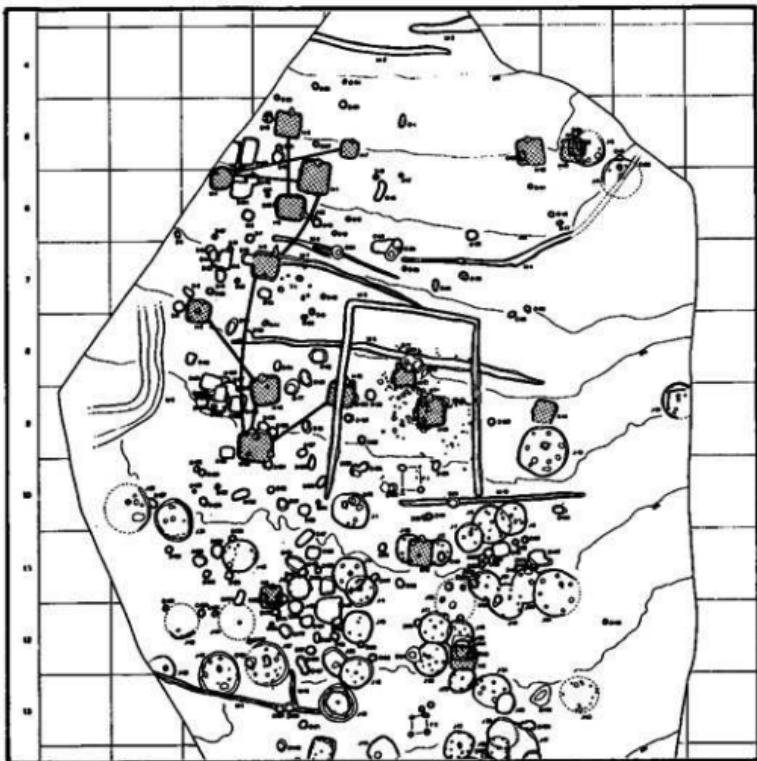
このような事例から、これまでその存在を知られていなかつたいくつかの地方寺院の存在も、今後徐々に明らかになるのであろう。

(4) 平安時代の集落

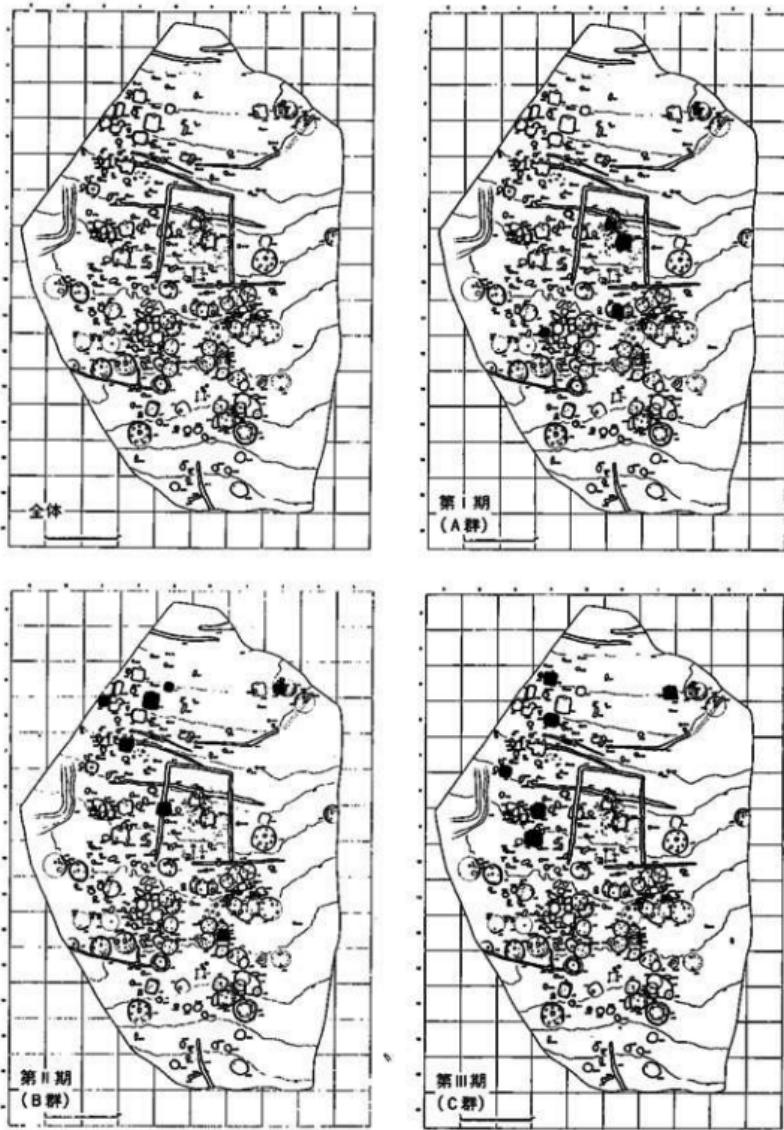
川原田遺跡の19軒の平安時代住居は、何軒かの集合をもって集落を形成し、その集落も継続的な変遷をもったことが推定される。

住居から出土する土器は、住居内に遺棄された場合にあってはその住居の時期を示すが、住居内に廃棄された場合は住居と同時期あるいは住居廃絶以後のより新しいものである可能性がある。したがって、住居の時期決定についてはこの点を注意しなければならない。

第104図は、住居間の土器接合を示している。住居間接合は、住居間の同時性もしくは継続性、関連性を示すものであるが、川原田ではことに北西の住居群において認められる。第105図は、さきの3段階の各土器群の出土を、住居ごとに色分けしたものである。第Ⅰ期の土器群を出土した



第104図 住居址間の土器接合



第105図 出土土器の所属期と住居分布

住居は5軒（A群）、第II期の土器群を出土した住居は7軒（B群）、第III期の土器群を出土した住居は7軒（C群）ある。土器様相の段階が即集落の段階を示すものではないが、およそ5軒程度の住居からなる集落が、9世紀末から10世紀にかけての半世紀程度、建てかえを経ながら継続して存在したとみるておくことに大過あるまい。なお、それらに付随する土坑は確実に存在するが、時期を特定するには至っていない。

さて、土器群の段階変遷に即した遺構の変化を概観すると、まずA群ではいずれも北カマドであるのに対し、B群では北カマドを主として一部東北コーナーあるいは東南コーナーのカマドがみられ、C群では東南コーナーのカマドのほか北あるいは西カマドが散見されるという、カマドの位置の変化が窺える。一方住居の大きさや柱穴の配置については、その変遷のなかで目立った変化は認められないようである。

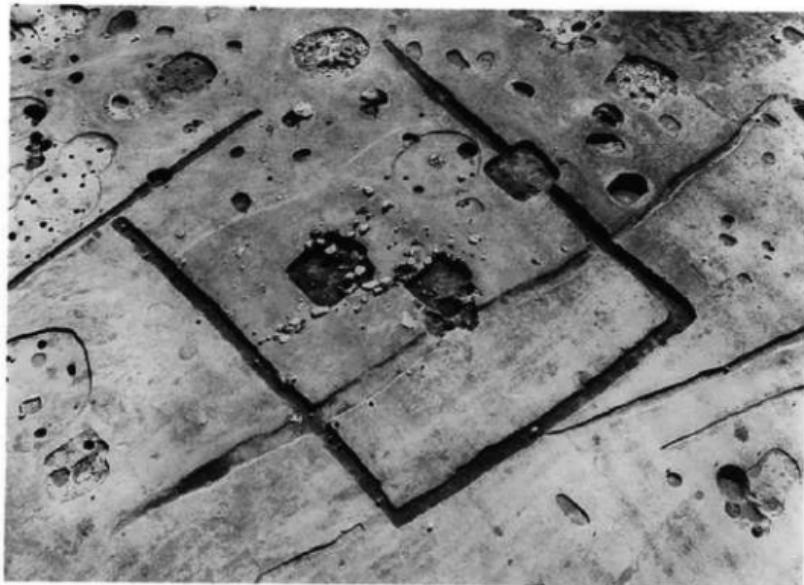
ところでK-1号区画内遺構群と集落との対応が気掛かりである。まず、第I期の土器群を出土したH-13・H-17号住居、第II期の土器群を出土したH-15号住居は、いずれもK-1号区画内遺構群の一遺構に切られて存在しており、すくなくともK-1号区画内遺構群が第II期の土器群の時期以降に出現したことは明らかである。したがって、K-1と集落との並存の可能性は、第III期の土器群（十世紀前葉）を出土した住居のC群とに絞られる。

（5）川原田遺跡の歴史的性格

I 平安集落の歴史的性格

川原田遺跡においては、5軒程度の住居から構成される集落が、9世紀末から10世紀にかけての半世紀程度継続して存在したとみておくことが可能となった。そしてこの集落からは、大内寺・大平寺の墨書き土器が検出されているが、これは集落の住人とそれぞれの寺院の結び付きを表わしているものと思われる。

ところで、川原田遺跡に隣接する古刹真楽寺は、比較的古い時期に創建された寺院と考えられる。真楽寺は一時、現在より深く浅間山中に分け入り、通称上寺場とか下寺場とかいわれる場所に変遷したとの伝承もあるが、現在のそれ自身の構造（占地や建物の古さ）から考えても、本堂は現在の場所にあったと考えておくことがより妥当であろう。さて、現在真楽寺境内に残る文化財のなかで最も古く位置付けられるのは、仁王尊であり室町時代応永2年（1395）の建立である。この段階において仁王尊を建立するだけの隆盛をきわめた真楽寺であるので、少なくともその創建はさらに遅ること必至であろう。他方で隣接する本川原田遺跡において別名の寺院とはいえ、寺院との結び付きを表わす資料が検出されたことは重要であろう。いずれにしても当該地においては10世紀代に寺院と関連する宗教的環境がそなわっていたと理解されるのである。このことを



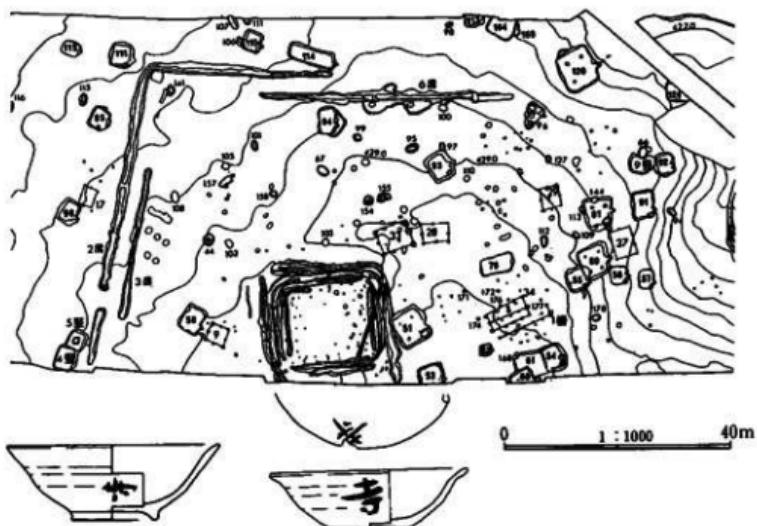
第106図 K-1号区画内遺構群

ふまた解釈をおこなうなら、真楽寺は10世紀代においては隣接した川原田集落を取り込むかたちで、存在していたと考えたい。加えて、この集落に居住していたのは、その僧侶や使用人とみることも可能である。そして、大平寺・大内寺などは真楽寺に関連の深い寺院で、その交流を物語るのが2種の墨書き土器とみることができないだろうか。

2 K-1号区画内遺構群の性格

K-1号区画内遺構群は、G-I-7~10グリッドにおいて検出されたコの字状に巡るM-8号溝状遺構と、その東側が接するM-10号溝状遺構に区画された内部に認められる遺構群で、その配列性からその有機的関連が考えられ、M-8号溝状遺構・M-10号溝状遺構・F-1号掘立柱建物址・T-1号礎石建物址・S-2号配石・S-3号配石・S-4号配石から構成されている。

このうちT-1号礎石建物址は、コの字状に巡るM-8号溝状遺構のほぼ中央に位置し、M-8の西溝とは7m、東溝とは6.4m、南北の溝とは11mの距離を隔てている。礎石には若干乱れが生じ配列性にやや欠けてみえるが、全体図第94図のスクリーントーン部分で示したプランの復元



第107図 群馬県戸神源訪遺跡の寺院跡「宮田寺」？（群馬県埋蔵文化財調査事業団1991）

が可能で $4.4 \times 4\text{ m}$ ほどの矩形となる。礎石は20個程度の大形で扁平なものがその主体となり、これに中小形の礎が50個程度伴っている。付近で瓦などがまったく検出されていないことから、板葺もしくは茅葺の建物が想定される。

全体を概観すると、 $28\text{ m} \times 18\text{ m}$ の溝で区画された中央部に、 $4.4 \times 4\text{ m}$ の矩形の板葺もしくは茅葺の建物（T-1）が存在していた。その区画の南側の半分は溝が切れており、入り口部と考えられ、2個の大石が左右に配されていた。また、その入り口の東隣には1間×1間の掘立柱建物址（F-1）が存在していた。

本遺構群は、時期的には、重複関係からH-15号住居址の所産期である10世紀初頭以降と考えられる。遺構群の時期を示す遺物は認められず、直接的な根柢はないが、おおきくは中世まで下らず平安時代ものとみておくことが無難なところであろう。

遺構群の性格を示す遺物も認められず、その推定が困難であるが、さきに述べた平安集落の寺院との関わり合いの深さ、古刹真楽寺などの近隣の宗教的環境などを考えあわせると、本址が寺院の機能の一端を担った建物であると想起することに大きな無理はあるまい。

ところで、群馬県沼田市戸神源訪遺跡においても、寺院と考えられる遺構が検出されている（群

馬県埋蔵文化財調査事業団1991)。第107図中央にみるその遺構は、およそ25×20m程度をはかる周囲に溝が巡る建物で、今は残らないが、礎石をもつ建物である可能性があるという。また、瓦等が検出されていないことから、瓦葺の建物ではないとされる。建物を巡る溝からは「寺」の墨書きが検出されており、また隣接する住居からは「宮田寺」の墨書きが検出されていることから、「宮田寺」と称される寺院であったと推定され、9世紀末から10世紀にかけての「戸神諏訪集落」の集落内寺院と考えられている。

「宮田寺」の建物の大きさは、本T-1の5倍と、その差がはげしい。一方、建物からやや距離をおく区画溝(図中、2・3・6溝とされるもの)の存在は、本K-1と共通する点である。隣接する竪穴住居から「寺」に関連する墨書き土器がいくつか出土しているところからも、集落と寺院が併存するという構成が窺え、興味深いところである。

平安時代における地方寺院については、こうした発見例が増すことによってその実態が徐々に解明されることであろう。

3 おわりに

最後に、平安時代川原田遺跡の性格について、ひとつの解釈の可能性を示しておく。「真楽寺の宿坊的な機能もはたして川原田集落に、大内寺・大平寺などの地方寺院の僧侶が修行に集まつた。そこでは転用硯などを用いた写経と朱墨によるその修正などが行なわれていた。また、青銅製の火熨斗はハレの僧衣などの伸しにあてられ、土師器鉢は托鉢に用いられていた。以降、10世紀前葉には集落の東隣に仏堂も建てられ、真楽寺が取り込んだその構成が充実した」

引用・参考文献

- 権原考古学研究所 1977 『新沢千穂126号墳』
- 上三川町教育委員会 1986 『多功南原遺跡』
- 京都市埋蔵文化財研究所 1986 『平安京跡発掘資料選』 2
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 『戸神御跡遺跡』
- 堤 隆 1989 「1 根岸遺跡における土器様相」 (『根岸遺跡』)
- 寺島俊郎 1991 「(1) 古墳時代末から平安時代の遺物」 (『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』)
- 日野市落川遺跡調査会 1987 『60年度 日野市落川遺跡調査略報』
- 平塚市教育委員会 1991 『神明久保遺跡』
- 福田健司 1991 「古代の東京—IV」 (『東京の文化財』)
- 前川要 1985 「猿投室における灰釉陶器生産最末期の諸様相」 (『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 III)
- 御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』
- 御代田町教育委員会 1988 『十二遺跡』
- 御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』
- 御代田町教育委員会 1991 『川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書』
- 御代田町教育委員会 1992 『城之腰遺跡』
- 御代田町教育委員会 1992 『細田・下弥堂・塙田・下荒田遺跡発掘調査概要報告書』
- 毛利光俊彦 1991 「10 青銅製容器・ガラス容器」 (『古墳時代の研究』 8)
- 和光市 1991 『平安時代の火葬斗出土』 (『広報 わこう』 No393)

V

写真図版



浅間火山(2,560m)とその裾野に位置する川原田遺跡



川原田遺跡と城之腰道路



川原田遺跡全景(東方より)



T-1号礎石建物址



K-1号区区内遺構群



H-1号住居址



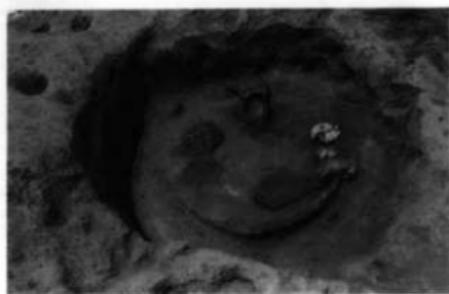
H-1号住居址 掘り方



H-1号住居址カマド



H-1号住居址カマド



H-1号住居址P7



H-2号住居址



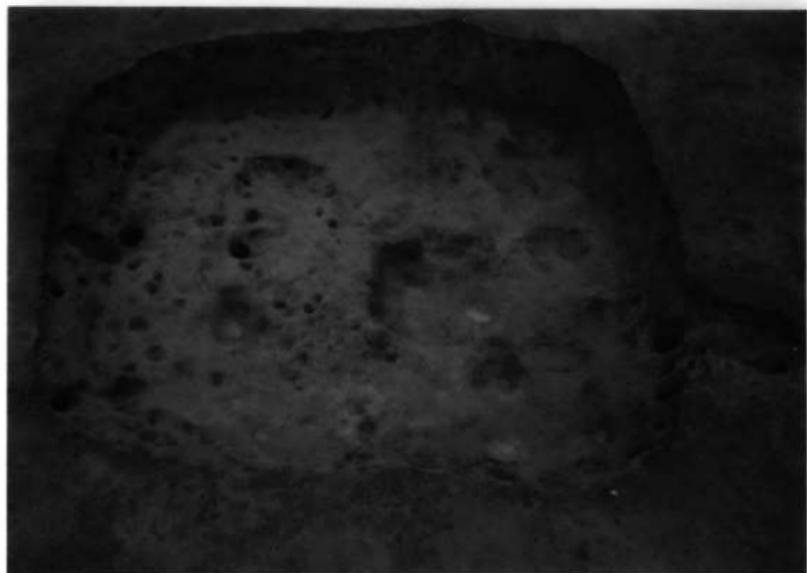
H-2号住居址掘り方



H-2号住居址カマド



H-3号住居址



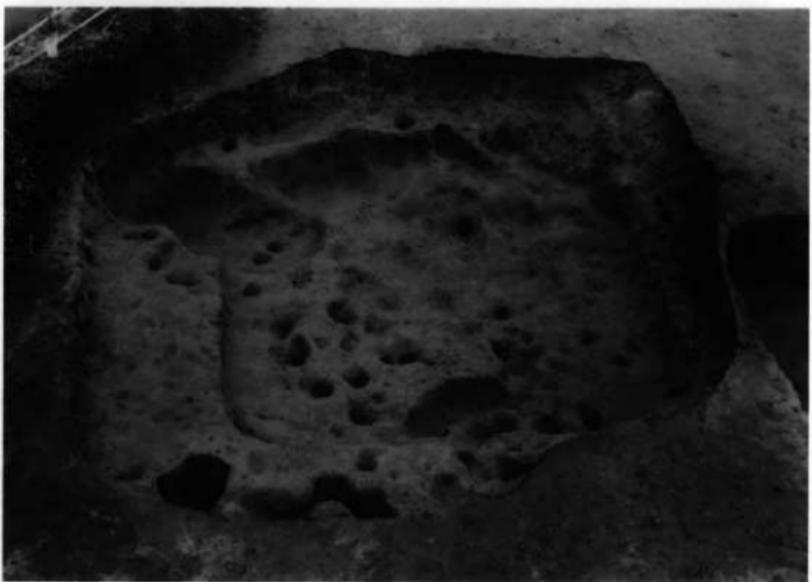
H-3号住居址掘り方



H-3号住居址カマド



H-4号住居址



H-4号住居址掘り方



H-4号住居址カマド



H-4号住居址カマド



火焚斗出土状態



H-5号住居址



H-6号住居址



H-6号住居址カマド



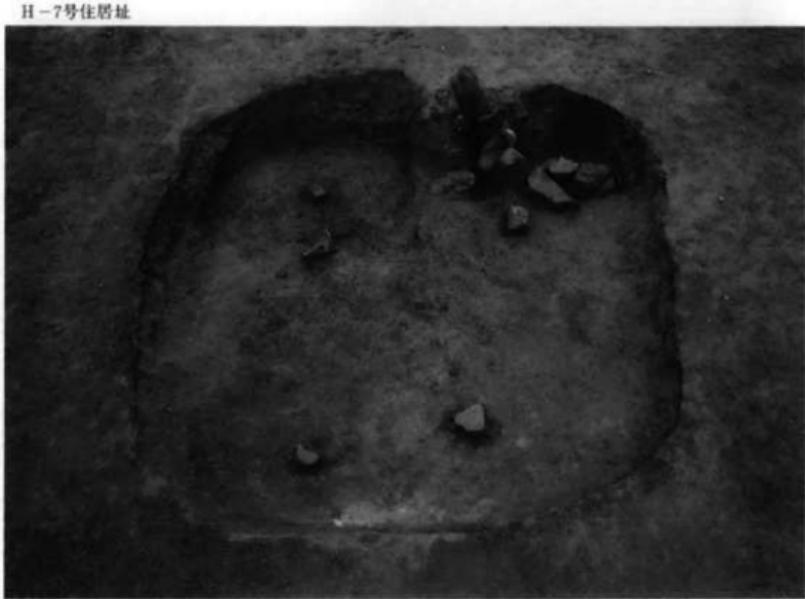
H-6号住居址カマド



H-6号住居址カマド断面



H-6号住居址カマド構築材集積



H-7号住居址



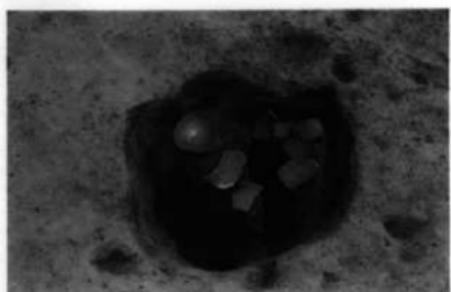
H-7号住居址掘り方



H-7号住居址カマド



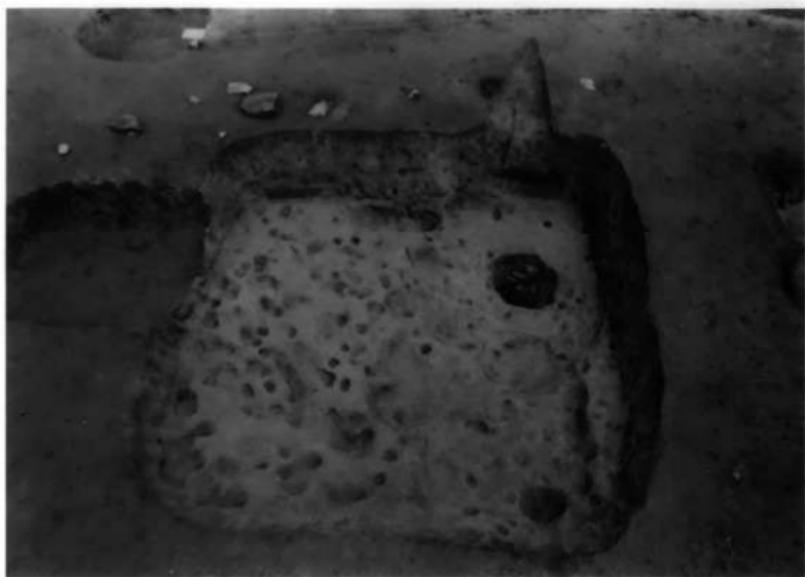
H-7号住居址遺物出土状態



H-8号住居址遺物出土状態



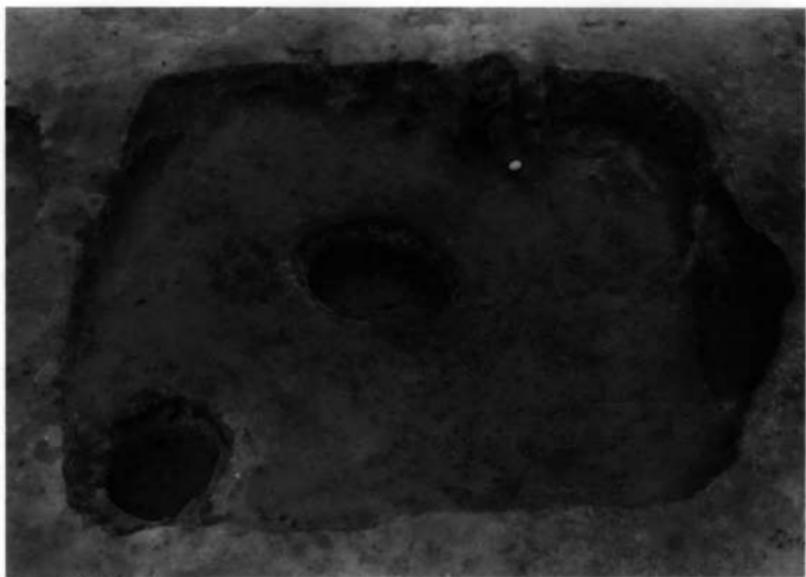
H-8号住居址



H-8号住居址掘り方



H-8号住居址カマド



H-9号住居址



H-9号住居址掘り方



H-9号住居址カマド



H-10号住居址



H-10号住居址掘り方



H-10号住居址カマド



H-11号住居址



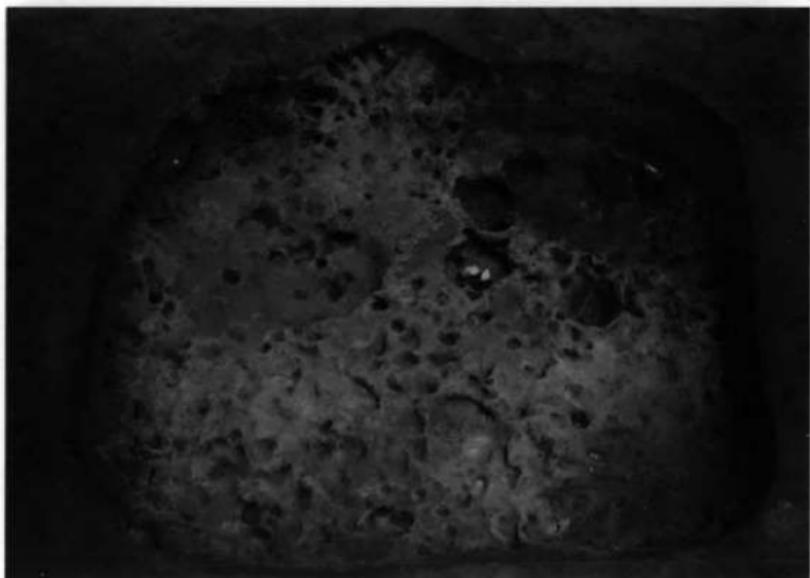
H-11号住居址コーナー



H-11号住居址跡錐車出土状態



H-12号住居址



H-12号住居址掘り方



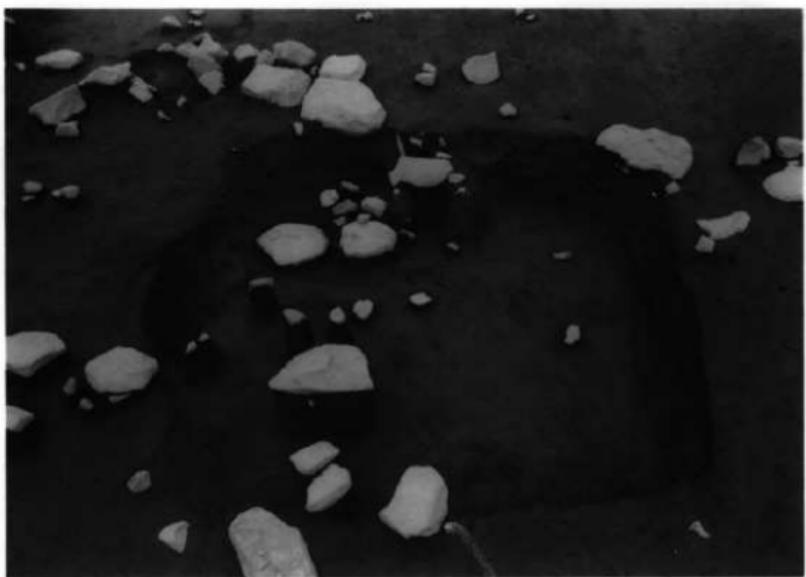
H-12号住居址カマド



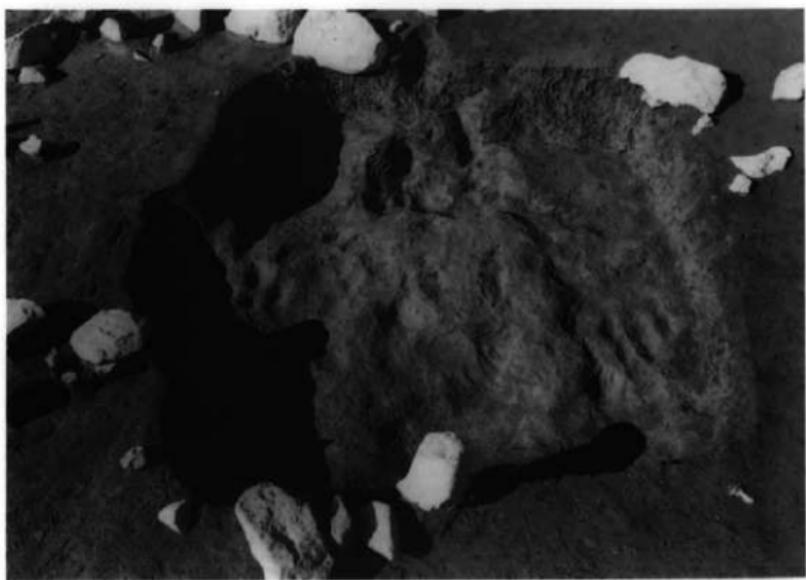
実測風景(H-12号住居址)



作業風景



H-13号住居址



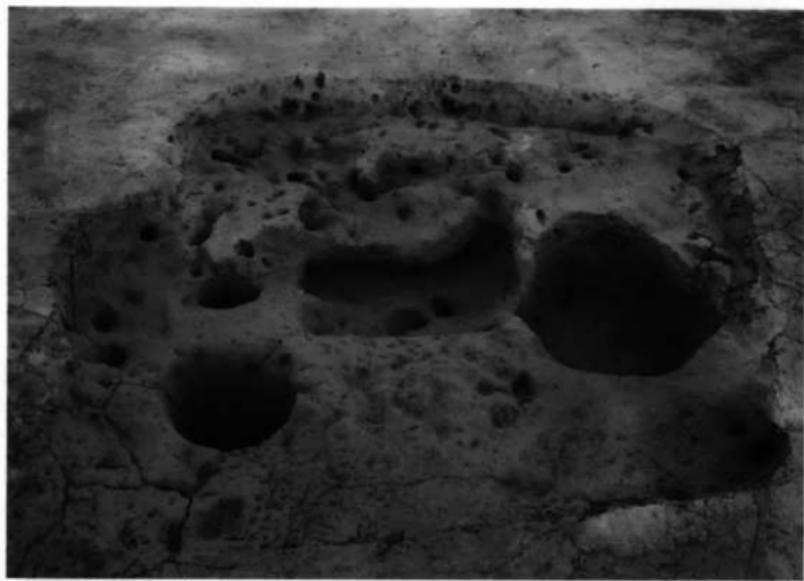
H-13号住居址掘り方



H-13号住居址カマド



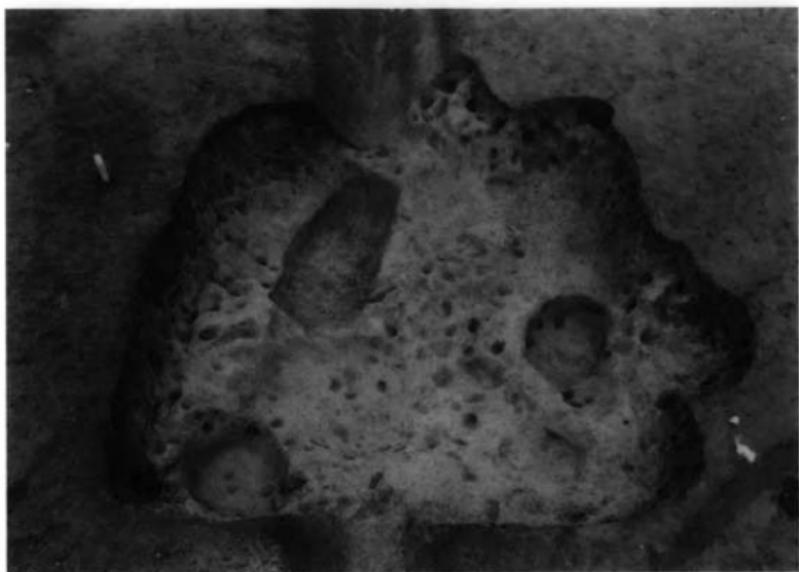
H-14号住居址



H-14号住居址掘り方



H-15号住居址



H-15号住居址掘り方



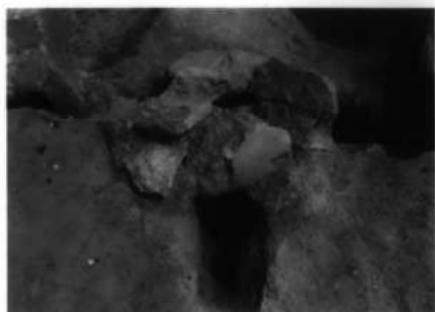
H-15号住居址カマド



H-16号住居址



H-16号住居址カマド



H-16号住居址カマド



H-16号住居址カマド断面



H-16号住居址P1



実測風景（H-16号住居址カマド）



H-17号住居址



H-17号住居址カマド



H-18号住居址



H-18号住居址掘り方



H-18号住居址カマド



H-19号住居址



H-19号住居址カマド



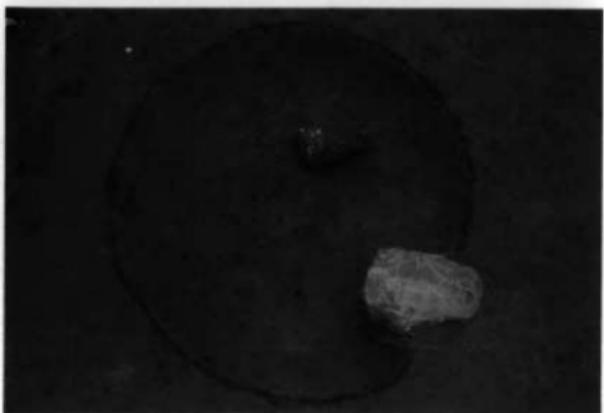
空中写真測量



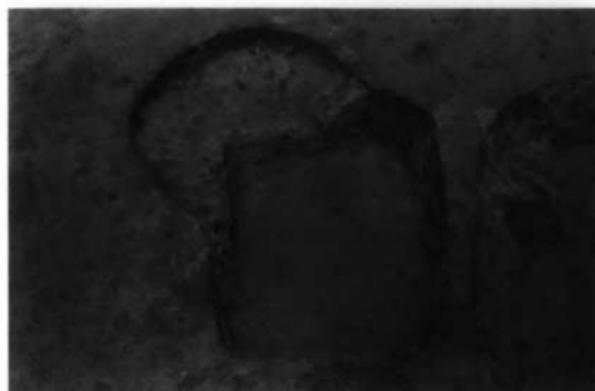
D-1号土坑



D-2号土坑



D-3号土坑



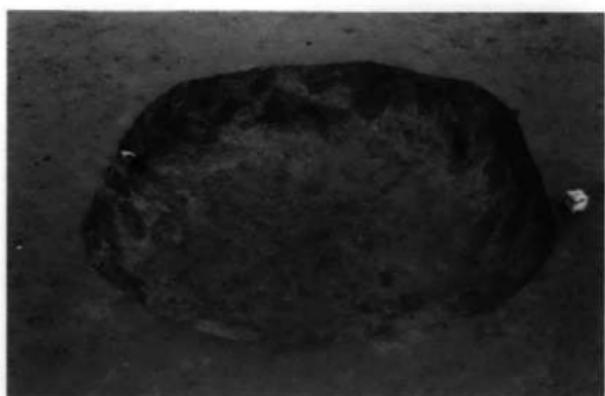
D-4・D-6号土坑



D-5号土坑



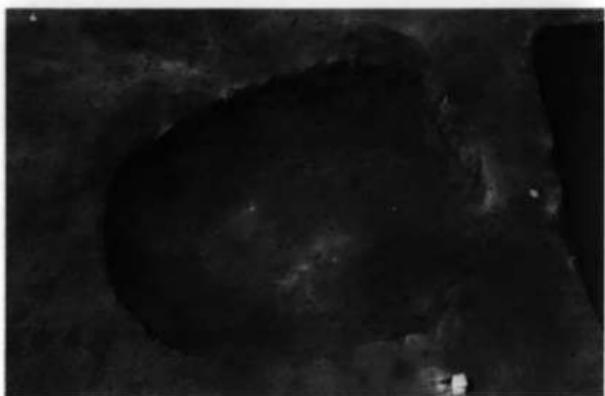
調査風景(D-43号土坑)



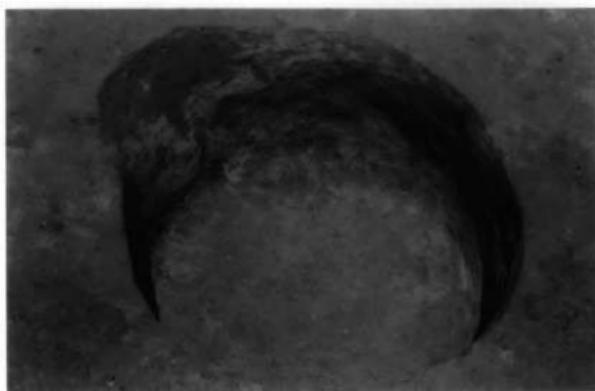
D-7号土坑



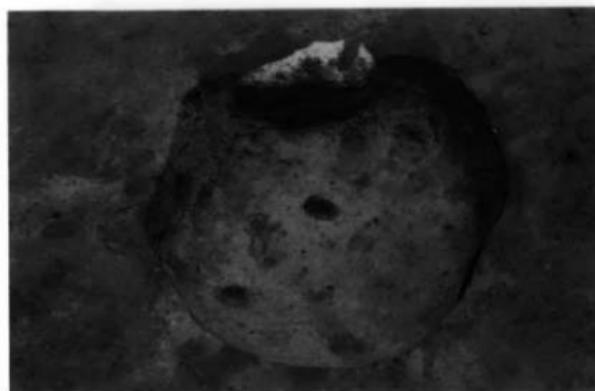
D-8号土坑



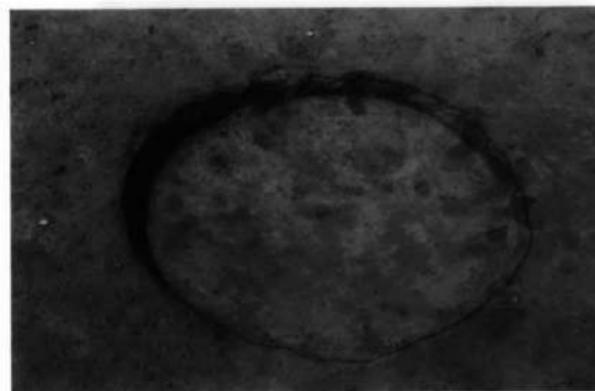
D-9号土坑



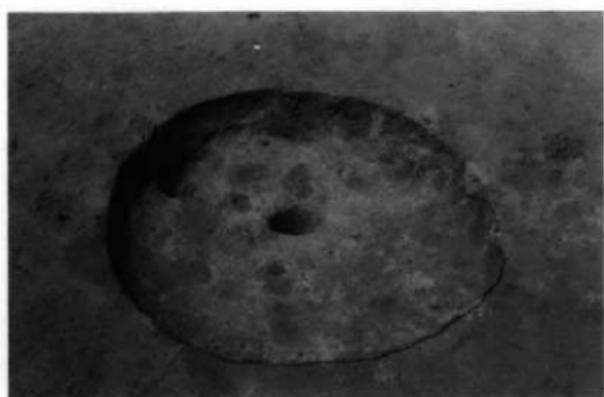
D-10号土坑



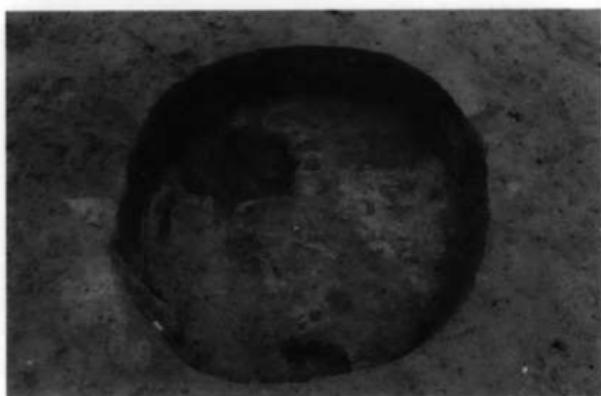
D-11号土坑



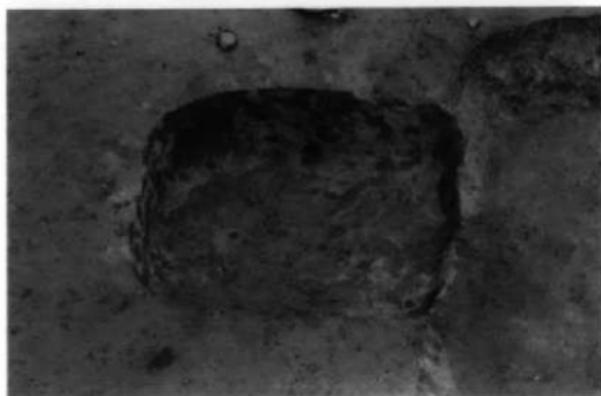
D-12号土坑



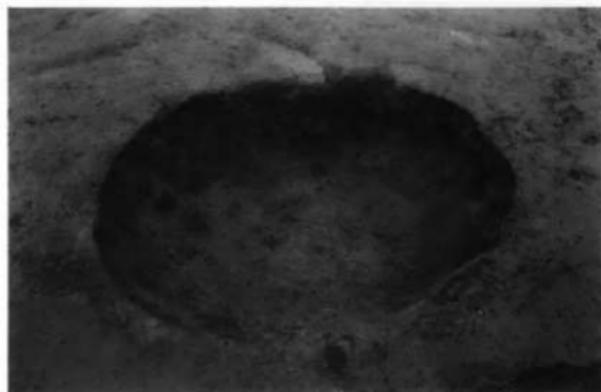
D-13号土坑



D-14号土坑



D-15号土坑



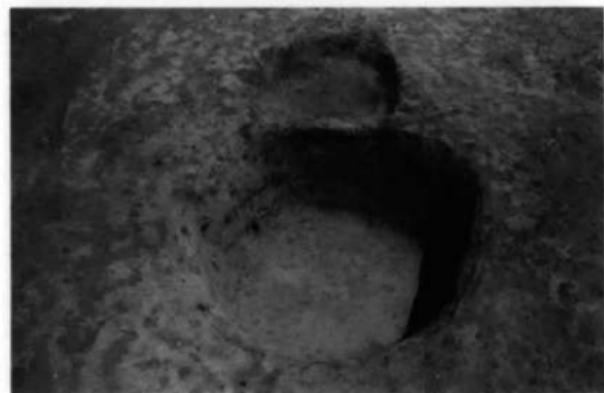
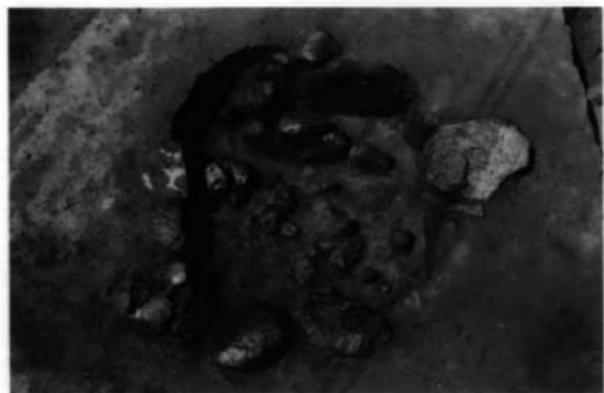
D-16號土坑

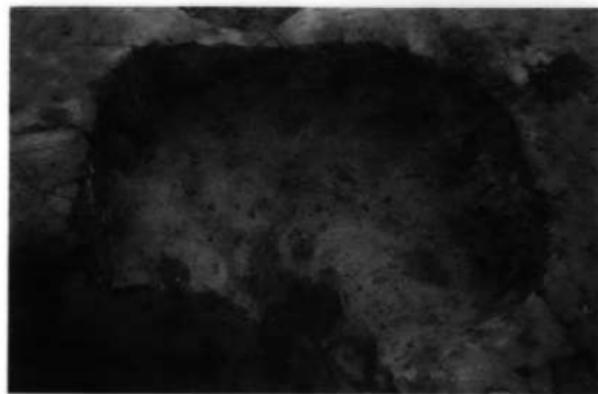


D-17號土坑

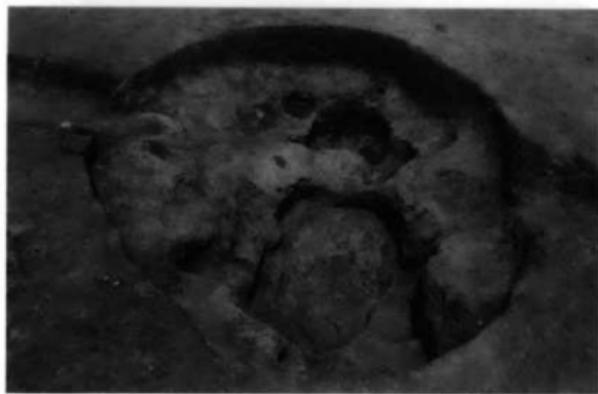


D-18號土坑





D-23號土坑



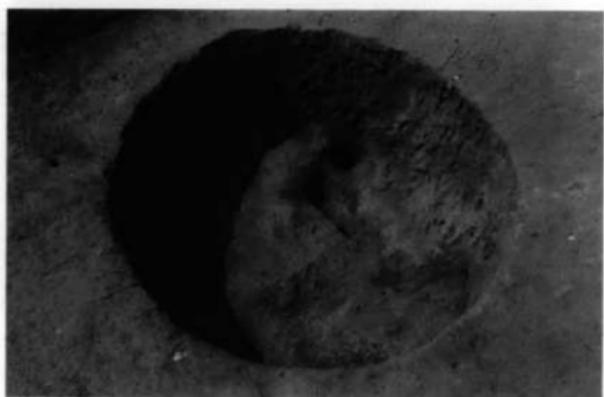
D-24號土坑



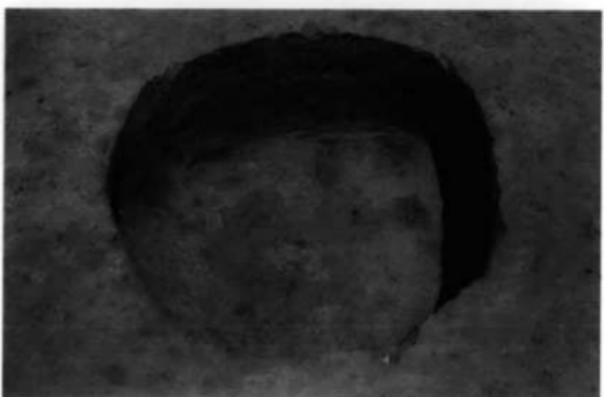
D-26號土坑



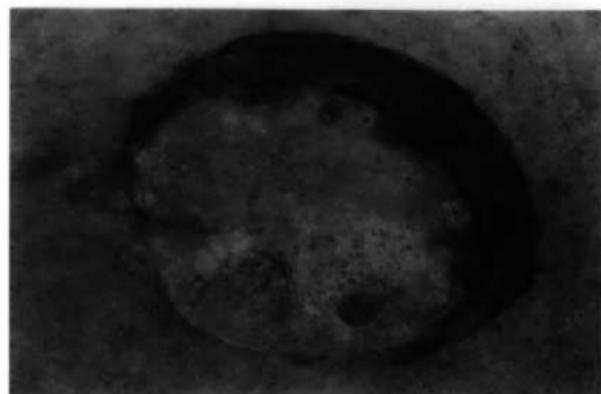
D-27号土坑



D-28号土坑



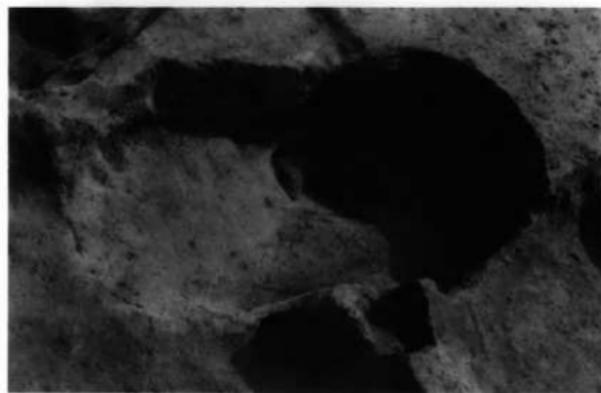
D-29号土坑



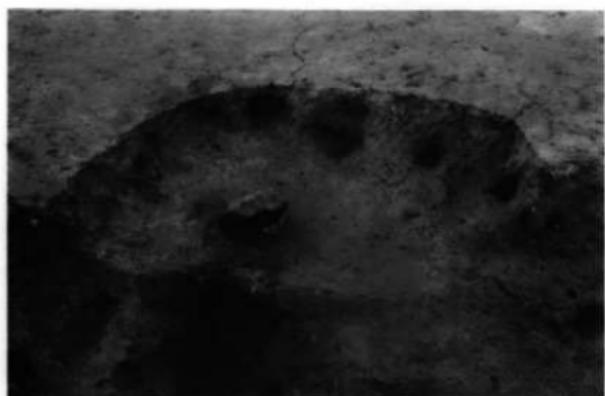
D-30號土坑



D-31號土坑



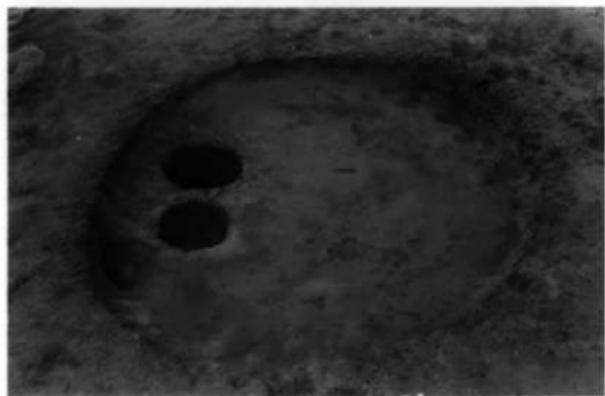
D-32號土坑



D-33号土坑



D-34号土坑



D-36号土坑



D-39·D-40號土坑



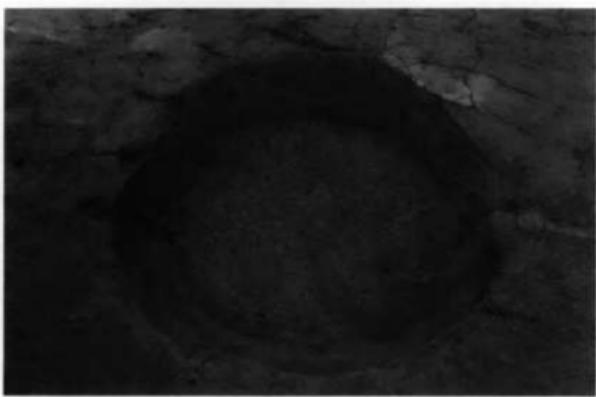
D-41號土坑



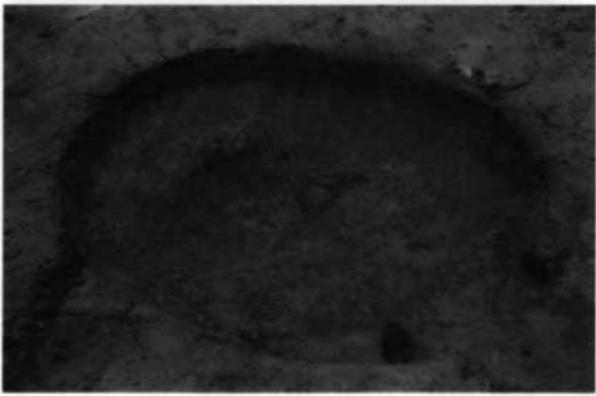
D-42號土坑



D-43号土坑



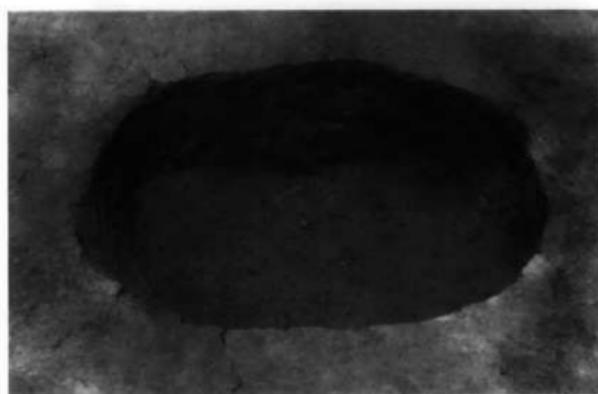
D-44号土坑



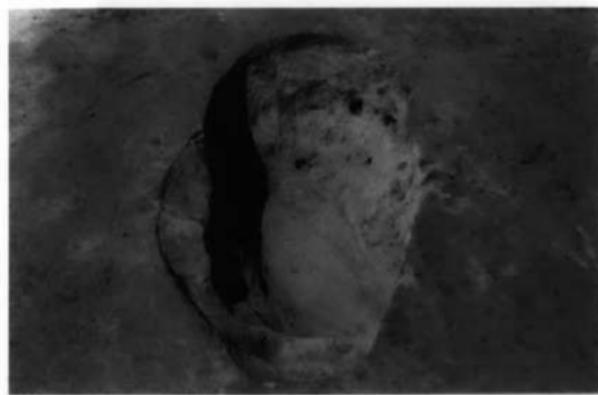
D-45号土坑



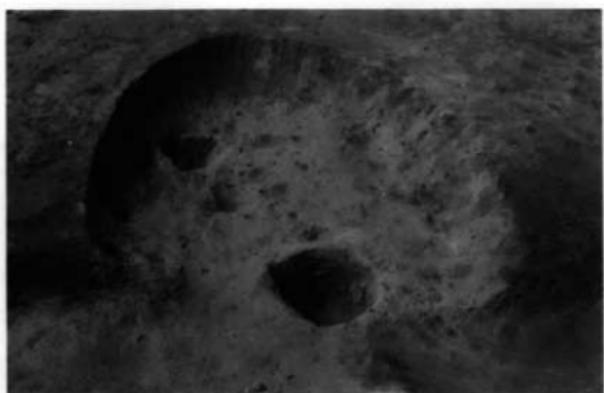
D-46号土坑



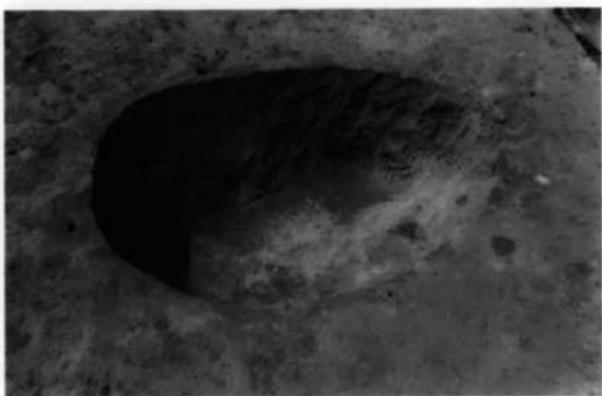
D-47号土坑



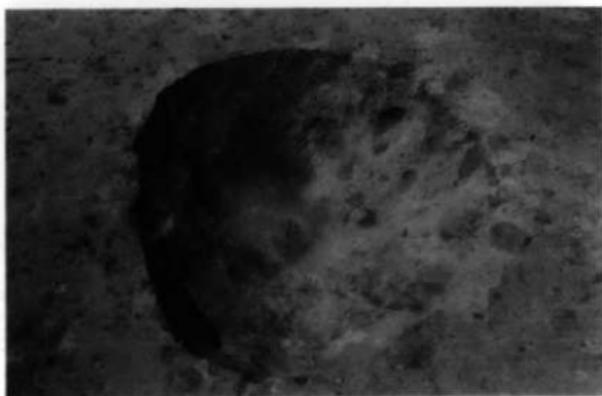
D-58号土坑



D-59號土坑



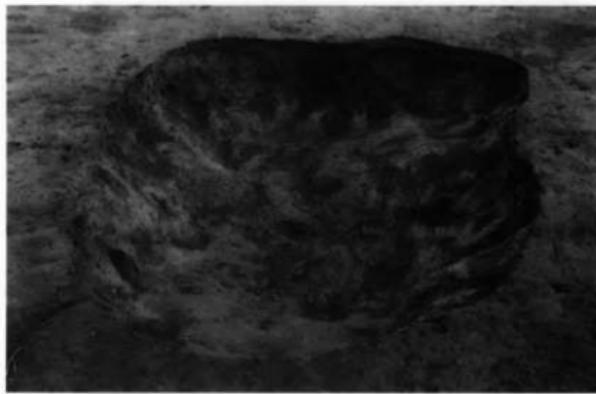
D-60號土坑



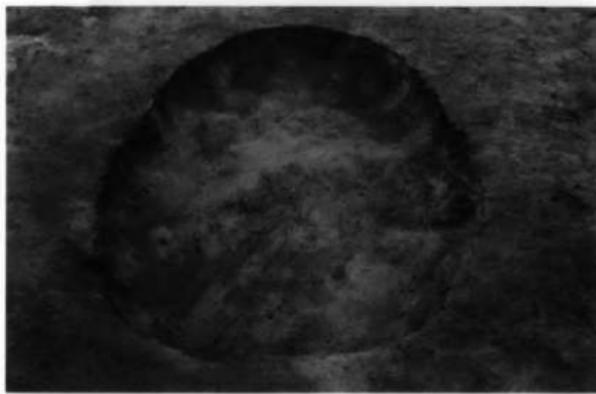
D-61號土坑



D-62号土坑



D-63号土坑



D-64号土坑



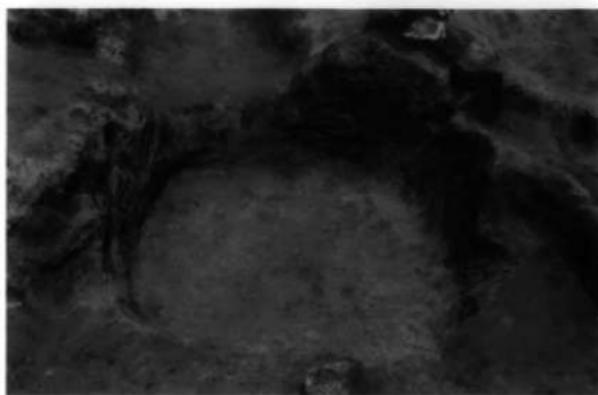
D-65号土坑



D-67号土坑



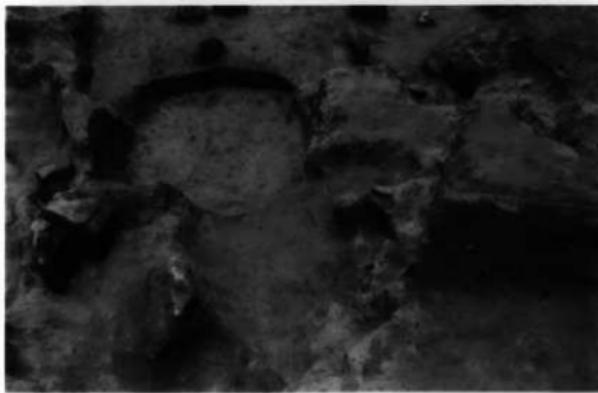
D-68号土坑



D-69號土坑



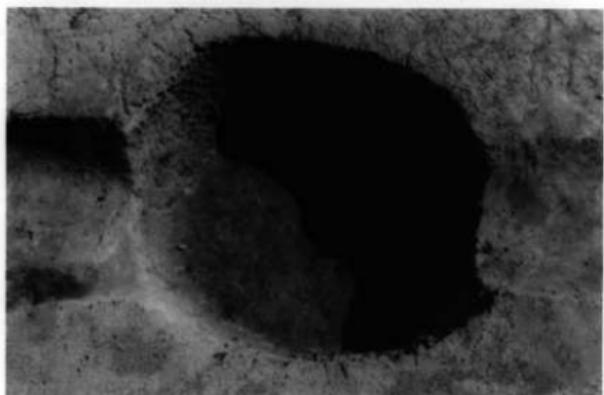
D-70號土坑



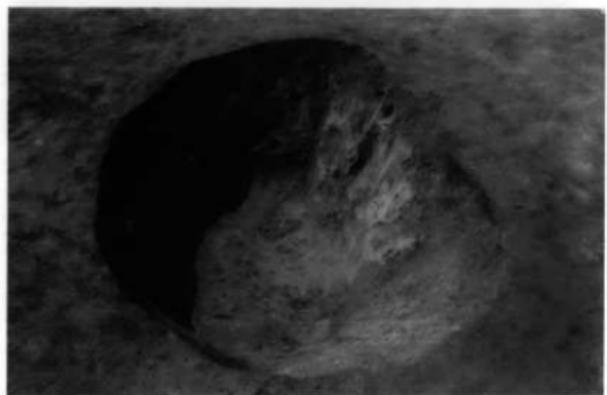
D-71號土坑



D-72号土坑



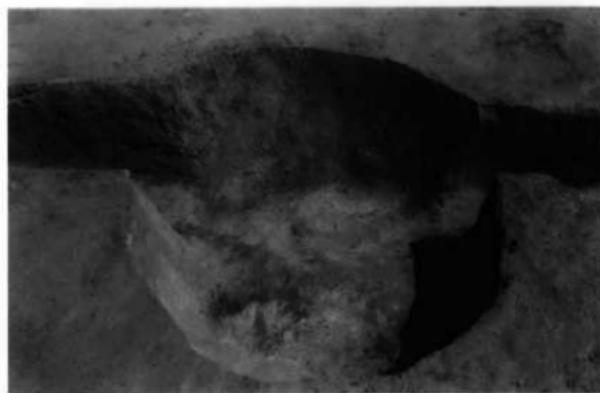
D-74号土坑



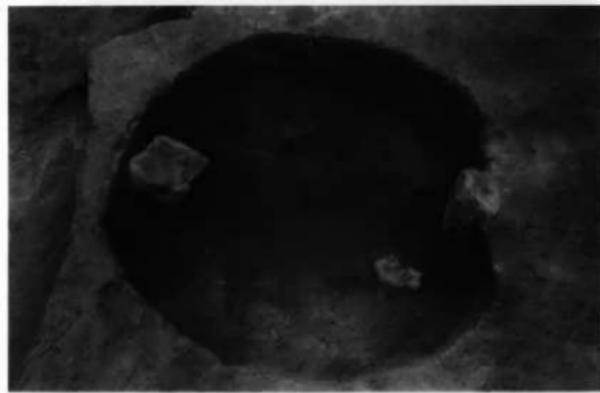
D-75号土坑



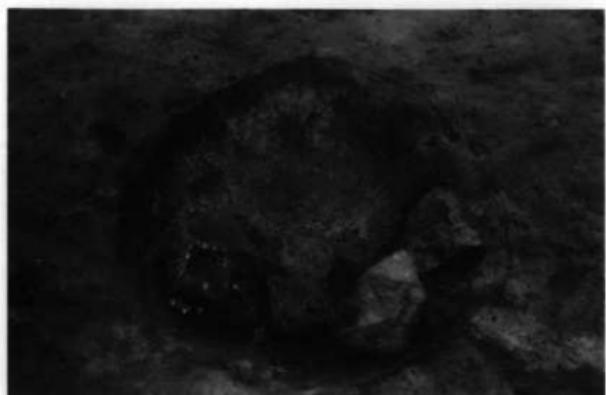
D-77号土坑



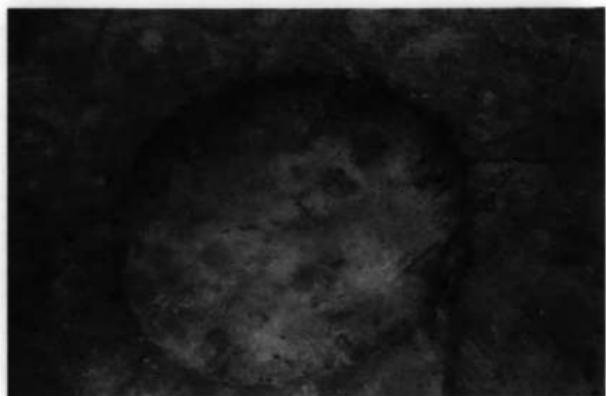
D-80号土坑



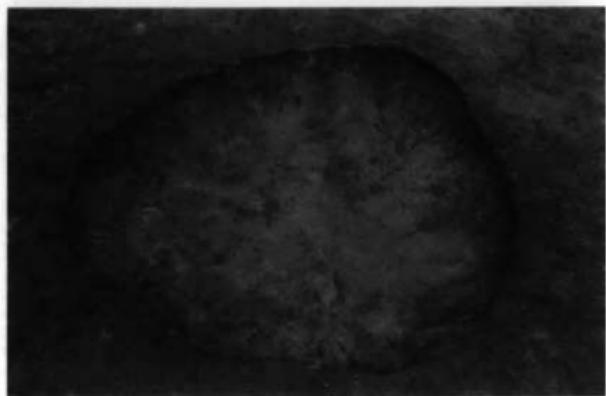
D-85号土坑



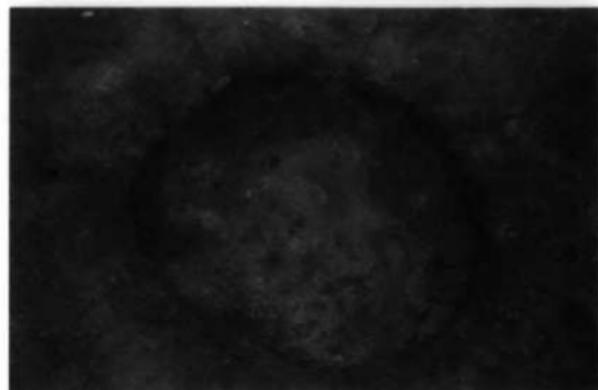
D-86号土坑



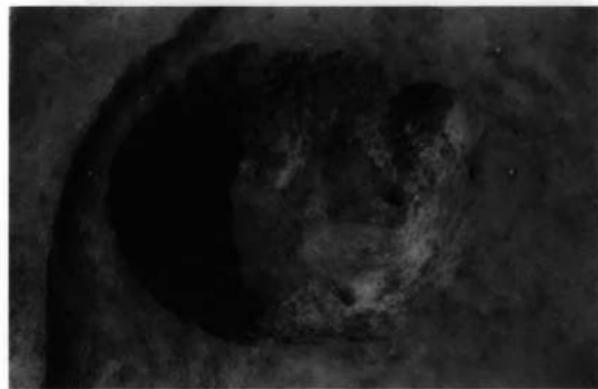
D-92号土坑



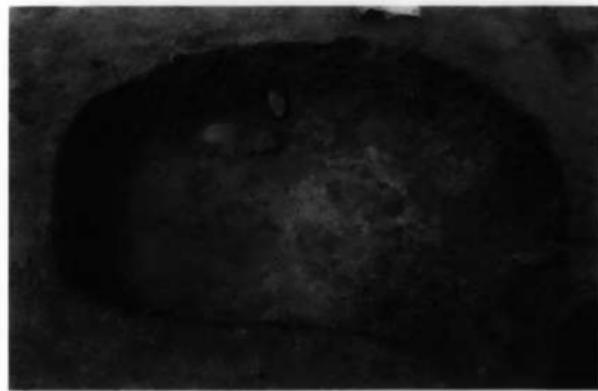
D-93号土坑



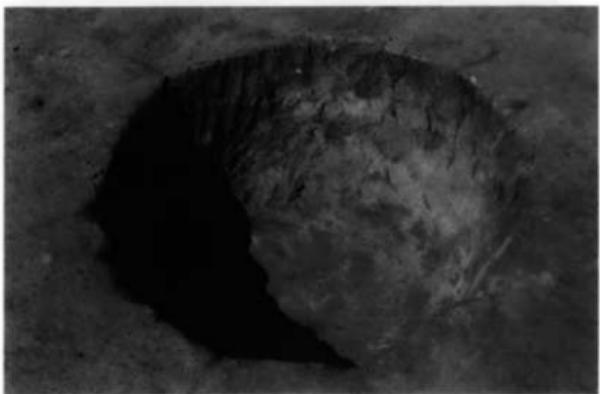
D-94號土坑

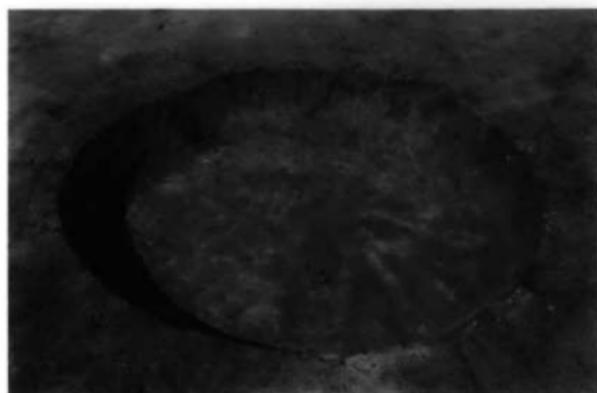


D-122號土坑

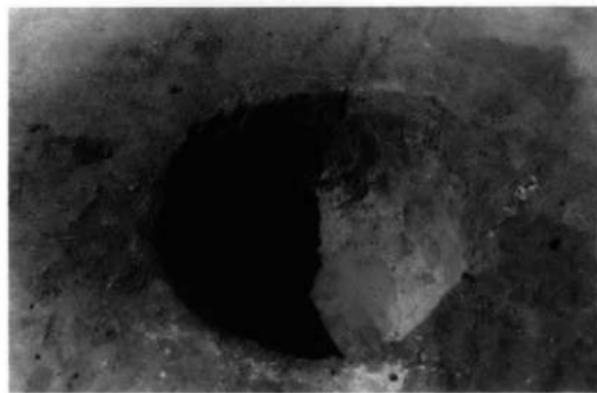


D-124號土坑

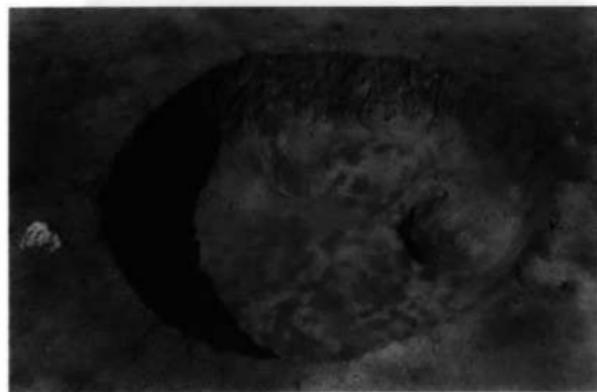




D-128號土坑

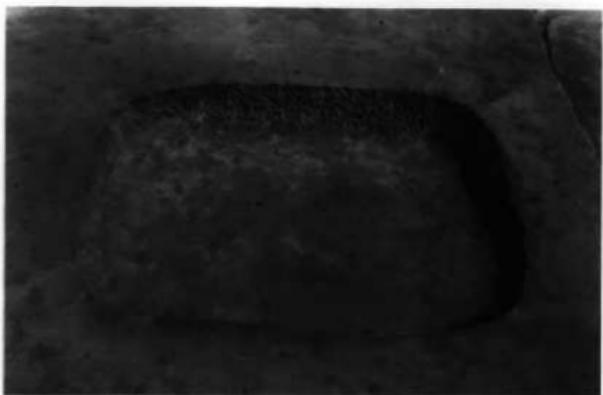


D-129號土坑

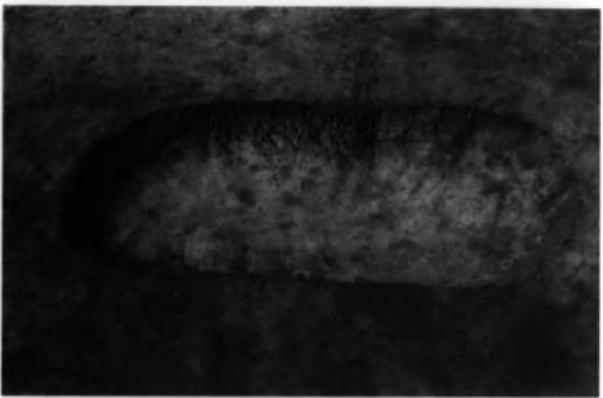


D-130號土坑

D-131號土坑

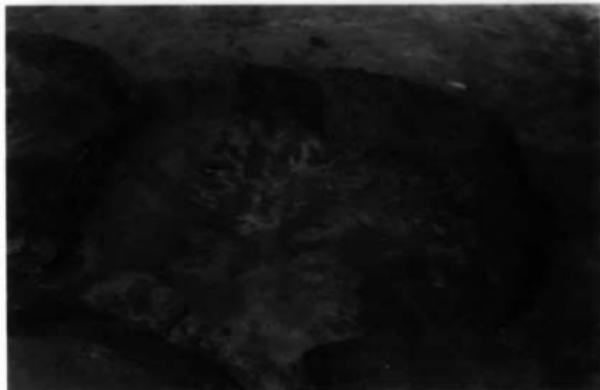


D-132號土坑

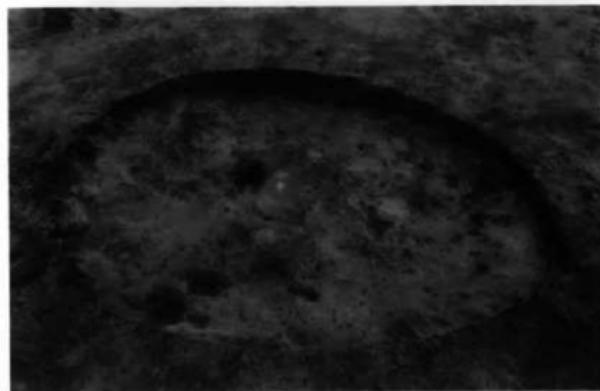


D-135號土坑

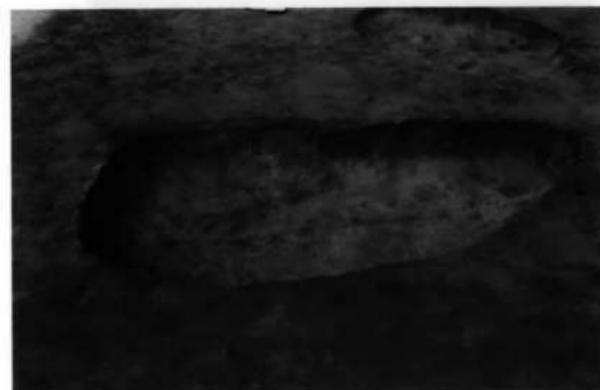




D-136號土坑



D-137號土坑

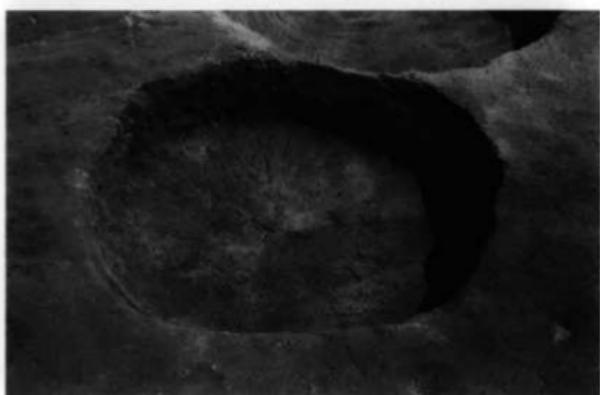


D-138號土坑

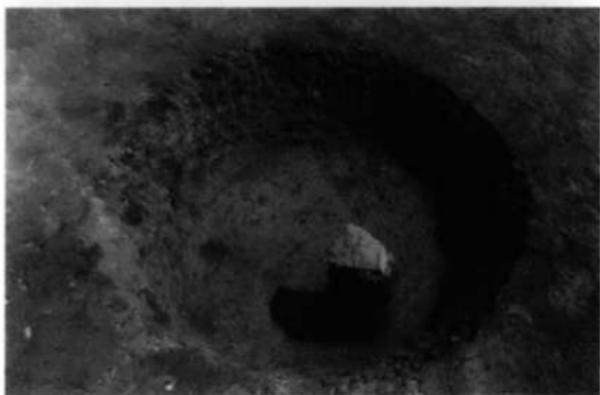
D-139号土坑



D-178号土坑

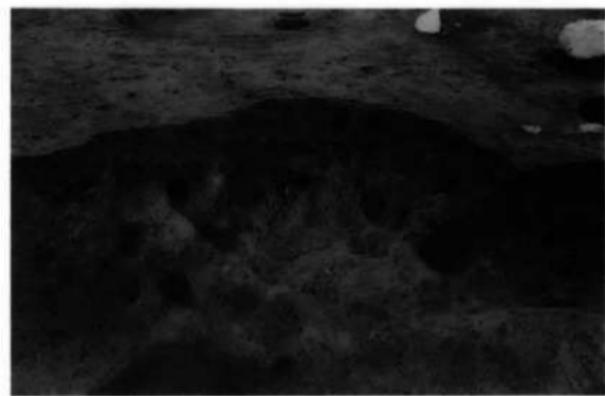


D-180号土坑

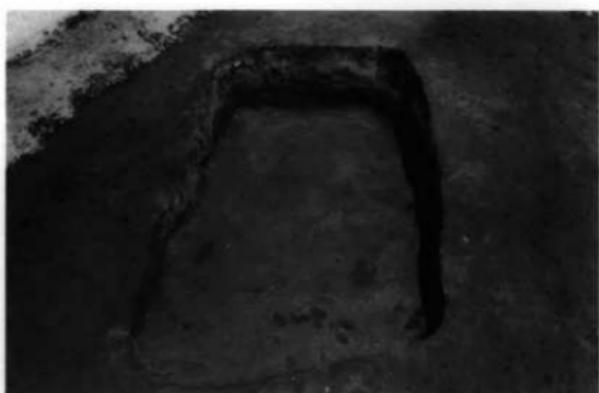




D-154~D-163号土坑



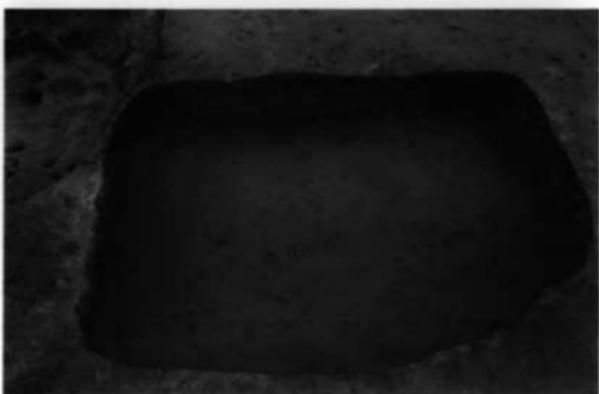
D-190号土坑



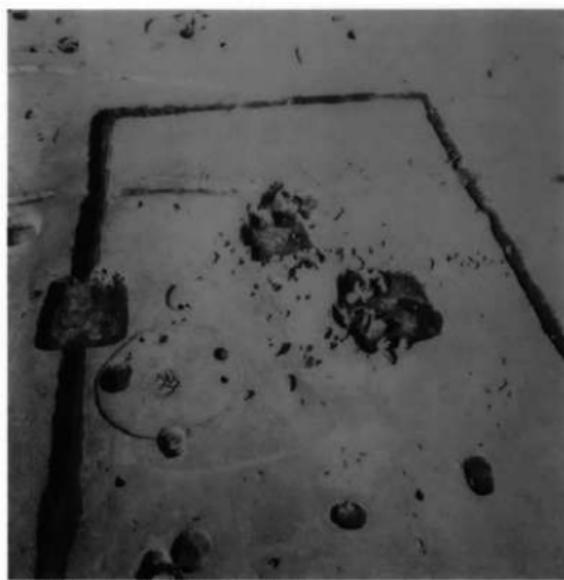
D-192号土坑



D-193号土坑



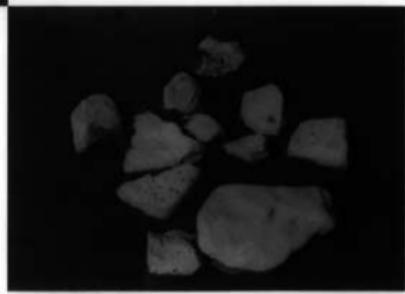
D-194号土坑



T-1号礎石建物址とM-8号溝状遺構



S-1号配石遺構



S-3号配石遺構





M-2号溝状遺構



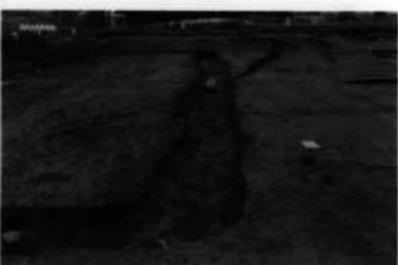
M-4号溝状遺構



M-5・M-8号溝状遺構



M-8号溝状遺構(東側部)



M-8号溝状遺構(北側部)



M-8号溝状遺構(西側部)



M-10号溝状遺構



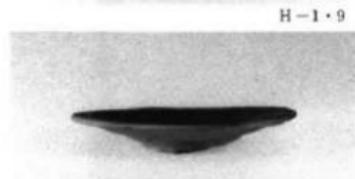
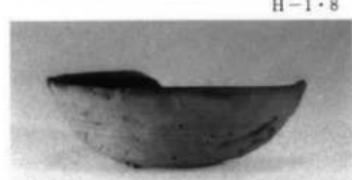
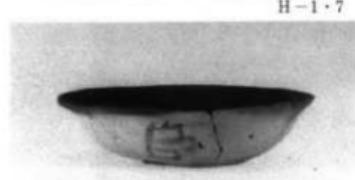
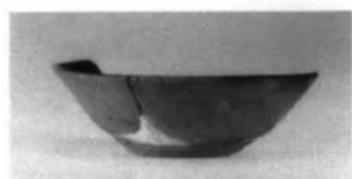
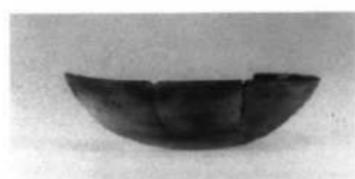
M-11号溝状遺構

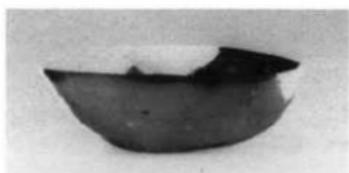


M-12号溝状遺構

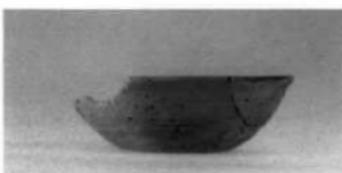


F-1号掘立柱建物址





H-1・19



H-1・25



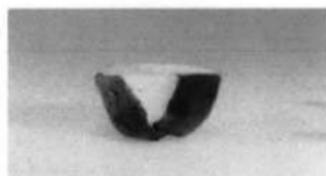
H-1・30



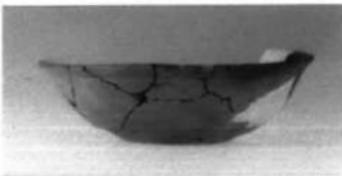
H-1・31



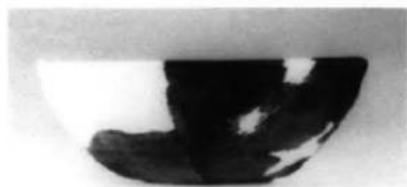
H-1・31



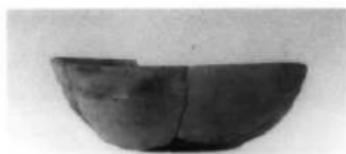
H-1・36



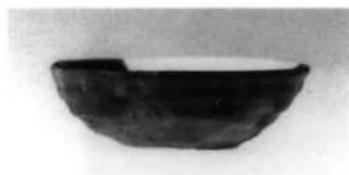
H-2・1



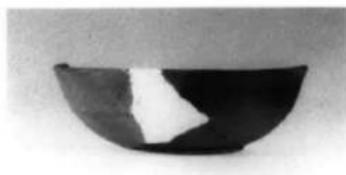
H-3・1



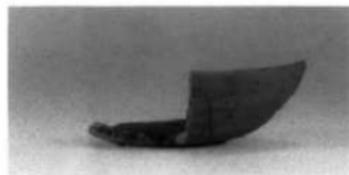
H-3・2



H-3・3



H-3・4



H-3・6



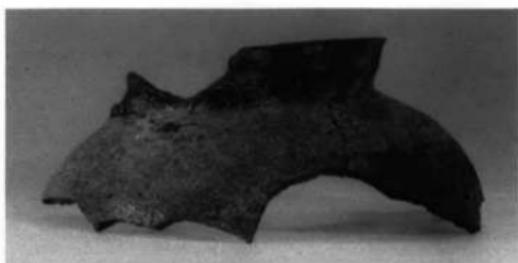
H-4・8



H-4・1



H-4・2



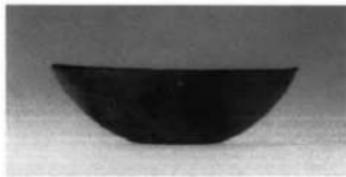
H-4・6



H-4・7



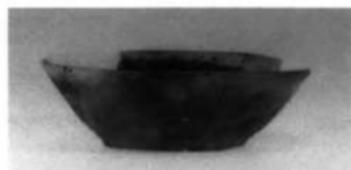
H-5・1



H-5・2



H-5・3



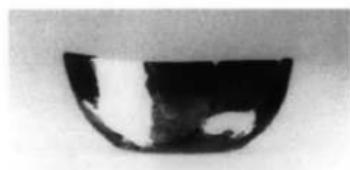
H - 6 · 3



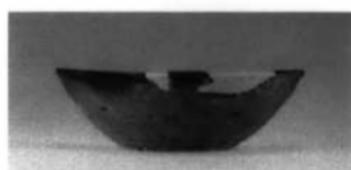
H - 6 · 4



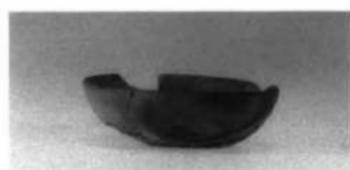
H - 6 · 5



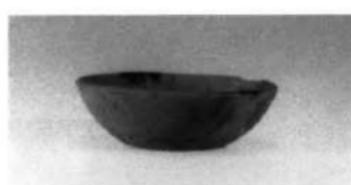
H - 6 · 6



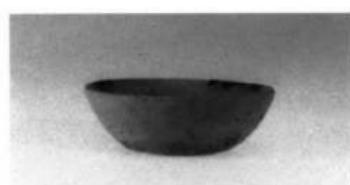
H - 6 · 7



H - 6 · 8



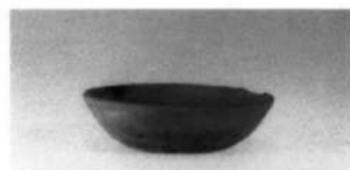
H - 6 · 9



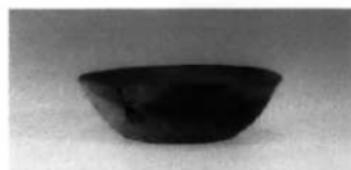
H - 6 · 10



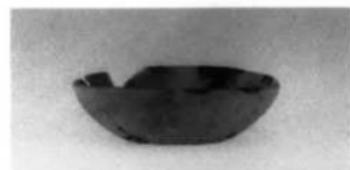
H - 6 · 11



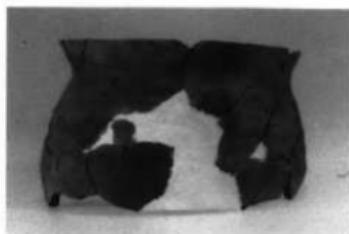
H - 6 · 12



H - 6 · 13



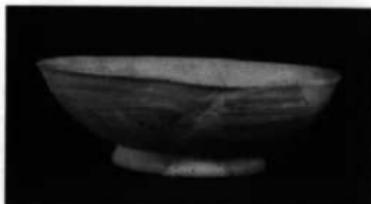
H - 6 · 14



H-6・16



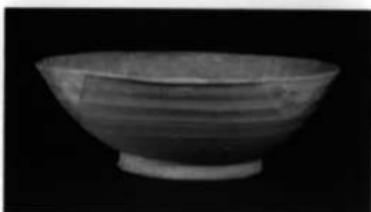
H-7・2



H-8・1



H-8・3



H-8・2



H-8・4



H-8·5



H-8·8



H-8·9



H-8·14



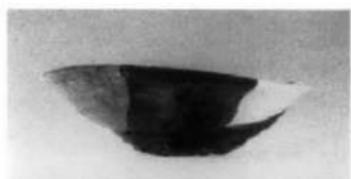
H-8·11



H-8・15



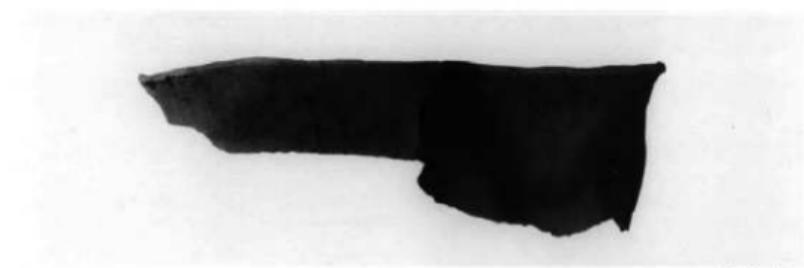
H-8・16



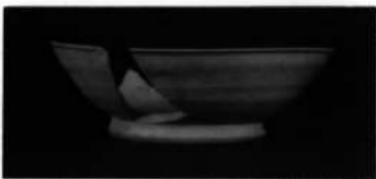
H-9・2



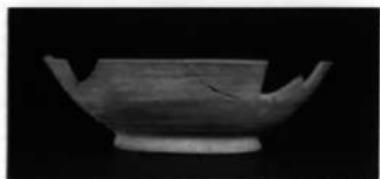
H-9・6



H-9・7



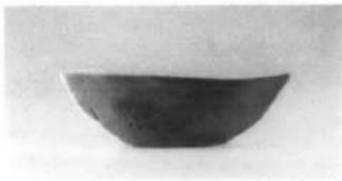
H-12・1 H-18・1



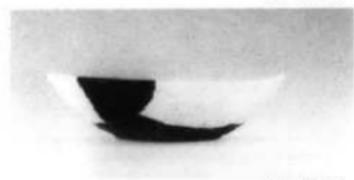
H-12・2



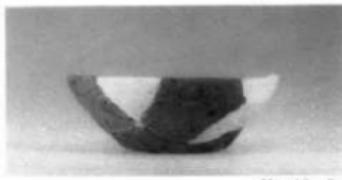
H - 12 • 3



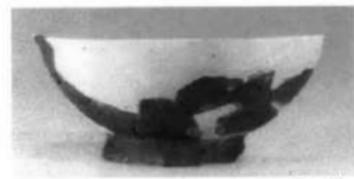
H - 12 • 5



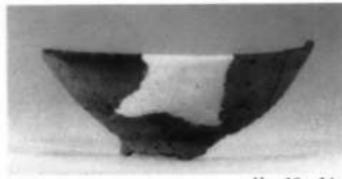
H - 12 • 8



H - 12 • 9



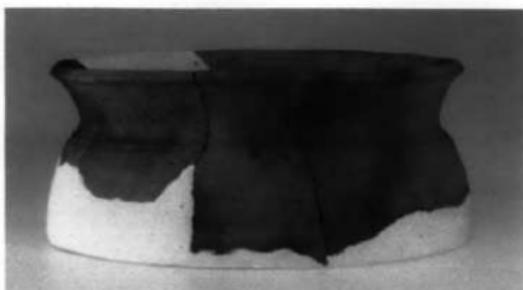
H - 12 • 13



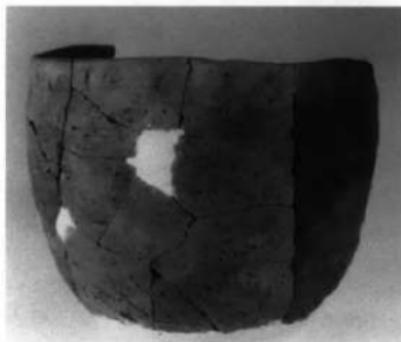
H - 12 • 14



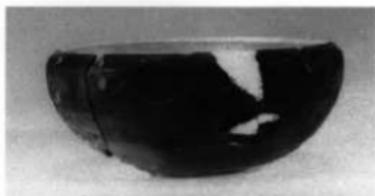
H - 12 • 20



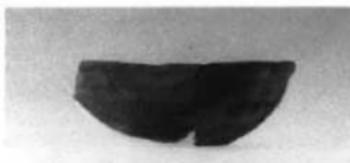
H - 12 · 17



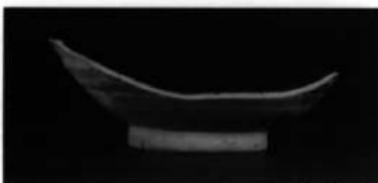
H - 12 · 19



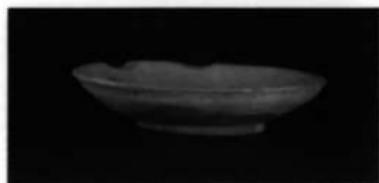
H - 12 · 21



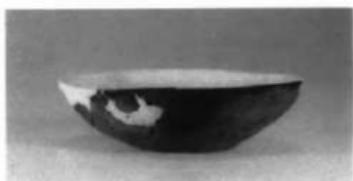
H - 13 · 1



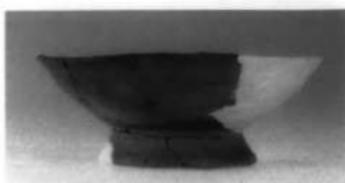
H - 14 · 1



H - 14 · 2



H - 14・3



H - 14・4



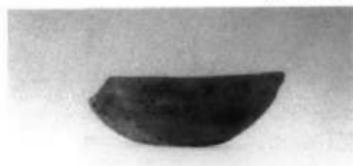
H - 15・1



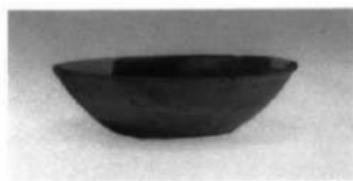
H - 15・3



H - 15・8



H - 15・6



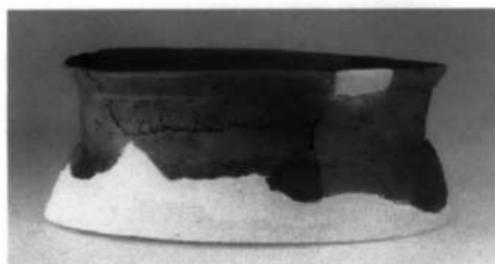
H - 16・2



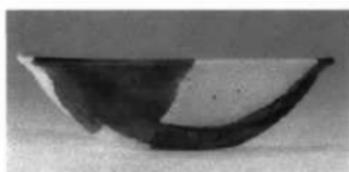
H - 16・3



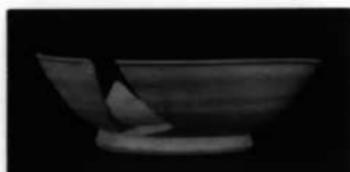
H - 16 · 4



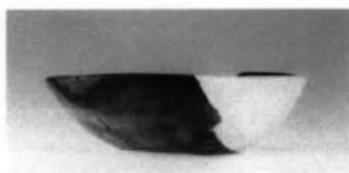
H - 16 · 7



H - 17 · 1



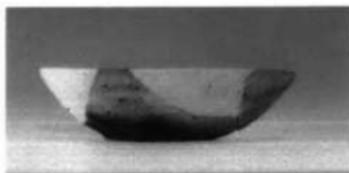
H - 18 · 1, H - 12 · 1



H - 17 · 2



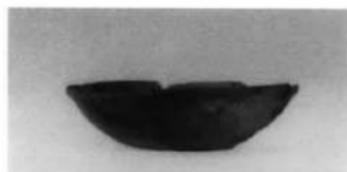
H - 18 · 2



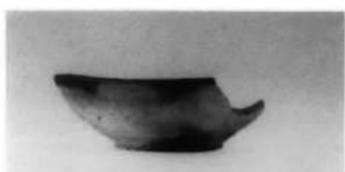
H - 17 · 4



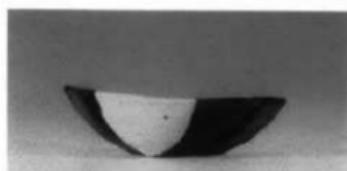
H - 18 · 3



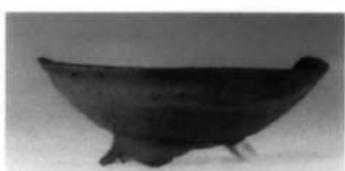
H - 18 · 4



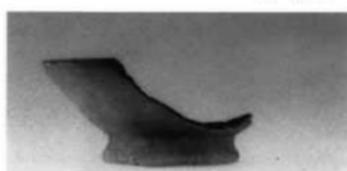
H - 18 · 5



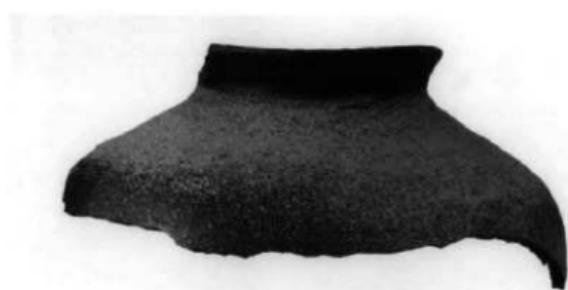
H - 18 · 7



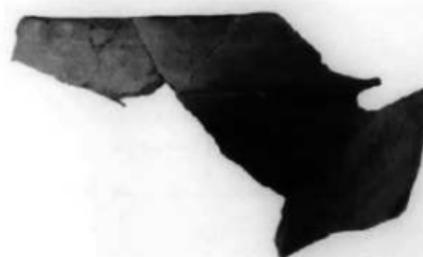
H - 18 · 9



H - 18 · 10



H - 18 · 11



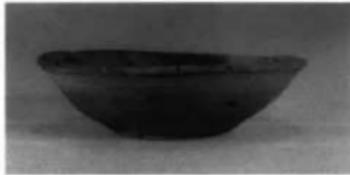
H - 18 · 15



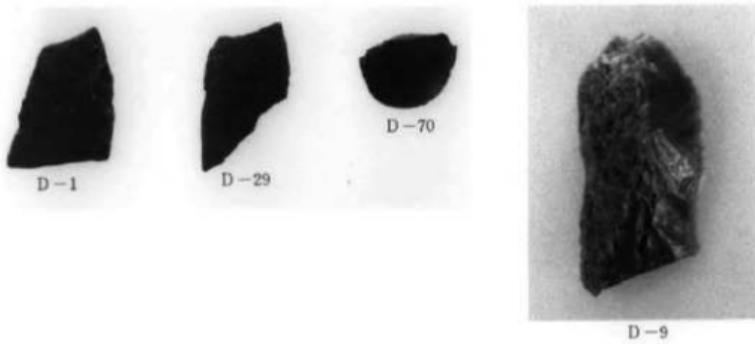
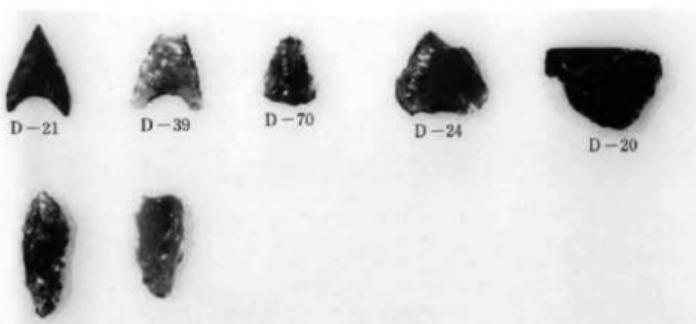
H - 18・12

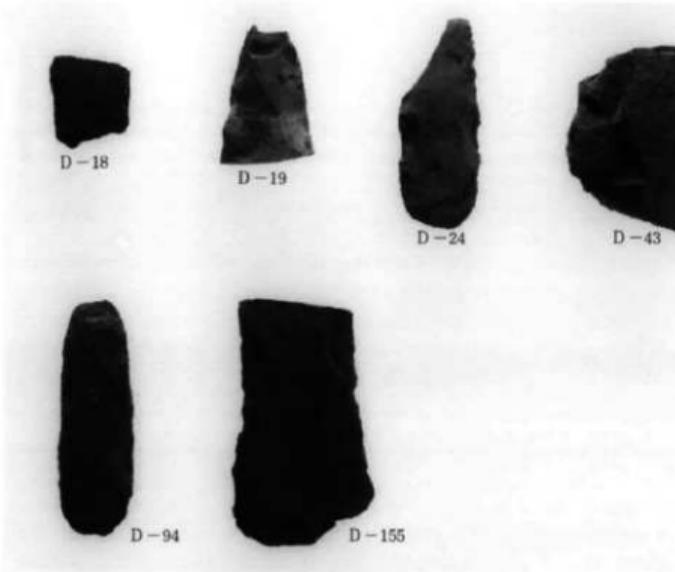


H - 19・2



D - 72







H - 1 · 40



H - 11 · 5



H - 18 · 19



H - 17 · 6



H - 12 · 23



H - 3 · 13



H - 6



D - 3



H - 1 · 41



H - 1 · 42



H - 1 · 43



H - 2 · 5



H - 9 · 8



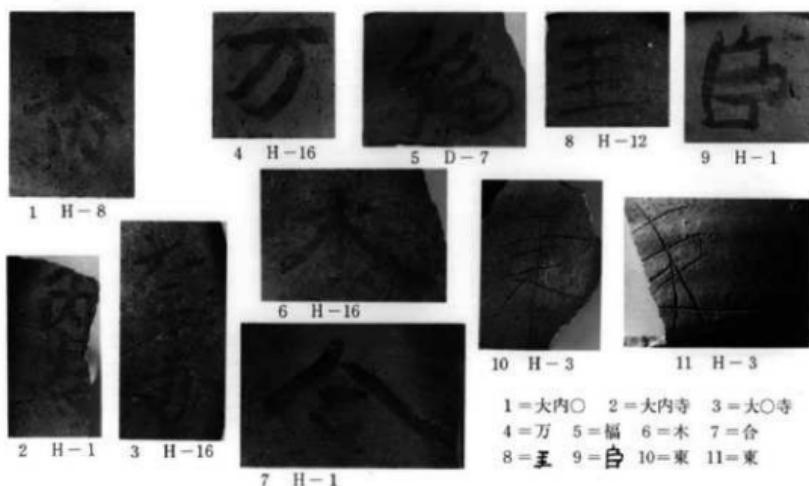
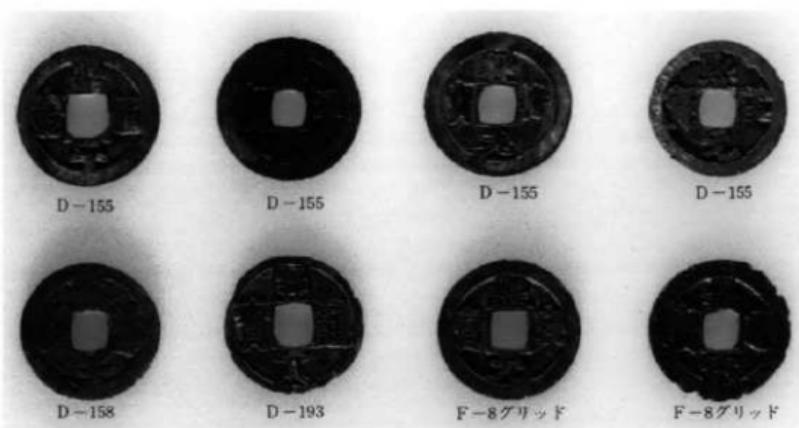
D - 192



D - 192



D - 158



御代田町の埋蔵文化財発掘調査報告書

- 第1集 御代田町教育委員会 1975 「馬瀬口下原古墳群」
第2集 御代田町教育委員会 1985 「野火付遺跡」
第3集 御代田町教育委員会 1985 「宮平遺跡」 —遺構編—
第4集 御代田町教育委員会 1986 「大沼遺跡」
第5集 御代田町教育委員会 1987 「前田遺跡」
第6集 御代田町教育委員会 1988 「十二遺跡」
第7集 御代田町教育委員会 1989 「根岸遺跡」
第8集 御代田町教育委員会 1989 「広畠遺跡」
第9集 御代田町教育委員会 1990 「聖原Ⅱ遺跡」
第10集 御代田町教育委員会 1991 「川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書」
第11集 御代田町教育委員会 1992 「城之腰遺跡」
第12集 御代田町教育委員会 1992 「細田・下弥堂・塚田・下荒田遺跡発掘調査概要報告書」
第13集 御代田町教育委員会 1993 「川原田遺跡」 —平安・中世編—
第14集 御代田町教育委員会 1993 「細田遺跡」
第15集 御代田町教育委員会 1993 「池沢遺跡発掘調査概要報告書」
第16集 御代田町教育委員会 1993 「西駒込・東二ッ石・湧玉遺跡」
-
-

川 原 田 遺 跡

—平安・中世編—

長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡発掘調査報告書

1993年3月25日 発行

編 集 御代田町教育委員会
発 行 御代田町教育委員会
印 刷 ほおづき書籍株式会社
